
けいおん！ めぐり合う花

ウッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ めぐり合う花

【Nコード】

N2771Q

【作者名】

ウッキー

【あらすじ】

桜ヶ丘高校音楽教師、山中さわ子を姉に持つ大学一年生の山中巧斗は、姉の研修のため、半ば強引に軽音楽部の臨時顧問になってしまう。その軽音楽部は、喫茶店と化したゆるーい空気と、強い個性を持つ五人の集まりだった……。青春と恋愛と、音楽が出会うことで生まれるストーリー。

ヒロインは漣です。はてさて、巧斗はこの軽音楽部でどんな音を奏でるのか・・・？

きっかけはふとしたことから

第一話 きっかけはふとしたことから

「タク、ちょっとお願いがあるんだけど」

こうさわ姉が切り出してきたのは、ゴールデンウィークも間近にせまった、四月の末頃だったと記憶している。

ちょうどエフェクターと格闘していた俺は、ノックもせず部屋に入ってきた六つ上の姉に気付かなかった。うつむいてどうすれば手持ちのもので理想の音色が出せるか、つまみをあちこちいじるので頭がいつぱいでほかの音が耳に入ってこない。

「タク、聴いてんの？」

パンとさわ姉が目の前で手を叩いて初めて、俺は部屋に自分以外の誰かがいることを悟る。

「さ、さわねえ？」

「そんなびつくりしなくてもいいでしょ、自分の姉なのに」

「集中してる中で手をたたかれたら誰だってビビるよ」

やれやれ、といつてさわ姉はクッションの一本に腰を下ろす。さわ姉は高校生のころ、よくこうして部屋に来たが、教師になってからはほとんどない。

「で、なんの話？」

相変わらずつまみをいじりながら俺は答えた。

「お願いがあるんだけど、今私が担当してる部活の顧問、臨時で引き受けてくれない？」

つまみをいじくっていた手が止まり、俺はさわ姉を凝視した。

「俺が、顧問？」

「そ。私が研修で帰ってくるまででいいから、やってほしいの話が分からない。研修で数カ月家にいないのは知っていたが、顧問をやってほしいとはどういうことだろう？」

「なんの？吹奏楽？」

「なんでバンドマンの弟に吹奏楽の顧問頼むのよ。軽音楽部にきまってるでしょ」

そう言えば、この姉は勤務先の女子高で顧問を掛け持ちしてるって言うってたな……

ここで俺の思考は、ようやく言葉の意味を理解する。

「軽音の顧問？」

「ここが桜ヶ丘高校か……」

さわ姉から借りた車から降りると、駐車場から校舎に視線を移す。白亜の建物は、校舎と言うよりもむしろ講堂という言葉がふさわしいと思うほど堂々とした佇まいだった。

「久しぶりだな……」

さわ姉こと山中さわ子から顧問の依頼を受けてから二週間後。俺は姉の半ば強引な説得によって、ここ桜ヶ丘高校に赴いていた。

「しかし……ほんとに大丈夫なのか？」

たしかに姉は軽音楽部顧問だと思うが、一介の大学一年生が、臨時とはいえ、女子高に入れるものなのだろうか？たしかに女子高校という響きは、20にも満たない俺にとって魅力的な単語の一つだ。しかし、それとこれとは、話が別だ。

さわ姉が俺にお願いをしてくるのは、今回が初めてだったように思う。いつも六つ離れた姉の後ろをくつついてこそすれ、向こうから何か頼ってくる状況などなかったのだから。だからこそ、俺以外に適切な人材がないということも、すでに学校に顧問が見つかったと言ってしまう、切羽詰まった状況だというさわ姉の詰めめ甘さ

にも目をつぶったのだ。弟として、初めてできる姉孝行だと納得するしかなかった。

とにかく、行くしかない。

車の荷台からギターケースとエフェクターケースを取り出すと、俺は自己主張を始めた胃袋を無視しながら校舎に向かって歩き出した。

「なんで俺が？」

あの時、この無茶なさわ姉のお願いが理解できなかった。

「いやね、他に頼める人がいなくて・・・」

「でもバンド仲間とかいるじゃん。当たらなかったわけ？」

「もちろん真っ先に相談したわよ」

さわ姉は急にカーペットをいじりだした。

「だけど全滅。みんな時間の都合が悪くて出られないって」

「また駄目だったのかよ。ひよっとしてさわ姉嫌われて・・・」

さわ姉のチョップが俺の脳天に直撃する。視覚が感知できない速さでたたきつけられたものだから、頭に鈍い痛みが走った。

「いてえよ。本気はなしだっていっつも言ってるだろ！」

「タクが変なこと言うからでしょ」

図星じゃなかったら、ここは笑ってやり過ごすところだろう、さわ姉は大人だし、と心の中で愚痴る。

「それで、俺？」

「うん。だつてあんた、現役のバンドマンじゃない」

たしかに高校時代からバンドはつつけているが、それで高校生、しかも女子高生の指導などできるものだろうか。とくに今の俺の力量は、他人に指導できるものに達しているのだろうか？

答えは、否しかないように思えた。なにせ、自分がさわ姉に追いついているとは到底思えない。記憶の中にある、ギターを華麗に弾きこなすさわ姉を、俺はずっと追いかけている。

「最初は職員室に行け、か・・・」

さわ姉に渡されたメモを見ながら、目をあちこちにやりながら目的地を探す。

正直な話、ギターを背負い、エフェクターケースを持った俺は、女子高の中でひどく浮いていた。もう放課後の時間だからか、何人もの女子高生が俺を通り過ぎるが、俺の姿を見るたび、好奇心をむき出したり、ひそひそ小声で何か話し合うので、非常に心持がよろしくない。ライブで人に見られたり騒がれたりするのは仕方がないとしても、こつも人目につくのは気分が悪い。

俺は見世物じゃないと言いたくなかったが、言いだす前に職員室のプレートを見つけた。

「今現役でやってるタクだから顧問やってほしいのよ」

「あれ、自分のバンドメンバーは？」

「上げ足とらないの。いい、あの子たちはやる気あるんだかないんだか分かんないのよ。自分たちのバンドしか、多分知らないからでしょうね」

そう言うさわ姉は、姉の顔から、教職の顔になっていた。ガサツでいい加減なさわ姉をよく知っている俺は、その真剣なまなざしにドキツとした。さわ姉はバンドマンだっただけに、軽音楽部に対する思いは本気なのだと伝わってくる。軽く俺を指さすと、言葉を続けた。

「タクは本気でバンドやってるでしょ。そういう人から指導を受ければ、刺激を受けるだろうし、もっとバンドをやるうって気になると思うのよ。いかにせん素質はいい子たちだけに、もったいなくてさ」

さわ姉がここまで学校のことを話すことも初めてのことだった。だからここまでさわ姉を真剣にさせたその部活に、俺は興味を持った。いや、惹かれた、といった方が正しいのかもしれない。

「うまいの？」

「んー年齢にしては、ね。ベースとキーボードの子はうまいし、コピーじゃなくてオリジナルもやってるわ。タクはバンドの曲作ってるんでしょ？」

「コードとリードギターだけだよ。他はみんなでセッションしながら・・・」

正直俺が作った曲はクオリティが高いとは言えない。みんなで作っていくのもそれぞれの持ち味を出したいからで、とくにドラムに至っては細かい指定がなかなか難しい。みんなで作ってて初めてバンドの曲になる。だから軽音楽部に惹かれはするが、素質の面で俺がやってても本当にいいのだろうか？

「そのやり方はあの子たちも一緒。それにタクはいろんな音楽聴いてるから、曲や音がいいか悪いかも判断できるわよ」

俺の不安を読み取ったのか、さわ姉はこう言って俺を説得にかかると。どうしても俺にやってほしいのか、急に過去を思い出すように視線をあらぬ方へ向けた。

「顧問やってくれないなら、半分出してあげたムスタングのお金、今すぐ出して」

「あれはお祝いじゃなかったの？」

バンドを始めてギターを買うことになったときのことだ。今まで貯金と合わせてもカート・コバーンが愛用したフェンダー・ムスタングには手が届かなかった。半分まで出してあげる、といったのはさわ姉だ。他のギターは目に入らなかったのを見るに見かねたと本人は言ったが、あとで聞いた話だと俺がバンドを始めたのがうれしくて仕方なかったらしい。

「姉の願いを聞いてくれない弟にはお祝いなんてしません」

きっぱりと言い放つさわ姉の理不尽に開いた口がふさがらない。

生徒のことを心配したときの感動が吹き飛びそうである。

「きたねえよ！俺が金欠なの知ってるのに・・・」

「だったら、顧問やりなさい」

俺を指さすさわ姉は勝者の笑みを浮かべていた。

「臨時顧問には、少ないけどお金出るし、私の車、研修中は自由に使っていていいわ。どう、やってくれない？」

こう言われて、俺はすっかり退路がなくなっていることに気付いた。飴と鞭。どうやら、さわ姉は本気で俺を臨時の顧問にしたいらしい。

俺は、負けた。

職員室で正式な許可と入校パス、それからこまごました書類を受け取ると、さっそく軽音楽部があるという音楽準備室へ向かった。

相変わらず、古い校舎である。

さわ姉が現役の高校生だった頃、学園祭やら体育祭やらで俺をこまごも引つ張ってきたものだった。そのときは小学校三四年のはずだった。しかし、そのころの自分でさえ校舎の古さに驚いたことを覚えている。

階段を踏む際になる木造独特のきしみ音が、一步一步重さを増していく。

校舎の中は賑やかな生徒の声があふれかえっていて、ようやく俺は女子高校に来ていることを実感した。だが、どこかひっかかるものを感じていた。それが何に対するものなのかいまいち分からなかったが。

階段を上がった突き当りに、音楽準備室はあった。だが、軽音楽部であるものを示す看板もポスターも、なにもない。

ドアの向こう側から聞こえる女の子の笑い声から、ここが軽音楽部だと判断するほかなかった。

大きく息を吸い、ドアノブに手をかける。また胃袋の自己主張が始まったことに、俺は戸惑った。

そんな緊張に構うことなく、ドアノブが大きな音を立てて回転した。

きっかけはふとしたことから（後書き）

小説初心者です。お読みくださり、ありがとうございます。

一応、バンドあり、恋愛ありのストーリーをこれから書いていこうと思います。

誰がヒロインかはまだ伏せたいのでここでは書きませんが、次回から放課後ティータイムが出てきます。

さわ子ファンのみなさん、勝手に設定変えて申し訳ありません

いろいろと至らぬところもあるかと思いますが、どうかお付き合いくださいませ

リズム、ビート、そしてケーキ？

「それでそれで、さわちゃんって家ではどんな感じなの？」

「いや唯、ここはさわちゃんが学生だったときの話を聞こうぜ」

「それよりも、どっちも聞いた方がいいんじゃない？」

「みなさん、さっきから質問ばかりですね・・・」

「そうだぞ。先生困ってるじゃないか」

「・・・どうして、俺はここで紅茶を飲んでいるのだろう？」

俺は、軽音楽部の顧問、という話でここ（音楽準備室）にいるんだが・・・。

目の前で嬉々としてさわ姉のこと、たまに俺のことを聞きまくる女子高生たちに、戸惑っている自分がいた。

らしくない緊張のもと、軽音楽部室に足を踏み入れた俺を待っていたのは、歓迎会ムードで俺を待ち構えていた軽音楽部のメンバー五人だった。

荷物を置いたとたんに、一番窓際の、しかも五人全員を見渡せる席（いわゆる誕生日席）に誘導され、自己紹介をする間もなく質問の嵐である。さわ姉が何と言って俺のことを説明したのかは定かではなかったが、五人（中でもテンションが上がっている二人）のこの盛り上がりようから察するに、なにか吹きこんで学校を後にしようだ。

「さわちゃんがすごい弟を連れてくるって言ってたから、どんな感じなんだろーって楽しみにしてたんだよねー」

ほんわかした口調と笑顔で話題をふる、黄色のヘアピンをした子
- 平沢唯がケーキをほおばりながら話始める。というか、さわ姉は

なんて期待値をあげてくれる台詞を残したんだ。

「すごい、弟？」

「そうなんですよ。ギターも歌もうまい、かつこいい自慢の弟だって」

と、おっとりしてほほ笑む琴吹紬が俺に丁寧に説明してくれる。いや、どれも当てはまらない気がするが、なにより自慢の弟って生徒に言うことじゃないだろう。

「それにしてもまさかさわちゃんに弟がいるなんてなー。絶対一人っ子だと思ってた」

上を見ながら椅子をガタガタ揺らしながら、カチューシャをつけた田井中律が感想を述べた。

「子供っぽい姉でごめんなさい」

「い、いえ、そんなことないですよ、お世話になってるのはこっちなんですから」

どれだけさわ姉がこのメンバーに迷惑をかけたかを想像して謝ると、一人だけ制服のリボンが違う、左右に分けた髪の毛の持ち主、中野梓があわててフォローしてくれた。

「お世話に・・・なってる・・・か・・・」

やや疑問を顔に浮かべている黒いロングヘアの秋山澪が、何かを思い出しているのか顔が引きつった。

さわ姉から、デジカメの画像やらライブの映像やらで五人のメンバーはすでに把握していた。ただ、細かいことは会えば分かる、の一点張りで性格や好きな音楽などはほとんど聞けなかった。ただ面倒臭かっただけなのだろう。家から近いという理由だけで母校に就職してしまうような姉である。

だから、教師として、顧問としての顔がどんなものかは全く予想できないまま、メンバーの名前だけが分かっている状況で、俺は今ここにいる。

ただし、さわ姉から一つだけ、顧問としての禁止事項が存在した。

『いい、私は学校でおしとやかな美人教師で通ってるの。それをぶち壊さないでよ』

ようするに、イメージ崩壊させることは言うな、ということだった。

だが、五人の会話から察するに少なくとも軽音楽部のメンバーだけにはおしとやかな美人教師という仮面は通用していないか、あるいは存在していないことが確定だった。これから数か月だけだが、週に何回かは会うことになる子たちである。なんとか距離を縮めた、そんな思いもあった。

「さわ姉の普段の様子ねえ。知りたいの？」

「うん、教えて教えて！」

平沢以下全員が耳をそばだてるので、俺はこのメンバーにはいいか、と家でのさわ姉を少し語ることにした。

「うそ、さわちゃん家でもそんななのか？」

田井中が腹を抱えて笑い転げる。家のことや高校のころのことを話すと、笑ったり呆れたりするので、五人の反応が面白い。気付けばたくさんのエピソードが俺の口から飛び出していた。やっぱり、先生としての威厳はここでは皆無らしい。わが姉ながら情けない。

「でもさわ姉はおしとやかで通ってるって言ってたけど、違うのか？」

「いえ、他の所ではそうなんですけど・・・」

中野が言いにくそうにさわ姉の『仮面』ぶりを話始める。フレームレスの眼鏡がさわ姉の顔に知的さがプラスし、おしとやかな物腰と年齢の近さから、生徒の中ではかなり人気がある先生らしい。といても、そんなさわ姉はなかなか想像できなかった。美人教師ということとは身内である俺も認めざるを得ないが、あれでかなり子供っぽいのが実際の姉なのだ。

「あ、あの」

隣に座っている秋山がおどしながらか話しかける。さつきからずっとこんな調子なので、俺の顔は自然と緊張に染まる。かなり人見知りする性格のようだ。

「先生つて、名前なんていうんですか・・・？自己紹介がまだだから、その・・・。」

あ。

俺も含めた全員の顔が固まる。こんなに話しているのに、お互いのことはほとんど紹介していない。

「じゃ、じゃあ、自己紹介します」

立ち上がって姿勢を正すと、俺は自己紹介を始めた。とはいっても、何を話せばいいのだろう。

視線を部員に向けると、目を輝かせて俺を見つめている。そこではっとした。

可愛い子ばかりだ。

映像や画像で分かっていたが、実際に会ってみるとそのレベルに驚くばかりだった。

なんとも短絡的とかいまさらとか、とにかく俺は激しく緊張した。胃が擦じ切れそうに痛み、頭が回転しない。さわ姉がいるし、これまでの18年そこそこの人生でそれなりに女子と話したこともある。だけど、ここまで自分を見つめられるという状況に遭遇したことは一度もない。それも年下に。

ややどもりながら、働かない脳みそでとにかくこの場を終わらせようと、名前を言う。

「や、山中巧斗たくとです。たくとは、巧に北斗七星の斗たくとって書きます。こ、これから10月くらいまで、ここで姉に代わって臨時の顧問を務めさせていただきます。よろしくお願いします」

「たくちゃん先生のパートはどこなんですかー？」

拳手をして田井中が質問をしてきた。さわ姉からギターだと聞いているはずなのだが、ツッコミを入れられる余裕もないほどに俺は

緊張していた。それに、たくちゃん先生というかるいあだ名にも反応できなかった。

「ぎ、ギター。曲によっては、ボーカルも」

「オリジナルやってるんですか？」

秋山が少し驚いたような口調で質問する。

「うん。コードとリードギターを。たまに歌詞も書きます」

「すごい、という声がどこからともなく聞こえた。

「なんでもできるんですね」

琴吹が感心したようにうなづいた。

「それじゃあさ、たくちゃん先生にギター弾いてもらおうよ！」

平沢が提案すると、中野がぜひ聴きたいです！と強い目でこっちを見てくる。そして、全員がそれに同調した。

一応ギターは持ってきたが、この流れで弾くのか。最悪とまではいかないが、ここまで注目されて弾くとなると、かなり恥ずかしい。しかし、弾かないわけにはいかなかった。

平沢が使用しているマーシャル・MG15CDRにシールドを差し込み、エフェクターをチエックする。どんな音にしようか。とりあえず、というのは彼女たちに失礼だが、自分のやりたいようにやってみよう。俺はそう決めると、手早くチューニングを済ませる。

ソファの回りに五人が集まって、俺の手元を凝視している。とくに平沢、中野の目の輝きようといったら、他のメンバーの比ではない。

アンプのスイッチを入れ、音を確認める。マーシャルとムスタングが織りなす、暴れる音色だった。

アンプのメモリを調節。エフェクターもばっちりだ。

ストラップをきちんと肩にかけ、へその位置にギターを固定する。誰も声を発しない。それが余計に緊張を高めたが、いったんギターをオープンで鳴らすと、すっと緊張がほぐれていくのを感じた。

ああ、そうか。俺は、この感覚を何度も経験している。
これはライブと同じなのか。
そう思うや、俺は一気に右手を振りかぶった。

青いムスタングから、音があふれだす。

エフェクターとアンプが表現する、パワーの塊みたいな音だった。
放課後ティータイムのメンバーは、巧斗が作り出すその世界に、
圧倒された。

コード引きから入ったと思ったら、激しいソロ。
大きく足でリズムをとりながら、身体全体でギターを弾いていく。
ときに上を向き、ときにギターを凝視しながら。

身体よ揺らし、ギターを振り回す。

それでいて軽やかな指先から伝わる、巧斗の魂。
激しさと、静かさを重ねていきながら彼の演奏は続く。

パフォーマンスという言葉が生易しく聞こえるほど、その弾き様
は圧巻だった。

気がつけば、メンバー全員が手をたたき、引き込まれていた。

汗びっしょりで演奏を終えると、五人が我慢できないといった面
持ちで駆け寄ってきた。

「すごい、私感動しちゃった!」

「めっちゃくちゃうまいじゃないですか・・・」

「思わず手たたいたっちゃったよ」

正直、こんなに感動されるとは思わなかった。

感情の赴くまま、さらにいえば、本能に従って俺はギターをかき
鳴らした。他のことは一切、そう、かつこいいところ見せようだと
か、俺のギターを見せつけるだとか、そんなことは考えなかった。
みんながリズムと取ってくれたり、乗ってくれたりするので、ギタ

ーを弾くのが楽しかった。

我ながら反省すべき点多々あったが、とにかく、よかった。これが今の感想だった。

「たくちゃん先生、唯のことはまかせた!」

親指をぐつとあげながら田井中がうなずく。

「なんでだよ。というかたくちゃん先生って……」

思いのほか激しく弾いたからか、かなり息があらう。そして指摘する余裕も出てきた。

「さわちゃんの弟で、いちおう顧問だから、たくちゃん先生」

先生と呼ばれるのがこんなにこそばゆいとは思わなかった。俺はそんな柄じゃないのに。というかなんて簡単なあだ名方式だ。

「唯は去年からギターを始めたので、その指導もしてほしいんです」

さつきよりもおどおどすることなく、秋山が田井中の答えを引き継ぐ。

「私が教えているんですけど、やっぱり先生に教えていただいた方がいいと思って……」

「ひどーいあずにゃん、私をみすてないでえー」

平沢が中野に抱きつきながら捨てられた子犬のような顔をする。

後輩に教えてもらいながらその態度はどっちが後輩なのか分からない。それよりも……。

「あずにゃん?」

中野は顔を真っ赤にしながら

「先生はこの名前で呼ばないでください!」

なるほど、そういうことね。真面目そうな子だから、先輩にいじられている、ということか。

「わかった。でも、毎日来れるわけじゃないから、俺がいない日は中野が平沢のギターをみてほしいんだけど、いいか?」

「はい」

あだ名に俺が突っ込まなかったのか、まだ顔を赤くしながらも中

野はうなづいた。よし、次はこのバンドの演奏を・・・

そう言おうとすると、田井中がそれを遮った。

「じゃあ改めて、みんなケーキを食べるか！」

ちよつとまって、という間もなく真つ先に平沢がテーブルに戻り、紅茶を飲み始めた。言った本人である田井中はもうケーキに夢中になっている。琴吹はティーポットの中身をチェックしている。中野はやや考えたあと、結局ケーキに向かった。

なんとという切り替えの速さ。ここは普通、自分たちもやろう、と思うところではないだろうか。

一人だけ取り残された秋山に聞いてみることにした。

つんつん、とメンバーに聞かれないうちに指さすと、身体を震わせていた秋山は目を丸くし、驚いた顔で振り返った。

「あ、驚かせてごめんね」

「い、いえ。それで・・・なんですか？」

「ここはいつもこうなの？」

恥ずかしさと申し訳なさが入り混じった顔で秋山は答えた。

「そうなんです。練習もするにはするんですけど・・・」

「こうしてしゃべっている時間の方が長い、と」

「はい。ごめんなさい、せつかく来ていただいたのに・・・」

秋山はうなだれながら謝った。

「いや、あやまることじゃないよ」

このままいけば泣きそうな雰囲気だったので、あわてて俺はフォロ―に入る。

「まあ今回は、顔見せてことで、いいじゃないか」

「え？」

俺は思わず、さっきとは違うことを言っていた。

「いきなりガチで顧問やりたいなんて、俺思っていないよ。とりあえず今日は、この部活にどんな子がいるか、確認できただけでもよかったよ。これから、楽しくやれそうだよ」

「先生・・・」

「おい、二人してなにしゃべってんだー。二人のケーキはおれたちがいただくぞー」

田井中が大げさにケーキを掲げる。

「今日初めて会ったのにとりあげるなよ」

たしかにケーキはおいしい。うん。今日は、これでよしとしよう。

「まあ、いいじゃん？」

笑顔を見せて、机に戻りかける。身体を動かしたからか、お腹がすき始めていた。秋山はそうですね、とちょっとほほ笑んであとに続く。

「次来た時、みんなの演奏見せてもらうからな」

ケーキを食べる前にそう宣言すると

「えええー！ー！！！」

おもに田井中と平沢の、悲鳴に近い叫びが部室に響き渡った。

「えー、じゃない俺はさわ姉から頼まれてるんだ。だいたい部室あんのに練習しないのはおかしいだろう」

ぶつくさいうメンバーの不平を聞かないようにしながら、俺はケーキを口にした。

ほんのりとした甘さが、口いっぱい広がった。

リズム、ビート、そしてケーキ？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

主人公の好きなジャンルはオルタナティブ・ロックです。分かりやすく言うとニルヴァーナ大好きっ子です。

なんでもあとがきで書くのかというと、本編では書けなかつたんです。ノリを重視した結果がこれです。ほんとすいません。

駄文が続きますが、どうかお付き合いくださいませ。

次回、だれがヒロインかわかる、かも・・・

ホーム・コメディ

バンドというのは、ひとつの家だ。

というのは、それぞれの役割がはつきりしているからだと思う。ギター、ベース、ドラム、ボーカル。それぞれが欠けたらバンドにはならないし、音楽はできない。お互いに主張したり、喧嘩したり、妥協したり、いろいろな山を越えて活動を続ける。真面目にやっていたら、自然とそうなる。クオリティの高いものを目指せば目指すほど、ぶつかってしまう。だけど、ライブで、スタジオで感じるあの高揚感は、バンドでしか得られない。だから、バンドをする。少なくとも、俺はそうだ。

常日ごろからそう思っている、というわけではないが、スタジオに入ってから練習すると、ふと、こう感じることもある。

さわ姉に言うと、彼女は青春してるね、と笑ったけど。

バンドの練習が終わると、スタジオ近くのファミリーレストランで遅い夕飯を取るのが高校からの習慣になっていた。

四人いるバンドメンバーは高校から変わっていないが、大学は見事にバラバラで、入学してからはこれまで以上に練習時間の調整が難しくなった。でも、こうしてみんなでくだらないことで盛り上がるのはやはり楽しい。いかにあしたが早くても、長いこと雑談は続いていく。

「ライブの申請がきた？」

俺がタバコに火をつけると、バンドリーダーであるドラム担当の室井がケータイを押しやった。

「なんだ、いつものムーンチャイルドじゃん」

ベース担当の青島が、メールを見るなりあくびをした。まあ、高校からお世話になっているライブハウスだけに、今更特別に緊張は

しないのだろう。

「ちよつとまで、まだ続きが・・・え、俺ら、トリ？」

最後まで読んだサイドギター兼ボーカルの柏木が、拍子抜けした顔で室井を見つめる。

「うん。今回はトリ。多分、対バンするバンドがみんな高校生だからじゃない？」

たしかにメールには、他の出演バンドとそのリーダーの名前と年齢が記されていたが、どれも年下だった。

「トリは初めてだなあ」

ライブのトリ、つまり一番最後ということとは、一番出演する中でうまいということだ。トリという単語を聞いたとたん、いつものライブハウスだというのになぜか緊張している自分が情けない。

「今から一カ月半あとか・・・。タク、一曲作るか？暴れるの」

柏木の提案を予想していないわけではなかったが、時間的にどうなのだろう？

「うーん。簡単にするか、インスタにするか・・・トリならみんなで騒ぎたいしなあ」

「インスタって逆に時間ないじゃね？」

ハットを直しながら室井が意見を述べる。ピザを口に運びながら、青島が提案した。

「じゃあどつちも考えてきてよ。時間あるだろ？」

「時間があったって、できるときとできない時があるんだが・・・」

正直、桜ヶ丘高校の臨時顧問になってから、あまり暇ではなかった。でも、内容が内容だけに、こればかりはバンドメンバーには話せていない。女子高の顧問をやっていると分かったら、あるメンバーは紹介しろと絡むだろうし、あるメンバーは嫉妬のあまり何をしだすかわからない。俺たちの間に信頼がないわけじゃないが、一般的に見たら、世の男子が妄想の世界でしか立ち入ることのできないのが俺の顧問先だ。落ち着くまで黙っていた方が得策だろう、と

踏んでいた。

「次の練習までには結論出すか。頑張ってみるわ。その代わり、頼むぞ」

実際問題、できるかどうかはまだわからないが、俺が基本を作れば、必ず発展していくのが自分のバンドだ。それを信じて、格闘するしかないだろう。

ライブの話はそれで終わり、話題は下ネタに移って行った。軽音部のメンバーに、とても聞かせられる内容ではなかった。

翌日。授業も半分は寝ていたし、一コマ目は時間ぎりぎりで間に合った。だが、なぜか桜ヶ丘高校に向かうのだけは、早かった。

楽しんでるなあ、俺。

浮かれている自分に気付く。そんな現金な自分が、いやらしい人間であるかのように思えてしまうのが、いやだった。もっとも、五人と話をするのが、楽しかった事は事実だ。

けど仕方がないじゃないか、と自分を励ましながらハンドルを回す。だいたい、あんな可愛い子たちが五人もいて、何も感じない男子はいない。そうだとタクト、お前は正常だ。だが忘れるな、お前は顧問だ。さわ姉の代理だ。変な眼でみたら姉にも迷惑がかかるぞ、とよく分からない叱咤激励をしているうちに、目的地についてしまった。

やや疲れながら、車を降りる。今日は顧問として二回目の訪問で、前回の宣言通り、演奏を聴いて指導する予定だから、ギターは持ってきていない。

自分がどの程度まで指導するかはきめていない。その前に、まだ俺は、指導などという上からの言葉を使っていることに抵抗があった。そんな器なのか、自分の中でまだ判断が出来かねていた。

放課後までは、あと十分。

とりあえず、トイレに行こう。

女子高なので、もちろん男子トイレは教職員用しかない。それはたいてい一階にあるものだ。部室である音楽準備室からはかなり遠いので、先にすましてしまうことにこしたことはない。

用を足しながら、うきうきしてくる本能と必死で格闘する。さっき自制したばかりだというのに、この感覚が出てくるのはおかしくはないだろうか？

多分、女の子とは別に、どんな演奏をするのかが、バンドマンとして純粹に楽しみだからだろう。いわゆるガールズバンドとほとんどかわりがなかった自分にとって、新鮮な存在であることは間違いなかった。

やっぱり、この校舎は懐かしい。

廊下を歩きながら、さわ姉に学祭で連れまわされたことを思い出していた。

さわ姉のころは、軽音楽部は今よりももっと人数がいて、ライブも大盛況だったらしい。あのころのさわ姉はとにかくデスマタルの世界に浸かっていてライブも家でも激しかったが、俺と学祭を回る時はなんでもおごってくれたっけ。

それに、六つ下の弟が（こんなことは恥かしいけど）かわいかったんだろ。クラスの屋台、軽音楽部のメンバーに引き合わせ、ここにこしながら俺を紹介した。そのころはとにかく大勢の女子に見られるのが恥ずかしくて仕方がなかったが、誇らしげなさわ姉をみると、なぜかうれしかったのを覚えている。年齢が上がるにしたがってここに来たことは忘れつつあったが、それでもこんなに鮮明に校舎の記憶があるということは、それだけここが印象に残ったということだろう。もし俺が弟でなく妹だったら、この高校に進学していたかもしれない。

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか軽音部の部屋の前に来ていた。

すでに話し声が聞こえているが、楽器の音は一切ない。

さて、どうやってみんな（おもに田井中と平沢）のやる気をだそう、と考えていると、階段を駆け上がる音が、だんだん大きくなってきた。

秋山が軽快なリズムを刻みながら、こっちに向かっていた。

「先生。こ、こんにちは。今日もよろしく願います」

俺に気づくとペこりと頭を下げる。この前も感じたが、この秋山漣という子は、軽音学部の中でもまじめな子のようだし、やる気もありそうだ。この子に聞いた方がいいのかもしれない。

「秋山、ちよつと相談があるんだけど・・・」

「は、はい、なんですか？」

未だに俺に緊張しているのか、警戒心が垣間見える口調で秋山は答えた。

「どうしたら、演奏してくれるかなあ」

「私たちが・・・ですか？」

「言いくいんだけど・・・。ほら、前来た時見せてもらって言ったけど、どうすればやる気がでるのかなって・・・」

前回は結局、なぜか自分のギターを披露し、それ以降は歓迎会と称してほとんどケーキやお菓子を食することで終わってしまった。いきなり顧問風を吹かせるよりは軽音楽部の空気に乗った方が、これからやりやすいのではないかと思った。

「前はほんとにごめんなさい。せつかく来ていただいたのに、演奏できなくて・・・」

「ああ、いいんだよ、前のことは。俺も結局ケーキいただいちゃったし。みんなと話せたから、もうそれでいいかなって」

こういつて秋山を説得にかかるが、どうも本人は前回のことに悔いがあるようで、まっすぐ俺を見つめるところ宣言した。

「今日は、私が必要なを演奏させます！」

その言葉には、強い意志があり、その強さに俺はビックリした。大人しそうな子だし、てつきり俺に頼み込むのかと思った。もっと

も、彼女は顔を真っ赤に染め、プルプルと身体が震えていたが。

ただ、この時俺は、練習の事とは別に、単純に秋山に見とれていた。墨のようにまつ黒な髪に、釣り目がちな大きい目。とにかく、俺が現実に見た女の子の中でトップクラスのかわいさに違いなかった。

「先生、今日はちゃんと聞けるようにしますから」

秋山のその言葉に我に返った。秋山は依然と俺を見つめている。

・不振がられたらどうか？

「あ、ああ。わかった。でも無理はしないでね」

俺が答えると、秋山は勢いよく音楽準備室のドアを開けた。

「・・・やっぱりこれか」

秋山と俺が入ると、そこは前回と同様にまったりしたりした、そう、たとえるならなじみの喫茶店のような雰囲気の流れていた。なんとかギターやドラム、アンプ類で軽音楽部だと分かるくらいで、この空気は一般の軽音楽部とは大違いだと思う。

「あ、先生！」

すでにケーキを食べ始めていた平沢が手を振った。その頬つぺたにクリームが着いている。他のみんなもそれぞれ紅茶やお菓子を食べて始めていた。

「漣、今日のケーキもうまいぞー」

田井中が舌鼓を打ちながら振り返った。

「あ、今お茶入れますね」

琴吹は俺たちの姿を認めると立ちあがってティーポットにお茶を入れ始めた。

秋山は身体をプルプルと震わせていたが、腰に手をやって叫んだ。

「みんな！今日は練習するぞ！」

「ほえ？」

「いきなりどうしたんだよ、漣・・・」

予想どおり、田井中と平沢はあつけにとられて疑問を浮かべた。

秋山は腰に手を当て、メンバーに言い放った。

「前先生もいっただろ。今日は先生に私たちの演奏を見てもらうんだ」

「そうですね、先輩！やりましょう！」

中野はフォークを持ちながらも秋山に同意した。

「えー、もうちょっとゆっくりしようよー」

田井中はダダをこね始めた。

「せっかく先生が来てくれたのに、演奏しないのは失礼だろ」

「でも澁ちゃん、ほら」

平沢はケーキをすくうと、何か言いかけた秋山の口に押し込んだ。

「ん……。こらあ、唯！」

「こんなおいしいケーキ、食べないと幸せになれないよー」

田井中も平沢もこれ見よがしにケーキをほおばると、幸せいっばいと恍惚の表情になった。

「あ、あのねえ……」

これはまずい。秋山からなにか怒りのオーラめいたものが蠢いている。

俺は、秋山の肩をたたいた。

「秋山、ここはこのままでいいや。あとは俺が何とかする」

「でも先生、ここは私が……」

責任感の強さを見せながら、秋山はなおみんなをやる気にさせようとする。だが、このまま強引に練習に入っても演奏がぐだぐだになることもあり得るし、むしろそうなる可能性が高い。無理やり演奏するのは、それは音楽じゃない。

「とりあえず……。そうだな、ケーキを……。秋山もいったん、座ったら？荷物重いでしょ」

「先生もですか？」

中野がやや呆れた顔で声を挙げる。だが、郷に入れては郷に従え。いったん彼女たちの懐に飛び込んでしまえばいい。秋山はなお言お

うとしたが、俺の言葉でぶつぶつ言いながらも席に着いた。

「じゃあ、俺が食べ終わったら・・・演奏、見せて」

琴吹が淹れてくれた香りたつ紅茶を口に運びながら、俺は言った。

「やっぱりか！」

突っ込みを入れる田井中を少しにらみつけながら、俺は言葉をつづけた。

「前はあれでよかったさ。初めからばりばりにやってもみんなのこと分かんないままじゃ、アドバイスのしようがないからな」

「さ、さわちゃんとは違う・・・」

平沢がなにやらカルチャーショックを起こしたようだが、気にすることなく俺はみんなを説得にかかる。ふと眼をやったホワイトボードに、目指せ武道館！！の文字が躍っていた。これを使ってみよう。

「まあ、このまま練習しないんじゃないあ武道館は無理だなあ。俺らのバンドにも及ばないかも・・・」

「おーし、じゃあやってやろうじゃん！」

売られた喧嘩は買う、とばかりに田井中はドラムに歩み寄った。

「うん、がんばる！」

と言いつつケーキを完食しようとする平沢。

なんともわかりやすい。だが、このやる気活性化方疲れた。

「先生、ありがとうございます」

秋山も心なしか疲れているようだった。

俺は、一回見せたらケーキを食べていい、と言っのを忘れなかった。

「えっと、オリジナルをやればいいんですよね？」
それぞれのセッティングを終えると、秋山が演奏する曲目を尋ねた。

「そう・・・だね。何曲できる？」

「え、一曲だけじゃないのか？」

田井中が予想と違えばかりにドラムから身を乗り出す。がつくりと俺は頭を抱えてしまった。本当に一回合わせただけでうまくなると思っているのだろうか。それにこれは練習ではない。それぞれのレベルと、バンドとしての力量がどれくらいあるかを測るものだ。一曲だけでわかるとは思えないし、オリジナルといえ、なおさらだ。自分がアドバイスできるものは、自身がないが。

「とりあえず、いまできるだけいいからやってくれ。終わったらケーキ食べていいから」

「よし、やるう！」

平沢がギターを抱えてメンバーに演奏を促した。まったく、初めからこうだったら楽なんだけど……。

「四曲ですね……これが歌詞と、コード表です」

秋山が四枚の紙を手渡してくれた。ルーズリーフに書かれた文字は、女の子らしい丸っこい字だった。ただ、俺が気になったのは文字ではなく、その歌詞だ。

「筆ペン〜ボールペンに……。私の恋はホツチキス……。カレーのちライス……。ふわふわ時間？」

歌詞はまるで生クリームたっぷりのケーキのように、甘い。なんだろう、歌詞を見ていると背中がかゆくなってくる。

「あちゃー、先生無言だぞ、遷、呆れてるんじゃないか？」

ステイックを背中にまわしながら、田井中が秋山にやつちまった、という顔で言った。

「わ、私の歌詞、そんなにひどいんですか？」

すでに秋山の大きい目には光がたまっていた。これはまずい。なんとかフォローしなければ。

「勝手に俺の評価を下すんじゃない、田井中。秋山、なかなか、いい歌詞じゃないか」

「ほんとですか？」

一瞬で秋山の顔が輝く。たぶん学校以外の人から評価をもらった

ことがないのだろう。ここで正直に自分の意見を述べたら、今後の活動に支障が出そうだし、感想の一部を言うことに止めた。

「うん。女の子らしくて、少なくとも俺には書けないな」

「よかったわね、漣ちゃん」

秋山の後ろで、軽く指をキーボード上で遊ばせていた琴吹がほほ笑んだ。まあ、このくらいでいいだろう。秋山は眼に見えてほっとしていた。

「よし、じゃあ、演奏お願いします」

「オツケー、いくぞ……って漣、どうしたんだ？」

カウントを始めようとした田井中が秋山の異変を察知したようだった。今ほっとしたはずなのだが、秋山はベースを持ったまま、顔を真っ赤にして震えている。

「や、やっぱり人前で演奏するの、恥ずかしい……」

「やっぱりか！」

「漣先輩、なにもここで恥ずかしがらなくても……」

田井中と中野が、それぞれの感想を隠すこともなくさらけ出した。始まる前はあんなにやる気があったのに、この恥ずかしがりようは不可解だ。

「人前でって……。俺がいるだけじゃん」

「あの、あんまりなれていない人だから、足がすくんじゃって……」

秋山の台詞は俺を落胆させるのに十分だったが、このままでは一向に演奏が聴けない。ようやくスタートラインに立ったと思っただけで、違ったようだ。

どうようか、と思った俺はあることを思いついた。

ソファを180度回転させ、ちょうど背もたれがみんなの前にくるようにする。そして、俺は仰向けに倒れこんだ。

「せ、先生、何やってるんですか？」

中野が驚いた声を挙げる。確かに、いきなり寝転がられたら混乱するだろう。俺は寝そべったまま、行動の訳を説明した。

「見られると恥ずかしいんだろ、だったら、こうしてみられない状況をつくったほうが、いいんじゃないかと思って」

みんなの顔は見れないが、空気から、反応はよろしくなさそうだし、こうでもしないと聞けないのだ。

「どう、漣ちゃん」

平沢が心配そうな声で秋山に確認している。少し時間があつたあと、ベースの心地よい低音が耳に飛び込んできた。だが、その音には、どこか元気がない。ひよっとして。

「だめ、そこに先生がいると思うと・・・」

俺は起き上った。秋山は涙こそためていなかったが、それでも、緊張しているという状況を確かめるには十分だった。

「あーもう、漣、しっかりしろ！バンドやってる人間がこれじゃあ、だめだろ」

「田井中、初めてまともなこと言ったな」

まったくその通りだ。バンドはライブをすることが、その目的と言っても過言ではない。たった一人の前でもこの調子なら、去年の文化祭はどうやってライブをしたのだろう？

「先生、そりゃないよ。あたしだってまともなことは言っさー！」「うっ・・・」

田井中の苦言は無視することにしたが、この恥ずかしがり屋のベイスリストはなんとかしなければならぬ。

「わかった。俺、入り口のところにいるから。それだったら、まだましだろ？」

「な、なんとか・・・」

「よし。俺が合図したら、演奏、始めていいよ」

俺は言葉通り入り口に歩いて行き、ドアに背中を預けた。

「漣、ほんとにいいのか」

「う、うん。このままじゃ、先生に聞いてもらえないしね」

「じゃあ、やるっ！」

平沢の元気いっぱいの掛け声の後、ハイハットシンバルのカウン

トが始まった。

「先生、終わったよー」

何とか四曲を終えた後、平沢がちょこんと顔を出して、演奏の終わりを知らせてくれた。

五人は（なかでも田井中が真つ先に）机に座った。秋山は、もうやりつくしたとばかりに、顔を赤く染めながら机に突っ伏している。「どうでした、先生？」

期待と不安を織り交ぜながら、中野が感想を求めてきた。中野はバンド経験が数力月らしいので、評価が余計気になるのかもしれない。かっ。

「えーっと、いいところと悪いところがあったけど、どっちからがいい？」

「じゃあ、いい方からで・・・」

田井中がメンバーを代表して答える。

ちよつと考えをまとめた後、口を開いた。

「歌詞を見た時は、どんな曲か想像もつかなかったけど、アレンジ、かっこいいよ。正直、すごいと思った」

「やった〜！あずにゃん、かっこいいって！」

喜びを身体全体で表現しながら、中野に抱きつく。なにも後輩に抱きつかんでもいいだろうに・・・。

「あとは・・・そうだね、バンドとしてのまとまりはあると思う」

このバンドの演奏は、予想以上にうまくいった。なんだろう、とにかく、五人が楽しんで演奏していることが、ストレートに反映されている。あんなにグダグダな活動をしていたとは思えないくらいに。

「えーっと、悪いところは・・・」

「よし、シャットダウンだ！」

「ダウンするな！」

正気に戻った秋山がげんこつを田井中にお見舞いする。やりすぎ

ではないかとも思うが、これで付き合いの長い二人なのだから、言わないでおこう。

「先生、お願いします」

「そうだな・・・個人になっちゃうけど・・・、田井中、サビで走りすぎ。秋山がいるからまとまっているけど、他のバンドだったら目茶苦茶になってるぞ。」

ぎくつ、と大げさにうるたえている田井中。自覚はあったのか。

「そうなんですよ。テンポキープがいつも大変で・・・」

前々から思っていたのか、秋山が大きくうなずきながら切実そうに語った。たしかに完璧なリズムで演奏できるバンドなどプロでしか存在しないが、一番目立つのが、ドラムである。

「うう・・・ばっちりだと思ったのに・・・」

キーキを落としそうになりながら、田井中が落胆する。厳しい意見かもしれないが、ここは正直に行った方がバンドのレベルアップになる。

「先生、私は？」

「唯、その自信はどこから・・・」

呆れて秋山がうなだれる。よし、ここも遠慮せずに行くか。

「平沢はそうだな・・・リードギターするんだったら、もっと練習だな。中野に変わってもらった方が・・・」

「せ、先生、私、練習します！」

ビシツと手を挙げ、平沢があわてた様子で言った。後輩にパートが取って代わられるのだけは避けたいのだろう。モチベーションが上がるのはいいことである。

「後は・・・ボーカルって、平沢なのか秋山なのか。どっちだ？」

「本当は唯ちゃんなんですけど」

琴吹が答える。

「けど？途中で変わったよな？たしか・ふわふわ時間、だっけ」

「いやー演奏を聴いてもらえるってなったら、やっぱり緊張しちゃって・・・」

「新歓ライブと同じ理由じゃん！」

平沢のあつけらんかんとした理由に、田井中と秋山がつっこんだ。というか、ボーカルを忘れるって普通あり得ないだろう。天然にもほどがある。

「それで秋山がカバーに入った、と」

「はい、すごく恥ずかしかったですけど、こればかりはどうしようもなくて……」

歌詞を書いたのが秋山なら、フォローできて当然か。

「でもよかつたな。澗。練習無駄にならなかったじゃん」

「それ以上言うなあ〜！」

あわてて田井中の口を塞ぎにかかる秋山。恥ずかしがり屋なのに、頑張るところはあるわけね。

「でもどっちもボーカルとしてもうまいよ。声や歌い方が違うから、被ってないし」

平沢のかわいらしい声、秋山の凜とした声。声のベクトルは全く異なるが、だからこそ、二人が合わさった時のハーモニーは、妙に心を動かした。

「そうなんだ。澗ちゃん、よかったね」

なんだかんだあったが、このバンドと関わっていくのは悪くない。五人から教わることもある。とりあえず、顧問らしいことは、まずできたかな。

「それにしてもさあ〜」

みんなほっとしたのか、フォークを上機嫌に動かしているなか、平沢がしみじみと言った。

「なんだかたくちゃん先生って、お父さんみたいだね」

俺は盛大に頭を机に打ちつけてしまった。

バンドは家族。そう例えることもある。だけど。

「お父さんか……ははははは！」

「こら田井中！腹抱えて笑うんじゃない！」

「そういえば、さっきまでの行動といい、みんなをまとめるとこ」

るといい、お父さんというの、中々合ってますね」

にこにこした笑みを崩すことなく琴吹が追い打ちをかける。俺はみんなと二歳くらいいしか違わないはずなんだけど……。そこはお兄ちゃんだろう。

「じゃあ溇はお母さんだな。厳しいし、胸もひといちば……」

本日二回目のげんこつ。煙をたんこぶから拳げながら田井中が抗議するが、秋山は顔を今にも爆発しそうなほど赤くなっていた。

「なんでそうなるんだ！お母さんてことは……」

なぜこうも赤くなるのか判断が着かなかったが、その後は誰が姉妹の順になるかでもめた。

話しあいの結果、琴吹が長女、田井中がおてんばな二女、平沢がおっとりした三女、中野があまえたがりの末っ子（ただし本人は認めなかった）になった。

ちなみに、俺が父親で、秋山が母親という案に変更はなかった。

さわ姉は姑さん、ということになった。

「この年で子持ちか。苦労するなあ、秋山……」

またしても顔を赤く染めた秋山が、今度は俺の頭上に拳をお見舞いした。

さすがに、やりすぎか。

消え行く意識の中、俺は調子にのったことを後悔した。

ホーム・コメディ（後書き）

遅くなつてすいません・・・。

やたら滯と絡みが多い気がしますが・・・

まあ、そういうことです。

ようやくスタートラインに立ちました。

これからはかなりオリジナルストーリーになります。

今回は、けいおん！メンバーがなんとかタクトにあだ名で呼ばせようとしています。

今回もお読みくださり、ありがとうございます。

次回も、読んでいただければ幸いです。

ポケットとあだ名

音楽準備室。一般的な高校にはたいていの場合存在する部屋だが、この桜ヶ丘高校の場合は、軽音部員が持ち込んだ紅茶セットと『いただきもの』のお菓子によって喫茶店と化した軽音部室である。普段あまりにぎやかな音楽が流れることはない。

そして、この日流れていたのは、たった一人の新人部員が先輩に『おもちゃ』にされている音だった。

「あずにゃん、これ着てみてみてよ。きつとかわいいよ〜」
「いやです!」

研修でしばらく帰ってこない本当の顧問、山中さわ子が自作したコスプレ衣装を着させようとする平沢唯と、その魔の手から逃れようと必死に抗う中野梓の応酬が続いていた。

「えー、ナース服だめなのか。かわいいのにな〜」

「なんでそんなの着なきゃならないんですか!あとなんで部室にコスプレの服があるんです!」

「じゃあせめてネコ耳・・・」

「それもいやです!」

しかし、身の危険を感じてうずくまる梓の後ろに、田井中律が音もなく近づいて、ネコ耳ではなく『トラ耳』をスポン、と装着させた。

「り、律先輩!なに着けるんですか!」

「ああ〜、トラ耳着けたあずにゃんもかわいい〜」

まるで赤ちゃんトラのような愛らしさに我慢できなくなったのか、唯はすりすりと梓に頬ずりを始める。始めは必至に抵抗していた梓だったが、律によしよしと頭をなでられるとすぐに大人しくなった。

秋山澪は、そんな三人の様子に呆れた顔で見守っていた。紅茶を飲もうとカップを持ち上げると、琴吹紬が頬を染め、まるで片思い

する乙女のようにうつとりしながら唯と律になす術なく『いじられて』いるよくある光景を見つめていた。

「いいかげん、梓を放してやれよ。そろそろ練習するぞ」

これ以上おもちやになっっている後輩を見ているのが忍びなくて、漣はバンドのリード・ギタリストとドラマーに注意した。

「え〜、もつとあずにゃんのかわいい姿みた〜い〜」

「まだ文化祭まで時間あるし、そこまですなくてもいいじゃん」
それぞれ違う方向でぐだぐだしようとする先輩二人に対して、梓はここぞとばかりに言った。

「でも、明日は先生が来る日ですよ。また二人、怒られてもいいんですか？」

う、と痛いところを突かれて唯と律が硬直する。これ幸いとばかりに、梓はやつとの思いで自分の席に座る。

「そうか、たくちゃん明日来るんだった・・・」

まるで宿題を忘れた小学生のような顔をして、唯は事の大きさを実感した。

「そういえば、先生が来てから一カ月近く経ちますね」

紅茶をすすりながら、梓がふと思いついたように言った。

佐和子の弟である、山中巧斗が臨時顧問となつてから、少しずつではあるが、この部活は音楽をするようになっていた。巧斗は週に二回、多くて三回訪問するが、その度にバンドのあつていないところ、唯のギター指導、アレンジの相談などしているので、ぐだぐだしようと思つてもできないのだ。

かといって、彼が嫌われているのではない。

さわ子の弟という事前情報があつたからなのか、リアクションがおもしろいからなのか、主に律が巧斗をいじればそれだけで笑いが起こる。『顧問』の顔になっっている時の真面目さと、いじつた時の反応のギャップがおもしろくてついいじっちゃうんだ、と律は漣に語つた事がある。

「そうだな。おかげで、唯は前よりもここで練習するようになって

たし、うまくなってるし」

「そんなにここで練習しなかったんですか・・・」

やや落胆しながらもどこか納得したように梓はつぶやいた。

「でもびっくりしたなー。さわちゃんの弟だからうまいとは思ってたけど、本当にすごかったからな」

気を取り直した律が、席に着きながら溇の言葉を引き継いだ。

「うん。プロみたいだったよね」

いつの間にか復活した唯がクツキーをかじりながら同意する。

「私もギター的事よく分らないんだけど、感動しちゃいました」
ムギがその時のことを思い出しながら感想を述べた。

最初に巧斗がここを訪れた際、唯の一声でそのギターの腕前を披露することになったのだが、彼の演奏はテクニクだけではなく、身体全体で弾いていて、なによりも人を引き込む力があつた。

「さわ子先生とちがつて真面目に音楽に取り組んでいるのは、すごい感じます」

さわ子本人が聞いたら抗議しそうな梓の発言に、全員強くうなづいた。なにしろ、さわ子は五人以上にここでのひと時を楽しみにしていると言ってもよく、その度合は先生でありながらティータイムセット一式撤去を泣きながら止めようとしたことからもはつきりわかる。しかも彼女は、昨年なぜか自作のメイド服で溇以下現二年生を文化祭でライブさせたばかりか、事あるごとにコスプレさせようとする。教師らしからぬ言動が多いのは、全員認めざるをえなかった。

「でもムキになるところは、やっぱり弟だよな」

悪戯っ子のような顔で律は、いじりの数々を反芻しているらしい。

「それは律がいじり倒すからだろ」

「だけど溇だって、たくちゃんがお父さんで自分がお母さんって言われた時は思いつきり殴ったじゃないかよ」

にやにやと意地悪い笑みを浮かべて、家族ネタで巧斗が溇を『お母さん』扱いしたことを指摘しながら律が言った。

「あ、あれはしょうがないだろ！いきなり唯が変なことやって、律がそれに乗つかるから！殴ったのはやりすぎたけど・・・」

「先輩、あの後先生に平謝りでしたよね」

巧斗が『お父さん』で、漣が『お母さん』、ムギが長女、律が二女、唯が三女、梓が末っ子。この会話の流れで巧斗が漣を『奥さん』扱いしたものだから、漣はあまりの恥ずかしさに感情の流し方が分からず、パニックになって顧問の頭上にげんこつを叩きつけてしまった。巧斗が数分間もの間気絶していたことから、その力の大きさが推し量れる。

もつとも、巧斗はただただ謝り続ける漣に対して、自分が悪かったから気にするなと笑って許してくれた。その日は、みんなのやる気うい出させると宣言しながらできなかったし、いざ演奏すると足がすくむし、あげくに暴力をふるうので、今も後悔の種だった。

けれど。

後悔するたびに、漣の中に疑問が一つ、生まれる。

どうして自分は、あの時あんなに恥ずかしかったんだろう。感情の行き場がなくなるほどとり乱してしまうのは、人前に出る時や怖い話、痛い話ぐらいなのに。本来なら、もつともまく流せたはずなのに、ああも混乱するのは、自分らしくなかった。みんなに言うことではないので、ずっとこのころのポケットにしまっているが、一向に答はでなかった。

「と、とにかく」

態勢を立て直そうと、ポケットの中の疑問をしまい込みながら話題を変えた。

「先生もうちの部活になじんでくれてるし、ちょっとは軽音らしくなってるかな」

「でもなんか、たくちゃんと話していると足りないものがあると思うんだよねー」

天井を見つめながら律はつぶやいた。

「りっちゃん、なにが？」

唯が律の顔を覗き込む。

「いや、うちらになじんでるって溇が言っただけど、まだちょっと他人行儀な気がするんだ。もっと仲良くなれば、いろいろおいしいことが……」

「律先輩、発想がなんとというか、すごい現金ですね……」

「なんだって?!」

この子も言うようになったわねえ、とどこその主婦のような言い方でツツコミを入れると、律ははっとして声を挙げた。

「そうだ！うちら、たくちゃんにまだ名字以外で呼ばれたことがない！」

「確かに、先生ら呼ばれるときって、決まって名字よね」

律の意見に、ムギが納得した顔でうなづく。

「でも顧問何だから、そこまで考えなくても、いいんじゃないか？」

溇の見る限り、巧斗は律にいじられている時以外、ここで『顧問』としての顔を崩すことはほとんどない。部員のボケや天然ぶり、コントじみた会話に突っ込んだり、笑うことはあっても、どこか一線を引いている気がしていた。たしかに、巧斗はたいがいのことは笑って許してくれるし、すごく優しい。でも、本人がそこまで深入りしてこないのに、自分たちがずかずかと立ち入ってもいいのだろうか。

「よくないさ！うちらがたくちゃんって呼んでんのに、名字で呼ばれるの、なんかすごいもやもやする！」

「そうだね。もっと、先生と仲良くなりたいな」

へたーっと机に突っ伏しながら、唯は唯らしい天然ぶりで言った。「で、でも先生相手にそれは……」

あまり男子と接点がない人生を送っている溇は、律の意見にいささか抵抗があるのか、足をもじもじさせた。

「だってさ溇、たくちゃんをたぶらかせ……いや仲良くなれば、気前よく機材とか買ってくれるかもしれないぜ！」

「先輩、いくらなんでも機材は無理なんじゃ」

なんてことを言うのか、と表情に出しながら梓は呆れた。

「たくちゃん、うちらと三つも離れてないんだぜ？先生っていう
ほどこかつちりしてないし、いつまでも名字で呼ばれるのはなあ」

律の話聞きながら、漣は巧斗が自分の名前を呼ぶところを想像した。不思議なことに、ほんの少しだけうれいかも、という気持ち
が湧きあがってくるのに驚いた。そして、ちよつといいかも、と
思えてしまった。そうになると、律のやや確信犯のような意見も受け
入れてみようと、考えてしまった。

「だけど律、どうやって呼んでもらうんだ？」

「ふっふっふ。あたしにいい考えがある」

まるで活動中のスパイのように声をひそめて話す律の計画に、他の
四人は耳を傾けた。ようするに、このメンバーは全員、巧斗を顧
問としてではなく、歳の離れた友達として接したかったのである。

結局この日は、音楽準備室から音楽が聞こえてくることはなかつ
た。

ポケットとあだ名（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

前回の予告めいたあとがきとだいぶ違った形になってすいません。書いていたら、想定以上に長くなってしまったのが原因です。

でもたまには、こうしてレギュラーメンバーだけの話も書いて楽しいなあと思いました。

とくに律と唯。なんだかんだいって動きのあるキャラは書きやすいです。

次回もお読みいただければ幸いです。

壁を壊すネコの耳

家の自室で俺が課題に悪戦苦闘していると、机の隅に放置たまのケータイが震えだした。

ディスプレイに、『山中さわ子 姉』の文字が映っている。時刻はもうすぐ夜の11時になるうとしていた。この時間、研修中のさわ姉は寝ているはずじゃないのか、と少しいぶかりながら、電話をとった。

「タクー！私もう帰りたーい！」

絶叫にも似たさわ姉の声の大きさに、俺はケータイを耳から放した。一カ月ぶりに聞く姉の声は、泣声だった。

「いきなりなんだよ」

これは長くかかりそうだ。俺は過去の経験から課題を諦め、イスに深く持たれながらため息をついた。

「だって、一日中机に縛り付けられて聞きたくもない話聞いて、ピアノの実習もあって全っ然ヒマがないのよ！」

「それが研修じゃないのかよ！」

あいた口がふさがらない。子供っぽいのはいつものことだから仕方がないとしても、これでも働き始めて1年経ったはず。これではどちらが上なのかわからない。

「自分から応募したわけじゃないし、それになにより、真面目な空気って私、ダメなのよ」

「だからって泣くことはないだろ」

「タクにしか言えないからじゃない！」

そう言い切られても、弟として困るんだけど。さわ姉に今彼氏はいないから、当然か。父さんと母さんに言うわけにもいかないしな。それに、俺にしか言えないと言われて、悪い気はしなかった。

「わかった。愚痴聞くよ」

我ながら、甘いなあ、と思う。昔からさわ姉の愚痴を聞いていた

のもあるだろうが、こうして客観的にみると、俺の中で姉の存在の大きさを認めざるを得なかった。

さわ姉は、それから30分近くかけて一カ月の間に溜ったのである。ろく愚痴を吐き続けた。一緒に受けている人が暗いだけの、講師がいやらしい目で見てくるだの、部屋が狭いだの、周りに何もなだの、話のスピードと内容から、よっぽど溜っていたに違いなかった。

そして一息つくと、落ち着いたのか今度は俺に質問をぶつけてきた。

「それで、顧問の方はどう？うまくやれてる？」

「やってるといっつか、いじられてるといっつか・・・」

俺が返答に困って言葉に詰まると、さわ姉は笑いだした。

「どうせそんなことだろうと思っただわよ。大方、律にやられてるんでしょ？」

さすがは教師。五人に部活時の姉の様子を耳にするたび、その教師ぶりに疑問が増えていったが、こうしてすんなりいじっている相手を言い当てるところを見ると、しっかり生徒をみているんだなあと感心してしまう。だがその気持ちを言うのはできずに、つい強情を張ってしまう。

「それは、みんなが俺をいじろうとするからで・・・」

「なにいつてるの。あんたは学生なんだから、そう気張らずにやればいいのよ」

「でもそうするとみんな言うこと聞かなさそうで・・・」

「心配なくても大丈夫よ。私の弟として行ってるんだし、あの子たちは、やる時はやるのよ」

そういうものだろうか。あいにく、俺はそこまでさわ姉の言葉を信じれなかった。顧問として気張らずにやればいいといっつか、どうすればいいのだろうか？

「自信持ちなさい。臨時なんだし、壁つくってたらあの子たちもやりづらいわよ。タクなら、大丈夫」

さわ姉の台詞には、不思議と説得力があった。これが教師という

ものなのだろうか。

気づけば、俺は部活のことをしゃべっていた。最初に訪問した時、ギターを弾かされたこと。お父さん扱いされたこと。ふいな一言をいじられること。毎回やる気を出させるのに苦労すること。でも、五人といると楽しいこと。

「そう。楽しんでやれてるじゃない。演奏はどう思った？」

「うーん、個人のレベルはばらつきがあるのに、バンド単位で聞くとなぜか、かっこいいって思うんだよね。グループがいいのかな」

「今の話、あの子たち聞いたら喜ぶわよ」

自分のことのように喜びながら、さわ姉は笑う。部活のOBということもあるのだろうが、これまでの話から、どうも軽音楽部でしか、さわ姉は学校の中では素に戻れないらしい。

「でもちかくライブあるし、課題と時期が被ってるから、今忙しくてさ」

「あ、ライブあるんだ。どこで？」

「いつものムーンチャイルド。今回はトリだったさ」

「すごいじゃない」

俺はベッドに寝転びながら、そうじゃないと返答する。室井に聞いたところによれば、今回対バンする四つのうち半分が初ライブなのだという。つまり、自分たちがトリなのは年齢的な要因が大きいのではないか、という疑問が残っていて、とりてて褒められるものじゃない、というのが実感だった。

「何言ってるの。あそこのオーナー知ってるから言うけど、あそこは年齢だけでトリにするほどやさしくないわ。トリに出来るだけの實力があるからその順番にくんだのよ」

さわ姉は、大学も含めてかなりのライブを経験しているだけに、このあたりのライブハウスのことは大抵知っていたし、知り合いも多い。今日は、さわ姉の言うことに納得することが多いと感じた。

「あ、けいおんのみんな、ライブに誘ったら？どうせチケット裁かなきゃならないんだし、あの子たちあまりライブに足運ばないか

ら、ちょうどいいんじゃないかしら」

「でも来るかなあ、俺が誘っても」

「来るわよ。タクが誘えば」

この時、俺はここまで言い切るさわ姉の自信が理解出来なかった。それからしばらく雑談をした後、電話を切って、カバンから今日渡されたばかりのチケット10枚を取り出す。薄いブルーのなめらかな長方形の紙を見つめながら考えた。

ライブをするのに、お金は当然必要かかる。ライブハウスはそこまで慈悲深い存在じゃないし、出るにはそれ相応のコストが必要なのである。とくに自分たちのようなアマチュアのライブチケットがお店で出回ることはないし、元を取りたかつたら手売りで稼ぐしかない。この十枚は俺に課せられたノルマともいうべきものだった。

たしかに、同年代の演奏を聴けばモチベーションも上がるだろうし、俺のバンドも下手ではないので、なにかしら得るものはあるだろう。

だが俺は、さわ姉に言われるまでもなく、一人の男としてチケットを見つめていた。

なんだかんだ言っただけじゃなく、タク。

私はケータイをベッドの隅に投げると壁にもたれかかった。顔がゆるむのが分かる。愚痴を聞いてもらったし、顧問もすっかりやってくれてるみたいだし、しばらくあの子には頭が上がらないわね。もっとも、素直に感謝するのは照れ臭いけど。

文部科学省が主催した、全国にいる音楽教師のスキルアップを図るといのが、私が受けている研修だった。あることは知っていたけど、受けるつもりはさらさらなかった。だけど、学校がいい機会だからと勝手に応募してしまった。

普段の仕事とか、考えなければいけないことは山ほどあったが、

その中でも真っ先に心配したのが軽音楽部だった。あの部活の時だけ、私は普段の自分に戻れる。おしとやかな教師を演じるには相当の体力を使うので、ムギが持つてくるお菓子と一緒に、あの空気はなくてはならないものになっていた。

部活については臨時の顧問をつけよう、と言われた時、私は頑としてそれを断った。あの空気、あの居場所を、見も知らない他人に壊されたくない気持ちと、あの子たちに合う顧問はなかなかいないという気持ちがそうさせていた。だから私は、参加する条件に、臨時顧問の件は私に一任することを提示した。新米のすることではなかったし、何人かのベテランは渋い顔をしたが、校長の一言で、私の仮面を外せる唯一の場所は保たれた。だから、タクは大学一年という若さにもかわからず、学校に来ることができた。でも、文化祭に間に合うかどうかは、日程的に難しい。

「今、タクはどんな音だせるようになってるかな」

タクのライブには何回か足を運んだし、きちんとした音源も聞いた。聞かたびに技術が磨かれているのが分かるし、ライブでのタクの動きは、音楽の世界にはまりこまなければできないレベルにまで達していた。バンドの実力もある。何より、ボーカルが変わることでガラリと空気が違う。そんなバンドはなかなかない。

でも、タクはもっともっと伸びる。それに必要なのは、精神的にもっとリラックスして音楽をやることだ。タクは真面目だし、音楽にまっすぐなだけに、視野が狭くなりやすい。ちょうど、自分が片思いした男の子に合わせようとして、デスメタルにのめり込んでいったように。

軽音の子たちと触れ合ってくれれば、それができると思ったし、あの五人にも、真面目に音楽をする癖が着くだろう。話をすると、考えはもうすぐ実現しそうだった。

余計なお世話かもしれないが、これでタクに彼女でもできれば、もう心配はないのだけれど。タクはかわいい顔してるし、性格もやさしい。もったくない、と常々思っていた。

それは私も同じか。

落ち込みそうな自分を励ましつつ、机に向かって、明日の予習を始めた。

いつものように軽音楽部の部室に向かう道すがら、俺の胃袋は妙に重たかった。昼間学食で食べた、特大かつ丼のせいかと思ったが、俺の胃袋はそんなに繊細じゃない。となると、原因は鞆のなかにある、チケツトか。

さわ姉は来る、と断言したが、一晩たってもその確信を信じるこ
とができなかった。なにしろ、女の子を誘うなど久しくなかったもの
だから、俺の頭は少々混乱していた。

さて、どう言えば自然に誘えるだろう、と考えてドアの前で立ち
止まると、俺の身体にいやな予感が走った。この直感に近いそれは
めったなことでは外れたことがなかった。チケツトのことなど脳内
ではかき消えてしまい、予感の正体を確かめようと、ドアを薄く開
けて、部室の中を覗いた。

だが、予想とは裏腹に、部室ではみんなが談笑しているだけで、
とりたてて何かが起こりそうな様子はない。

予感は、あくまでも予感だしな。

それに、いつまでもこうして覗いているわけにはいかない。事情
を知らない生徒が俺を見つけたらなかなか面倒な事態に発展するこ
とは、火を見るより明らかだ。

命までは取られまい、と思い直してドアを開けた。

「おーす。今日もよろしくお願いしま・・・」

俺が言い終わるよりも早く、田井中が立ちあがって、両手を後ろ
にしながら近づいてきた。なにか言われるのだろうと、予期せぬ行
動に俺の身体が硬直する。

「たくちゃん、ちよっとうちらからお願いがあるんだけど・・・」

「な、なに？」

何がおこる、何が起ると心臓がばくばく言うなかで、部長はパツと隠していた両手を俺の面前に掲げた。その手に握られていたものは。

「一回、このネコ耳着けてくれるかな？」

田井中の手に握られていたものは、黒いカチューシャにこれまた黒のネコの耳がちよこん、と生えた物体。ご丁寧に、耳の内側の毛まで再現されている。これを俺につけるとおっしゃるのか。

「なんでだよ！」

「いや、うちの部に入るにはこれを付けるのが儀式になってるんだけど、たくちゃんはまだやってないな」と気づいて」

「だれがやるか！あとなんでそんなものがある！だいたいそんな儀式があるのはおかしいだろ！」

あまりの急展開ぶりに、恥も外聞もなく、俺は大声で間違いを指摘する。なんと突っ込みどころの多いお願いだ。

「えー。たくちゃん女の子っぽい顔してるから、きっと似合うよー」

にこにこしながら、平沢が俺のこころを抉ってきた。

「男でこれが似合うって言われて喜べるか！あと、この顔はコンプレックスだから言わないでくれよ！」

昔から、俺とさわ姉はそっくり、と言われてきた。それ自体は姉弟なのだから不思議でもなんともないのだが、女と男として見た場合は、少々勝手が違う。さわ姉の場合は、性格さえ隠せば清楚な美人で通るが、俺の場合はなんだか男として認められていない気がして、かわいいと言われる度、うつ屈した気持ちになった。だから、その単語はできれば受け付けたくない。

「ふふふ。たくちゃんが顧問とは言っても、梓より後に来たんだから、受けてもらわないとねー」

思いつきりニタリと意地の悪い笑みを浮かべている田井中と、どこまでも気の抜ける笑顔で迫る平沢。このまま下がるとドアで退路が無くなるので、俺は横に移動して行動範囲を確保する。なんとか

して、この状況を打破しなければ。

そうだ、秋山と中野なら、なんとかしてくれるだろう。これまでも何回か助け舟を出してもらっているし。

「秋山、中野、このバカ二人を止めてくれ」

最後の良心ともいえる存在に、俺は賭けた。しかし。

「え、えつと、先生。そ、それはダメです。うちの部は、これが決まり何ですから・・・」

「み、漣先輩の言う通りです。わ、私もやっただんですから・・・なぜかもしもじしながら、それでいて俺と視線を合わせようとなないベーシストとリズムギター担当に、俺の希望は粉々に打ち砕かれた。

「というと・・・俺、逃げ場なし？」

「そうみたいです、先生」

につこりと微笑しながら、琴吹が止めを刺した。

「さあたくちゃん、神妙にお縄にかかれ！」

「だが断る！」

俺は飛びかかってきた田井中をかわし、反復横とびの要領で左右に細かくジャンプしながら逃げ惑った。

やっぱり予感的中しやがった！

「たくちゃん、だまされたと思って着けてみてよー」

「だまされるか！」

高校生の友人だったら、手や足を使って阻止するところだが、いかんせん相手は女子でしかも年下。出来るわけがない。だから、俺に残された選択肢は、逃げ続けることだけだ。しかも、秋山たちが座っている席は教室の隅に配置されていて通れない。また、部室には機材もあるので、そこまで動けるわけではない。

状況は最悪だ。

「ほらほら、止まれ止まれ」

田井中のやつ、絶対楽しんでるだろ。それも小学生のノリで。ちくしょう、なんで大学生になってこんなに逃げなきゃならないんだ。

初めて俺は、この直接の原因になった実の姉を恨んだ。

飛ぶ。走る。ジャンプする。あまり動けないなかで、俺は追いつがる二人をかわし続けた。それにしても、俺にそんなにネコ耳を付けてほしいのか？

何周まわったのか、分からなくなるほど動き続けた。

だからだろう。俺は、床に転がったスティックに気づかなかつた。感想を言う間もなく、俺は頭から前につんのめった。手は出せたので身体にそれほどダメージはなかったものの、これでおしまいだ。

「はあ、はあ、たくちゃん、どうしてもいやかい？」

「何度も、言わせるんじゃないよ」

追い詰めたと言わんばかりの表情で俺を見下ろす田井中に、息もだえだえになりながら最後の抵抗を試みる。正直、俺がとつた行動は子供っぽくてどうしてこんなことになったのかわからない。考えられるとすれば、あれを身につけたら、大事な何かを俺は失ってしまっ、ととつさに思ったことだ。

「なんでそんなに嫌がるの？」

まるで俺の心情を察していない平沢にうんざりしながら、俺は説明した。

「だれだって、いきなりネコ耳付けろって言われてすんなり応じるかよ」

「梓は案外すんなり着けたけどな」

「律先輩！そんなこと言わないって約束でしょ！」

顔を真っ赤にしながら中野が抗議した。俺はめまいに襲われた。

この部活がおかしいのか、それとも俺がおかしいのか。

感覚がおかしくなってきた俺に、田井中がずい、と顔を近づけてきた。田井中も、女の子っぽい感じではないのに、きれいな顔立ちなんだな……。いや、そんなことを考えている場合ではない。ああ、俺の人生はここで終わるのか……。

「そんなに嫌なら、一つ条件がある」

「……どんな条件だよ」

「あたしたちを、名字で呼ぶの止めて！」
なんなんだ、このオチは？

「名字で呼んでほしくなかったら、最初からそう言えばいいのに」
ああ、お菓子がおいしい。動き回ったあとだし、シュークリームのあまいカスタードが、俺の身体を癒していく。ようやく席について、ほっと一息ついていた。

「だって、たくちゃんって呼んでんのに、まだうちら名字でしょ？
なんかもやもやしてさー」

おでこに赤いラインをくっきりと浮かばせながら、田井中が先ほどまで繰り返していた騒ぎの要因を説明した。女子に暴力振るうべからず、という俺の憲法は、田井中のでこっぱちにチョップをたたき込むという特例を認めていた。

「それにみんなが協力って・・・」

俺の言葉に、気まずそうに顔をそむけるけいおんメンバーたち。

あの、そんなことされるとこっちが恥ずかしいんだけど。話によれば、俺が嫌がることをわざと振って、その見返りに呼び名を変えさせようとする計画だったらしい。見事にその計画は達成されたわけだが、回りにくどすぎるだろう、方法が。

「で、なんて呼べばいいの？」

「名字止めてくれるの？」

パツと平沢の顔が明るくなった。そりゃあ、ネコ耳を付けるよりもはるかにましだ。声には出さないが、それに、さわ姉が壁をつくとやりづらいと思うわよ、と言っていたことがなければ、俺はずっと顧問というペルソナを付けていたままだっただろう。

「それじゃあ」

「あ、やつぱ俺が考えるわ」

「ひどーい！」

平沢の提案に一抹の不安を感じた俺はそれを制した。とはいって

も、五人分のあだ名。とつさに思いつくことができない。どうしようか。というか、みんなの名前はあだ名にしづらい。梓は別として

「みんななんて呼び合ってるの？」

「そういえば、ムギと梓以外あだ名ないな」

秋山が気づく。なんだ、それなら話は早いじゃないか。

「それじゃ、俺もみんなと同じで、名前で呼ぶわ。それでいい？」

「えー。あだ名じゃないのー」

平沢・・・じゃない、唯が期待外れという口調で言った。いや、

むしろこっちの方が距離は近いと思うのだが。

「それじゃ琴吹はムギでいい？」

「ええ。よろしくお願いします」

なんだか恥ずかしいが、これも慣れだろう。使い続けるしかない。みんなが俺に歩み寄ってくれたのだから、それに応えるのが、顧問だ。

「えっと中野は・・・」

「あずにゃんだけはやめてください！それだったら梓でいいですから！」

「ですよね、梓は・・・」

梓の気迫はものすごく、試しにでも唯のように呼ぶことはできなかった。

「あーよかった。これでたくちゃんも、うちの仲間だな。よかったな、漣」

ニヤニヤして、律がいきなり漣に話題を振った。振られた本人は戸惑いながらも同意した。

「え、そ、そうだね」

「律、なにがあったんだ？」

「いやー、昨日話合った時一番乗り気だったのがこの子でさー。

一番反対してたのに、理由いうとコロッと意見変えたんだ」

「そうなのか、漣？」

俺が話しかけると、漣は顔を耳まで赤く染めて言葉なくうなづい

た。いや、そんなに緊張しなくていいのに。にしても、この反応をされると、俺の態度はみんなに違和感を覚えられていたようだ。

「でも、俺がすんなりつけることもあったわけだろ。その場合はどうしたんだ？」

「そこはぬかりないよ、たくちゃん」

律の言葉を合図に、ばーんと登場したのはハンガーラックにつるされたいくつもの衣装。しかしどれもこれもが、コスプレだ。なんでナースとかメイドとかあるんだよ。ここは軽音楽部のはずだろう。俺は衣装を見つめたまましばらく茫然とした。なぜだろう、この服の作り方にすごい馴染みを覚える。この服の製作者を俺は知っている気がする。

「あのさ、さっきの耳といい、この服といい、誰が持ってきたんだ？」

「え、さわちゃんだよ」

当然のように答える唯に発言に、俺はがっくりと膝をついて倒れた。昔の記憶が、走馬灯のように目の前を通り過ぎてゆく。

「せ、せんせい！大丈夫ですか？」

あわてて澪が駆け寄るが、俺はまだ立ち上がれない。俯いたまま、こうなつた経緯を説明する。

さわ姉の趣味はバンド以外に、さまざまなコスプレ服をつくること。しかし、自分で着るわけもなく、その対象は当然、

「え、先生が着てたんですか？」

やっとの思いでイスに座つた俺にお茶を出しながらムギがビツクリした声を出す。

「そう。高校二年くらいまでかなあ。毎回毎回追いかけて強制にだよ。こればかりはトラウマもんだよ。働き始めたら終わったから、さわ姉も大人になったと思っただけけど・・・」

顔を挙げると、主に澪の顔が固まっていてピクリとも動かない。

コスプレがここにあることといい、澪のこの反応といい、止めた時期といい、つまりさわ姉の標的は俺以外に移動したのだった。

「溥、ほんとにごめん！うちの姉が迷惑ばかり！」

「こればかりはどう謝っても仕方がない。」

「あ、あの、それはもう、いいですよ。今度さわちゃん先生が服持ってきたら、これで追い返せますから」

ようやく我に返った溥は苦しい微笑で応じてくれたが、俺の気持ちには釈然としない。

「そうだ、そのお詫びじゃないんだけど・・・」

五人が俺の行動に疑問を浮かべるのをよそに、ごそごとカバンをあさり、お目当てのものを取り出した。そうだ、俺はこのために今日あんなにも緊張していたんだ。いつの間にか忘れていた。

俺の手には、五枚のチケットが握られていた。

「こんど、俺のバンドライブするんだけど、来てくれないか？」

壁を壊すネコの耳（後書き）

お読みいただいて、ありがとうございます

ことわっておきますが、主人公にコスプレ癖があるわけじゃありません、あしからず。

とはいっても、さわ姉がだいぶ大人な気がしますが、ああ見えてきちんとした先生だと思つのです。だから、ああいった心理描写になりました。ちなみに私に姉はいないので完全な妄想です。

次回もお読みいただければ幸いです。
ではまた

人物紹介（前書き）

主人公とバンドメンバーの紹介です

あと、さわ子もオリジナル設定がおおいので入れました。

人物紹介

山中巧斗『やまなかたくと』

主人公。姉であるさわ子によって、桜ヶ丘高校の軽音楽部の臨時顧問となる。

現在大学一年生の18歳。

性格は温厚だがツツコミは激しい。

小学校四年のとき、文化祭で見た姉のギターにあこがれ、弾き始める。

そのテクニクは激しい演奏をしながらもしつかりと弾きこなすほど高い。

しかし、曲作りにおいては理詰めで行うため展開が似たものになりがち。

使用するギターはムスタングのアッシュ材を使ったモデルで、カラーは薄い水色。ビブラート・アームは着けている。曲によっては黒のジャズマスターも使用する。用いるエフェクターはオーバードライブ、ディスト、シヨン、ファズ、ディレイ、コンプレッサー、ワウペダルなど。

好きなバンドは主に洋楽系で、アメリカのバンドを聞く傾向にある。しかし、東西問わずさまざまなバンドを知っている。ニルヴァーナに出会ったことで現在の路線が確立した、と言ってもいいほどの影響を受けている。

さわ子を姉にもつためやや大人びた言動が多いが、特撮好きなど子供っぽいところもある。また、昔からフォローしてきただけあって姉の扱いは悪いが、強引な行動に振り回されることもしばしば。シスコンと呼ばれることもあるが本人は否定している。

姉とよく似ているルックスの持ち主で髪の色も同じだが、本人にとってはカッコイイと言われた経験が皆無で女子から可愛がられる

こともありコンプレックスの一つ。
そのため、これまで女子と触れ合うことは多かったが彼女はいたことがない。

山中さわ子

巧斗の姉。桜ヶ丘高校の音楽教師二年目。
かなり子供じみた性格の持ち主で生徒からも弟である巧斗からも呆れられることが多い。

しかし、見るべきところは見ているきちんとした教師の面もちらんあり、生徒の成長も見据えて弟を顧問にするなどきちんとするところはする人間である。

六歳下の巧斗とは良好な関係を築いているが、強引に物事を押し付ける、コスプレをさせていたなどその性格から喧嘩も多い。音楽になると一転真面目になり、かなりの確なアドバイスを続けるなど巧斗の技術は姉の影響が大きい。

アートワークス

巧斗が高一の二学期から続けているバンド。主にライブハウス、ムーンチャイルドを拠点に活動している。

曲は歌もの、インストウルメンタル問わず、いいものは作るという考えで曲を作成する。ライブではドラム以外暴れまわることが多い。メインボーカルである柏木の張りのある声に、巧斗の変幻自在で激しいギター、青島の躍動感あふれるベースライン、室井の的確かつパワフルなドラムというオルタナティブロックバンド。

柏木優季『かしわぎ ゆき』

アートワークスのメインボーカル兼リズムギター。
ライブでの緊迫感ある姿とは裏腹にお調子者かつ度が過ぎる性格で、行動がやや誇張じみているのが弱点。

とにかく女運がなく、好きになった女性はことごとく彼氏持ち。
影響を受けたバンドは海外ではA C / D C、日本ではザ・ピロウズ。ニルヴァーナを巧斗に紹介した張本人である。

巧斗とは中学校からの付き合い。ギターはバンドマンである父親の影響で始めた。

使用しているギターはエドワーズのS Gカスタムで、父親から譲り受けたもの。

使用するエフェクターは歪み系がほとんどだが、空間系としてコーラス、フェイザーも存在する。空間系は主にインストール時に用いることがあるが、使う頻度は少ない。

青島俊市

アートワークスのベーシスト。

天然パーマがトレードマークだが、性格は現実主義で慎重。しかし、はまりだすと暴走しがちな面があり、メンバーの中ではもっとも行動が読みにくいと言われる。

巧斗と優季とは違い、日本のパンクロックに影響を受けた。中でも銀杏B O Y Zのベーシストに強い感動を受けたことをきっかけにベースを高校入学時から始めた。日本のメロコア、パンク好きだが、レッド・ホット・チリペッパーズのフリーはその教則DVDをコンプリートしているほど尊敬している。

使用ベースは中古で買ったリッケンバック（モデル不明）。決めるようなサウンドを求めているため、エフェクターもM X Rを中心に組み立てている。

室井慎

アートワークスのドラマーであり、リーダー。
バンドきってのおしゃれであり、ハットを年中被っている。クールかつもつとも落ち着いた性格で言葉数も少ないが信頼できる人間。バンド内でもつとも偏差値の高い大学に通っており、そのことから事務的なものはほとんど慎が引受けている。

家が資産家であり、祖父が和太鼓をやっていた影響で幼いころからリズムに親しんでいた。たまたまテレビで紹介されていたレッドツェッペリンの衝撃からドラムを始める。メンバーとは全ての学校が違うがライブハウスで知り合い、意気投合。そのままバンドを続けている。

おもにイギリスのバンドを好み、ハード・ロック、プログレシブ・ロックが中心。実際にロンドンのライブを経験したことから音楽の良さを常々口にする。そのため、ビル・ブラッフォードやステイブ・ガッドなどのテクニカルなドラマーからジョン・ボーナムのような激しいドラミングまでさまざまなドラムの練習に余念がない。使用するドラムはカノウプスのバスドラにDW5000のキック、TAMAのハイ・タムにフロア・タム、スネアドラムはラディック製のジョン・ボーナム・シグネイチャーにカノウプスのスナッピーを使用、シンバルはTAMAのAXタイプで、スティックはパールのヒッコリー110をチョイスしている。自前のドラムに関してタムやバスドラはライブハウスでは使っていないが、シンバルやスネアは持参している。録音はすべて自宅のもの。

人物紹介（後書き）

ウ「今回は紹介なので登場します、ウッキーです」

巧「あれ、こついつのやらないって決めなかった？」

ウ「本編でやらなけりや問題なし！」

巧「そういう問題じゃない気がするけど。あとこの紹介、専門用語がやたら出てくるけど大丈夫なのか？」

ウ「でも有名な物しか出してないよー。細かいことは知らなくても済むように書けばいいだけだし。もし分からなければググってください」

巧「投げすぎにもほどがあるわい！特に慎のところ。今ブラッフォード知ってる高校生なんて少ないだろ。めちやくちやうまい人だけどぞ」

ウ「俺が好きだからいいんだよ」

巧「まあ、うまく本編で活かされればいいけどな」

ウ「おのれ、一番気にしてることを・・・」

夕日に染まる(前書き)

10000アクセス、ありがとうございます！
これから、皆さんのご期待に添えるような話を書いて行きたいです！

夕日に染まる

狭いスタジオ一杯に、轟音が響き渡った。

一斉に俺たちは、疲れた表情で曲の感触を言う。

「やっぱりしっくりこないな」

「うん。なんでかなあ」

ライブを後五日に控えた今日は、本番を見据えた練習をする……はずだった。

しかし、思ったほど新曲の出来が芳しくない。形は出来ている。出来ているのだが、全員納得がいていない状況だった。この新曲はライブの二番目に演奏する予定だから、このままではライブで披露できない、というバンドの認識のもと、納得いくまで曲作りをしていた。

なにが、どう納得いかないのか。それが分からないからやっかいだった。たとえば、サビの盛り上がりがいまいち欠けている、というのであれば、前後を落とすか、さらにサビのフレーズを盛り上げればいい。間奏がいまいちのれない、というものならめちやくちやに騒ぐものに作り替えるか、逆に一気にトーンダウンさせて、区切りをつけるのも手だ。

具体的にどこがどうなのか言えない。だが、全員が納得していないということは、どこかがおかしいのだ。こんな時のスタジオの空気は相当に悪い。普段軽口を言い合う関係であつてもお互い必要なことしか口をきかず、それぞれの楽器をいじくっているのだ。

「ベースもつと動けるか？ドラムがここのとこ……」

室井がフレーズを刻む。サビが終わり、最後に向けて盛り上がるところだ。

「ちよつとまって。えーつと」

ルート音を確認すると、試し弾き、といった感じでベースを触ったが

「うまいこと考えられないや。ごめん」

「気にすんなよ。明日も練習あるし。それより、本番の練習やるか」
柏木の提案に全員うなづく。これ以上構成を練り続けてもうまく進展しないことは明らかだった。

本番にむけて演奏する四曲を、ライブを想定した環境で合わせていく。六月も半ばを過ぎていたこともあり、スタジオにクーラーをかけていたが、それを切って練習する。

というのも、ライブ会場では冷房や暖房といった空調が効くことはないし、季節関係なく暑い。本番に向けた練習というものは、この暑さに慣れながらいかに演奏ができるかという点でやらなければならぬものだった。ライブとは英語で生きているという意味だが、たしかに、ライブでの暑さは前もって慣れていなければ体力的に厳しい。特に俺はライブだと動きまわる傾向にあるので、準備を怠るとバンドメンバーどころかライブハウスのスタッフにまで迷惑をかける結果になる。それを避ける個人的な意味もあった。

しかし、やはりこの時期に冷房なしでの練習は体力を激しく消耗させる。一回セットリストの流れでやっただけで、俺のTシャツは汗でべとべとになってしまった。

「相変わらず動くなあ、タクは」

スポーツ飲料を喉に流し込みながら、柏木が呆れた様子で言った。そういう本人も汗が服に滲んでいるのだが、俺の汗具合と比べたらまだまだだった。

「なんでだろ。ただ、演奏すると身体が勝手に反応するというか」
「本能かよ」

青島はベースのチューニングを確認しながらビツクリした声を出した。

「でもユキもシユンも暴れるだろいつも」

室井は唯一ライブで冷静に振舞うので、客観的にフロントメンバーを観察しているらしい。ドラムは一番後ろなので、細かい仕草もよくわかるという。

「あれはなんというか、やっぱりライブの空気ってテンションあがるじゃん？」

大きくうなずきながら柏木が説明した。ボーカルである柏木はあまりステージでは動けないはずなのだが、ボーカルがない部分やインストの曲の場合は動く。

「きちんと本番やってくれよ。結構弾けてないってオーナーからも注意されたらろ」

室井は前ライブで言われたことがまだ気になっているらしく、まっすぐ柏木を見つめた。

やはり、曲作りのことがあったから、みんなの調子は悪い。さっきの演奏も出来がよくなかった。

このままで行けるのか、という不安が胸の中に生まれる。しかしそれでもライブには出なければならぬ。

けいおんの五人、来てくれるって言ってたしなあ……。
もう一度、という言葉に反応して、ストラップをかけ直した。

いつもの部室に、バンドの音が騒がしいまでに鳴っている。俺はソファにもたれながら五人の演奏を聴いていた。

もう恥ずかしくて演奏するようなことにはならないし、何回か通せば毎回問題点も見つかる。

「た、たくちゃん、終わったよ」

唯はそういうとその場にへたり込んだ。

「おし。じゃあ、休憩しようか」

部室にクーラーや扇風機といった部屋を涼しくする機械はない。

練習中は周りにうるさいからと窓を締め切っているため、せめて休憩中は俺は窓を開放した。だがそれでも、生温かい風が皮膚を不快感で染めていく。

「どうだった、たくちゃん？」

ハンドタオルで額の汗をぬぐいながら律が言った。

「ふわふわなんだけど、ギターのアレンジ変えた方がいいかもってまず思った。これは俺の好みの問題かもしれないけど」

「どっちのアレンジですか？」

俺の意見に、さっそく梓が食いつく。あの曲はもともと、ギターが唯だけなのを想定していて編曲している。俺がここに来る前にもう新しいパートは出来上がっていたのだが、今日ふと、そう感じたのだ。

「なんだろ、梓せっかくマスタング使ってるから、その音を活かしてできないかなあ、って」

「ふたりのギターってそんなに違うんですか？」

質問するムギに、俺はマニアクにならない程度に説明していった。ムスタングは様々な欠点がある上級者向けのギターだが、逆に又ケのいい音であることやネックの短さとは裏腹にかなり暴れる音が好まれている、ということ。

「そっか、やっぱりあずにゃん、ギターうまいんだねー」

そっついっつ抱きつこうとする唯。なんというか、唯は終始梓にべったりな気がする。こんな気温でよくやれるな。

「でも、先生も梓と同じギターですよ？どうしてあのギターを？」

澪が梓のギターを見つめながら言った。

「ああ、カート・コバーンが使ってたからだよ。初めはさわ姉のフライングV借りてただけど、自分の買う時はどうしてもムスタングがよくてさ。そしたら弾きにくいなの・・・」

事実、ムスタングはチューニングも狂いやすいし、ギターの大きさをそのものはストラトなどフェンダーの他種と大差ないか、むしろ長い。とにかく扱うには奏者の力量が求められる。ただ、あの音色は紛れもなく、俺が初めてニルヴァーナを聞いてから求めていたものだった。

「そっだったんですか。私は左利きなので、どうしてもモデルが限られて・・・」

澪の場合はそうだろう。レフティなど扱ってる楽器店そのものが

限られてくるし、値段も右利きよりも割高だ。

楽器のことで会話できるのがうれしくて、それからつい長話をしてしまった。高校の時は女子とこんな会話をしたことがないし、音楽も詳しいのは男子しかいなかった。大学でも女子との会話は比較的浅いものが多く、高校のころと大差なかった。

正直、テレビやくだらない話が嫌いな訳じゃない。だけど、一番盛り上がってしまう話題は音楽だった。

それぞれよく冷えたアイステイーでくつろぎ始めた。俺は音楽の会話をいったん止めることにした。

「梓、ムスタングちよつと借りていいか？」

本人はちよつとびっくりしたが、ほほ笑んで許してくれた。

アンプに座りながら、ひとつひとつ音を確認していく。

頭に、練習で感じた違和感がどうしてもこびりついていた。なぜ、完成しているのに納得できないのか、それもバンド全員が。曲そのものに問題があるのか、俺たちのモチベーションに問題があるのか？ たった一人で弾いても分からないと知りつつも、俺はギターを走る指を止められなかった。

巧斗が、梓のギターで何か弾き始めた。

漣は、自分が聞いたことのない曲だから、たぶん先生のバンドの曲なんだろう、と推測することしかできなかった。ライブも近いし、ちよつとの時間でも練習したいのだろう。それでも、わざわざ合間をぬって部活に来てくれることに、漣は密かに感謝していた。

巧斗のギターが、甘い、それでいてどこか悲しいメロディを流す。唯のような叩きつける弾き方とも、梓の教本に忠実なピックの持ち方とも違う。人のギターというのもあるのだろうが、優しく、丁寧に、まるで音色と会話しているかのようにその指は動いて行く。

いつしか、みんな巧斗の方を見つめすぎないようにしながらその音に聞き入っていることに、漣は気づいた。ティータイムのいいB

GMとでも思っているのだろうか、とくに律などは。

しかし、改めて巧斗を見るとヒマつぶしに弾いているとは思えないほど、考え込んだ顔をしていた。ギターから出る音とは真逆の顔に、漑は引つかかった。前演奏した時は、あんなに楽しそうに弾いていて、それがメロディにもよく表れていたのに、今回は違う。

そんなに、ライブの練習がうまくいっていないのだろうか。

「漑ちゃん、どうしたの？先生の方向いて、考え混んでるけど・・・」

「

ムギが耳元で、小さく聞いてくる。頭の中が巧斗のことで一杯だったことに戸惑いながらも、不振がられないように

「え、ああ、私も、先生見たいにベース、弾けるようになりたいなああって」

「そんな！漑先輩、とってもベースうまいじゃないですか！」

梓が意外そうな声を出す。その目はどこまでもまっすぐだった。

「でも、まだまだ足りないものもあるし、先生みたいに何回もライブなんて、私恥ずかしくてできないし・・・」

漑はとにかく人前がダメだ。小学校のころから、どれだけ人前に立たないようしてきたか。それでも、律と出会ってから大分まともにはなった方だが、それでも大勢の前で歌を披露するなど、考えただけで気絶してしまう。

「ベースのことは、よくわからないけどさ」

律が会話に割り込んできた。ちらりと律越しに顧問を見るが、演奏に集中しててこっちのことにもまだ注意が向かないようだ。

「漑、昔から恥ずかしがり屋だったもんない。だからベース選んだんだし。先生みたいにバンドやるのは、うちらじゃちょっと無理かな」

律が梓に説明するように言った。そうだ。ベースを選択したのは、それが一番の理由だった。他に、律に合わせられるのは自分ぐらしいかいないと思っていたこともあるが。

「そういえば、ライブってもうすぐよね？」

ムギがうきうきしながら言った。ライブハウスっていたことないから楽しみ、と本人は言っていたが、確かにこのお嬢様はライブハウスなどという乱暴な場所よりも、コンサートホールで静かに拍手している方が似合っている。

「あ。そうだ、たくちゃんにちょっとお願いがあるんだった！」
そういうと、唯は立ち上がって巧斗の前まで進むと、手を合わせた。

「どうしたんだ、唯？」

巧斗は演奏をやめ、突然のお願いに戸惑いを隠せないようだった。
「ライブのチケット、まだ余ってないかな？」

「あるけど、どうしたんだ？」

「和ちゃんと憂に話したらライブ見に行きたいって」
誰の話だかわからない巧斗に、律が助け舟を出した。

「唯の同級生と妹だよ。ていうか、誘ったのか？」

「うん。たくちゃんの演奏、みんなに聞いてもらいたくて。だって、めっちゃくちゃうまいもん！」

天真爛漫な唯の発言は、それだけに混じりけがなかった。にこにこしながら言う唯の顔に巧斗はややあっけにとられていたようだったが、その顔に笑みを浮かべ

「わかった。カバンに入ってるから、今渡しとくね」

「いや、たくちゃん、それなら梓と澪に渡した方が確実だよ。唯よ、くものなくすから」

律のアドバイスに、巧斗は納得した表情をした。

「それもそうか。じゃ、梓、澪・・・」

「ひどいよりっちゃん！それにたくちゃんも・・・」

シヨックを受ける唯に、ギターを置いた巧斗は呆れた顔で言った。
「いやあ、普段のお前見てたら説得力あって・・・」

むくれる唯と巧斗の会話に思わず笑いながら、澪はあの演奏中に巧斗が見せた顔が、どうしても頭から離れられなかった。

自分ではどうしようもないと分かっている、なにか出来ないだ

ろうかと考えてしまう。

でも、結局その答を見つけられないまま、部活は終わった。

メンバーと巧斗を交えた六人でまで帰宅をするほど、巧斗は軽音楽部になじんでいた。窓から差し込む夕日がオレンジ色に校舎を照らし、ちらほらと部活を終えるところも出てくる。

学校で誰が話を広めたのかは澪の知るところではなかったが、巧斗はあのさわ子の弟ということとでちょっとした有名人だった。部活にまで押しかけてはこないが、こうして帰るときになると興味を隠しきれないといった様子の生徒が、巧斗を見ては噂し合っている。その噂が五人の耳に入ることはないものの、よからぬ噂だけはやめてほしかった。

澪は一人、メンバーとライブのことを話し続ける巧斗を後ろで見ながらまだ答を探していた。ライブ経験と言ったって、文化祭と新歓ライブしか経験していない自分が、もう何回も経験している人間に言えることなど何もないのかもしれない。余計なお世話、なのかもしれない。でも、あの考え込む顔を思い出すたびに、なんとかしたいという思いに駆られて仕方が無くなってしまふ。この経験は澪にとっては初めてで、そのことでも戸惑ってはいたのだが。

靴をはき、玄関を出る。ここで巧斗とは、ライブまで顔を合わせることはない。

どうしよう。

「じゃあたくちゃん、ばいばーい！ライブ、絶対行くからね！」

唯が元気よく手を挙げながらわかれのあいさつをした。このままだいけば、何も言えないままライブになってしまう。

みんなが校門に向かう中、澪の足は自然と巧斗の元へ向かっていった。

「あ、あの、先生」

何を言おうとするのかも分からず、ただ巧斗のことを呼ぶ。

「ん、どうした？」

きよとんとした顔で、自分とそう歳の離れていない顧問は澪の言葉を待った。

澪はしばらくもじもじしていたが、

「ら、ライブ、頑張ってください！私、応援してますから！」

あの顔を解決する台詞など言えなかった。口から出てきたのは、ただ、ライブを楽しみにしている、それだけだった。

だが、巧斗は優しい笑顔で、澪を見つめた。澪の頬に、朱が散る。「ありがとう。なんか、ふっきれたよ。ありがとう」

呆れられこそすれ、感謝されるなど思ってもいなかった澪はあわてて後ろに転びそうになった。

「お、おい、大丈夫？」

腕をつかんで立たせてくれる巧斗。その腕の力強さに内心驚きながら、男の人に腕を握られているという状況に澪の頭はショート寸前だった。しかも、巧斗の顔はお互いの息がかかるほどに近い。「だ、大丈夫です。ちょっとくらからしちゃって」

恥ずかしくてこれ以上、顧問の顔がまともに見られない。澪は一礼すると、ベースを背負ったまま校門までダッシュした。

校門の外では、みんなが待っていた。

「澪、遅いじゃないか・・・って、顔真っ赤だな」

律の指摘に、今起こったことが頭の中で暴走を始めてしまい、ついに澪は倒れ込んだ。

「澪ちゃん?!」

あわてたムギが、澪を支えた

なにやら校門の方で声がするが、これから練習だ、急がねば。

俺はそう思いながらも、澪がさっき言ってくれた言葉や、唯の飾り気のない、ライブを楽しみにしてくれる様子にどこかほっとしていた。

口ではみんな、いつもだからといっても、結局緊張していたんだ。でも、聞いてくれる人がいる。楽しみにしてくれる人がいる。だからライブは楽しいんだ。

いつしか、どう上手に演奏するかばかりにこだわるようになっていた。見てくれる人がいるから、そのためのライブだということを、俺は忘れていたんだ。

こう考えると、あの曲の納得がいけない理由もわかった。あれは聴かせる曲じゃない。聴いてもらおうとする意志が足りない、伝えたいものがない。だから、あんなにも腑に落ちていなかったんだ。

これから本番までに曲を仕上げるのは正直骨が折れる。でも原因が分かれば、修正出来る。

俺はみんなに感謝しながら、車のアクセルを踏んだ。

夕日に染まる（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

更新が遅くなつてすいません！

しばらく風で寝込み、書きたくても書けない状況が続き・・・

次回はもつとはやくアップします。

さて、今回はだいぶ漣に突っ込んだ話となりました。というか完全に漣、恋する少女ですね。まあ本人に自覚はないのでしょうけども。次回は、ついに巧斗のバンド、アートワークスのライブです。あまりうまく書けないかと思いますが、頑張ります。

次回もお読みいただければ幸いです。

生きている旋律は、心を揺らす

ライブハウス・ムーンチャイルド。隣町にある、俺たちが高校生
のときからお世話になってるハコだ。駅から徒歩6分と交通の便
もよく、バー形式のカウンターとステージを合わせれば150人は
入るとあって、インディーズバンドのツアーも利用する所である。
もっとも、今日はレーベルとは全く関係のない、五つのアマチュ
アバンドがステージに登場するのだが。

「じゃーリハーサル行きます。アートワークスのみなさん、よろし
くお願いしまーす」

ライブのリハーサルは通常、逆リハと呼ばれる形式で行われる。
順番とは逆の流れでリハーサルを行う。これなら、最初のバンドが
リハを終わると、そのまま開演することができる。

前もって書いておいたセットリストに従って、リハーサルをこなし
ていく。

このとき、一番重要なのは恥ずかしがってPAの指示通りにする
のではなく、自分が感じたことは全て伝えることだ。演奏するのは
自分だから、自分が演奏しやすい状況にするにこしたことはない。

「どうですか？」

髪をひつつめた30ぐらいのPAがそれぞれの様子を聞いてくる。

「ドラムなんですけど、ボーカルとベースをちょっと上げてくださ
い」

「ベース、もっとバストラをください」

「リードギター、ボーカル強めで」

それぞれのパートには、返しと呼ばれる他の楽器音が流れるスピ
ーカーが置いてある。ライブはボリュームが大きいので、アンプの
音だけで合わせることは、実は難しい。だからこの返しを頼りに演
奏する。この返しをどう使うかは個人の自由、いや何を重要に聞く
かによる。

俺は主にバスドラとボーカルを聴きながらライブをする。バスドラはバンドの一番大事な低音であるし、ボーカルをお客は聞くからだ。返しは全ての音を流すことは出来ないから、必然的に選ぶことになる。

「じゃあ、一番激しいの頼みます」

そして、音響としてもっとも大切な、バンドごとの最大、最小ボリュームのチェックに入る。これがちゃんと確認できていなければ、ライブ本番はぐずぐずに終わってしまうし、スピーカーにも大きな負担をかける。

セットリストの中からもうやる曲は決まっていたので、PAの指示にしたがっていきなりフルスロットル。かといって、俺は本番よりも抑えめに演奏していた。暴れまわるのは、あくまでも本番だ。

しかし、このリハーサルは当然自分たち最後の確認の場でもあった。ステージのコンディション、メンバーの調子は毎日同じというわけではないし、なによりこれ以後、まとまって練習はできないのである。視線をメンバーに振りながら、どう動くか、演奏を組み立てるイメージをつくる。

「はい、おっけーです。本番もよろしくお願いしまーす」

リハーサルが終わり、楽器、機材を控室に運び込む。これから本番までかなり時間があるが、湧きたつ心を抑えることが出来なかった。とりあえず落ち着こうと、タバコに火をつける。

「みんな、チケット裁けた？」

煙を吐き出しながらだれともなく質問した。

「いつものメンバーは下宿したりだから無理だったけど、大学の友達も誘えたからなんとか」

青島がベースをしまいながら答えた。ほかの二人も同じようで、大学になるとやはり友達の関係が微妙に変化する。それでも、大学の人を誘えるだけまだよしとすべきなのだろう。

「で、タクはどうなん？俺らと一緒にか？」

柏木はお茶を喉に流し込みながらさして興味なさそうに言った。

だが俺は迷った。受け取った10枚のうち、7枚は桜ヶ丘高校の軽音部とその友人に渡っている。残りは大学の友達に格安で売り払ったが、やはり女子高生（それも7人）がくるとなると、その説明をどうすればいいのだろう？そもそも、大学生が女子高で顧問をするという話を理解してくれるか？さわ姉のことはみんな知っていて、教師ということも話したはずだが……。ああ、ややこしいなあ、もう！俺の説明力では何をどう言おうとあらぬ疑惑と嫉妬の嵐を呼ぶだけだ。

結論として、俺はごくわずかの「真実」を話すことにした。

「友達に渡せたよ。柏木、喜べ、女の子たくさん来るぞ」

そう、こうしてうまくかわして、本人たちに説明してもらおうのが一番手っ取り早い。案の定、柏木は大きくガッツポーズをすると、有頂天になってステップを踏み始めた。

「よっしゃー！俺の勇姿を見せつけるぜ！」

「相変わらず、タクは女子を誘うのがうまいなあ」

室井がやや呆れながら言った。しかし彼は大きな勘違いをしている。俺は女子とはたいてい友達になってしまったため、カッコいいところ見せたいがためにライブにくることなどなかったのである。

とりあえず控室から出ると、リハーサルが続くフロアに戻った。

一方、巧斗からチケットを受け取った桜ヶ丘高校軽音部とその友人という組み合わせの7人は、ライブに向かっていた。ちなみに、今日は学校があったため着替える時間もなく、みんな制服である。ライブハウスには歩いて行ける距離ということもあってか、早めに部活を切り上げた。

「ライブ、ライブ、楽しみだね、和ちゃん！」

「唯、そんなにはしゃいだら転ぶわよ」

まちきれない様子でくると回転する唯に、幼馴染の和が注意した。その落ち着きぶりは、赤いアンダーリムのメガネと相まって、

世話の掛かる子供にむけて言う母親のようであった。

「それにしても、梓よく知ってたな、たくちゃんのバンド」

律は眼の前ではしゃぐ唯を横目で見ながら言った。巧斗がライブのチケットを渡した時、一番テンションが上がったのが梓だった。

理由は、ムーンチャイルドでお勧めのバンドとして挙げられたのが、アートワークスだったからである。

「あのライブハウスにはたまに行くんですけど、ステージングがすごいのに、曲のスタイルの幅が広がって言われたんです」

「そうだったのか。こりゃあたくちゃん、下手なライブできないぞ」

とはいうものの、律は部活の最中、練習に身が入っていないかった。唯が一番そわそわしていたから、誰も気づいてはいなかったが。

「でも、和、よかったのか？唯が強引に・・・」

和の隣で、澪が心配そうに言った。確かに、和は生徒会に所属しているため、ライブに行くために活動を抜けてくれたのである。それに、和は真面目だからライブハウスに行くと言ったこと自体、にわかには信じられなかった。

「ううん、唯があんなに目をキラキラさせて誘ってくるの、あんまりなかったから。一つの事に打ち込んだこともなかったし。だから、興味がわいたの。それに、臨時顧問の先生だって、かなり話題になってるのよ」

幼稚園からさんざん世話を見てきた、幼馴染しか言えない言葉だった。澪はその深さに感心すると同時に、軽い音楽しかやらないと思っただけだ。唯が、ここまで音楽に興味を持ってくれるまでになっただけだと思っただけだ。涙が出そうだった。

でも、私たちだけだったらここまで来なかったのかもしれない。

澪は、自分と二つしか離れていない顧問に感謝した。生徒の間で話題になっているという発言に、ややひっかかったものを感じながら。

「ふふ、澪も楽しみにしてたんじゃない？」

「な、なんでよ？」

あわてて否定したが、冷静に答えられていない時点で認めたと同然だった。

「だって、授業中先生の話、あまり聞いていないようだったから……」

「そ、そんなことない！」

嘘だ。ライブに行ける、先生に会えると思ったとたん、授業に身が入らなくなった。部活はみんなそわそわしていた手前、何とか抑えてはいたものの、和にはばれていたようだった。

「へえ、澪ちゃん落ち着かなかつたんだー」

不意に会話に飛び込んできたムギにビクツとして、澪は飛び上がりそうになる。

「だから違うって」

なんだろう、最近、いつにもましてほんとの事を認めづらくなっている。しかもその話題は決まって……。澪の脳が、この前の、巧斗の力強さと顔の接近ぶりを再生し始めたために、顔が紅潮していく。

「み、澪さん、大丈夫ですか？」

唯の妹、憂があわてて澪の前に駆け寄り、顔を覗き込む。

「憂、なんでもないから、安心して」

「で、でも……」

心配して口ごもる憂に、梓と話しこんでいた律が言った。

「ああ、澪って緊張するといつもこうなるんだ。ほっとけばそのうち……」

そう言う律の首根っこを、澪はぐいっとなつかんだ。

「りーっー、あなたはちょっとでも気になけないさー！」

「あ澪、ちょっとやめて、あたしこけるー！」

始まった律と澪のどつきあいには内心ほっとした憂に、梓はこっそり話しかけた。

「憂、なんでライブ行こうって思ったの？」

「お姉ちゃんとお出かけるの楽しいし、お姉ちゃんがお世話になって

る人に、一度あいさつしたかったから」

につこりとほほ笑む憂に毒気を抜かれた顔をした梓は、なぜ唯があんなにもだらけるのか少しだけ分かった気がした。

こんなことを繰り返しながら歩いているうちに、ライブハウスまで着いてしまった。

「あずにゃん、ここ？」

唯が不思議そうに尋ねた。唯の見立ててでは、ちっこい雑居ビルがあるだけでとてもお客がわーわー騒ぐスペースがあるようには思えない。

「ええ。こつちです」

そういうと、梓は眼の前にあつた階段を下り始めた。

「そうか、地下にあるのか！」

ポン、と手を叩いて納得する律に、梓はホントにライブハウス来たことないんですね、と呆れた。

「でも溲、どうする？こーんな怖い人がいっぱいいたら」

律は溲にめちやくちゃパンクな人のものまねをした。すると溲は恐怖のあまり身体全体を震わせてしまった。

「み、溲先輩、大丈夫ですよ。今日は高校生バンドが多いですから、そこまで怖い人はいませんよ」

見た目はもとより、実際この中で一番年下の梓が先輩を落ち着かせることはおかしいといえれば可笑しかったが、とにかくみんな舞い上がっていたことに間違いなかった。溲は梓の言葉に落ち着きを取り戻すと、不意に怖がらせた律にげんこつをお見舞いした。

「じゃ、いきますよ」

梓は、重い防音使用のドアをゆっくりと開けた。

「すごい人・・・」

開口一番の感想が、人の多さだった。奥のバーのようなカウンタ―、ステージがあるフロアもたくさんの人がすでに集まっていた。

それぞれ談笑しながらライブが始まるのを待っている。制服姿の人
も多かった。ライブをするバンドの友達なのだろう。

梓以外はこの騒がしい空気と熱気にあっけにとられてしまい、チ
ケットを用意することさえ忘れていた。さまざま臭いが混ざりあ
って、ちよつと臭かった。

「先輩、先生からのチケット渡さないよ」

その言葉に全員はっとして、カバンから長方形で薄い水色チケッ
トを取り出し、机が一つだけのちゃん受付に差し出した。

「あ、桜ヶ丘の人か。誰を見に来たの？」

人のよさそうな若い女の受付が、気軽に七人に話しかける。

「えーと、あ、アート・・・なんだっけ？」

「あと四文字じゃねーか！」

答えようとした唯は、やはり巧斗がどのバンドだったのか忘れてい
た。その天然ぶりに律が漫才のようなツツコミを入れる。しかし、
受付の人は分かったのか、

「アートワークスを？高校生なのに、音楽詳しいのね」

てつきり、高校生バンドの誘いで来たものと思っていたらしい。

非常に驚いた顔をしてチケットの半券を手渡した。

「これで、ドリンクが一杯飲めるから、あそこのカウンターで渡し
てね」

指差したカウンターには、誘った張本人である巧斗が、友達と談
笑していた。その笑い方から、とてもライブ前とは思えないほどリ
ラックスしていた。

そんな巧斗を見て、私もあんな風に落ち着けたらいいのに、と遷
は羨望にも似た思いを抱いた。

「おいタク、あそこ見ろよ」

カウンターでアイスコーヒーを飲んでいた柏木が、振り返ると俺
をつついた。それに反応すると、視界に見慣れたブレザーに細身の

リボンという制服が飛び込んできた。

「相変わらず目ざといな」

「なにおう、かわいい子に敏感だと言ってくれ」

茶化す青島に反論すると、柏木は早速近づこうとし、それを俺は手をつかんで止めた。

「ぐあつ！タク、放せよ」

「どうしてお前は見境なく女子に近づくんだよ」

「そりゃ、女の子とお近づきになるには自分から行くのが一番だろ」

「だから彼女出来ないんだよ、ユキは」

そういう室井は、すでに到着した彼女と雑談に興じていた。

「お前はいい、そのまま話しとけ」

フライパンで殴られたような顔で室井に言い放ち、柏木が手を振りほどこうとした時だった。

「たくちやーん！」

あ。唯が俺に気づいたのか、桜ヶ丘高校の七人がこっちに来た。

唯の一言で、柏木は疑惑を超えて不快の表情で俺を睨みつけた。さあ、ややこしいことが始まる。しかし、俺はそんな思いを表情に出さぬよう気をつけながら柏木を無視し、軽音部とその友人に向き合った。

「みんな、迷わなかった？」

「ううん、あずにゃんが場所知ってたから」

いつも以上にテンションが高い調子で唯は言った。そう言えば、梓は唯一ライブハウスを経験している。こここのことを話した時、一番うれしそうだったし、当然か。

「あ、そうだ」

唯は俺が見たことのない二人の腕を引っ張ってきた。赤いアンダーリムのメガネが真面目さを強調している子と、唯によく似た顔立ちで短く髪をトップでまとめている子だ。

「えーと、この子が和ちゃん、こっちが妹の憂」

「真鍋和です。チケット、ありがとうございました。あと、普段か

「唯がご心配おかけしてます」

まるで小学校での保護者面談のように、真鍋和がぎこちない笑顔であいさつした。それにしても、唯が曲がりなりにでも桜ヶ丘に入れたのはこの子のおかげだろうと俺は察した。

「平沢憂です。いつも姉がお世話になってます」

ぺこりと頭を下げる唯の妹の礼儀正しさに、俺は意表を突かれた。しつかりした妹とは聞いていたが、これはよく出来た妹だ。

「今日は、来てくれてありがとう」

俺が言うはずだった台詞を、会話に割り込んだ柏木が放った。

「おい柏木、あいさつの途中で入ってくんな」

「黙らっしゃい！というかタク、この子みんなお前が呼んだのかよ？」

「そうだけど」

「なにをした？お前はどんな手を使って女子高に入りこんだんだ？桜ヶ丘高校は、女子高としてはこのあたりではかなり有名だ。進学率も高く、偏差値はそれなりに高い。ここが正念場だ。」

「今、顧問やってんだよ。さわ姉が研修で学校いない間だけ」

「どうしてお前は運がいいんだよおおお！」

嫉妬のあまり柏木は俺の肩をつかみ激しく振り始めた。当初の『みんなで説明』計画は見事にとっかかりから破たんした。

こんなことをしているうちに、俺が呼んだ女子はみんな笑い始めていた。

「おおおい、みみみんなの、わわわらいもものになってるからはなせっ！」

渾身の力で柏木の拘束から逃れる。柏木のやつ、思いっきり揺するから頭がくらくらしてくる。

「せ、先生、大丈夫ですか？」

漣が駆け寄ろうとしてくれたが、男としてここは踏ん張らねばならない。手で制して、身体を安定させようとカウンターにもたれかかる。

律がそんな俺を見て、学校と同じような意地悪い笑顔で

「たくちゃん、扱いひどいな」

「よし律、あとで覚えとけ」

「タク、話はまだおわってなぶほっ!？」

「柏木、落ち着こうか」

俺は肘でなおも不毛な会話をつづけようとする柏木の腹筋を打ちつけると、ようやく笑っているみんなと会話をする事が出来た。

「真鍋さんに、憂ちゃん、それとみんな、来てくれてありがとう」

「いえ、私は誘われただけですから」

どこかそわそわして真鍋は返事をした。そろそろ人が集まり始め、カウンターにもたくさんの人が押し寄せていた。ライブハウスは、連れで来た場合は慣れるまで緊張する人が多い。会場にあふれている大ボリユームのSEと、満足に動くことも出来ないほど密集する観客。ライブが始まれば、バンドによってはもみくちやになる可能性だってある。そのあたりを、敏感に感じ取ったのかもしれない。

「それにしても、すごい人ね」

ムギはきよろきよろと周囲を見渡した。たしかに、開演まで、あと10分もない。高校生バンドが主体で、2バンドが初ライブとあっては、その友達が多数を占めているのだろう。俺たちも初めはそうだった。

「あ、そう言えばバンドメンバー紹介してなかった」

俺は室井、青島、柏木の順で紹介する。柏木以外無理にキャラをつくっていなかったからよかった。俺のバンドが変人ばかりだと思われるのはいやだな。

「先生、今日何曲やるんですか？」

梓はもう待ちきれないようで、俺をキラキラさせた瞳で見つめた。

「五曲。曲順までは言えないけど、歌もの3、インストが2かな」

「歌ものうち、一曲はタクが歌うから期待しててな」

青島はコーラ片手に余計なひと言を繰り出した。ちなみに、ここ

ムーンチャイルドはアルコール類もライブでは出すのだが、今日は高校生バンドがほとんどということだなしになっている。タバコも控室でしか吸えない。

「ええ、たくちゃん歌うの？」

唯が驚きと期待を込めた声を挙げた。とはいっても、これではハードルが上がるばかりだ。あくまでも俺が作った曲だから歌うのだ。歌詞がうまくできなかった曲の中で、俺が着けることがあり、それがそのまま歌うことになったのだ。俺としても、ライブで唯一身体がマイクの前に固定されて休憩替りになるからやっている。ただし、俺はそこまで自分の歌に自信があるわけじゃない。柏木のほうがずっとボーカルに向いている。

「そんなに期待するなよ。俺、そんなにうまくないから・・・」
「なに言ってるの。ホントに下手だったらボーカルさせないっての。まあタクの事だから心配してないけど」

室井の一言に、俺は不覚にもびっくりしてしまった。

「それがハードル挙げてるって思わないのか？」

「だからじゃん」

確信犯だ。室井は冷静で頭が回るだけに、いじられる時は一番油断できない相手だった。

ふとみると、唯や律、ムギ、それに唯の妹である憂ちゃんは柏木や青島としゃべっているが、漣は真鍋とどこか居心地悪そうに立っていた。漣の性格からすればそれも仕方ないだろう。なにせ、漣はかなりの恥ずかしがり屋だ。

俺はカウンターから離れるとその二人に近づいた。ちょうど、漣には感謝の言葉も言いたいところだったし。

「漣、大丈夫か？和ちゃんも」

俺が話しかけると、漣はどこかほっとしたよう

「あ、はい。ちょっとこの人数にビックリしましたが・・・」

「そっか。あそつだ、ドリンクの券はよく考えて使った方がいいぞ。ここ、テーマパーク並みに高いから」

最後の言葉は、カウンターの人に聞かれないよう声を落とすとした。二人がくすりと笑ったので俺はほっとした。

「先生つて、ライブに出るの、緊張しないんですか？」

おずおずと、漣が聞いてきた。そういえば、漣は最初に演奏を見せてくれたとき、恥ずかしがって出来なかったんだっけ。今ではそんなこともないから忘れていたが、本人は気にしているのだろう。だから俺の素直な気持ちを言うことにした。

「そんなことないよ。今結構心臓がばくばく言ってるんだ。それにトリつてのも初めてだし」

「じゃあどうしてそんなに平然と出来るんですか？」

「んー、それ以上に楽しみだから・・・かな、ライブが」

漣は、俺が見てきたなかで一番驚いた顔をした。そうだ、俺がライブをする理由、楽しみなわけ、それは楽しいからだ。練習とは違う、観客に聞いてもらえるということ。経験の少ない漣は、そこがまだ分からないのかもしれない。

「楽しみ・・・？」

その意味を考えているようだったが、俺は言葉をつづけた。ただ、こういうのはなんだか、正直な話ものすごく照れくさい。

「漣、その、この前はありがとうな。おかげで、曲がいい具合に出来たよ」

漣をはじめとして、軽音部に曲づくりがうまくいっていないとは一言も発していない。自分のバンドのことを持ちこんでみんなに迷惑をかけたくなかった。でもあとあと考えれば、唯は別として、少なくとも漣はそのことを察知していたか、俺の顔にはつきりそう書いてあったのだろう。だからわざわざ、最後になって応援の言葉をくれたのだ。

「い、いえ私はその、なにもしてないですから・・・」

何を思い出したのか、漣は慌てふためき、顔を赤くしていた。それを心配するような、それでいてどうしていいかわからない様子で和ちゃんがあたふたしだした。

「でもほんとだよ。あれで、気が軽くなっただ。ここだけの話、それ二番目にやるから、感想頂戴ね」

「は、はい・・・」

すると突然SEのポリウムが上がったと思うや下がり、デイスコ調の曲が流れた。一気に照明が落ち、ステージだけが明るくなる。今から開演だ。

少し、身体が震えた。

最初と二番目のバンドは、想像通りガチガチな演奏で、緊張しているのが溼にも分かった。オリジナルよりもコピーの方が多く、演奏レベルも取り立てて高いとは言えなかった。それでも、来てくれた友達らしき人たちが多いに盛り上げていたが。

みんなと一緒にフロアの真ん中で見ていると、唯や律、それに乗っかる形でムギと憂がリズムを身体で刻んでいるのが分かった。梓は真剣な顔で聞いている。でも自分は、さっき巧斗に感謝されたことが、頭でかなりの割合を占めていた。

あの時、またしてもどアップの巧斗の顔が思い出されてしまい、自分でも何を言ったか覚えていない。あんなにも、ライブを楽しみにしていたのに、これでは楽しめないじゃないか。

楽しみにしていたのは、本当にライブだけ？

溼はちらりと視線を、壁にもたれてバンドメンバーとライブを見ている巧斗に投げた。口元にやわらかな笑みを浮かべながら、時折目をつむっている。ライブが楽しい。そう言う巧斗の顔は、本当に音楽が、バンドが楽しいという気持ちに溢れていた。眩しくて、まともに見ることが出来なかった。

巧斗と自分は、大きく違う。少なくとも自分は、楽しんでライブが出来るところまではまだ行けていない。ボーカルもできればしたくない。去年の文化祭は、あんなことになってしまったし。

なのに、なんで自分はバンドをやっているんだろう？みんなとい

るのが楽しいから？それとも、あの空気が好きだから？だけど、音楽が好きなのはつきりと認められる。

三バンド目が終わり、一旦照明が落ちる。それが合図であるかのように、巧斗は控室に向かってしまった。

「澪ちゃん、和ちゃん、ジューズもらお？」

すでに汗をかいていた唯が、人ごみをかけ分けてきた。律も梓もムギも、とにかくみんなまだ半券を持っている。巧斗のアドバイスを忠実に守っていた。

「そうね、行きましょう」

和に続いてカウンターに歩み寄る。あと2バンドだというのに、まだ人は多かった。むしろ、増えているような気さえ、澪はしていた。

「お、梓ちゃん。今日は何を見に来たんだい？」

人ごみをかき分けてカウンターまで来ると、バー内で短髪のマツチヨな男の人がコップを拭きながら話しかけた。唯以外は警戒心をあらわにしたが、梓は何ら警戒することなく、むしろ楽しそうに、

「アートワークスです。先生が出るので、それで」

「先生？でもさわ子は出てない・・・そうか、弟か。いつの間に・・・」

男の言うことはよくわからなかったが、がちがちの澪たちを目にする話を続けた。

「それで、その子たちは友達かい？」

「いえ、軽音部の先輩です」

「そうか、あの・・・」

梓に律が耳打ちした。

「梓、この人、だれ？」

「このオーナーですよ。前来た時、いろいろお話したんです」

オーナー？と律がビククリした声を出したので、オーナーは苦笑した。

「ははは。事務的なことは他の人がやってくれてるからね、ライブ

の時はいつもここなんだよ。それにしても、アートワークスが目当てとはね。最近ようやく固定ファンがついてきたんだよ、そこ」

人数分のオレンジジュースが運ばれてきて、7人は口に運んだ。よく冷えた酸味のある味が、ライブの熱気で火照った身体を冷やしていく。巧斗がよく考えて半券を使えといった理由が分かった。

澪は、後ろが気になって巧斗がいた場所を振り返った。でも、やっぱり姿は見えなかった。

「タク、俺に言うことはないか？」

「ない」

控室で楽器を取り出しながら、絡んできた柏木をにべにもなく切り捨てた。あの流れだと当然予想されたことだし、これ以上関わりと面倒だ。

「まあいいや。ライブが終わったら、尋問だ。だろ、シユン？」

「そうだな。どうしてあんなかわいい子ばかりなのか。狙ってる子はいいるのか」

ミネラルウォーターを飲もうとした俺は急にせき込んだ。青島の奴、変なこと言わなかったか、今？

「狙ってる子って……。俺、ちゃんとした顧問なんだけど。許可証もあるし」

その通りだ。俺は、2歳しか変わらないが、れっきとした顧問である(あくまでも臨時だが)。だから、狙ってるとか、そんな邪な考えはあまり持たないようになっていた。そうでもしなければ、練習を見ることなど出来ないだろう。

「そんなんだから、タクはダメなんだよ」

腕のストレッチを入念に行いながら、呆れた様子で室井が言った。少なくとも、ファツションと恋愛に関してはバンド内でこいつの右に出るものはいない。現に、彼女がいるのは室井だけだ。

「だからって、そんなことしたらダメだろ、社会的に」

外の歓声が大きくなった。反射的に壁に懸かっている時計を見る。出番まで、あと15分を切った。俺はリュックから黒に小さくnirvanaとロゴがプリントされたバンドTシャツを引っ張り出した。ライブでは、これにデニムの組み合わせが、俺の衣装だ。

「はあ、なんだろ、呆れてどうしようもねえや」

柏木のつぶやきを無視し、エフェクトボードの最終確認。歪み系、空間系、チューナー、ライン、全て良好だ。ムスタングのコンディションもいい。

それにしても、と俺はバンドメンバーから言われたことを反芻していた。

狙う子ということは、好きな子がいるか、ということだ。確かに最初は、オトコとして、女子のレベルの高さに驚いたし、テンションも上がったが……。

でもいまはどうなんだろう？もう、俺はあの空気に馴染み、あまつさえいじられるようになった。そんな状況でどう恋愛をしるというのだろうか。彼女たちにお父さんとまで言われているのである。

そもそも、今日誘ったのは、純粋にライブというものを体験してほしいからだ。そうなんだ、と自分に言い聞かせる。でも、なぜか、こころのどこかで、これは言い訳じゃないのか、という思いが湧いていた。

俺は頭を振って、一線を越えるようなことは出来ない、なにせ、さわ姉のこともあるのだから、と思考の奥深くに押し込めることにした。あいつらが尋問とやらを始めた時、うまく対処できる方法を考えよう。

とにかく、今はライブに集中だ。そろそろ出番だし。さすがに、もうメンバーは茶化すことはなく、それぞれのやり方で精神を集中している。

怖くはない。練習はみっちりやっているし、なんども踏んだステージだ。一部の観客が俺と密接な関係であったとしても、俺たちの音楽を聞いてくれる。

聞いてくれるひとが一人でもいるなら、全力を出すだけだ。拍手と、流れるような演奏がドア越しに耳に入る。さあ、俺たちのライブだ。

それまでフロアの真ん中で聞いていた漣たちだったが、唯の提案でステージのほど近くまで寄ることになった。

当然、漣は演奏者に近づくといい恥ずかしさに渋ったが。半ば強引に律や唯、それにムギまでもが手を引っ張り、桜ヶ丘の制服が一堂に会することになった。ステージまでは、ほんの1メートルしか離れていない。

バンドの入れ替えで、巧斗は最後にギターと大きなエフェクトボードを抱えて登場した。

「たくちやーん！」

唯が手を振ると、巧斗は恥ずかしそうに笑いながら手を振り返した。そんな、自分の感情に素直に行動できる唯を、漣はたまに羨ましく思う。自分だって、巧斗に応援をしたいのだ。でもあと一歩のところ、出来ない。

アートワークスの準備が整ったようだ。フロアが、暗闇に包まれる。

力強いムスタングのリフ。それと同時に、スポットライトが巧斗に集まる。

バンドの緊張感が一気に解放されたかのような、音の濁流がステージから溢れた。

アートワークスのライブは、圧巻の一言に尽きた。

これまで見てきた4バンドとはレベルが違う。

巧斗は一曲目から激しく身体を動かし、右足で大きくリズムを刻む。にもかかわらず、その指はギターの上をなめらかに、踊るよう

に動く。

激しいテンポの曲に、柏木優季の張りのあるボーカルが、アートワークスの世界を組み立てていく。

その土台となる、室井慎の、普段の落ち着いた姿とは真逆の、パワフルで、まっすぐ放たれるドラム。

そこに、身体の奥にとどくようなエフェクトをかけた、青島俊市のアグレッシブなベース・ライン。

個々の演奏レベルはもちろん、バンドとしての一体感。

ステージで奏でられるそれぞれの音楽が集まり、一つのレーザーのように、フロアに放射される。

アートワークスの曲に合わせ、観客がジャンプする。手が前後に振られる。

歓声と音楽が一つの潮流になって、ライブハウスを大きく揺らした。

「すごい……」

漣は、目の前で繰り広げられているライブに、心を奪われていた。さつき、あれだけお茶らけて巧斗に絡んでいたボーカルは、前をすっと思据え、歌を紡いでいく。すぐにでも身体が動くような演奏なのに、その歌詞は繊細で、小説のように心情に富んでいる。

そして、ベースは黒いリッケンバッカを揺らしながら、指弾きの細かさや躍動感でバンドを支える。しかしその音は爆音のなかでも主張出来るほどの存在感だった。

ドラムの、律とは比べられないほど安定したリズムキープに、表現豊かなフィル。

ギターの歪みや観客の身体を反応させるフレーズを弾いている巧斗は、普段の温厚な笑顔ではなかった。

鬼の形相、とでも言うのだろうか。顔をゆがませ、必死の表情でめっちゃくちゃにギターを振り回す。オールのようにネックをまわし

たかと思えば、クラツシユシンバルに合わせて跳躍、ギターがステ
ージに触れるほど腰を屈め、頭も揺らす。それでいて、スピーカー
から流れる音は途切れることがない。

だが、しつとりと聞かせるところは、丁寧にピックを動かしてい
く。

2曲目のインストウルメンタルは、16ビートと変拍子を基本と
しながらも、リズム、リードのギター関係なく、それぞれのフレ
ーズが絡み合う。その起伏、音楽から連想される世界。インストウル
メンタルを漣は聞いたことがなかったが、それぞれのパートが織り
なすメロディが一つになる様は、かつこよかった。

3曲が終わると、汗だくになった巧斗はアンプの上に置いてある
ペットボトルを飲む。汗をかいた髪の毛が、ライトに反射してキラ
キラと輝く。

「それではお待ちかね、タクのボーカル・タイムです」

「変なこと、言うな。メインは、お前だろが」

肩で息をしている巧斗の言葉に、観客が笑う。

シンバルの4カウント。

巧斗は、大きく息を吸い込んだ。

聞こえてきたのは、ハスキーな歌声だった。

「漣、すごいな、たくちゃん」

隣で聞いていた律が、感嘆の声を挙げた。

「うん・・・」

静かに、しつとりと巧斗は歌い上げる。命を光にたとえ、命がめ
ぐるさまの美しさをうたった歌詞だった。それまでの歌が小説だと
するならば、この詞は、詩だ。バラードとは違う、宇宙のような深
さの旋律。本人は始まる前謙遜していたが、観客ではないどこか遠
くを見つめながら歌い上げる様子は、本当にバンドが好きなんだと
伝わってくる。

5曲目、それからおこったアンコールになると一転して、アート
ワークスのフロントメンバー3人はめっちゃめっちゃに暴れ出した。

だが、観客は大いに盛り上がり、漣も律も、唯もムギも、みんなステージの音楽に酔いしれた。

生きている旋律は、心を揺らす（後書き）

遅くなって本当にすみません！ あと無駄に長くてすいません！

ライブの描写が思った以上に難航しました

ほんとに、音を表現するのって難しいですね 修行あるのみです。

アートワークスには明確なバンドのモデルはないのですが、巧斗がボーカルをした曲はACIDOMANをイメージしています。
今回も、お読みただいてありがとうございます。

次回予告

ライブも終わった巧斗だったが、そのあとに予定外の事態になっ
てしま

う。軽音部のメンバーは、その解決のために、どうするのか・・・？
次回もお読みくだされば幸いです

お粥にさえぎられたもの

ベッドの上で、寝返りを打つ。さして質のよくない布団がごそりと音を立てる。だが、体は思うように動かず、だるい。

頭が重く、目を閉じてもいつもは感じない眼球の存在が邪魔だ。額にはられた冷却シートが気持ちいい。

つまりおれは、熱を出していた。

あのライブ。アンコールも合わせ7曲を披露した。ライブに慣れたと思っていたが、初のトリということもあってやはり緊張していた。だがそれ以上に、あのライブは楽しかった。観客に届いている、あの感触。俺達バンドの音に合わせて、オーディエンスが動く様は何度経験しても気持ちいいものだった。

自分がどう動いたのかは記憶にあまり残っていないが、それでもむちゃくちゃに動いたのは確かだった。頭、額、胴体、脇、足、体のいたるところから汗が滝のように吹き出してニルヴァーナのTシャツを浸していった。ベトベトという擬態語を超える不快感だった。俺のムスタングがアッシュ材（トリネコなどの木）を使っている関係上、おそらく梓が使っているモデルよりも重い。それを縦横無尽に振り回したのだから当たり前なのだが。

ライブ終了後の控え室で、俺はぐったりと備付のソファに深く深く腰を降ろした。あまりの疲労感と開放感、達成感で動くことができなかった。

「今日のタク、いつにもまして動いてたな」

同じく青島も床にへたり込みながらぼつりと言った。とにかくみんな疲れていたが、その表情は笑顔だった。

「それは青島も柏木も同じだろ。ストレイトのときにやってたあれ、なんだ？」

本来ならばこのときさっさと着替えればよかったのだが、今回のライブはこれまで以上にバンドとして出来が良かった。まあ、前回までが個人としてもバンドとしても納得いったことが少なかつたからなのだけど。高揚感がすっかり俺の思考回路を鈍くさせていた。

そうしてライブの感想を言い合っていると、オーナーが控え室に顔を出して、打ち上げの開始を告げた。どこのバンドでもライブ後は打ち上げがあるが、ここムーンチャイルドはライブ会場そのものが打ち上げの場になる。気前のいいオーナーがドリンクやスナック菓子などを提供してくれ、ワンコインで参加できる。参加しない理由がなかった。ライブ衣装のまま、特に汗を拭くこともなく打ち上げに参加した。

それがいけなかった。あのあと、誘った軽音部のことで長い時間バンドメンバーのみならずオーナーまで根掘り葉掘り追及してきたため、帰宅できた時には日付が変わってしまった。おかげで誘った軽音の子たちはおるか、大学の友達にすら感想を求めることができなかつた。あまりの疲れから即効で風呂に入ったものの、ろくに乾かしもせずにベッドにもぐりこんだのだ。

どうも、それがとどめになつたらしい。今朝から虚脱感と寒気、頭痛と俺は闘っていた。自己管理能力のなさに、俺は何とも言えない気持ちだつた。

ベッドサイドの体温計に手を伸ばし、ぎこちない動きでほっそりした体温計を脇に挟む。数分後に、甲高い電子音。

38度2分。かなりの高熱だつた。おかげで、身体は夏の暑さと冬の寒さが同居しているかのような嫌悪感で蝕まれている。

「今日部活行くのは無理か・・・」
何とかケータイでたどたどしく部長である律にその旨をメールすると、俺の意識は眠りの世界へ落ちて行つた。

ライブは金曜日に行われたため、軽音部のメンバーと憂、和を合

わせた七人は月曜日にようやくまともな感想を交換することができた。ライブの終了時間がだいぶ遅かったことと、みんな興奮して騒いただけでその日は終わったからである。

「先生のバンド、すごかったね」

廊下の窓に寄りかかりながらムギが感想を述べた。昼休みの昼食後とあって、軽音のメンバーと和は集まっていた。

「うん。前見た演奏よりもすごかった！」

うんうんと頷きながら唯は同意した。それを聞いた律は

「二人とも朝からそればっかだな」

と苦笑した。事実、この二人は登校した時からこの話題が途切れたことがない。しかし、律もライブ終了後にはしゃぎまくっていたうちの一人である。

「でも、ほんと二人の言うとおりよ。私音楽なんてそんなに詳しくないんだけど、圧倒されたというか、すごいって思ったんだから」

和は柔らかな笑みを浮かべた。確かに、この唯の幼馴染は聞く音楽といってもヒットチャートをたまに意識するくらいで、軽音部のメンバーと比べたらやはり音楽に対する意識は低い。

「そうだよな。先生が、まさかあんなに動くななんて・・・」

漣は、ライブの様子を思い出しながら言った。あの気迫あふれるバンドの演奏。ステージから解放される音の塊。バンドの命の躍動が形になったような曲ばかりだった。

「和、ライブ初めてだったけど大丈夫だった？」

つづけて漣は、帰りが遅くなって親は心配しなかったか、と聞いた。

「うん、ちょっとびっくりはしたけど面白かったし、お母さんたちも何も言わなかったわよ。今度ライブがあれば、また誘ってね」

「うん、誘うよ！」

「それはたくちゃんに言うことだろうが」

律はパシンと唯の腕をたたく。和は笑みを浮かべながら

「アートワークスって、唯・・・じゃない、漣たちから見てもやっ

ぱりうまい？」

「和ちゃん、私も含めてよ・・・」

打ちひしがれる唯に赤いアンダーリムの幼馴染は、音楽詳しいのは溼でしょ、とあっさり返した。

「そうだよ。前の四つのバンドとは、聞いた限りだと個人のレベルがばらばらだったりしたけど、先生のところは、なんていうのかな・・・感情が溢れてるっていうか、とにかくすごかった」

「ふふふ、溼ちゃん、すっごく楽しそうね」

ムギがにこにこ笑いながら溼を見つめた。溼は自分がいかにウキウキと感想を述べていたかに気づき、焦った。ムギのみならず、律も唯も和も、みんなにやにやしている。

「そ、そんなにやにやしなくてもいいだろ！感想言ってるだけなんだから！」

溼は、笑いが意味するところに気づいていたが、認めることができなかつた。今でさえ、その感情をどう扱えばいいのか、自分でも分かりかねていたからだ。

その時だつた。律のケータイが震えだした。

「メールだ。誰から・・・ってたくちゃん？」

あわてて律はケータイを確認する。隣にいた溼は何事かと横からケータイを除いた。すると、その内容で頭がいっぱいになつてしまつた。

「たくちゃん、なんだつて？」

「えーっと、風邪で寝込んでるから今日は部活見れそうにない・・・って」

やや心配そうな顔で律がメールを読み上げた。

「風邪?!」

和も含めてみんなの声がシンクロし、廊下にこだました。

「寝込んでるってことは、熱が出てるってことだよね・・・?」

「部活出てこれないってことだしなあ・・・」

溼の言葉に、律は頷いた。

「え、先生今日来れないんですか？」

そのあと、部活で合流した梓に、巧斗が休むということ伝えると、やはり梓はびっくりした声を出した。

「うん。風邪で寝込んでるって。どうも熱が高いんじゃないかってみんなと話してた」

一応部長である律が、メールから察せられることも含めて返事した。

「そうなんですか・・・感想言えると思ったのに・・・」

梓は自分のMP3プレーヤーに、ライブで無料配布されていたアーティストのCDを入れていた。今朝も聞きながら登校したという。

「とにかく、今日はきちんと練習するか」

ティーカップを持ち上げながら漣が宣言した。巧斗がいなければ練習ができないというのは避けねばならなかった。

それからしばらくして練習に取り掛かったものの、いま一つ全員のノリが合わない。練習に身が入っていないのは明らかだった。

「唯、弾けてないところ多いぞ」

漣が注意すると、唯は

「たくちゃんって、いま家で一人なのかな？」

と全く練習と関係のないことを言ったので、本来だったら誰かが（主に漣や梓）注意するはずなのだった。しかし、内容が内容だけに、漣は黙ってしまう。練習できていない原因ははっきりしていた。「どうだったかな？たしか、共働きじゃなかったか？」

律が視線を天井に向けながら返事をしたが、それが何を意味するかに気づいた。

「てことはいま、たくちゃんは・・・」

「家でひとり、ってことだな・・・」

風邪の時、一人になるのは心細く、精神的にも弱ることがある。

溲はひとり、という単語が自分の口から飛び出たとたん、部屋で息荒く寝込む巧斗のイメージが脳裏に浮かんだ。家で一人きり。頼る人が、今巧斗にはいない。

「ちゃんと食べてるんでしょうか？・・・先生、料理できなさそうだし」

梓も窓の外を見ながら心配しきりだ。

「熱が高いとすると、寝てるだけでは治らないわよね」

珍しくムギが考え込んだ表情を見せた。

空気が重い。本人たちに自覚はないが、巧斗がここに初めて来たときは、風邪でみんながこんなに心配すると誰が予想できただろうか。

すると、唯がはいはい、と手を挙げた。

「ねえみんな、お見舞行こうよ！」

「事務の人、あっさり教えてくれたな」

メモ用紙を見ながら、律が乾いた声を出した。

「さわ子先生の家って言ったなら、すぐだったね」

ギターケースをかけ直しながら唯が言った。

唯の「お見舞い」という提案に、全員が賛成した。その時は唯をメンバー全員が誉めたたえ、すぐさま部活を切り上げた。唯は去年文化祭前、さわ子の家でギターボーカルの特訓をしていたため、すぐにも行けると誰もが思ったが、そこはやはり唯、道順がいままで案内ができるどころではなかった。しかたなく事務でさわ子、いや巧斗の住所を聞くことにしたのだが、内心びくびくしながらだった。というのも、巧斗は顧問であるもののいまだ未成年である。その家に女子が五人も見舞にいくのが問題視されやしないか不安だったのである。

もっとも、事務の人は疑問に思うどころか、やさしい子たちね、と高評価で、肩透かしを食らった感触があった。そのあとスーパー

に立ち寄り、今メモを頼りに巧斗の家を目指している。以外に近く、20分ほどで着きそうだ。

「・・・でも、こうしてみんなで行くの、やっぱりまずいんじゃないか？」

ビニール袋をぶら下げた漣はまだ納得していない様子だ。

「ということは漣ちゃん、一人で行きたかったのかなー？」

にやつと律が笑う。それを聞いた漣は

「そ、そうじゃなくて、病気の人に大勢で押し掛けても大丈夫なのかなって思っただけさ！」

といつもより荒々しく返すので、みんなびつくりしてしまった。

特に律は実際に数センチ飛び上ったほどである。

ああ、だめだ。漣はみんなに謝りながら、いい加減冷静になれよ、と自分に腹が立った。

「そ、それにしても、律先輩妙に乗り気ですね。どうしてですか？」

そんな漣の心境を知ってか知らずか、あわてて梓が話題を変える。律はまたしても口元に笑みを浮かべ、梓にその理由を耳打ちした。

「だって、たくちゃん大学生だろ、そんな男の部屋にあるものって・・・ごによごによ」

とたんに、梓の顔がこれまでにないほど赤くなった。

「な、な、なんてこと考えるんですか、先輩！」

「えー。だってそう考えるのがふつーじゃん」

「いやらしいです！先生はそんなの持ってません！」

「あずにゃん、どうしたの？」

後ろから抱きついてきた唯に、梓は言おうか否か迷った。しかし、普段の唯からして、律の言ったことがはたして理解してくれるのか確信が持てなかった。

「ほほう、梓、ずいぶんたくちゃんを信用してるんだねー」

「ふ、ふだんの先生を見てて思っただけです」

意味ありげな口調で質問する部長に、梓はまだ顔を赤くしながら答えた。

だがその時、ムギがみんなの想像の盲点を突いた。

「そういえば一人って決めつけてたけど、先生の彼女がいたら、どうする？」

みんなの足が止まった。澪はその発言に、胸の鼓動が加速度的に速くなるのを感じていた。そうだ、その可能性を忘れていた。腕組みをしながら、みんな考え込んでしまった。もしそうなら、自分たちの存在は完全にお邪魔虫以外の何物でもない。みんなの脳内で、甘い看護を受けている巧斗の様子が再生された。澪はその映像で不快感が胸にこびりつく感覚を覚えた。

「ようし、そうだったら余計行かなきゃ！」

ところが。律、唯、ムギ、そして梓までもが妙に乗り気で、足を運ぶスピードが速くなった。唯とムギにいたっては、わずかに頬が赤い。

「ちよつと待て！」

澪のツッコミでそわそわした四人が振り返った。

「ほえ？」

「なんでそんなうきうきしてるんだ？」

「いやだって」

ムギが赤い頬のままいう。

「そうだったらすごい楽しみじゃない？」

えっ、と澪は自分とみんななどの思考相違にびっくりした。これが普通の女の子の反応なのだろうか？

「だって、たくちゃんとそういう話したことってないじゃん？だからひよつとして・・・」

律がなにかよからぬことを考えている。どこまでも巧斗をいじりたらしい。

そういえば、この軽音部は恋愛めいた会話をするのがあまりない。巧斗がいるいないにかかわらず、部活の方への興味が優っているせいか、年ごろの女子がもっとも関心を持つであろう話題は久し振りだった。

「澪ちゃん、ひよつとして興味無いの？」

唯の顔にまさか、と書いてあった。

「い、いやそんなことは・・・」

むしろ逆だ。ものすごく興味がある。もし本当に彼女がいたらどう思ってしまうのかは予想できないけど。でもライブの巧斗を見ると、彼女がいてもおかしくなかった。それだけライブの巧斗は輝いていた。

「じゃあ行かない理由はないな」

だから律の言葉に、澪は不安がいつぱいそのまま頷くしかなかった。

変な夢を見ていた。

いつものように部室に行く俺。だが、なぜだか部室にたどり着けない。

何度も何度も確認して階段を昇るのだが、同じところに戻ってしまふ。

すると、唐突に柏木が俺の前に現れた。

「タク、お前そんな環境でなにも感じないってのは変だぞ」

「だってしょうがねえだろ。顧問がなんでそんな感情もたないかんだ」

「いや臨時じゃん、お前。姉貴の変わりだし、もっとフランクにしろって言われなかったか？」

その言葉にドキツとするが、なんでフランクにしろっていうセリフを知っていたのか。

「もっと楽しめばいいじゃん」

すると今度はライブハウスに俺はいた。軽音部のみんながライブしているのを、後ろで見つめている。色とりどりのスポットライトを浴びて、楽しそうの演奏するメンバー。それを見ていた俺はなぜか、たまらなく悲しくなっていた。ステージのみんなにせめて気づいてほしくて、手を伸ばす。でも当然、届かない。

すると今度は、逆にみんなが輪になって俺を囲む。それぞれの楽器を携えながら、まるでメリーゴーランドのように回転していく。それも速度が、どんどん速くなっている。あまりの速さにもはやみんなの姿は確認できず、ただの抽象画のようになってしまった。

真白な天井が、視界を覆っていた。ぐっしりと濡れたTシャツの感触と、わずかにのこる熱さまシートの気持ちよさ。そして、俺が発する洗い息遣いの音しかしない。

目が覚めていた。時計を確認すると、もう夕方の四時半を過ぎていた。

四時間以上寝ていたのか。あまりの睡眠ぶりにかるく驚いた。

体の調子は・・・朝よりはましになったと思う。まだ体にだるさはあるしふらつきはあるが、少なくとも寒気はない。体温計で計ってみると37度1分。よかった。俺は熱がひいたことに、あからさまにほっとしていた。と同時に、空っぽの胃袋が猛烈に主張を始めた。胃液が粘膜を突破し、俺の胃は焼けるように痛み出した。

なにか食べないと・・・この分では自炊することはできないから、ヨーグルトとかで済ますしかないか。母さんが帰ってきたら、なにか頼もう。

そう思って立ち上がった時だった。

チャイムが家の中に響いた。

なんなんだ、こんな時に。

俺は起き上がってベッドから抜け出すと、窓に近寄ってカーテンをわずかに開けた。俺の部屋からは、インターホンがよく見えるのだ。

俺は固まった。

「あれ、なんで・・・」

白いブラウスに、細長いリボンとグレーのスカート。それに姫力ツトの黒髪に黄色いカチューシャ、黒いツインテール。それに何より、背中からまるで戦士の持つ剣のように飛び出ている、黒いギターケースたち。

「なんで軽音部のみんなが・・・」

相変わらず、チャイムは鳴り続けている。俺は頭がくらくらしてくるのを感じ、ごん、と窓に額を打ち付けた。

ここに来た目的には、だいたい予想がつく。しかし、こんな状況になるとは思っていなかった。

とりあえず、下に行くか。すべてはそれからだ。

俺は部屋を出て階段を下りた。いつもより大きい音が、木製の階段から飛び出した。

「はい」

ドアを開けると、そこには間違いなく、桜ヶ丘軽音部のメンバーが勢ぞろいしていた。

「・・・どうしたの？」

質問の答えは分かっていたが、あえて聞いてみた。

「どうしたのはないでしょ！お見舞いに決まってるじゃん」

まっさきに律が胸を張った。やっぱり予想通りだった。

「先生、風邪の具合どうですか？」

急に漣が動くものだから、彼女が手にしたビニール袋が音をたてた。

「うん、律にメールした時よりはだいぶ良くなったよ。熱も下がったし」

「食欲ありますか？」

ムギも同じくその手にビニール袋が握られている。だが、漣のものよりも明らかに重たそうだ。

「昼から食べてないしなあ・・・って、唯も梓もどうしたんだ？」

珍しいことに、この二人は俺を見てなぜかガツカリしていた。たしかに俺は寝起きで髪もぼさぼさだが、普段の俺は室井ほど外見に気を使っていないし、それで幻滅するのはおかしい話だ。なにがあったのだろう？

「え、な、なんでもないよ、たくちゃん。それより私たち、先生のお見舞いにきたんだよね、あずにゃん」

「そうですね、唯先輩言ってることめっちゃくちゃですよ」

二人の会話を聞いた時点で、俺は覚悟を決めた。というか、せつかくお見舞いといって来てくれたみんなを無碍にすることはできなかった。

「なにか買ってきてくれたみたいだし、とりあえず上がる？」

「へー。たくちゃんの部屋ってこうなってるんだ」

唯は先ほどのショックから立ち直ったのか、部屋に入るなりきよるきよると見渡した。

実はみんな、俺が寝込んでいる時に彼女が来ているかいないかで盛り上がったらしい。余計なお世話だ。残念ながらライブに来てくれて、病気の俺を献身的に看病してくれる彼女などいない。

まあ、これまでもそんな関係になった人はいないのだけだ。

唯以外の四人は、男の部屋が珍しいのだろう、落ち着かない様子で腰をおろしていた。

「先生、ポカリ、買ってきました」

漣がビニール袋をガサガサさせて熱が出た時には持ってこいのドリンクを取り出した。それをテーブルにあつたコップに注いで、ベッドに座っている俺に渡してくれた。まだ少し喉にいがくりがこびり付いたような感触があるので、とてもありがたかった。

「ありがとう、漣・・・っておい律、なにやってんだ」

お見舞いに来たはずの律は、うろろろしながら何かを探していた。と、ベッドからもっとも遠い壁に來ると

「たくちゃんって、こういうの好きなんだ」

とやや引いた声を出すので、みんながそこに集中した。

「いや、それは昔から集めてるもので・・・」

律が手にしていたもの、それは仮面ライダーのソフビだった。きつちりと箱に詰めてある。俺が幼稚園のころから大切にしている、仮面ライダーBLACKだった。しかも、友達からもらった劇場版

のポスターも貼つてある。昔から特撮が大好きで、今や俺の部屋の一角は完全にDVDやフィギュアで占められていた。なんだろう、俺に突き刺さる視線が非常に痛い。

「なーんだ。ちよつとつまんない」

「なにを期待してたんだお前は・・・」

ため息をついて視線を戻すと、梓がベッドの近くにある楽器コーナーを見て、目を輝かせていた。

「ジャズマスターとフライングV・・・。それにこっちはエフェクター・・・」

「こら梓、先生今風邪ひいてるんだから。ちよつと落ち着きなさい」
珍しく梓が注意された。

「梓、エフェクトボードに入ってないやつで使いたいのがあったら使つてもいいよ」

「ほんとですか？じゃあこのブルースドライバーを・・・」

そんな梓を見てちよつと苦笑いしながら、ムギが

「先生、私たち何か作りましょうか？」

「え、いいの？でもそこまでは・・・」

「そのために、いろいろ買ってきたんだよ」

唯はビニール袋から卵やら林檎やらをつかみだして俺に見せる。

用意がいい。というか、はじめからそうするつもりだったのだろう。この際、彼女たちに任せてしまうのもいいかもしれない。

「わかった。えーとじゃあキッチンに案内・・・」

「ダメ、たくちゃんは寝てて楽しみにしてなさい。まだ熱はあるんでしょ？」

俺が立ち上がるうとすると、律が手を開いて押しとどめた。その言葉はもつともで、俺は素直にしたがるしかなかった。

「大丈夫、私たちにはムギちゃんがいるし！」

「なんで唯が威張ってるんだよ」

冷やかに遷は言った。だが、

「よーし、じゃあ遷以外はキッチンに行こう！」

という律の提案で急にあたふたしだした。

「なんで私だけなんだよ！」

「だって、たくちゃんを見張る人は必要だろ？」

「それは構わないけど、見張りはないだろ」

漣が返答に困っているの、俺はあきれた口調を装った。

「てことで、決定だな。ようし行こう！」

おー、と唯が拳を上げた。荷物を持ったムギに続いて、梓が心配そうに漣を見やって部屋を出た。漣がひきとめる間もなかった。結果として、この部屋に残ったのは、俺と漣だけになった。

俺はとにかく体を休ませようとベッドの縁に背中だけ預けた。漣はどうしていいのかわからない様子で、指先をいじりながら視線をカーペットに向けていた。

律のやつ、なに勝手なことやってるんだ。漣は幼馴染と、なぜかその提案に乗ったみんなに、心の中で憤慨していた。不思議なことに巧斗は疑問に思っていないようだが、それも気になった。こっちは、先生とふ・・・二人きりというだけで、緊張しているというのに。

律は見張りと言ったが、どうすればいいのだろう。巧斗をちらりと見ると、毛布をかぶってあー、と小さく唸った。

「相変わらず、だな」

「す、すみません。どうしてもみんなで行きたいって・・・」

顔をこちらに向ける巧斗。視線が合い、漣は顔をそらそうとした。でもできなかった。巧斗は穏やかに笑った。

「いいよ、謝らなくて。朝からずっと一人だったし。それに病気の時って、どうしても心細くなるじゃん」

「みんな喜びます」

その言葉で、漣の心が少し軽くなった。机に目を向けると、デスクトップ型のパソコンと、棚に平積みになった大量のCDがあった。

「でもやっぱり、音楽聴けないのつらいな。いつも聴いてるから」
ほんとに音楽が好きなんだ。漣はライブと部活の時の巧斗を思い出した。部屋の一部を除いて、完全に音楽で埋まっている。ポスターもCDショップでもらったのであるうジミヘンやカート・コバーン、ライブDVDの広告などで埋め尽くされている壁。これくらいしなければ、あの演奏はできないのだろう。

「あの、なんで風邪ひいたんですか？」

漣は幾分か話しやすくなっていた。そもそも話を、そういえばしていなかった。巧斗はわずかにあわてていた。

「ライブでテンションあがったから、そのまま打ち上げ行ったからかなあ。まさかこんなことになるなんて……。ライブどうだった？」

「かつこよかったです。インストは私聞かないんですけど、いいなって思いました。歌ものも激しいのに演奏しっかりしてて」

一瞬、巧斗のことを言おうかどうか、迷った。だが巧斗のことをいうのがやっぱり恥ずかしくて、どっちとも取れる言い方になってしまった。

巧斗は漣の言葉を聞いてとてもうれしそうな表情になった。いや顔どころか、体中からそのオーラが出ているのではないかと思うほどはつきり分かった。

ドアの外で、大きく音がした。なにかが落ちた音にも聞こえた。

漣はその唐突さに驚き、ビクツと後ろに覗けた。しかし勢いがありすぎたのか、そのまま後ろに倒れそうになる。

間一髪、反応した巧斗が漣の手をつかみ引き戻す。

漣は一瞬、自分の状況が理解できなかった。手の平が包み込まれている感触と、そこから伝わってくる仄かな熱。

すぐに、頭の中がパニックになる。ギターやらベースやらドラムやらキーボードやらリコーダーやらがてんでバラバラな演奏をしているかのようだった。

それでも、握った手を離せなかった。

男らしいが、しなやかな巧斗の指。手の甲に感じる硬いものは、ギターで硬くなったのであるう指先だった。

巧斗も、前のめりの態勢でいるにも関わらずそのままだ。

お互いの視線が絡まりあい、そのまま硬直する。呼吸の音だけが、巧斗の部屋で存在していた。

ダン、ダン、ダダン。

しかしその時間は長く続かなかった。階段を昇る音が大きくなってきたからである。あわてて手を離し、距離をとった。

「たくちゃん、もうちょっとまってね・・・どうしたの？二人とも顔赤いよ？」

ドアをノックすることなく入ってきた唯が首をかしげた。

「おお、おいしい」

「でしょ？さすが私とムギ！」

「律先輩にこんな一面があるなんて知りませんでした」

「そうだね。りっちゃん、以外と料理できたんだ」

梓と唯の容赦ないコメントに律は大げさに打ちひしがれてみせた。

「普段のあたしって・・・」

それを巧斗は

「いや、ほんとすごい。そんなに濃くないけど、卵がうまくご飯とあつてるな」

と絶賛したので、ムギと律はハイタッチした。

ムギと律が作ったのは卵お粥。白いお粥に卵を流しこみ半熟状態にして、軽く醤油で味を調えたという。

できれば私が作りたかったなあ・・・と溲はらしくないこと考えていることに気づき心の中がかぶりを振った。湯気を上げる一人用なべをつついていている巧斗を見てみると、うれしい気持ちになるのだが、同時にあまり面白くはない。

握った手を見つめる。まだ、あの時の感触が残っている。その時

のことが、ありありと思い出された。

巧斗はさわ子とよく似ているだけあって、目の形もほとんど一緒だった。引き込まれてしまいそうな、そんな瞳だった。

だ、だめ、なに思い出してるの、あたしってば。

このまま行くと、頭が延々とループしてしまいそうだった。

「じゃあねー！」

夕焼けのなか、唯と律が手を振った。俺はそれを見送ったあと、すぐ部屋に引っ込んだ。

漣と、手をつないだ。あくまでも漣を助けるためだったとはいえ、それからの数分の俺は、なんか変だった。彼女の手はほっそりとしていて、滑らかで、でも指先だけは、ベースストのものだった。ベースの弦に何回も何回も対抗していなければできない硬さ。そして本当に、漣はきれいだった。

いやいやいや、なにを考えているんだ。俺はうら若き乙女か。そんなの、あってはならないと言ったばかりじゃないか。

オレンジ色の光でいっぱいになった部屋の中で、俺は激しく動揺していた。

だが、漣がライブをかつこよかったと言ってくれた。それはバンドのことだと思うが、それでもうれしい。なにせ、ライブの感想でかつこいいとってくれたのは、漣が初めてだ。

すっかり熱も下がった頭でまず考えたことは、次の部活がいつか、ということだった。

お粥にさえぎられたもの（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

いつも話が長くなってすいません！

この話は、巧斗の見舞いにみんなが行く

というだけの話なのですが・・・

もっと精進します。あと、前回の予告になってませんでしたね。ほんとすいません。

それにしても、巧斗はこれから顧問という立場で居られるんでしょうか。この回で漣を意識した感がありますが・・・。

次回もお読みくだされば幸いです。ではまた。

一足づつ、そばに行けたら

雲ひとつない澄み切った青空と、容赦なくアスファルトに照りつける太陽。夏真っ盛りの天気で、見ている分には本当に気持ちがいい。おされなカフェでよく冷えたアイスコーヒーでも飲んでいるのなら、どれだけ夏を有意義に満喫できたことだろう。

しかし、俺はいつもの部室で蒸つとした空気に纏われながら演奏を聴いていた。クーラーはおるか扇風機すらない部屋の中で、みんなは汗をにじませながら練習に励む。

何回か通したあと、みんなは大きく深呼吸する。そろそろいいかな。

「唯、ミュートが甘いぞ。時々雑音が入ってる」

「ミュート？」

唯の頭上にはてなマークが浮かんでいる。相変わらず用語覚えてないな。

「ギター貸してみ」

サニーバーストのレスポールを手に取り、唯のミュート、すなわち弦を押さえて弾く奏法を再現する。

「いいか、時々弾いてない弦が押さえきれなくて、それをギターが拾ってるんだよ。ほら」

ギターのミュートはただ弦を押さえて無駄な音を出さなければいいという単純な話ではない。これがうまくできるかできないかで、ギタリストとしての力量がわかってしまうほど奥が深い。唯のミュートをやってみると、アンプから不快なノイズが放出される。唯の顔がゆがんだ。

「こうなってたんだ・・・」

「サビのところどころでこうなってることが多いから気をつけてよ。ポーカーも兼任だから練習しないときついぞ」

「うん、たくちゃん！」

大きくうなずく唯。これでも当初よりだいぶうまくなつたと思う。毎日家では練習してるみたいだし。ただもつと言葉を覚えて理論的にもギターを学んでほしいと思うけど、それにはだいぶ骨が折れるだろう。

「ムギ、キーボードだけど音作つた方がいいんじゃないか？」

俺の指摘に、ムギは首をかしげる。

「音づくり……ですか？」

「うん。キーボードのエフェクトでもいいから、もっとこう……きらびやかな……。イメージでごめん」

うまく説明できなかったが、ムギは納得していた。

「なるほど……」

「あ、全体としてはサビでちよつと走つてたかな」

「そうですね……」

澁が俺の言葉を受けて考え込んだ。くりんと上向けにカールしたまつ毛が上下する。

「暑いし、休憩にしようか」

律がドラムに覆いかぶさつた。

「へー。やつと休めるー」

「律、お疲れ。ドラムはしんどいだろ」

席に着きながらドラマーをねぎらう。律は鞆からタオルを取り出すと汗をぬぐつた。

「ほんとだよ。たくちゃんは何回も……」

「おい。ライブハウスに比べたらこれでもまだましな方だぞ」

「たしかに、先生ものすごく動いてましたもんね」

梓がアイステイーをおいしそうに口にした。俺のステージングは度が過ぎるのかもしれないが、ライブハウスはたとえ冬でも暑い時がある。夏なんかサウナかと錯覚しそうになったのも一度や二度ではない。

「はい、先生」

ムギが目の前にアイステイーを置いてくれた。ひんやりしたグラ

スが心地よかった。

「んー、おいしー!」

唯がアイスクリームに舌鼓を打った。それにしても、この部室はすごいな。俺は部室の奥に設置された冷蔵庫をはじめとした休憩道具を見やった。すっかりこうやって休むのが当たり前になっていたが、改めて考えれば季節に応じたスイーツが出てくるってかなりすごいことじゃないのか？

「今日のもうまそうだな……。ムギ、ありがとう」

「いえ、戴きものですから。それに、早くしないと溶けちゃいますよ?」

気がつくと、俺に差し出されたチョコアイスから緩やかに液体がにじみ出ていた。俺はあわててアイスを口に含む。程よい甘さと、仄かなチョコの苦味が滑らかな舌触りと冷たさをもって、俺の体を冷やしていった。

ちなみに、唯はストロベリー、澪はバニラ、律はなぜかバナナ、梓はミックス、ムギは抹茶と全員別々のアイスだった。途中で取り換えつこが始まったが、俺はなぜか恥ずかしくて参加できなかった。「そういえばさ」

どのアイスがおいしいかで盛り上がっていたみんなが、俺に注目した。唯にいたっては唇の端にアイスがついたままだ。

「歌詞って澪が考えてるんだっけ?」

「え、は、はい」

なにを言われるのかと思ったのか、澪の顔が急に緊張で染まった。「ほほう、ついにたくちゃんかたまっていた思いを吐き出すわけすな」

律の無遠慮な発言に、澪の眼に涙がたまり始めた。強い日差しが教室に入ってくるので、余計に澪の瞳が輝いて見えた。

「そんなわけあるか!ダメ出しするならもつと早いうちからやってみよ」

「そ、そうですか……」

胸をなでおろす漣。いかん、このままいくと話題が逸れそうだ。

「ったく・・・。えっと、曲作る時って、どっちが先なんだ？」

「どっちって？」

唯は俺の言うことがわからないようだった。そうか、そういえばこのバンド、理論的という言葉が通用しないんだった。

「これはあくまでも俺の意見なんだけど。曲を作るとっかかりには三つあると思うんだよね。歌のメロディが先か、歌詞が先か、はたまたアレンジが先なのか」

オリジナルを作るのは難しい。簡単にできるときもあるが、オリジナルリティを出そうとすると、クオリティの高いものを目指そうとすると悩む。オリジナルは初心者ではまずできないと思っただい。ある程度まで、ギターでいえばコードの理論が頭に入って応用できるようになるまでいかないと、いいものはできない。俺がいるアーティストクスだって、最初はコピーバンドだった。だから、みんながオリジナルをやって、それもあの個性があるということは、このバンドのレベルが比較的高いということの証であった。

「歌詞が先かな。漣のやつに、ムギがメロディつけて、アレンジは最後」

「なるほどね」

歌詞からメロディをつける。これがこのバンドの曲作りにおいてフォーマットになっているようだ。歌詞先行で曲作りを行うということとは、具体的なイメージがあって、それが曲になるということ。プロではシンガー・ソングライターが比較的この作り方じゃなかったか。

「でもそれがどうしたんですか？」

梓が聞いてきた。たしかに、ちよつと唐突過ぎたかもな。

「いや、ぱつと思いついたんだけど、次曲作る時はメロディ先で作ってみたいか？」

「わ、私ですか？」

話を振られてムギは少々戸惑っていた。

「うん。たまには違うことやっても面白いかなーって」

「おお、たくちゃんプロデューサーみたい」

律はまだスプーンを動かしながら言った。俺がプロデューサー？
・たしかにそうかもしれない。演奏指導だけじゃなく、アレンジ
に關してもかなり口出してるからな。

「そんなつもりはないんだけどな」

「私が先に・・・」

「いや、難しかったらやらなくてもいいよ。あくまでも俺の個人的
な提案だし」

そうだ。無理やりやらされるのは、少なくとも俺の信じる音楽で
はなかった。親が強制的にピアノをやらせてあれこれ口を出すこと
もあるが、それは可哀そうだと思う。音楽は自分が楽しむのが第一
だ。やらされるという意識があるだけで、それは義務になり、自分
を縛る鎖になる。俺はここに来てからそれだけはししないと心に誓っ
ていた。俺も同じ思いだからだ。バンドは楽しい。実際に自分が感
じているからこそ、価値観の押しつけはできなかった。

「わかりました。やってみます！」

真剣なまなざしでムギがうなずいた。なんだかんだ言っても、こ
ういう音楽に対する興味が高いのが、みんなのいいところだ。

「そうだ、みんなもどうい曲がやりたいのか話し合ってみたら？
まとまらなかつたら漣の歌詞ができるまで保留って形にすればいい
し」

「じゃあ私、リードギターとリズムギターが折り重なるようなのや
りたいです！」

梓が意気込む。梓はリズムギターを担当しているが、今ある曲は
そこまでギターの掛け合いはない。それに、梓はツエッペリンが好
きだと言っていたから納得できた。ハードロックはギターのリフが、
どれもかっこいいからなあ。

「じゃあ私は、もっとかわいいのがいい！」

ばしん、と手を挙げて唯が提案した。かわいい曲・・・。漣の歌

詞がかなり甘々なだけに、アレンジまでポップ色を強めたらアイドルの曲になりそうだ。

俺の脳内で、五人がダンスを踊りながら歌っているシーンが浮かび上がった。アイドルらしい派手な衣装だ・・・あれ、以外とありかも？

「先生、なに想像してるんですか？」

みんなが曲で盛り上がっているなか、隣に座っている澁が腫れものにさわるかのように尋ねた。俺、そんなに変な顔してたのか？

「い、いや、みんなのライブシーンをね」

まさか事実をいうわけにもいかず、適当にごまかした。さすがに、アイドルの妄想はないわ。自分が不潔な人間のように感じられた。アイドルを否定はしないが、明らかにまずい。

「そうですか・・・」

さすがに、この言い訳は苦しいか。さらに追及されると思ったが、澁は話題を変えた。

「先生のバンドは、どんな風に曲作ってるんですか？」

「俺らのところ？ そうだなあ」

簡単に曲作りの説明をした。基本的に、うちのバンドはメロディ先行だ。ただし歌ものとインストの場合では少し異なる。

歌ものはある程度コードと一緒にメロディをつける。まずコードが形にならなければベースも付けられない。曲においてコードとは柱であり設計図だった。少なくとも俺はそう考えている。これに柏木が歌詞を考え、アレンジを加えてひとつの曲になる。インストの場合は漠然とリフから考えるときもあれば、青島や室井からネタが出てくる時もある。それが発展していくか行かないかはわからない。実際、インストはボーカルという道標がない。それだけに自由だともいえるが、その自由が逆に曲にとって正解なのかかわからなくなる時が多い。

「そうなんですか・・・」

普段他のバンドと触れ合うことがない澁には新鮮な話題だったら

しい。純白の頬をわずかに染めながら深くうなずいた。その姿を凝視している自分に気づいて、俺は狼狽した。

右手に、漣の手の平の感触が蘇る。そして、見舞の時に絡まりあった俺と漣の視線。あれだけ自制していたはずなのに、俺はかなりきつい姿勢にもかかわらず、動くことができなかった。漣の目を覗いた瞬間、離さなければと思っただけでも、できなかった。今俺は、その感情の納め方がわからなかった。ただ、漣に気取られるのは避けなくてはならないというのは、はっきりしていた。

「だから大変なんだよね。うまくかみ合わないときは、みんな不機嫌になるし」

「それでも、バンドを続けてるんですよね？」

漣と視線が重なる。この目にかかれば、すべての穢れは浄化されるのではないか。そして、さっきアイドルを想像したからか漣に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「そうだよ。なんていうのかな・・・俺は他の人と組む気はないよ。遊びだったらセッションしてもいいけど」

「私も、同じです」

漣が曲のイメージで言い合っているみんなを見ていた。漣は梓に同じことを言ったという。みんなといるのが楽しい。そういう漣は、普段の張っている表情とは逆に柔らかい雰囲気だった。

いやだから、なんで無駄に細かいことまで見てしまうんだ。俺は。「でも歌詞大丈夫か？メロディが先ってことは、自由に書けないってことだぞ？」

とにかく漣に対する感情を押し殺し、顧問の顔を必死で繕った。

「なんとかやってみます。初めてなので、ちょっとだけ不安ですけど・・・」

「漣なら、できると思うな」

思考よりも早く言葉が出た。これは掛け値なしの本音だった。ただそれだけに、漣の顔が紅潮する。言っというて感じるのも変だが恥ずかしいな、こういうの。

「え、それって・・・」

「みおー。どんなのやりたい？」

俺が質問に答える間もなく、律が会話に参加しないベーシストであり幼馴染を呼んだ。答えないわけにはいかなかったのだろう、漣は体を反転させた。

「そうだな・・・。指弾きやりたいな」

新曲については方向性が統一することはなく、俺の言ったようにムギ待ちで、漣のイメージを優先することになった。もうアイスは食べきってしまった、俺は二杯目のアイスティーを飲んでいた。

「そういえば、そろそろ合宿のこと決めないと」

練習再開しようかな、と思った矢先のことだった。律が思い出したように言った。その単語のそぐわなさに、俺は文字通り耳を疑った。

「合宿？ここですか？」

確かに、学生向けにバンド練習ができるホテルもあるらしいが、この部ってそんなに部費が余ってるのか？

もっとも、俺は行くわけにはいかないが。

「うっん、ムギちゃんちの、別荘！」

唯のテンションが一気に上がった。この暑さだというのに。天然ってこういうことか。いやそれよりも。

「ムギの別荘？」

「はい。去年は一番小さいところだったんですけど・・・」
申し訳なさそうに言うムギ。いや、別荘って普通持ってないだろ。金持ちの代名詞だし。しかも今の口ぶりからすると、所有している別荘は一軒だけというわけではないようだ。いつも飲む紅茶とお菓子といい、ムギの家はいつたい何をやってるんだ？

「すごいですね・・・」

一年生である梓はただ圧倒されてまともな言葉がでない様子だ。

別荘とさらりと言われて普通の対応をしるっていつのも無理か。ただ俺は最年長として、動揺しているのを見られてはいけない。だが、律の言葉でそれは脆くも崩れてしまった。

「日程はまたあとでいいとして、たくちゃんの大学っていつから休み？」

どこか喫茶店でもよろうか、という気軽さで律が予想斜め上を行く質問をしてきた。

「え？俺行くの確定してんの？」

さすがに合宿は無理だ。さわ姉に顧問にさせられたときも若干抵抗があつたのに、合宿はレベルが高すぎる。ただでさえ顧問も（個人的に）危ないと思ってるのに。

「もしかして、行かないつもりだった？」

唯が核心を突くことを言った。これだから天然は……。俺はうまく答えられない気がしたが、

「だって、女子の中に俺が入るわけだろ？社会的にまずいだろさすがに」

俺が二十歳を超えていたら、あるいは大丈夫だったのかもしれない。もし俺が女だったら、こんなことで悩まなかつたはずだ。

「だってたくちゃん顧問でしょ？なにを戸惑ってるのさ？」

律は全く俺の葛藤を理解していない。あのな、いくら合宿とはいっても、泊まりがけなんだぞ？そう言われて、ほいほい着いていったら……。男の妄想を舐めるなよ？

「それは、そうだけど……」

「だ、誰が練習見るんですか？せっかく、いいかんに練習できてるのに……」

まさかの溼が、律の発言に同意した。あれ、これって俺、男として見られてないってこと？小学校からこの扱いに慣れているとはいえ、俺は無性に悲しくなった。

「新曲のこともあるし、やっぱり先生がいた方がいいですよ」

梓も納得していない様子だった。いや、こういつてくれるのはと

っても嬉しんだけどなあ……。

「そうだよ。先生も含めて、軽音なんだもん」

唯、そう言われると……。

「先生のこと信じてますから」

ムギの言葉がとどめだった。みんな、無垢な瞳で俺を見つめている。そんな目で見られたら、断れなくなるじゃないか。どうなつても知らないぞ……そんな度胸、俺にないけど。

俺は、あとでさわ姉に報告しなきゃな、と心のホワイトボードに書き留めた。

放課後、俺はそのまま合宿の買い物に付き合わされた。つまり荷物持ちだ。駅前の商店街を歩きながら、俺は未来ってホントにわからないな、と埒もないことを考えていた。

「最初入った時は予想できませんでしたが、特訓合宿するんですね！」

梓の眼が輝いている。それは俺も同意せざるを得ない。あのだけばりを見たら、合宿に行くということも疑ってしまう。

「いや、ね……」

なぜか溲は、そんな梓から視線をそらした。合宿って普通練習するものだろ？あれ、普通ってことは……。やな予感がした。

「買い物って、食材とか、機材とかですか？」

ああ、無垢なのがうらやましい。しかし、梓の言葉とは裏腹に、食品も楽器屋も通り過ぎ、ビルの中にどんどん唯、律、ムギは入ってしまった。

「買い物ってここだよ？」

唯が立ち止まったところで、俺の体は硬直した。梓も同じように、あいた口がふさがっていない。

「なあ梓、俺、同じこと考えている気がするわ」

「そうですね……」

唯が指さしているのは、海や川などで水に濡れてもいいように、いやむしろそのために作られた服。世の男性が、憧れを抱いてやまないものだ。人によつては、その大胆さや暴力的な魅力によつて虜にさせることも可能だ。

要するに、目の前にあつたのは水着売り場だった。

せーの、と俺と梓はタイミングを合わせた。

「遊ぶ気マンマン!？」

「そうさ!合宿といつたらまずこれでしょ!」

「帰るからな」

踵を返そうとした俺の首根っこを、律は思いつきり引つ張った。

「ここまで来て、それはしないでしょ!」

あまりに強く律が襟を引つ張るものだから、俺の気道器官は悲鳴どころか窒息寸前だった。

「ぐへっ……!!これは何の罰ゲームだ?!」

無理やり律の腕を引つpegす。あまりの超展開ぶりに、俺の体からなにかオーラめいたのが出ている気がする。

「だからー、荷物持ちだつて」

律のやるう、いい顔してやがる。もつともそのせいで俺は今大変居心地が悪いけどな!

「水着ぐらい自分で持てよ!」

彼氏でもなんでもないのに、これはない。断じてない!なぜか演説のように心の中で俺はまくしたてた。

「なんでそんなに嫌がるんですか?」

まさかの、ムギからの伏兵だった。部室での信じてる発言と言い、男がどういう生き物であるか、理解していないんじゃないだろうか。というか、そこを説明させるか、普通……あ、このバンドに普通つて通用しない言葉だったな。俺の頭が重くなり始めた。

「当たり前だろ。女子と一緒に水着売り場つて……」

正直、目のやり場に困るのだ。下着となんら変わらない形状であるがゆえに、水着というものは男としての本能と、理性との間で常

に揺れ動く妙な魔力を秘めている。マンガ雑誌であれだけ水着グラビアが載っているのを考えれば、世の男子がいかに興奮するかがしのばれよう。

「そういうものなんですか？」

ほんとにわかってないな、ムギは！ 小一時間、男がいかに狼なのか説教してやりたい！ 俺は本当に落ち着かず、体がプルプル震えだした。

「そうなんだよ。こんなの合宿となんの関係があつて、俺を連れてきた？ 前もって言ってくれば・・・」

「それじゃ面白く・・・いや、水着以外にも買うものあるし」

律のやろっ、今聞き捨てならないこと言つたよな？ 第一目的がからかつたためかよ。俺はこの場でへたり込みたかつた。

「そもそも、合宿つて練習じゃないんですか？」

梓がやり取りを聞いてやや引きぎみに、一番核心の質問をした。

「もちろんするさ。別荘が海に面しているから」

「信用できません！」

頬を膨らませて猛抗議する梓を、澪がたしなめた。

「まあ、息抜きも必要だから」

「そ、そうですよね！」

梓は掌を返したように澪に同調した。梓が澪を慕っているのは分かるが、こっちは露骨とは。

さびしそうな顔をしている律に、俺ははまだとばかりに

「さびしいのか、律？」

「ま、まさか！ まあなんか納得できないけど」

「いや普段の態度なら当然の結果だろ。てことで、俺は自分の見てくるから」

「ちよつとまてー！」

またしても律の腕が伸びる。しかし、俺はその動きを予想していた。ひょいっと体を横に移動させる。空振りになった腕を、律は残念そうに戻した。

「荷物はもつたる。だけど一緒に入るのはやめてくれ」

正直な話、五人と一緒に本当に売り場に入ったら、いろいろな意味でハッスルしてしまいそうで、それが怖かった。俺も健全な18歳の男子だ。だが理性というものを尊重すべき状況だという判断能力くらいはある。

「じゃあどーするのさ」

まだあきらめていないのか、律は不満そうに唇をアヒルのようにとんがらせた。

「終わったらメールしてくれ。そしたらここ来るから」

「律、もういいだろ。時間もなくなってるし」

漣が助け舟を出してくれた。その言い方はまるで保護者だ。だが今は本当にありがたい。

「わかった。じゃあメールするよ」

「あーあ、たくちゃんこないのかー」

しぶしぶうなずく律と、残念がる唯。俺本当に男として見られてないんじゃないか？

「律、さっきのはやりすぎだろ」

カラフルな水着の中を歩きながら、漣が苦言を呈した。

「いやー、たくちゃんがあんなに初心だとは思わなかったから、ついで」

ぺろつと舌を出したが、反省しているようには見えない。漣の口から溜息が洩れた。そういう律だって同じだろう、と思ったが、頭のほかのところは、どんな水着だと巧斗が喜ぶのだろうかという疑問で一杯で、それどころではなかった。

「なにがそんなにいやだったのかな？」

まだムギは分からないらしい。お嬢様だからしかたがないのかもしれないが、漣はたまにみせるムギの価値観が理解し難い。

とはいうものの、みんな水着選びは真剣だった。

「澪、これどう？」

律が真赤なビキニを持ってきた。カップのところにはフリルがついている。

「それは・・・似合わない、と思うぞ？」

なるべく穏便に、しかしはつきりという。律は痩せてはいるが、体の起伏に乏しい。自分がいうと律は決まってへそを曲げるので、言葉を選ぶ必要があった。

「そっかー。やっぱ派手か」

わかってたんかい、という突っ込みを澪はぐっと抑えた。

「なあ澪、最近、たくちゃんとなんかあった？」

水着を選ぶふりをしながら、ほかのメンバーの耳に入らないような小さい声で律が言った。澪の水着を選ぶ手が止まった。

「え、そ、そんなの、あるわけないだろ」

不意打ちも不意打ちだったので、澪はおろおろしだしてしまふ。

これでは丸わかりだ。

にやつくかと思つた律は、しかしまじめな表情になった。

「なにがあった？もしかして、お見舞いの時？」

するどい。澪はなんとか心を落ち着けようとしたが、律の顔を見ると冗談の類の会話ではなさそうだった。

「・・・うん」

「なにかされたわけでは・・・ないようだな」

気がつくと、澪は思いつきり首を横に振っていた。

「唯が降りてきたときなんか言つてたけど、それか？」

あの時のことを思い起こすのだけでも恥しかったが、この際、吐き出した方が、楽になるのかもしれない。澪はなにがあったのか一部始終を語った。

「へー。たくちゃんと・・・」

律は話があまりにベタだったものだからあきれているような声を出した。

「それであんなに、たくちゃんを前にすると赤くなつてたのか・・・

「うん。なんでなのか、よくわからないけど」

実際、今日巧斗が唯に指導をする際にも、その近さに胸がもやもやして仕方がなかった。巧斗を見ていると、胸の奥がきゅっと締め付けられるような、もどかしい思いに駆られる。なのに、会話をするるのが、楽しくて仕方がない。

「溼って・・・わかってないのか、本当に・・・」

独り言のように呟いた律は、何か深刻な悩みを抱えた大統領のように顔をしかめた。

「え、どういうこと、それ？」

「ううん、なんでもない。だったら、気合入れて水着選ばなきゃな、溼！」

いましがた見せた雰囲気は完全に消え去り、いつもの調子のいい律に戻っていた。

「な、なんでそうなるんだよ！」

「だって、変な水着でがっかりされるの、やだろ？」

「それはそうだけど・・・」

溼は、律が誰なのか具体的に話していないのに、会話が成立していることに気づけなかった。

巧斗と、泊まりがけの合宿。

そう思うだけで、はちきれそうなほどにうれしさがこみあげてくる。溼の中でいつの間にか、顧問というよりも、一人の男性として巧斗を意識している気持ちが湧き上がっていた。

一足づつ、そばに行けたら（後書き）

お読みいただきありがとうございます！

もっと書きたいことがあったんですけど、きりがないのでこのあたりでいったん締めました。

でも女子の水着選びに男子が着いて行くことなんてあるんだろうか。

さて、大分話が長くなっておりますが次回から合宿編に入れる・・・はずです。

次回もお読みくだされんば幸いです

期待が、止まらない

シャープペンシルが、テスト用紙の上を走る。下の黒板に書かれているお題は「日本の政治に必要なものは何か」正直一大学生が提言したところで国政にピクリとも響かない内容のテストだ。だがこれをクリアしないと単位が貰えないのだから仕方がない。

B5というかなり大きいテスト用紙に、前日脳内に詰め込んだ文章を書き連ねていく。今の日本政治に必要なものは、官僚制と政府主導のバランスであり、議員の派閥に頼らない包括的な国会の運営である。その理由として、グローバル化した環境の変化においては……。

「それでは、テストを終了します。解答用紙を後ろから前に流してください」

講師の抑揚のない合図とともに、大学内でも有数の講義室で声が弾けた。階段状にあつらえられた満員の学生はようやく訪れた夏休みの到来に胸を集らせていた。

それは俺とて例外ではなく、日に日にしつこさを増す太陽光も今や輝かしい夏を彩る装飾に思えてくるから不思議だ。

左右の席に座った友達とテストの感想を言い合う。個人としてはそれほど悪い出来ではない感触だったが、いくつか抜けていた内容があった。まあ、落ちることはないだろう。

講師が講義室を出て行ったので、鞆を取る。今日はバイトも桜ヶ丘に行くこともないので、思う存分解放された気分を味わうつもりだった。こんなことをさわ姉に聞かれたら怒られるだろう。まだ研修中だし。

ポロシャツから出ている腕がじりじりと焼かれる感触と校舎から出たとたん噴き出す汗にやっぱり嫌悪感を感じつつも、学食でアイヌでも食べようと友達に提案した。大学の友達は特別音楽にくわしいわけではなかったが、ノリが合うのでそれなりに親しくしていた。

ムーンチャイルドに誘った友人でもある。あれから、バンドや（やはり）漣たちのことを突っ込まれる機会が増えたが、ライブの評価は上々だった。どうやら、ライブでの俺は普段からよっぽどかけ離れているらしい。冗談だが二重人格、とさえ言われた。

そのアートワークスも、夏休み中にはライブに出演する。ムーンチャイルドよりも敷居の高いライブハウスで、トリではないが三つのインディーズバンドと一緒にいる。室井がダメもとで送ったデモが気に入ってくれたようだった。

それよりも、好きなチョコチップアイスを頬張りながら俺が目下心を奪われているのが、二日後に迫った、合宿だ。もちろん、アートワークスの強化合宿、ではない。なし崩しに参加が決定した、漣たち桜ヶ丘軽音部の合宿である。いろいろと心配することはあるのだが、やはり泊まりがけというのは心が躍る。

しかし、内容が内容だけに、あまりおっぴらにできないのがもどかしい。バンドメンバーに対しても大学の友達に対しても、親に対してでさえすべてを話すことができなかった。遊びや練習の予定を組み立てる時、うまく誤魔化したはずなのだが、事情を知る人からは軽音部絡みではないのかと妙に勘ぐられた。

そんな俺の葛藤と反して、友達とグテっつと椅子にもたれると一気に睡魔が俺を襲ってくる。テスト期間中は睡眠時間も削り、ギター練習もそこそこしかやれていない。帰ったら思う存分弾いてやる。どの曲をやるのか。ここはニルヴァーナか……。

その時、室井からの電話が来た。

「タク、ライブの出演依頼が急に入った」

室井にしては珍しくあわてている。何があつたのだろうか？俺は不安になりながらその先を求めた。

「納涼祭があるだろ、8月の半ばに。それに急ぎよ出てくれないかって、ムーンチャイルドのオーナー経由で依頼があつた」

「……マジでか？」

急な話だった。納涼祭とは、平たく言ってしまうえば、うちの町の

夏祭りだ。それなりに規模も大きく、花火も上がる。でもそれにバンドが出るなんて話は聞いたことがない。俺の頭から少しだけ合宿のことが飛んだ。

「うん。なんでも、今年から若い年代にも祭りに参加してもらいたいって、市長が急に提案したらしくてさ……。それで、近場のライブハウスに推薦してもらったら……」

「俺らを通った、てこと？」

「アートワークスだけじゃくて、いつもの対バン形式らしいんだけど……。どうする？」

個人的には、その日特に予定もなかったから別にいいのだが……。それにしても、本当に急だな。

「でもこの時期に来るのはおかしくないか？オーナーから推薦の話があってもよさそうなのに」

「それが、そのオーナーが連絡を忘れてたらしい」

「なんだよ、それ。これからムーンチャイルドでライブして欲しいって言われても考えるぞ。」

電話が終わるころには、食べかけのチョコチップアイスは完全に溶けてしまっていた。

夏祭りライブの連絡については、みんなの意見がまとまり次第ということになった。ゆっくりテスト後の余韻に浸りたいと思ってもできなかった。大学の友達は間近で聞いていたから、もし出るなら見に行く、といってくれたけど……。もし出るとするなら、あと20日もない。かなりの頻度でスタジオに入らなければ、完成度の低いままライブをすることになってしまう。それは避けたい事態だった。

このままだと、純粹に合宿楽しめないな。蒸し暑い空気をかき分けるように家に向かう道すがら、俺はため息をついた。せわしなく鳴り続けるセミの音が、妙に耳に残った。

それにだ。合宿は完全に俺とみんな、というわけにはいかなかった。

「合宿？」

そう、俺の六つ上の姉に報告した時から、なんとなくそんな予感
はしていた。

「うん。去年みたいに、ムギの別荘でやるって・・・」

「へー。別荘ねえ・・・」

電話の向こう側にいるさわ姉が、露骨に嫉妬の表情でいるのが分
かった。いまだに愚痴の電話は月に二回、多い時は週に一回のペー
スだった。その流れで、俺は合宿の件を話すことに決めていた。

「それで、俺も行くことになって・・・」

「は？タク、あんたが？一緒に合宿？」

さわ姉の声が一気に荒くなり、声のトーンも上がった。本人たち
はどう思っているかわからないが、正式な軽音部の顧問は俺の姉な
のだ。だからこういう反応をするのは予想していたし、電話をする
のも筋を通すべきだと思ったからだ。

「うん。去年のように、ムギの別荘で・・・」

電話から、さわ姉のため息が聞こえた。

「顧問を頼んだ時から、なんとなく予感はしてたけど・・・。どん
な流れで決まったの？もしかして自分から行きたいって言い出した
んじゃないでしょうね？」

「まさか！むしろ、みんなの方が参加するの、確定してたみたいで
俺はみんなに行かないと断言できる状況ではなかったと伝えた。

あれだけ信頼されている様を語られ、同行を求められれば、どんな
強情っぱりでも認めざるを得ないだろう。

「ふーん。経緯はわかった。でもタク、ずいぶん仲良くなったのね」

「だからだよ。こんなことになっても、危機感というか客観性がな
いみたいで・・・」

「まああの子たちらしいわね。でもほんとに全員言ってきたの？漣
ちゃんとか、反対した人はいない？」

俺はあの時の様子を思い浮かべる。たしかに、誰も俺が合宿に参加することに反対していない。

「うん。確かに、遷とか反対してもよさそうだったんだけどな」

そこに、俺は違和感を覚えていた。合宿に参加するのが当然だと思ってくれているのは素直にうれしいが、人間すべてが倫理に寛容というわけではない。調子のいい唯や律だったら納得できるものだが、遷や梓までもが、というのは、らしくない。

「へーえ。だれもない、ね」

その声にはからかいの微粒子が含まれていた。だから、思わせぶりなさわ姉の感想も引つかかった。この会話のどこに、そんな楽しめる要素があった？

「とにかく、日程と場所教えて。私も行くわ」

そんな俺の疑問とは裏腹に、さわ姉はこちらの予想外の発言をした。

「へ？来るの？」

俺の声は意外そのもので、どこか残念な気持ちが出てしまっていた。あれだけ悩んだのにいざ決まってみると単純なもので、男として喜んでいいる自分。

「なあに、私が行かないでも思った？弟が教え子と泊まりがけに出かけるって言って放りっぱなしにできないでしょ？そもその顧問は私なのよ」

あまりに正論過ぎて、俺は相槌を打つことすらできなかった。言いは大いに勘違いされやすいが、高校生だし、仕方がないか。しかし俺の中で一つ疑問が生まれた。

「でも研修はどうするの？あるんじゃないの？」

日程と大体の位置を教えた後で、その質問をぶつける。俺がこないらぬ心配をすることになった遠因はこのさわ姉の研修にある。

「あれ言っただけじゃなかった？10日間お休み貰えるって。それで行くから心配しないで」

ここまでできて、俺はさわ姉に裏があるのではないかと疑った。確

かにさつき言った理由は顧問、いや教師として立派なものだ。だが、それだけで動く人間なのだろうか？さわ姉は、それだけで動くようには思えなかった。ただし、今聞いてしまつと怒鳴られるのは確定なので、俺はそれをぐつと飲み込んだ。

ということ、合宿にはさわ姉も参加することになった。ただ軽音部の五人にはさわ姉の意向もあつて伝えていない。なんでもビツクリさせたいから、らしい。さわ姉が来るとなにか騒動が起きそうで、俺はテスト勉強中もその不安がちらついていた。

どうか、なにも起きませんように。一向に鳴りやまないミンミンゼミの声が、やたらと騒がしい。

漣は念入りに、準備をしていた。カーペットの上には大きめの旅行靴と着替えや小物類。もっともムギの別荘で練習したり、近くにあるという海で遊ぶだけだから、そんなに大げさな荷物はない。

「えーと、これにパジャマをまとめて・・・」

きれいにたたまれたジャージ類をビニール袋に詰めていく。と、その手があるもので止まった。

この水着、どうなのかな・・・？

先日みんなと買い出しに行った時に購入した、新しい水着。律と相談しながら買ったものだ。

さすがに着ることはできなかったから、ハンガーに掛つたまま自分の体に押し当てる。しかし座つたままではよくわからない。漣は立ちあがって鏡の前で構える。

先生は、どんな水着がいいんだろう。この水着、ちょっと形が派手すぎるかな？けどこの型が一番体にフィットするし・・・。律はこれではうちりだ！と言ってくれたけど。

漣は鏡に写る自分を見つめながら、なぜ真つ先に巧斗のことが出てくるのか、と何度繰り返し返したかわからない疑問を考えていた。見舞いの時のことを律に話してから、パニックにならない程度にはそ

のこを受け入れていた。もつとも、顔どころか体全体が赤くなるのは一緒だったが。

巧斗は男子だから、気にして当然だ、という考えがよぎる。確かに自分が男子と海に行くなんて中学のころは予想だにできなかった。少なくともできなかった。

それが、巧斗が来てから、自分はどんどん考えられなかったことをしてしまふ。ライブであんなにはしゃぐことも、男子のことを考えて頭がパニックになることも、合宿がこんなに楽しみなのも、そうだ。

その中心にいるには、やっぱり……。

漣は水着をカーペットの上に投げ出し、ベッドに倒れこんだ。先生は、合宿のことをどう思ってるんだろう。軽音部のことは、どう思ってるんだろう。私のことは……。最後の疑問でついに漣はぶんぶん頭を横に振った。な、なにを考えてるの、私って。巧斗は先生で、自分は生徒なわけで……。

なんだかよくわからなくなり、がばつと起き上がる。自分でもどう巧斗のことをとらえているのかはつきりしない。顧問として見ているのか、それとも単純に男子として見ているのか。どっちもあるのだろうけど、問題はどっちの割合が大きいからだ。

しかしこの問題も答えがでない。数学の問題ならすらすら解けるのに、巧斗絡みのことはほとんど解けない。なにが正解なのか、わからない。

だから漣は、いつもこの問題を先送りにしてしまふ。

「はやく準備して、ベース練習しよう……。」

その時だった。ケータイが着信を告げていた。ひよっとしたら……。

あわててケータイをとるが、声の主は昔からもつともよく知る声だった。

「おつす漣、今何やってる？」

「合宿の準備」

「あれ漣、なんでそんなにがっかりした声出してんの？」

漣はまさかに期待してしまった自分が情けなくなつた。もつとも、律は原因をわかつていないようだったが。かといって、これ以上勘ぐられるのもいやだ。

「うっん、なんでも。それより、どうしたんだ？」

「ふふふ、漣、あたし、とんでもない情報入手したぞ！」

「なに？もつたいぶらないで言いなさい」

溜めた口調が漣の癪に障り、急いでその情報とやらを聞き出そうとした。

「納涼祭あるだろ、あそこで、地元バンドのちよつとしたフェスをやるらしい」

「うそ？」

「ほんと。だから、その日みんな誘って見に行こうぜ！たくちゃんも一緒に」

夏祭り。その中でライブをするというのは意外な話だった。地元自治体が主催するだけあってプロは望むべくもないが、どんなバンドが出るのかはチェックしてもよさそうだった。それに、みんなと行けるというのもいい。漣は巧斗の名前がごく自然に出てくる今の状況に感謝していた。軽音のみんなといれば、確実に会えるから。「先生誘つたのか？」

「うっん、でも合宿の時に言うつもり。夏休みの予定聞いた時だとなにもないみたいだったし、大丈夫でしょ」

「そっか。でも律、唯と一緒に、先生にねだるつもりじゃないでしょうね？」

「え、ま、まさか、そんなの考えてないよ！」

この動揺ぶりは凶星だな。漣は律の考えの浅さにため息が出た。まったく、律も唯も、巧斗のことを軽く見すぎじゃないのか。それなりに顧問として立てている時もあるが、基本律は巧斗をいじる。合宿でも何かするんじゃないだろうか。

ただ、海と夏祭りという二大イベントにみんなと一緒にとは言え巧

斗と参加する、という時点で澁の期待値は限界を知らなかった。

「タク、シンからの話マジか？」

帰宅してすぐに掛つてきた柏木からの電話。正直な話俺は軽いいらだちを覚えていた。まっすぐギターの元へ向かい、ストラップをかけた瞬間になった電話。お預けを食らった犬のように、俺は体を震わせた。ただ内容が重大だっただけに、怒鳴ることはできなかった。

「そうみたいだな。オーナーの連絡ミスにはまいったな」

「ああ。もちつと前に連絡してくれれば……。それでお前、出た
いのか？」

「そりゃ、声が掛つたんだから出たいに決まってるだろ」

「そつか……」

柏木にしては珍しく、このライブに乗り気ではない。夏祭りにライブなんてなかなかできるものじゃないし、柏木なら女の子の視線を独り占めだ！ぐらいのことは言ってもよさそうなのに。

「柏木、予定でもはいつてるの？」

「いや、日程としては出られるんだが……」

だったらなんの問題があるのだろう。これは渋っているというよりも戸惑いの方が大きかった。

「よくわかんないけど……」

「ライブの時間はシンからの話で間違いないのか？」

「それを俺に聞くなよ。だけど、ライブの前後は文化祭みたく自由じゃないか？」

俺の言葉は突き放しているようだったが、電話の声だけでも柏木がこのライブに引っかけかりを覚えているのが分かった。ふとある考えが浮かんだが、それはこいつらしくないとすぐに打ち消した。

「じゃあいいんだけど……。よし、でるか、ライブ」

何かを決意した柏木は俺に宣言した。なにがあつたのか追求する

ほど今の俺は余裕がなかった。早くギターを弾きたい思いでいっぱいだった。

「そうだな。青島も乗り気だったから出演は決定か。じゃあ明日練習だな」

「お前なんで旅行行くんだよ。ひよつとしてあの軽音部と行くんだろ」

妙な確信を持って言い切る柏木が、だんだん粘着質をもった、いつもの話し方に戻ってた。こうなってくると、俺に残された選択肢は少ない。

「この話はまた今度な。お見上げ買って来るから」

「ちよつとタク、話は終わって・・・」

強制的に電話を切った。ほっと一息つける。柏木があんなに自信ありげに軽音部の旅行だといったことに引っかけかかりを感じたが、俺はすぐに頭の中をギターに切り替えた。

一回、ダウンストローク。俺の中で、テストや合宿にさわ姉が参加することや合宿の不安がこの時だけ溶けるように無くなっていった。オルタネイトストロークで、アドリブのフレーズを弾いていく。

あと二日後の今、俺はみんなと何をしているのだろう。

期待が、止まらない（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

やっぱり、前回と切ってよかったと思います。おもに量的な意味ですが。

今回はきっかりしたストーリーはないのですけれども、アニメでいうならアバンタイトルぐらいの位置づけなのでお気軽にお楽しみください

さて、次回からいよいよ合宿に入ります。ただ、何回で終わるのか、まだ決めてません。三回以内に収めよう・・・とは思っているのですが。

次回もお読みくだされば幸いです

刹那・サマー・バケーション

目覚まし時計の針は、夜中の三時を指していた。カーテンの隙間から見える外の暗さは、漆黒の闇そのものだ。怖がりの漣はあまり外を見ないように、ベッドの中で丸くなる。集合時間に間に合うためには、六時起床が限界なのに。これではちっとも寝れないじゃないか。

『漣なら、できると思うな』

枕を抱きしめながら、頭の中を巧斗の言葉がオーバーフローしていく。

もちろん、みんなと合宿するのも楽しみだ。去年もあまり練習そのものではできなかったが、みんなと笑い、騒いだ。その時のことはいまもはつきりと覚えている。

でも、あの時だったんだ。さわ子が軽音部のOGだという伏線はカセットで聞いたあの演奏は、ジャンルこそ漣の好むものではなかった。だが、それがあって初めて合宿で自分のバンドはまともな演奏をした。それが、一年たって、自分は生まれて初めての感情をくれた巧斗と一緒に合宿に行く。後輩となった梓とともに。

私、先生のことどう思ってるんだろう。この合宿で、それがわかるきっかけがあるんだろうか。

暗闇にほんのわずかだけ、白が混じり始めた。

俺は今日目覚ましよりも早く目が覚め、いつもより完璧に準備を終えて集合場所に向かっていた。

休日の睡眠時間が8時間以上をこえて、しかも宵っ張りの俺からしたら奇跡に近いことだ。さわ姉が見たら浮かれています、と指摘したことだろう。その通りだから仕方ないのだけれど。

「にしても集合時間早すぎだろ・・・」

腕時計はまだ七時を回ったばかり。集合場所までは歩いて行くしかない。俺は重い荷物に後悔しながら、出勤するサラリーマンに混じって駅に向かう。さっきからじろじろとすれ違う度に見られている気がするが、練習に向かう時はいつもこうなのでいたって冷静だ。むしろ、俺の頭はこれからのことではいっぴいだった。

顧問という形とはいえ、男子は俺だけ。成り行きとは言え、これはどんなラブコメの展開だというのだろうか？普通に人生を歩んでいたらまず起こり得ないイベントだけに、期待が止まらない。

まあ、音楽的な期待以外もあるのだけど。

水着を新しく買ったってことは、当然、それを使用するということだ。いや、いくら顔が女子っぽいといわれても中身は健全な男子。女子高校生と一緒に海に行くってなったら、そりゃねえ……。いろいろとヘンな想像もするわけで。

まあ普通の男子として、俺は見られてないからこんなことが起こったのだろうけど。

俺は心が深く深く落ち込むのを感じ、ため息が出た。しかしすぐ俺はこの感情に違和感を覚えた。友達感覚とはいえ、俺は顧問としての一線を越えないと決めていた。だから、男子扱いされていなくてもそれほど落ち込まなくてもいいはずだ。でもこれでは、男子として扱うことを望んでいることになる。

なんでなんだろう。

桜ヶ丘高校の最寄り駅は大きな駅ではないので、俺たちはそれからひと駅分先にある地元の主要駅で落ち合うことになっていた。出勤ラッシュの時間を迎えつつあるからなのか、駅前のロータリーは送りの車と人で混雑していた。

「駅前のコンビニ……ここか」

普段俺は、大学に行く際にこの駅を使わない。これとは違う鉄道で通学しているため、このあたりのことはよくわからない。こじや

れた駅の外観にそぐわない青いカラーのコンビ二の前で集合、と律からメールが前もって入っていた。

「お、たくちゃん!」

「せ、先生!」

すでに到着していたのは漣と律だった。律がいたのは意外だったが、この二人は家が近いらしいから、漣が引つ張って来たのだろう。もつとも、二人とも寝不足なようで漣はやや目が腫れぼったいし、律は豪快にあくびをかみ殺している。

「おはよ。二人とも早いな」

「うーん。あたしはもつと寝てたかつたんだけど、漣が」

どうやら俺の予想通りだったらしい。俺が視線を漣に移すと、本人は耳を染めてこっちを見てくれない。乗り気なのが恥ずかしいのかも知れない。まあ漣だし、仕方ないか。

「たくちゃん、その楽器どうしたんだ?ギターが2本も・・・」

俺はキャリアケースにエフェクトケース、いつものムスタングにアコースティックギターといういでたちだった。確かに楽器といってもスティックだけの律や、ベースだけの漣と比べれば明らかに荷物が多い。

「せつかくの合宿だし、普段やらないことしようと思って。俺もずっと練習してるわけにいかないし」

「それもそっか」

律がまたしてもあくびを噛み殺しながら納得した。

「先生、アコギ持ってたんですか?お見舞いの時見かけませんでしたけど・・・」

「あ、これ?さわ姉の借りてきたんだ。なんか大学中を買ったらしくて・・・」

朝食をとっていなかったもので、それから二人に荷物をまかせ、コンビニでパンを買って戻ると、梓が、それから数分してムギがやってきた。

もきゅもきゅとソーセージマヨネーズパンを食べながら、ウキウ

キしているみんなと雑談しながら残りのギタリスト、唯を待った。あれだけ水着を買うのに反抗していた梓でさえ、その眼に輝きが光っている。ふだん別荘なんて代物に触れる機会なんてないしな。

しかし……。こない。唯がこない。集合時間は電車の時間よりかなり前に設定されていたから、まだ大丈夫なのだが。あつという間に食べてしまったパンの袋を、コンビニ備えつけのごみ箱に放り投げる。すでに集合時間を15分はオーバーしていた。

「唯先輩、遅いですね。憂がいるのに、何してるんでしょうか」

梓がだれともなく言ったが、俺は単に寝坊しているだけだと思っただ。相変わらず、梓は唯たちに厳しいことをいうしゆったりした空気に戸惑っているが、それも合宿で解決できるだろうか。

と、ポストンバックとギターを背負った唯が人にぶつかっては謝り、を繰り返しながらやってきた。

「唯、おそい！」

部長らしく律が注意するが、唯はてへへと頭をかきながら

「水着のチェックを憂としてたら、遅くなっちゃった」

ガクツ、と俺と溲、律、梓が新喜劇よろしくずっこけた。朝っぱらから何やってるんだ、この天然少女は。風邪引いても知らないぞ。「ようやくそろったし、行くか」

ため息をつきながら、俺は引率の先生よろしく号令をかけた。ほんとにこれで大丈夫なのか？何度したかわからない自問自答をしながら、くそ重い荷物を手に取った。

電車に揺られること2時間、俺たちは蒼の絵の具を薄めずに塗りとくったような海が見える駅に降り立った。ホームまでくる潮風の香りが、空と海の境まで見える景色を彩る。このため、唯と律のテンションは上がりっぱなしだった。かくいう俺も海なんて久しぶりで、沸き立つ感情を抑えられなかった。

「ムギ、ここから別荘って近いのか？」

改札を出た時に、漣が海に目を奪われながら言った。俺はなれない電車と睡眠不足でがちになつた体をほぐそうと肩を回す。

しかし漣の、見ないようにしてたけどＴシャツに短パンのデニムという服装は、その、目のやり場に困る。制服よりも薄い生地だからその胸がより強調されているし、すらりとした、瑞々しく長い脚もかなり暴力的に写るのだ。ほかのメンバーはそんなことはあまりないのに、漣だけは別だった。この五人、皆ルックスに関しては誰もかれもレベルが高いのだが、ボディラインで言えば漣が最も恵まれているのは認めざるを得なかった。くそ、別荘につく前から、こんな試練があるうとは！なんとか見ないようにと、小学生のように騒ぎまくっている唯たちを注意するしかなかった。

「ええ。こっち！」

そんな俺の煩悶する脳内と反して、ムギは足取り軽く別荘に向かった。

「こ、これが別荘か・・・」

「一段とすごいな・・・」

目の前にあるのは、リゾートホテルばりの色彩とたたずまいを持った別荘だった。純白の壁は桜ヶ丘高校にある講堂の比ではなく、かなり広いバルコニーにはテーブルとパラソル。想像以上の別荘だった。

「こ、これが、去年借りられなかった別荘だね？」

ピンクのワンピース姿の唯が、あわてて会話を再開させる。

「ごめんなさい、一番広い別荘、今年も借りられなくて・・・」

狭いかもしれないけど、我慢してね、と続けたムギに、俺以下5人はあいた口がふさがらなかつた。これよりもまだ上があるのか・・・。

寿家のすさまじい財力に圧倒されながら、俺たちは荷物を落ちつけることにした。

俺にあてがわれたゲスト用の個室に入って、まずしたのはベッドに倒れこむことだった。ふかふかした敷布団は、俺が使う安ものとははるかに違う。やさしく、まるで赤ん坊を抱く母親のような柔らかさだ。調度品もシックで海のさわやかさを表現してあるものばかり。ほんとにムギの家はなにをしているのか。絵に描いたようなセレブだ。

5人はまとまって広い部屋で寝るといふ。まあこの一人部屋は当然だし、さすがにみんなと寝れないのはわかっていた。でもさびしい気持ちになるのは否めなかった。いやらしい意味は、ほとんどない。ほんとだよ？

あ、荷物置いた後集まるんだっけか。勢いよくベッドから起き上がると、みんなが集まっているであろう大広間に向かった。

しかし、大広間には誰もいなかった。みんなの声はしているが、その声は玄関の方向からしている。

「まずは練習が先！」

「えー！」

「遊びたい！」

・・・まあ、こうなるわな。

玄関ではすでに水着に着替えて練習のことは考えていなさそうな唯と律、練習が先だという漣と梓で向かい合っていた。予想されたとはいえ、出発前にしっかりと合宿であって旅行じゃないと言っておくべきだったか。

「じゃあ多数決だ。私は練習が先！」

漣の提案は当然のごとく水着組と私服組に分かれた。これで2対2。残すのはムギだが・・・あれ？みんなと一歩下がって見ているムギの服装は・・・。

「遊びたいです！」

小さく手を挙げていたがしっかりと水着を着用していたキーボード

担当のお嬢様がそこにいた。

「やっぱり、しょっぱなから遊びなのね」

みんなに聞こえるように声のボリュームを上げてつぶやく。律と唯が体を盛大に伸ばしてビックリした。

「せ、先生も言ってください！せっかく来たのに練習しないなんて・・・」

「そうです！何のために・・・」

俺を発見した漣と梓が、最後の希望だとばかりに視線をこちらに向けた。たしかに、ここにあるスタジオに興味はすごくある。ライブもあるし。でも目の前にあるのは。

「唯、律、遊んだ後ちゃんと練習するか？」

「うん！」

「当たり前だろ！」

いつもなら調子のいい返事だ、と返すところだが、今日の俺はやっぱり浮かれていた。

「じゃあ俺、水着取ってくるわ」

ええつ、と漣と梓の二人が裏切り二人目だ、と俺をにらみつける。だが俺の心はすでに水着組と同じだった。

「いやー、駅から見えた景色がすごかったから・・・。ダメ？」

俺の言葉に漣と梓の二人は、観念したようにため息をついた。

「おっしやー！」

律が雄たけびを挙げながら唯とともに、波打ち際に駆け寄った。いや、突進したというべきか。未使用のキャンバスのように白い砂浜を、サンダルは雪を踏みしめる時とよく似た音を出しながら、跡を残していく。

かくいう俺も、なんの障害もない大海原の解放感にすっかり感化されて、駆け足で漣たちを追い抜いた。

パーカーを脱ぎ捨て、走り幅跳びの要領で海に飛び込む。一気に体

が、涼しく滑らかな海水に包まれた。そして、ちよつと口に入ってしまった塩辛い味。まぎれもなく、ここは生命が誕生した母なる海だった。

「たくちゃん、競争だあつ！」

「ふふつ、年上に競泳を申し込むとはいい度胸だな！」

近くに寄ってきた律の安っぽい挑発に乗り、俺は猛然と透明な海水をかき始めた。しかし、ゴーグルを忘れてしまったために海の塩が眼球を痛めつけ、俺はもがいた。それを見た律は勝ち誇った顔になつて

「へーん、三下な台詞を吐くからさ！」

「ふざけんな！」

「二人とも、まってよー！」

うきわをつけたままの唯が、俺の後ろで小さくバタ足をしているのが見えた。

「漣先輩」

「どつした、梓？」

海に浸かりながら小学生のようにはしゃぎまくる三人を見て、梓は怪訝な声を出した。

「これで、ちゃんと練習できるんですか？先生もああなってるんじゃない……」

「うーん。少なくとも先生はちゃんとしてくれるはずだと思うけど……」

パラソルの下で、ほほえましく海を見つめるムギとは対照的に、まじめなところが似通った先輩と後輩の表情は浮かなかつた。

去年のことがあるし、こうは言っても漣は軽音部の空気に親しんでいるから、練習が後ということに多少の不安があつても不満はない。だがやはり、梓は違うらしい。巧斗が来てからはまじめに練習する回数が増えたとはいっても、軽音部の基本は変わらないからだ。

「私たちだけなら、ほんとに練習少ないかもしれないけど、先生がいてくれるから大丈夫。普段からそうだろ？」

漣の言葉に、梓は少しだけ納得した顔になった。

「そうですね。でも、漣先輩がそんなに先生を信頼してるなんて思いませんでした」

「えっ!？」

梓の思いがけない発言に、漣の体がのぞけた。自分の台詞、そんなにヘンだったのだろうか？

「はしゃいでる先生見てたら、ちよつと不安になったんです。それに先生のこと、よく見てるんですね」

漣は言葉が出なかつた。無意識のうちに、自分は巧斗のことを目で追っていたのだろうか。ただ、あれだけ音楽に一直線で、まじめな巧斗が海で今日を終わらすわけがない、と思っていたのは事実だった。だけどそれは、漣にとって当たり前の認識で。

そう思っているところに、打ち捨てたパーカーを捨てた巧斗と律唯が笑いながら戻ってきた。素直に、自分も海に入ればよかったな、と漣は思った。巧斗は筋骨隆々ではなく、どちらかといえばやせ形なのだが、割れた腹筋やがっしりした肩を見ると、どんなに顔がさわ子に似ていても男子なんだと実感する。普段は隠れて見えない部分があらわになっっているので、漣は急に恥ずかしくなり、バスタオルを肩にかけた。にもかかわらず視線は巧斗から離れなかつた。

「漣、どうした？俺の体になんかついてる？」

「い、いえ、なんでもありません!」

案の定不審がった巧斗にあわてて否定するが、胸の鼓動がさつきからはつきりと動きすぎだった。

「そっか・・・」

梓はそんな漣と巧斗を交互に見比べていたが、今度はビーチボールをもった律の挑発に乗ってしまい、砂浜にかけ出してしまった。

巧斗はその流れに苦笑しながら、梓がいたところ、すなわち漣の隣に座った。

「先生、ビーチバレーしないんですか？」

どこかの盆踊りのような手の動きをしながらムギが不思議そうに質問した。海水をふきながら巧斗は

「いや、もうきつくて。このまま遊び続けると練習見ずに寝ちゃいそうだから」

やっぱり、巧斗は練習のことを忘れていなかった。漣はなぜか、誇らしい気持ちになったが、それが巧斗に対してなのか、彼を信じ続けた自分に対してなのかよくわからなかった。

太陽が水平線に触れ始め、円なる形を維持できなくなり始めるころまで俺たちは遊んだ。背中をつけあって砂浜に座りこむ律と唯の表情は、欲しいものを買ってもらえた子供のような笑顔だった。しかし、このままで終わってしまったのは、わざわざムギの別荘にまで来た意味がない。

「うし、じゃあ練習だ」

さっそく宣言するが、やはり律が文句をいいだした。

「えー。つかれたしご飯にしようよー！」

「練習するって、遊ぶ前に約束しただろ？」

「そうですよ！」

俺の言葉に強く同意してくれる梓しかし、その体は遊び始めた時と大きく違っていた。

「でも梓も遊びまくったじゃん。真っ黒になつて・・・」

ピンクのワンピースタイプの水着以外は、見事にこんがりと焼けていた。ほかのメンバーは日焼け止めが効いたのか、梓ほど黒くない。というか風呂とか大変そうだな。

「じゃあ戻るか」

漣の一言で律の主張はあつけなく却下され、別荘に向かう。俺は深呼吸した。一番後ろでみんなを見ながら、足を進める。

正直な話、予想通り漣の水着姿は俺の脳天を直撃した。シックな色

だが、ビキニの水着は溇の体を余すところなくアピールしていて、高校二年とは思えない色気を放っていた。　　ここが寿家のプライベートビーチでなかったら、海水浴客の視線を独占していたに違いない。ただでさえ溇は美人なのに……。いかにかん！俺はもう一度、深呼吸した。教え子に欲情してどうする、このバカ者！これから練習なのに、客観的な視線が出ないじゃないか。軽音のメンバーと楽しく会話している溇を見つめながら、俺は自分が許せなくなった。

軽くシャワーを浴びて汗を流すと、まだぶつぶつ言い続ける律と唯を引っ張るようにしてスタジオに連れてきた。重い扉をあけると、そこは俺が使ったことのあるどのスタジオよりも広いスタジオだった。アンプも部室や俺が持っているようなグレードの低いものではなく、かなり値段の張るものばかりだった。ライブハウスでしかお目に掛ったことがないようなものもある。

「こ、これはすごい……」

「こんなアンプ使ったことがないですよ！」

部員の中でもっとも機材に関心がある梓がさっそく食いついた。溇もベースアンプに見入っている。なんとというか、やはり寿家は規格外なんだな、何においても。アンプに埃が積もっていないところと、マーシャルのつまみの輝きから、俺はつい最近まで店に会ったものではなかるうかと推測した。

「溇、たくちゃん、すごいぜ！スネアが新品だ！」

そして、一番ぐだぐだしていた律でさえ、その機材の良さに目が煌めいている。ほんと現金な奴だな。

「よし、練習するぞ！これ終わったら飯だからな！」

なれない掛け声を見ると、みんなおー！と拳を揚げた。

まずはじめにふわふわ時間を通すように指示すると、これまでの練習よりも音がそろっていた。なんとというか、いい意味ゆった

りしていて、聞きやすい。演奏している本人たちも手ごたえがあったのだろう。会話が弾ける。一人を除いて。

「今のすっごくよかったね！」

「いい感じに会ってましたね！」

「そうだな、ちょっとびつくりした」

「私たち、やるときはやるんだよ！」

どーだと言わんばかりにVサインをして見せる唯。これが普段からだったら、どんなにいいだろうか。

「律もしっかりテンポキープ出来てましたよね、先生」

「うーん、そうなんだけど・・・本人にその自覚、ないみたいだぞ？」

律は魂が抜かれてしまったように、タムに突っ伏していた。どうやら、疲れ果てて体に余計な力が入らなかったのが、ドラミングに良い影響を与えてくれたようだ。もつとも、本人は自分の演奏など気にしていない様子だが。澁はそんなドラマに呆れて、乾いた声を出した。

「おなかすいて力がでないよう。たくちゃん、ご飯にしょー」

「まだ一回通したただけだろ。もうちょっと待て」

実を言えば、俺だって腹が減っているし、猛烈に眠い。でも、ほんとにこれっきりで練習が終わっていいはずがない。こんな機材と部屋で練習できるなんて、プロですらうらやましがらうだろう。

「えー！」

「律、我慢しなさい」

結局、律のやる気が一向に上がる気配を見せなかった。今できる曲を一回ずつ通したただけで練習は終わってしまった。明日は午前中から練習を組み込まないとだめだな。

そして、その律の強い要望により（というよりわがままに近い言い方だったが）夕飯はバーベキューになった。冷蔵庫に食材は当然のようにおいてなかった。近くのスーパーまで買い出しに行った。同行したのはムギ、唯、梓。澁は動けない律のお守と機材の準

備だ。そこに一抹の寂しさが浮かんだが、都合良く俺はそれを無視した。

「ほらりっちゃん、お肉だよー！お野菜だよー！」

買い出しから戻ると、律の顔、いや身体が反応して、唯が持つビール袋からキャベツを取り出した。まるでトロフィーのように、頭上高くキャベツを掲げる律。

「そんなに腹へってたんか・・・」

キャベツでそんなにテンションが上がる人間を、俺は一人しか知らない。漣は律をとりなして、俺たちはさっそくバーベキューの準備に取り掛かった。

食材の下準備は女子に任せ、俺は漣たちが別荘の倉庫から引っ張り出してくれたバーベキューコンロと格闘した。燃料材と新聞紙、それから木炭をうまく組み合わせる程よい火加減に・・・。

「けむっ、ごほっ！」

しかし、アウトドアなど数年ぶりという俺の手腕では、炎は言うことを聞いてくるそぶりすら見せてくれなかった。無駄に新聞紙が燃えるだけで木炭になかなか火がつかない。それでもなんとか、バーベキューができるまでにはこぎつけた。それから、食材準備のフォロウに回って、夕食の準備を整えていく。みんな普段のぐだぐだぶりがうそのように張り切るものだから、あっという間に準備は終わってしまった。

ムギが人数分の紙コップにオレンジジュースを注ぎ、それぞれ手に取る。これで夕飯にありつける。肉の香ばしい香りと音が、さっきから俺めがけて飛んでくる。

「これで夕飯ですけど・・・タクちゃん、ここで一言！」

食べたがりだった律は、大げさなジェスチャーで俺に話を振った。え、このタイミングで？急な話で戸惑ってしまった。そういえば、初めて部室に来た時も、俺はこうしておどおどしてたっけ。みんなの視線が俺に集まっているのも同じだ。

「えーと、合宿とですから、みんな、張り切って練習に励もう！遊

びは、ほどほどに。乾杯！」

紙コップが輪になって、飲み口が重なる。俺たちはようやくありつけた食事に飛びつくように、食べた。

コンロで色よく焼きあがった肉と野菜を、さっそく口に運ぶ。バルコニーの解放感と、潮風独特のにおいが、一層味を盛り上げた。

「うめええ！」

おちゃらけながら、じゃれながら、バーベキューは進む。俺は焼く係を漣と交代しつつ、律や唯の話に乗っかったり、突っ込みを入れたりする。梓もよく笑っている。愛想笑いではないのがわかる。俺の唇がほころび、笑顔になる。

「先生、おにぎり、どうですか？」

今度はシーフードを焼くことになっていた俺の隣に、真っ白な大小のおにぎりを乗せたお盆を持った漣がやって来た。ちようどご飯が欲しかった俺は、迷うことなく大きいおにぎりを手に取った。

「やっぱりお米だよな」。これ、誰が作ったの？」

手に付いたコメ粒も逃すまいと食べながら漣に質問すると、彼女の顔がちよつとだけ暗くなった。

「私です。小さい方は梓で……」

なにがそんなに気にして……。俺は不意に、漣の手の平を、俺のそれと重ね合わせた。手はかるうじて俺の指がちよつと上にはみ出るくらいで、漣の手は意外にも大きかった。漣の顔が、赤くなっているのが分かる。普段の俺はこんなことしない。でも、合宿という環境が、俺をおかしくさせていた。

「漣の手、やさしい感じがするな。うん。ベースも弾きやすいだろ？」

俺の頭にも、お見舞いでの記憶が戻ってきた。あの時はやや気が動転していてわからなかったが、漣の手のひらは大きめだからこそその安心感があった。

「あ、ありがとございます……。私、自分の手、あんまり好きじゃなくて」

後になって考えてみたら、この一連の俺の言動、激しく気持ち悪い。一步間違えなくてもセクハラだ。漣はそこまで思ってくれなかったらしいがもじもじはしていたので、俺はおにぎりありがとう、といって魚介類が山盛りのトレイを取り上げた。

「漣の手、やさしい感じがするな」

いきなりの言葉に、漣の心は激しく揺れた。コンプレックスな自分の手を、初めて、人が褒めてくれた。言ったことが恥ずかしいのか、急に無言になってグリルと格闘する巧斗の後ろ姿を、じつと見つめる。体中に喜びがあふれ、細胞の隅々までいきわたるような感覚に襲われた。それに、これまで以上にはつきりと、巧斗の体温が伝わってきて、海の時以上にどきどきした。

そんなこと言われたら、私……。

漣は、ひよっとしたら自分のライブを褒められる以上にうれしくなっている自分に、いい加減答えをださなきゃなきゃ、だめだよね、と言い聞かせた。

「あー、食った……」

女子五人に男子一人という構成上、買い出しの料は多すぎたと思っただが、その心配は杞憂に終わった。ビニール袋いっぱいにあった食材は、明日の朝ごはんと飲み物を除いてきれいさっぱり六人の胃袋に収まってしまった。片付けも、女子が五人という事実から食べ終わったらすぐに終わった。そのときもみんなでワイワイしながらやったので、そこでも笑いが絶えなかった。

とつぷりと暮れた中、俺はバルコニーのチェアに腰をおろして、涼しくなった潮風にあたりながら目を閉じていた。ここまで満腹になるまで食ったのは久しぶりだった。

そこに、ムギの声がした。

「みんな、花火、やる！」

この提案に異論があるはずもなく、五分と経たないうちに、六人の顔は色鮮やかな光に照らされていた。

「ほれほれ」

律が花火を持って、梓やムギを追いかけまわす。それを見ていた俺は、ふと視線を空に向けた。家では決して見ることができない数の光が、そこに広がっていた。でも、俺が握っている光も、それに負けないくらいきれいに、俺の目に映った。

花火は、すぐに終わってしまう。それがどんなにきれいでも。どんなに大切に思えても。そんな花火を見ていると、俺の心はなぜか、たまらなく悲しくなっていく。花火に何を重ね合わせたのか、俺はわかっていない。でも、今はそれを認める時じゃない。

「先生、どうしたんですか？」

アトワークスの曲作りがうまくいかなかったときと同じように、顔にでていたのだろう。線香花火を渡してくれた澁が、俺を心配そうに見上げた。まるごと銀河が入っているのではないか、と誤認しそうなほど輝いている瞳が、そこにあった。素直なことを言ったら、きっとこの流れは止まってしまう。

「ああ、一日がおわったなあ、って。明日はもっと練習の時間を増やさないとな」

「ええー!?!」

大声を出す律の線香花火が、満足な活動をすることなく落下した。なんで今日の俺は、こんなに感傷的になっっているのだろう。年食ったからかな？などと、冗談を思ったところで空しいだけだった。

みんなで小さく輪になりながら線香花火で、今日のイベントは終わりだと思った。これで寝るだけだ。だが、イベント好きの律がいる限りその見込みは甘かったことに、俺は気付くべきだった。

「よし次は肝試しだ！」

「よくもまあ次から次へと・・・」

「そのやる気をバンドに回してくれれば・・・」

澗と梓の苦言が、律の逆鱗に触れたようだ。律の目が光ったのを、俺は見逃さなかった。

「あたしはやんないわよ」

澗はそう宣言したが、わかりやすい律の誘導にまんまとはまって、肝試しに参加することになった。

肝試しのペアは、言いだしっぺの律が考えることになった。だが、このドラマ はなにか思うところがあるらしく、いろいろ細工を施していった。それには、4人の協力が必要だった。

「高校生にもなって、肝試しはないですよね・・・」

懐中電灯もつけずに夜の森を歩く、俺と澗。澗は俺の半歩後ろを歩きながら、体が震えっぱなしだった。

「いや、俺現役のところもやったぞ？」

後ろに話しかけるが、返事はない。耳に届く澗の声は恐怖に支配されていた。

確かに、わずかに見える月明かりのほかは、明りとなるものはない。月の光も懐中電灯の代わりとなるほど強くはなく、つまるところ闇の中に俺たちはいた。

でも、さすがに澗の怖がりには気になった。もし何かあれば、気絶でもしてしまうんじゃないかなろうか。つか、澗って恥ずかしがり屋だけじゃなく怖がりだったとは。ちょっと意外な面を見られて、俺はうれしくなった。あ、澗をなんとかしなくちゃな。

ゆっくり進む中で俺が下した決断はかなり大胆だった。だけど、これが一番安心するような気がした。それに、怖がつてる女子を放っておくのはできない。息を整え、俺が言おうとした時だった。

「澗、ちょっといいか？」

立ち止まって澗の方に身体をむける。澗の顔はよく見えないが、

視線が重なっているのはわかった。

唸り声が聞こえる。地獄から出てきた悪魔か鬼のごとき声だ。

俺と澪の周りの空気が一変して緊張感に包みこまれる。なにかあったらまずいと、俺は澪の前に立って、声の主を探す。

声は、俺の右斜め前の茂みからしていた。スーパーでは、変質者の張り紙はなかったから安心していたが、これはまずい。それに、この後には唯と梓のペアが歩いているのだ。

もし、襲いかかってきたら……。俺はポケットから懐中電灯を取り出し、声のする方向に向けた。

澪の声が、さっきとは違う恐怖で染まっていた。オカルトなものよりも、もっと本能的な恐怖だ。

俺が、何とかしないと。

声の主は大きく茂みを揺らして 通路にでた。澪の身体がすくむのが分かった。俺は明りを向け

「だあ~~~~~!」

不気味なシルエツトが現れ、澪の絶叫が響き渡った。それにしても、あれ?いまタクって聞こえたような気が。それにこの声、ずっと昔に聞いたことがあるような。それも、女っぽいし……。

目を凝らして、もう一度、声の主を確かめる。そこにいたのは。「さわ姉!？」

そう、すっかり合宿に来ることを忘れていた俺の姉が、見るも無残な姿で横たわって、俺を見上げていた。

刹那・サマー・バケーション（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

今回もだいぶ長くなってすいません！

合宿の話はアイディアが過剰気味で、これでもそぎ落としました。

ほんとしたら、この話で一日目は終わるはずだったんですけど・・・

でもいいですよ、こういつの。青春って感じしますねー

次回もお読みくだされば幸いです

揺れる、巡る、触れあう

さわ姉のハイビスカス柄のワンピースはところどころ破けているし、顔も汚れている。どこをどういったら、こうなるんだ。おまけにストローハットとレトロなデザインをした旅行鞆。この格好は合宿ではなくて、バカンスだ。顧問たる存在がこんなのでどうするんだよ。

三か月ぶりくらいの再会なのに、ちっとも感動的じゃないのはどうしてだ。

不満といら立ちは山ほど出てきたが、とりあえずさわ姉の状況を確認する。

「さわ姉、なんでここに？」

「真っ先にいうのがそれ？」

そりやそうだろう。確かに細かい位置は知らせていないが、駅からすぐだった。にもかかわらず、その姿は百の山と千の森を抜けた冒険者のようにぼろぼろだ。ここはムギの別荘よりも駅から遠い。

普通だったら、不意に到着したさわ姉に玄関で驚く軽音部と俺……だったのに。よりもよって肝試しの時とは。

まあ大きな怪我はしてなさそうだし、さわ姉は大丈夫だろう。問題はあれだけ怖がっていた、澪だ。絶叫は俺の耳を劈くかと思われたほど大きく、しかしそれから澪の声は一切しない。

「澪？」

名前を呼ぶ。だが澪はへたり込んでいて、一切反応がなかった。目の前で手をぶんぶん振って見せても、ゆすつても、ピクリとも動かない。

もしかして、これ気絶か？

「みおちゃん、たくちゃん、すごい声したけど……ってあれ、さわちゃん先生？」

後続の唯・梓ペアが懐中電灯を照らしながらやってきた。思いが

けないさわ姉との再会に喜んでる様子はあまりなかったが、さわ姉の方は唯たちになぜ自分がここに居るかを説明した。

「みんなを驚かせようと思つてこつそり来たんだけど、道がわからなくて……」

どうやら、駅についたのは、俺たちが夕飯を食べ終わったぐらいだったらしい。しかし、住所を聞こうも無人駅だし交番もなければ通行人もいない。聞くに聞けずに、直感に従つたらなぜか森に迷い込み……。それから先は想像に任せた方がよさそうだ。

「なにやつてんだよ。もう25になるの……」

俺の頭に小さい石ころが直撃した。この状況で、さわ姉は年齢にこだわるのか。驚かせようとした計画は成功したみたいだが、代償は大きすぎた。相変わらず、澪は動かない。

「み、澪先輩！」

不動の副部長に梓が駆け寄る。澪はマンガみたく泡こそ吐いていなかったが、気絶していることに間違いなさそうだった。

「唯、律たち呼んでくれ。この分じゃ肝試しは無理だ」

それからすぐに、驚かせ役だった律とムギが、俺たちが進む方向からやつてきた。律の手には古典的なこんにやく付きの釣り竿が握られていたが、その出番はもう来ないだろう。二人はまずさわ姉に驚き、次いで気絶中の澪に二度びっくりした。

「何してくれてんの、さわちゃん」

律はせっかくの肝試しがおしゃんになったからなのか、顧問との再会を喜んでる風もなかった。とにかく、澪をムギの別荘に運ばないといけない。

「じゃ、先戻つてて。俺は澪を運んでく」

「大丈夫なんですか？」

くどいようだが、男子は俺だけだ。こういう時に、女子任せはできない。気絶している子を、どうして放っておけるだろう、ここで動くことが、俺の信じる男だった。

「ありがとう、梓。でも、ほかの子に任せるわけにもいかないでしょ

「？」

漣の前にかがみこみ、まず両腕をしつかりと持つ。俺の身体を前に屈ませ、漣の身体が俺の背中に乗ったことを確認する。それから足をもつて、ゆっくりと立ち上がった。

「ここが、どこだかわからない。状況が、理解できない。」

「お、漣、目覚めたか。大丈夫？」

「どうして私は、先生におんぶしてもらっているのだろう。」

さつきまで自分は不気味な声の主がすぐそこまで来たことは覚えている。でも今すぐそこにあるのは、巧斗の背中と、吐息。ということ。漣は自分のしでかしたことの大きさから、羞恥心に押しつぶされそうになった。結果として、

「え、えつと、あの、もう大丈夫です！」

漣は降りようと身体をじたばたさせた。すると、巧斗がやや怒った声をだした。

「道が悪いから転んだらどうすんだよ。氣失つたんだから、別荘までおとなしくしてろ。」

言葉は幾分荒かったが、その奥にある巧斗の気持ちは読み取れたので、漣は黙るしかなかった。もつとも、さつきから心臓がばくばくで、肌越しに聞こえてしまうのではないかと気が気ではなかった。昼間やバーベキューの比ではない。しかし、不思議なことにほっとする自分もいた。うつすらと見える巧斗の顔が、すごく頼もしい。

「せ、先生、ありがとうございます。」

「いや、うちの姉がほんとごめん。来ること知ってたんだけど本人が黙ってるって言ってさ。前もって言うてればよかったな。」

「そんなことないです。だって……。」

「え？」

「な、なんでもないです！」

巧斗が立ち止まり、顔を向けた。瞳の奥まで見えそうな距離に、ま

た、澪の心臓は跳ね上がる。

つぶやいた気持ちと、その先を言うわけにはいかなかった。そして、こんなに感情があふれるということは、つまり自分が巧斗を顧問ではなく、一人の男子として見ているということだ。

しかし、その事実の一步先までは自覚がまだなかった。それでも、澪はようやく、軽音のみんなと自分との、巧斗に対する認識がどうして違うのかを理解した。

玄関に着いた時、澪はもっと遠回りの帰りを頼めばよかった、と後悔した。

ソファに座って、俺はため息をついた。さわ姉も含めた六人はお風呂だ。さつきから、澪を背負ったことを反芻して、気持ちが落ち着かなかった。女子がみんなお風呂という状況なら、アニメなら覗きイベントでも起きるところだろうが、この時の俺にそんな余裕はなかった。

背中にまだ、澪のふくよかで柔らかい感触が残っている。澪の手前、俺は自分を繕うしかなかった。なれない状況に、俺の心臓は鳴りっぱなしで、澪に聞こえやしないかと冷や冷やした。

こんな自分に腹が立ったし、許せない。いくら二歳離れているといっても、俺は顧問として道を外すわけにはいかなかった。さわ姉から五人を託された以上、澪だけに特別な感情を持ってしまうと練習に支障をきたす恐れがあった。だから、澪を背負ってどきどきするのはその場限りなら仕方ないのに、終わってからも彼女の吐息や、時折俺の顔にかかった髪の毛の感触まで思い出しているというのは、あってはならないことだった。

「どうしちゃったんだろうな、俺・・・」

出発前は、まさか澪でこんなことになるとは思わなかった。たしかにお見舞いするときからなんかおかしいと自覚はあるが、それが悩むことにつながるなんて・・・。

しばらくソファにもたれながら天井を見上げていると、不意に石鹸のいいにおいが鼻をくすぐった。どうやら、みんな帰ってきたらしい。ところが澁はどこかおびえた表情だし、さわ姉がいない。またなにかやらかしたのか。かといってその理由を聞くほど愚かではないので、ため息をつくだけで収めることにした。

「あー、いいお湯だった」

なぜかたんこぶをつけたまま出てきたさわ姉を、俺は睨みつけた。肝試しの一件をきちんと解決すべきだったからだ。

「いいお湯じゃねえよ。さわ姉、謝ることあるだろ」

「それはもうお風呂でしたわよ。それに三カ月ぶりの再会になるのに、ちよつと冷たいんじゃない？」

タオルを首にかけてさわ姉はぐいつと顔を近づけてきた。三か月とはいつても、愚痴を聞き続けてきたので、俺としてはそんなに離れていたようにも思えない。

「今更、おねーちゃん、とでも言うと思ったのかよ」

「小学校のころはいつもそうやって付いてきたたくせに」

「へー。たくちゃんちいさいころ、さわちゃんにべったりだったんだ」

温泉よろしくコーヒー牛乳を飲む唯が嘔き出しそうにながら言った。その声にはつとしてみんなを見ると、全員笑いをこらえている。くそ、さわ姉が来たとたん俺の形勢は悪くなっている気がする。ここは一旦離れるしかないな。

「俺風呂入るわ。なんか汗かいちゃって・・・」

しかし、この離脱はさわ姉の力強い腕によって阻止された。

「それはあと。それよりも、今夜は飲むから、付き合いなさい」

「えええっ!」

こうして俺はその夜中までずっと、さわ姉の酒盛りの相手をする羽目になった。俺、そんなに酒強くないんだけど・・・。

結局、さわ姉は酔いつぶれてみんなが起床する時間になっても盛大にいびきをかいていた。研修といっても志願したわけじゃないらしいから、それには同情する。さわ姉のことだからストレスがたまりやすいのもわかってる。それを考慮しても酒の量は多かった。この分じゃ指導は望むべくもないから、さわ姉がはつきりするまで俺が担当した方がいいだろう。

にしても、軽音部で化けの皮が剥がれてるって言うのはほんとだつたんだな。

朝食を終えると、さつそく練習に取り掛かることにした。律や唯はやっぱり遊びたがったが、今回は漑や梓に押し切られた形になった。やっぱりみんな、練習をするという認識はあるらしい。

「たくちゃん、どれやる？」

スタジオで準備を終えた律がスティックを持ちながら聞いてきた。昨日の練習がアレだったからなあ。どうしようか。

「もう一回、できる曲全部通すか。昨日と今日じゃ律の調子違うし」

「たくちゃん、言ったな！」

「そういうんだったらちゃんとキープするんだな」

見る限り、今日の律は空腹に耐えられない様子はみじんもない。いつもの律だ。

「漑、リズム隊は任せた」

「え、は、はい・・・」

顔を赤く染めながら漑は、つぶやくようにいった。昨日のことがあったから、気まずい感情があるのかもしれない。それは俺も同じだったが、少なくとも自分は練習を見るということを意識して感情を誤魔化すしかなかった。

「ほうほう、たくちゃん、昨日漑になんかやらかしたんじゃないの？」

「やってねえよ！なあ、漑？」

「は、はい。こら律、先生を困らすんじゃない！」

みんなを見やると興味がない振りをしているのがばればれだった。

でも本当に何もしていない。おぶつて帰った時、澪が何か言いかけたが、その先を今も言っただけのことからすると、重大な話ではなかったのだろう。

こんなんで練習ができるのか少し不安だったが、それでもしないわけにはいかない。俺は毅然とした態度を崩さないよう気をつけながら、みんなの準備が整っていることを確認した。

始まった演奏を注意して聴く。朝一番だからノリがみんなばらばらだ。身体が硬いままだし、唯も梓もストロークがぎこちない。手首がいつもよりも使えていないのだ。律もやっぱりサビで走り気味だ。澪の顔が、あせりで染まっていくのがわかる。それにあわせるようにムギのキーボードが重なる。

「どうでした？」

指示通り一回通した後、ムギが感想を求めたがどこか浮かない顔をしている。

「やっぱり、演奏が硬い。朝いちだからしゃあないのかもしれないけど」

梓が落ち込んだようにため息をつく。基本的に俺は、指導に遠慮をしない。なれあいでバンドは成長しない。才能のみでプロまで行ってしまうバンドもあるがそれはごく一部の話。揉まれてバンドは成長する、と俺は信じていた。アートワークスもそうだ。すさまじいポテンシャルを秘めているこの五人だけに、中途半端な気持ちで指導はできなかった。

「あと律、ちゃんとハイハットでテンポキープするように注意しろよ。最初のふでペンなんかかなり速かったぞ」

「はい。きびしい」

律も自覚があったのか素直にアドバイスを聞いた。

「澪、ホッチキスのアクセント、弱かったぞ。リズムが分かりにくかったかな」

「は、はい！」

そう、基本みんな音楽に対してやる気はある方なのだ。俺たち男

子や、本気でプロを目指している人間には劣るのかもしれないが、向上心の高さは単純に仲良しバンド以上だと思う。

「じゃあ、一曲ずつ練習しようか」

ときどき休憩しながら、午前中はスタジオにこもった。演奏は回を重ねることに良くなっていた。ただ俺は、溇の扱いをほかの4人と一緒にすべきだと逆に気にしすぎていた。つとめていつもの俺を演じていたはずだが、ばれていたかもしれない。

「あー疲れた・・・」

練習後、テーブルに突っ伏した律のお腹が鳴った。正午も半分を過ぎている。みんなで（もつとも唯は戦力にカウントされなかつたが）色とりどりのサンドイッチを作るようになった。俺はただ待っているのが忍びなく、友達に教えてもらったサンドを振る舞うことにした。

「先生、ジャガイモ・・・ですか？」

ふかしたジャガイモをマッシャーでつぶしていると、ムギが不思議そうに話しかけてきた。基本サンドイッチは、軽食に分類されるように手軽さが売りだ。たしかにみんなはハムや野菜、チーズを思い思いに挟んでいる。その中で俺は過程が複雑だった。

「うん。ポテトサラダのサンドイッチを作ろうと思って。これがうまいんだよ」

手早くつぶしたジャガイモに野菜やハムを混ぜ込み、マヨネーズと塩コショウで味を調える。レタスやスライスチーズと合わせて、ポテトサンドの出来上がりだ。テーブルに並んだ大皿数枚に、山盛りのサンドイッチ。みんな一斉に手が伸びた。

「たくちゃんのめずらしいけど、おいしい!!」

唯のまっさらな感想とみんなのおいしそうなお顔で、俺はうれしくなる。あれ、女子にサンドイッチとはいえ料理を作るのは初めて、だな。

一番端の溇が、サンドイッチに舌鼓を打つ。小さく笑いながら食べるその姿に、俺の心臓が小さく跳ねた。昨夜感じた、溇の感触を

俺は押さえつけねばならなかった。そうでもしないと、この場にいられないと思っただからだ。

「そつえば、さわちゃんは？」

お腹をたたきながら律が俺に質問した。サンドイッチはすっかり無くなっていた。そつえば、まださわ姉を見ていない。スタジオには来なかったし、まだ寝てるのか。

「一回見てくるわ。みんなはこれからどうすんの？」

「今日はそうだな・・・スイカ割りしようぜ！」

「スイカ割りって、あのスイカ割り？」

ムギの目が輝き、律の方へ身を乗り出した。スイカ割りは一つだけだろう。目隠しをして棒を使って狙う、あれだ。

「ムギ、もしかしてやったことないのか？」

漣がノリについていけず困惑した表情を見せた。

「うん！うまい人は、気配だけでスイカの位置がわかるんでしょ？」

「それ勘違いな気がします・・・」

小さい声で梓が言った。そこまで行くとスイカ割りじゃなくて剣道の達人だろ。

「スイカってあつたけ？」

「唯が買いたいっていったんだろ？」

昨日のスーパーでトランペットを欲しがる少年のごとき表情でスイカを見ていた唯。反対する理由もなかったので購入したのだが、もう忘れてるのか。これで去年よく軽音やってこれたな。漣や律も大変だっただろう。

「お、みんな揃ってるじゃない」

オレンジのアロハシャツにハーフパンツという格好のさわ姉が、唐突にダイニングルームに登場した。

「どこ行ってたんだよ。ひよつとして今おきたのか？」

俺の質問に、さわ姉はまさかと首を振った。

「昨日まともはこのあたり見れてないからね。ちよつと散歩に」

「だったら声ぐらいかけるよな。こっちは練習してたの・・・」

「あーお腹すいたー！私の分は？」

「人の話をきけー！」

俺の苦言は潮風に揺れるヤシの木のように華麗に流された。あわててムギが、冷蔵庫にしまっておいたさわ姉の分を取りに行く。顧問の教師が教え子に飯支度させてどうすんだ。ここはビシツと言っておかねばならない。

「今度連絡なかったらさわ姉の分は作らないからな」

「タク、それはないんじゃない？」

「いや顧問はそっちだろ。そもそもその権限で来たんだろっが」

「なんだか、疲れた。」

「律、スイカ割り先やって。俺部屋で休んでるわ」

「えー！たくちゃん、やるー！」

ほほを膨らませて唯が抗議するが、練習中の気疲れやさわ姉のやり取りで、主に精神が疲れていた。さわ姉がいるってことは、今日もどうせ長くなるだろうし、体力は温存しておくにこしたことはない。

「先生……」

漣の声が聞こえた気がしたが、俺は聞かなかった振りをして部屋に戻った。

巧斗が部屋で休んでる間、軽音のメンバープラスさわ子の六人は砂浜で遊んでいた。巧斗はいつごろ来るとも言わなかったので、それまでスイカ割りはお預けになった。

波打ち際でみんなが遊んでいると、さわ子が不意に話題を振った。

「ねえ、ぶっちゃんけた話、タクってみんなの目にどう映ってるの？」

「いきなりなんなのさ？」

動きを止めたメンバーを代表して、律が言った。さわ子は小さく笑うと

「ちょっと不安だったのよ。タクにもみんなにも、顧問のことで迷

惑かけたんじゃないかって。いきなりだったし、ごめんね」

いつものさわ子ではなく、1教師、1姉としてさわ子は改めて謝罪した。すると澁があわててとりなした。

「そ、そんなことないですよ。巧斗先生が来てくれたおかげで、前よりも練習するようになりましたし」

「タクって、普段どんな練習させてるの？」

「私たちの演奏を聴いて、だめなところを一つ一つ指摘していくんです。技術だけじゃなくて、音作りとか、曲の構成とか。あとは、唯先輩のギターを見てます」

梓の説明に、全員うなずいた。案外きちんと練習見てるじゃない、とさわ子は素直に感心した。自分はその部室が解放感に浸れる場所という認識が強いため、情けない話、練習をきっちりとみているわけではなかった。みんなの演奏もタクの演奏もまだ聞いていないが、どれだけうまくなっているのだろうか。

「うん。たくちゃんすつごくやさしく教えてくれるよ！」

「へー、そうなの」

みんなの話を聞く限り、巧斗はみんなからかなり信頼されているようだった。たしかにこうやって合宿に来るくらいだ。話に聞いただけだが、巧斗は女子の友達も多い。本人は男子扱いされていないからと言っていたが、それが今回は良かったのだろう。単純に自分の弟というだけではなく、いちミュージシャンとして、軽音のメンバーから一目置かれているのが、うまく練習に反映されているのだろうとさわ子は推測した。

にもかかわらず、さわ子は一向にこない弟が気になって、トイレと称して別荘に戻った。

俺は、スタジオにいた。

言い訳じゃないが、休憩はした。しかし、昨日まったく自分の練習をしていないことに気がついたのだ。納涼祭のライブも近いのに、

練習しないのは致命的なミスだった。おまけにこのスタジオのクオリティを、ギターリストとして味わいたかったという欲求もある。

だから俺は、マーシャルのアンプとムスタング、エフェクトボードというライブを意識した練習をしていた。

昨日室井から曲のリスト案が送られていたので、その中で夏らしい、ノリのいい曲を中心に練習を始める。ムスタングの音色がスタジオにこだまし、俺の思考は完全に音楽に浸っていた。右足でリズムをとりながら、両指先、腕に注意してギターを弾いていく。うちのバンドはそこまでメジャー志向の曲は作らない。だがその中から選ばねばならないから、今回はインストを一曲だけにし、あとは柏木ポーカルの曲が4曲という構成で今室井が調整しているはずだった。

ただ、広いスタジオに俺一人という状況は快適ではあるものちよつとさびしいと感じた。今みんなは海で遊んでるわけだし、申し訳ないとも思う。でも、俺だって一人のギターリストとして、練習は必要だ。遊びたい気持ちは、もちろんあるけど。

すると、スタジオの扉が開いた。

「やっぱりここにいたか」

さわ姉だった。水着の上にパーカーという海帰りそのままの服装だった。

「どうしたの？」

「その言葉はないんじゃない？みんな、タクがくるまでスイカ割り待ってるのよ」

「ライブ近いし、練習しないわけにはいかなくて」

さわ姉はため息をついた。

「そんな事だろうと思った。さっさと着替えて、海に行きなさい。

私は来年もあるけど、タクは今回しかないんだから、楽しまなきゃ」

「う・・・」

顧問の期限を、俺はいつのまにかわすれていた。みんなといるのが、当たり前だった。だけどここにきて、思い出したんだ。俺は、

さわ姉が戻るまでの臨時顧問だということに。さわ姉の意見は正論で、俺は言葉が出なかった。

「それに、みんなとこんな仲良くなれたんだから、その期待にもこたえないと。漣ちゃんとか、結構気にしてたわよ？」

「漣が？」

その名が出たとたん、俺の気持ちの矛先が少しだけ海に向いた。

「そ。ムギちゃんも唯ちゃんも、みんな待ってるんだから。練習も大事だけど、ここで作ったつながりも大事よ？切っちゃダメ」

「わかったよ」

でもそこは弟として、素直に従う風に見られるのも嫌だった。さわ姉は、片付けを始めた俺に言った。

「あ、みんなの練習が終わったら、久しぶりにあれやらない？」

「えー。だってつかれるじゃん」

「私もギター弾きたいし、付き合いなさい」

「わかったよ。でも、俺どうすればいいんだ？」

ふと湧いた疑問を、俺は正式な顧問にぶつけた。今、この別荘には顧問の肩書を持つ人間が二人いる。

「この合宿はあなたに任せる。私は何かあつたら責任とるだけだから。やりたいようにやりなさい」

にこつと笑うさわ姉。3か月ぶりの笑顔だが、俺は嬉しくなった。

スイカ割りには、意外にも天然な唯の勝利だった。まっすぐにスイカに向かい、見事にヒット。ムギは感動で喜んでいたし、笑いが絶えなかった。俺が着くと、漣はほっとしたような表情をして、律にからかわれた。もっとも本人はそれを否定したが。

俺は指示を当てにするのだがみんなてんでバラバラな方向に指示するものだから、全く見当違いなところで棒を叩きつける結果に終わった。でも。さわ姉に言われたからなのか、なにかふっきれたようにも思えた。

そのあと、さわ姉も含めた7人で夕食のカレーを作った。俺は手伝えることがほとんどなく（唯に待ってとさえ言われた）、食器を準備しただけだった。カレーを作る際はどこの家特製にするかで若干揉めた。じゃんけんの結果、秋山家のカレーにきまり、澁はちみつとすりおろしたリンゴをカレー鍋に投入し、しばらく煮込んだ。

「うまい！澁の家ってこんな味なんだな」

一口食べただけが、澁の家のカレーはちょうどいい辛さとするみ具合だった。うちのカレーはどちらかという煮込まないタイプなので、玉ねぎが溶けるほど煮込まれたカレーを食べるとというのが珍しかった。

「ありがとうございます。よかったです」

「へ？」

なぜそんなに澁がほっとした表情を見せるのかよくわからなかった。澁は料理が特別苦手というわけでもないのに。

「たくちゃん、わかんないの？」

隣にいた律が俺にささやいたが、いまいちピンとこなかった。考えられることといえば、作り方に不安でもあったのだろうか。

「あー……。まあいいや」

乾いた声と表情を見せる律に俺は腹が立ったが、空腹だったのでそれ以上追及しなかった。

夕食後、俺たちはスタジオに入った。今回はさわ姉もいる。みんなは心なしに緊張しているようだった。さわ姉の目的は当然、みんながどれくらい成長したのか知ることだ。それがみんなに伝わり、どこか落ち着かないのだろう。もっとも唯はひとりのほほんと鼻歌など歌っていたが。

準備が終わると、俺は演奏をするよう指示を出した。

「みんな、すごいうまくなってるじゃない」

聞き終わったさわ姉の第一声は、みんなの成長を告げていた。たしかに三カ月たっているのだから、それなりに成長していないとおかしい。むしろ成長しないわけがない。それでも、さわ姉の言葉は俺も嬉しくさせた。さわ姉の音楽教養は俺の比ではない。

「やったー！」

「うおっし！」

五人はさわ姉の評価を受けて大喜びだった。唯は梓に抱きついているし、ムギもそんなみんなを見つめてにこにこしている。俺も笑っていたが、澁が

「先生、ありがとうございます」

と頭を下げた。思いもかけないことに、俺はしどろもどろになった。俺はただ、さわ姉から託されたことを自分なりにやっていたにすぎない。

「そ、そんなかしこまらなくても……。演奏したのはみんなだから。俺がしたのって口を出したただぞ？」

「そんなことないよ！たくちゃんのアドバイス、すつごく的確だと思っ。な、梓」

律の言葉を、軽音部唯一の一年生が引き継いだ。

「そうですね！気づけない悪い癖とか、自分の演奏を見直すことができましたから」

こんな褒められるなんて。さわ姉を見ると笑いを噛み殺した顔をしていて、俺は声を張り上げた。というか、こうでもしないとこの場を切り抜けられなかった。

「何笑ってんだよ、さわ姉！」

「良かったわね、タク。これで彼女でもできれば……」

彼女、の言葉に俺の心が妙に反応したが、

「余計なお世話だ。恋人いないのはさわ姉もいっしょだよ」

「言ったわねー！」

スタジオに、さわ姉の怒り声が反響した。報復とばかりに子供のころいかに俺がさわ姉にべったりだったかを話し始めたので。俺は

さわ姉の口を封じねばならなかった。

澪は、さわ子から褒められたのは巧斗のおかげだと信じていた。

それは、練習の量からも、アドバイスの質からも明らかだが、何よりも、巧斗を信頼していなければここまで来れなかっただろう。

そして、みんなから感謝されてあわてる巧斗を見て。ちょっと可愛いと思ってしまうのだった。それに、さわ姉と接している時の巧斗は、自分たちに見せる顔とは違い、遠慮はないが振り回されている。そんな一面を見れて、澪はこの部活に入ってよかったと思った。練習はそれから二時間ほど行った。みんな疲れがたまっていたので、お風呂のあとはガールズトークもそこそこに、すぐに眠りにおちてしまった。

しかし、月明かりが部屋の中を照らし、みんなの寝息が寝室を支配するようになっても澪は寝付けなかった。

巧斗のことを、男子として見ている。そう自覚してから一日だったが、この一日を思い返してみると、ドキドキしたのは何回だろう？ 正確な数はわからないが、かなりの数になるだろう。

朝の練習は昨夜おぶってもらったことが鮮明に思い出されたし、巧斗特製のサンドイッチはおいしかった。でも一番鼓動が激しかったのは、巧斗に自分の家のカレーを食べてもらうことになったときだろう。

受け入れてくれるだろうか、好みにあわなかったらどうしよう。巧斗一人に対して作っているわけではなかったのに、味を調べている時、いつもより必死になっていた気がする。澪はあまり料理をしないし、お弁当も母にまかせっきりだ。だから、この味付けで良かったのだろうかと気が気ではなかった。

でも、巧斗がおいしいと言ってくれた。それを思い出すだけで、澪の体中に喜びのエネルギーが駆け巡り、身体が熱くなっていくのがわかる。みんながいなかったら、思いつきり騒いだことだろう。

気がつくとい付が変わっていた。客観的になる余裕が生まれ、漣は浮かれていた自分を恥じた。それに、頭が暴走気味に動いていたのでも渴いた。

キッチンでお茶でも飲もう。

そう決めて寝室を出たが、さわ子の布団がもぬけの殻になっているのに気付いた。

あの姉弟は、また飲んでいるのだろうか。そうになると、明日も大変なことになりそうだ。

虫がさんざめく音を耳にしながらキッチンでお茶を飲む。窓から見える夜の海は幻想的で、どこか儂い色彩を帯びていた。

さつさと寝ないと、明日に響くからなあ。そう思いながら寝室に戻る道すがら、漣は二人の声を聞いた気がした。その声は、自分が今のところもつともよく知る年上の声だった。

「スタジオに明りが・・・」

声に導かれるようにスタジオのドア前に立つと、ギターのフレージがいきなり耳に飛び込んできた。ドアの円窓を覗く。

スタジオ内で、巧斗とさわ子が、向かいあってギターを弾いていた。

揺れる、巡る、触れあう（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

今回もだいぶ長くなりました。いい加減カットするシーンを増やさないと・・・。

本当は二回目をこの話で終わらせる予定だったんです。でもかいてあるうちにさわ子のせいで大幅にその予定が狂いました。せっかくさわ子がいるんだからまともなこともさせないとね。

さて、次回で合宿編もラストになります。自分の気持ちを認めようとしないうちですが、ついに・・・。

次回もお読みくだされば幸いです。

アコースティック・ムーンライト

うねる。旋律が、絡み合っていく。

心地よい、自然と身体が反応してしまうギターの音色。二人の嗜好する音楽性からは想像できない、特にさわ子のデスメタルからはかけがえのないメロディだ。激しさのかけらもない。ジャズのようなゆったりしたリズムに、どこか悲しげな思いがこもっているような・・・。漣はそう聞こえた。

足元のエフェクターをほとんど使っていないように聞こえる。まったくエフェクトをかけていないわけではないだろうが、この音からすると歪み系はほとんどないだろう。あるとすれば、空間系だ。

ドア越しから見える二人の演奏は、漣がこれまで見たことのあるどの二人とも違っていた。ライブでの巧斗はとにかく激しくて、衝動と本能に忠実だった。しかし、今の巧斗は違う。身体を揺らしてはいるものの、穏やかだ。さわ子もタツピングや速弾きといったメタルにありがちなテクニクに走っていない。お互いに寄り添い、うかがうようにギターを弾いている。

漣はその演奏に感動すると同時に、自分には見せない表情をする巧斗を目の当たりにして複雑な気持ちになった。巧斗と自分の関係は、自分にとって尊敬できる顧問とその生徒でしかない。その事実を突き付けられた気がした。この二日間で顔が真っ赤になる出来事は多かったけど、単純に顧問として見ていないことを自覚している、この事実には小揺るぎもしない。

でも、もっと、もっと二人の音が聞きたい。それは、音楽をかじっている者としての思いだったのか、巧斗がいたからなのか。後で漣は、この時のことを思い出した時、どっちが本音だったのだろうか分からなくなっている。

円窓は漣の身長でもかろうじて中が見える高さであり、詳しく見るには背伸びしなければならぬ。

ドアノブにかけた手が、急に動いた。

澪の視界が一気に広がり、スタジオの中に身体が躍り出る。

背伸びをしたら、勢いがありすぎてドアノブに体重がかかったようだった。

演奏が止まり、部屋の空気も固まってしまった。

「澪？」

水色のムスタングを抱えたまま自分を見下ろす巧斗を見上げて、澪はこの場からすぐにでも逃げ出したくなった。

「なーんだ、セッションが見たかったら、そう言ってくればよかったのに」

ミネラルウォーターのペットボトルを飲みながらさわ子が笑った。

「さわ姉の顔が怖かったから声かけづらかったんじゃないの？」

巧斗がそう言ったわずか一秒後に、彼の脳天でさわ子のスリッパが気持ちいいくらい良い音を出した。

「そんなことないわよね、澪ちゃん？」

「ええ……」

実際さわ子は学校で悪乗りする時が一番怖かったからその言葉にウソはないのだが、前科とでもいっべき出来事が多くて爽やかに同意できなかった。

「おい、言わせんなよ」

巧斗は呆れた表情をさわ子にした後、澪に視線を移した。

「でもどうしてこんな時間にスタジオに？みんなもまだ起きてるのか？」

「いえ、ちよつとのどが渴いて……」

自分のドジさと恥ずかしさから、まだ二人の、とくに巧斗の顔がまともに見られなかった。

「そっか……。よし、タク、もう一回、セッションやるわよ！」

さわ子の目が輝きを増したが、巧斗の目は逆に暗くなった。

「いいけど、いきなりルート音変えるなよ。急に変わると着いて行

くのしんどいだよ」

「でもタクは、着いてきてるじゃない」

「セツシヨンだからはいあわててます、なんて無様なことできるかよ！」

相変わらず、とつぶやいた巧斗だったが、律儀にムスタングを準備するところから姉には逆らえないらしい。もともと、さわ子のよくな強烈な姉を持っていればいたしかたないだろう。

「じゃあコードはまずCm、F、Gね」

さわ子は唯から借りたというレスポールで言ったコードを順番に弾いていく。セツシヨンを生で見たことがない漣は、期待感で言葉が出なかった。

「じゃあ今度は俺からでいいよな？」

「しょうがないわね」

巧斗の指が動きだす。緩やかにアルペジオを弾きながらアクセントを入れていく。8ビートではなく、変拍子であることに漣は気付いた。そこに、さわ子がストロークを組み合わせる。

一旦、二人の音が止む。そこから、巧斗の手がスリーカウントを数える。

一気にテンポが上がり、二人が紡ぐギターのリズムが重なってスタジオを揺らした。

リズムとメロを交代しながらセツシヨンは続く。激しいリフト、リズム隊の代わりにビートを刻みながら、ところどころ『遊び』が入る。二人の息は姉弟だからか、それともミュージシャンとして優れているからなのか、リズムやフレーズのタイミングの合い方は完璧だった。

「ふー。汗かいちゃった。タク、前よりもうまくなったじゃない」

「それはギター、それともセツシヨンが？」

時間にして10分も経っていなかったが、漣は一時間もの間、セツシヨンを聞いた気がした。二人はまるでコンビニに行った後のような気軽さで終わったが、漣はそのレベルの高さに胸を打たれて感

想が言えなかった。

「全体的に。それより漣ちゃん、どうだった？」

さわ子はギターをスタンドに置き、不満そうな顔をしている巧斗を無視して漣に感想を求めた。

「えつと・・・なんとというかその、すごかったです。すみません、言葉足らずで・・・」

細かいことや、テクニクのことなど言えることは山ほどあったのだが、いざ話そうとすると気の利いた言葉はなにも言えなかった。でも今のセッションは自分だけが聞いていた。それはとんでもない贅沢ではないだろうか。

「よかつたじゃん、タク。漣ちゃん喜んでるって」

「あ、うん。ありがとう」

まともに褒められたからなのか、巧斗の反応は戸惑っているようにも見えたが、いつもの穏やかな笑みを返した。巧斗はやっぱり、音楽に触れている時が一番、漣は輝いているように見えた。今のセッションのときだって、視線は巧斗、さわ子両方を追っていたはずなのに、気がつくくと巧斗しか見ていなかった。

「あの、先生」

「ん？」

「何？」

漣の言葉に、さわ子、巧斗が漣の方を振り向いた。すると、さわ子が笑いだした。

「そっか、漣ちゃんにとっては、私もタクも先生だもんね。どうしたらいい、タク？」

「俺に振るのかよ！まあ、俺のことは名前でもいいよ。実際、律と唯からはあだ名だし」

「え、えつと、じゃあ、巧斗・・・先生・・・」

こんなな、男子の名前を言うのが恥ずかしかったことがあっただろうか。もじもじしながら漣がいったものだから巧斗は嘖き出した。「名前だけなのにそんな恥ずかしがるなよ。で、なんの話だったん

だ？」

「さわ子先生と、た、巧斗先生って普段からセッションしてるんですか？」

「うん。俺が中学生のころから・・・だっけ？」

「たしか、コードの応用ができたってあんたが言ったからじゃない？」

「そうだった」

話によると、二人は暇な時にしょっちゅうセッションをしていたという。さわ子からすれば弟とできるのがうれしかったことと、ギターの指導もできることからやっていたらしい。一方の巧斗は、強引にセッションをやらされたと記憶に残っているらしいが、高校でオリジナルを作る時になって初めてセッションをして良かったと思っただけという。フレーズを組み立てる参考になったから、らしい。漣はまたひとつ、巧斗の音楽ルーツを知って嬉しくなった。

「それじゃあ最後に・・・。漣ちゃんもやってみる、セッション」「え、えええっ！いいいんですか？」

漣は予想もなかった申し出に混乱した。誘ってくれるのはもちろん嬉しいが、あのセッションをみた後だ。自分でもできるのかどうか、不安でいっぱいだ。基本、二人が弾いたフレーズは創造性に富み、思わず身体が動き出すようなものばかりだった。しかも、自分にはセッションなどしたことがない。それなのに・・・。

「たしかにいいかもな。メロに集中したいし、漣と一回合わせて見たいとは思ってたんだ」

巧斗もさわ子の提案に乗り気だ。漣は、この場から逃げられないと悟った。しかし、それは単純に自分の正確上の問題だからなのではなく、音楽をするものとして越えなければならぬ試練だった。

ベースはスタジオに置いたままだったので、準備そのものは早かった。しかし、緊張で漣の身体はがちがちに固まっていた。

「溇、そんなに硬いとセッションできないぞ……。あ、そう言えばセッション初めてだったな」

「す、すみません、まだよくわからなくて……」

またしても縮こまった溇を見て、さわ子は巧斗に向かって

「なに女の子追い込んだのよ。紳士じゃないわね」

「その女の子にコスプレさせようと追いかけてたのはどこの誰だ？」

「まあそれは置いといて。溇ちゃん、セッションについて説明するわね」

都合の悪い話を無視して、さわ子はセッションのやり方を話し始めた。

「できそう？」

説明が終わると、巧斗が心配そうな顔をした。たしかに、二人と演奏するのは緊張もするが、何より恥ずかしい。いつもの溇だったら、拒絶して部屋に戻っていただろう。しかしなぜか、この時は誘いに応じてしまったのだ。

「が、頑張ってみます……」

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。俺らが合わせるからさ」

溇の中で、不安がちよつとだけなくなった。

「じゃあコードね。タクが決めて」

巧斗はムスタングを弾きながらコードを四つ決めた。セッションは基本的にリズムを担当する楽器が先だ。つまりこのメンバーでは、ベースの溇が一番最初に弾くことになる。きちんとしたバンド構成、すなわちドラム、ベース、ギターならばドラムがもちろん先だ。

溇は深呼吸して、指を構える。足でリズムを刻みながら、フレーズを構成し始めた。

フレーズが固まってきつかり2小節後に、巧斗のギターが入ってきた。ベースのメロディとリズムに合わせて、ムスタングを操る巧斗。そこに、さわ子が絶妙のタイミングで軽やかなフレーズを奏でていく。

溇は二人に着いていこうと必死になって、ギターの動きに注目す

る。それ以外にも、リズムの取り方、視線の移動まで、とにかく頭を回転させた。

しかし、巧斗と目があつた時だった。巧斗は楽しみながら弾いていた。おそらく、漣の表情があまりに必死すぎたのだろう。声には出さず、口だけを動かした。それは

「大丈夫だよ」

この言葉のように読み取れた。その瞬間、漣は必死のあまり余裕がなくなっていることに気がついた。セッションは、楽しくやるもの。さわ子は、説明の時にそう言ってなかったか。巧斗もさわ子も、その演奏は自分のつたないベースを包み込むように合わせてくれている。それなら、なにを不安に思うことがあるのだろうか。

そう思うと、漣の顔が自然とほぐれていった。

3人の一体感がフレーズとなって現れ、スタジオを満たしていく。音の本流が壁を、床を、天井をえぐっては抑えていく。

漣は、律たちと演奏するのはまた違った楽しさと安心を感じた。自分が引く張るのは違う。フレーズ自体は激しく、ロックそのもののなのに、二人の演奏から感じるのは、温かくて、家族にいるような感覚だった。

セッションそのものは、10分と続いただろうか。ギターの開弦の残響がスタジオに残ると、漣はベースを抱えて座り込んでしまった。とにかく精神的にほっとした。いくら演奏中に緊張がある程度解けたとはいえ、慣れないことをしたのである。しかし、安堵とともに巧斗とさわ子ともに演奏した興奮も湧き上がってくるのだ。た。

「漣、ありがと。どうだった、セッション？」

「最初はすごく不安で、自分にできるかわかりませんでしたけど……。でも、すごく楽しかったです。巧斗先生やさわ子先生が、うまくリードしてくれたから」

感想は興奮の感情が上回ってしまい、普段の自分では考えられないくらいハイテンションになって答えた。

「そつか。やつぱりベースが入るとグルーブが生まれていいわね。それにしても、私結構遊んだのに。漑ちゃんはすごいね」

タオルで汗を拭きながらさわ子が褒める。すると巧斗がやや怒った顔で

「漑だけかよ。俺も苦勞したんだぞ？なんで8分の8でやってんのに変拍子を放りこんでくるんだよ！漑が初めてだからエイトビートに徹するかと思ったのに・・・」

「いやー、途中で何か物足りなくなっちゃって。漑ちゃんも予想以上にできたから、つい」

ペロツといたずらっ子のように舌をさわ子は出す。漑は着いていくことに集中していたから、打合せもなく拍が変わったことに動揺はしていなかった。その漑から見ても、さわ子は悪びれているようには見えなかった。巧斗は深いため息をついた。

「そんな事だろうと思った・・・。じゃ、そろそろ寝ないとまずいから、俺風呂入るわ。漑はどうする？」

「そ、それなら・・・」

この流れはお開きに向かっている。スタジオの時計はもう午前一時を過ぎていた。この1時間はこの合宿で一番濃い1時間だった。だから精神が落ち着くのにもまだまだ時間がかかるだろう。そしてこのことは、律たちには内緒にしておこうと、心ひそかに決めた。

翌朝、俺は若干の寝不足を感じつつも予定通り九時に目を覚ました。

昨夜、いや今日の深夜にやったセッションは面白かったなあ。さわ姉とのセッションは休日の半ば恒例行事と化していたが、ずっと二人でやっていたから、ベースも含めてというのが新鮮だった。基本さわ姉とのセッションは俺が振り回されることがほとんどという、普段の関係とあまり変わりがない。したがって、セッションは楽しいことは楽しいが精神的に疲れてしまうことが多かった。でも漑が

一人加わったことで、セッションは安定と創造が増したように思う。漣のベースはテンポキープや音のバランス感覚がいいので、俺はすごくやりやすかった。音のバランス感覚だけで言えば、うちの青島よりもあるのかもしれない。

そんなことを思いながらダイニングルームにいつもの五人がそろっていた。さわ姉の姿はない。

「おはよ。さわ姉は？」

「まだ豪快な格好で寝てるよ・・・」

律が対処のしようがないとばかりに肩をすくめた。やっぱりまだ起きてないか、あのだらしない姉は。俺は合宿のさわ姉の行動を顧みるたびに、自分が遊びたいがために来たのではないかという確信を強くしていった。軽音部の合宿中のことは俺に任せる、と言ってくれたが、それも自分が楽をしたためじゃないのか？

「そうか・・・じゃあ10時半から練習するか」

それでも、俺に権限にあるということはやりやすいことでもあるので、簡単に朝食を済ませると俺は練習時間までスタジオにこもることにした。いい加減練習しないと納涼祭のライブはまともな演奏ができない。そこまで追い込むようなライブではないのだが、それでは聴いてくれるお客に悪い。

「たくちゃん、スタジオで練習？」

唯がテーブルでぐったりしながら聞いた。みんなには納涼祭のこととは話していない。

「うん、空いた時間があるなら使いたいし」

漣と視線が重なる。漣はセッションの後よく眠れなかったのかまだ眠たそうな顔をしていた。セッションのことは誰にも話していないのだろう。もし話していたら、きつと律や唯、あるいは梓が騒いでいたに違いないからだ。

そこまで特別だったのか、あのセッションは。俺はあの時の漣を思い出すと、なぜか胸が締め付けられた。必死になって俺とさわ子についてこようとする漣。セッションのあと、緊張から解かれて座

り込んだ遷・・・。

いかんいかん、俺はこれから練習だ。集中しないと。

こう決め込んでスタジオに入ったにもかかわらず、練習は遅々として進まなかった。アンプから音が出ているのといない時間が半々だった。

ギターをなん気なしにただ弾いている。頭の中は合宿での出来事を回想していた。だから進むわけがない。合宿は今日と明日で終わりだ。明日は昼には電車に乗る予定なので、実質あと24時間と少しだ。

「いろんなことがあったなあ・・・」

だもので、すぐに練習の時間は終わってしまった。

「おいっす、たくちゃーん！今日は時間通りきたぜ！」

「そこ誇るところじゃない！」

勢いよくドアを開けた律たちに、俺の思考は遮られた。

「そうだ、先生。この前言われた新曲のメロディ、できました！」

みんながそれぞれ準備をする中で、にこにこしながらムギが俺に報告をした。夏休み前に話し合っていた件か。

「ほんと？じゃみんなの準備ができ次第聞いてみよっか」

「はい！」

支度が終わるとさっそく、ムギを促して新曲のメロディを弾いてもらった。テンポはそこまで速くない。140といったところか。もっともこれはあくまでも案だから、これ以上に速くなることもある。

メロディ自体のクオリティは高い。サビに当たるところはかなり耳に残るし、展開もスムーズだ。もっとも、このメロディラインからすると歌うというよりも語り口のような歌い方があってるな、と俺は思った。

披露が終わると、みんな一斉に拍手をしてムギを称えた。

「相変わらずムギの作曲はすごいぜ、な、遷」

「う、うん。これに歌詞をつけるのか・・・」

「全部オリジナル作ったのは本当だったんですね」

「お疲れ、ムギ。いいメロディだな。じゃあこの時間は作曲りに充てるか。えーと、タブ譜は？」

「あ、書いてないです・・・」

ムギが珍しく忘れ物をしたタブ譜とは、コード、あるいは楽器のシンクローションを記した楽譜のことである。作曲りの設計図とも呼べるもので、俺はこれをもとに作曲するのが一番やりやすい。

俺はギターケースからまだ白紙のままだったタブ譜を取り出してムギに渡した。

ムギは書道家のようにさらさらともの数分で一曲分のタブ譜を完成させた。その速さと巧さに俺は啞然とした。ムギのお金持ちぶりからかなりみっちりピアノはやってそうだが、演奏力と作曲能力は必ずしも一致しない。だがこのムギは両方を兼ね備えている。

このキーボードが、バンドの曲を構成する上で大きな割合を占めていることを、俺はやっと実感した。

「どうする？えーと、どんなイメージだったけ？」

「溼先輩の歌詞待ちって決まったはずですけど・・・」

唯と同じく、梓が指摘してくれなければ、俺は過去を思い出せなかっただろう。こんなことではだめだな。言い出したのは自分だし。「まあ、コードはあるわけだから、アレンジと歌詞平行してもいいんじゃないか？せっかく合宿に来たんだし」

実際、みんなの曲作り風景を俺は非常に知りたかった。当然のことながら作曲作りを知っているのは自分のバンドしかない。それぞれのスタイルがあるとはいえ、吸収できるものはあるはずだ。

とはいっても、この五人が全員、作曲りに専念できることはない。ムギと梓、そして溼がキーボードの前で話し合っているのとは対照的に、唯、律の二人は俺をいじって遊んでいた。おかげで作曲りに参加することも見学することもできなかった。というか俺はいつのまに二人の玩具になったんだ？

「たくちゃん、小学校のころどんな感じでさわちゃんにべったりだ

ったの？」

「ん〜とね・・・って話すかあっ！」

「え〜。小さいころのたくちゃんみてみたいなー」

こんな調子だ。もつとも、ノリ突っ込みをするまでになった俺に原因があると言えなくもないか。たしかに、六歳という年齢の差は大きい。子供のころ、それが妙にさわ姉を大人っぽく、超人に見せていたものである。

「つつても、音楽やり始めたのもさわ姉がいたからだから、一概に否定はできない、かな」

「え？巧斗先生って、さわ子先生がきっかけで音楽始めたんですか？」

聞いていた唯たちより早く、漣が振りかえって反応した。

「そうだよ」

漣の行動に俺以下五人はちよつと驚きながらも答えた。

「あれ、言ってなかったけ・・・。さわ姉もバンドやってて、その影響」

「それってたくちゃんが何歳の時？」

唯は興味をひかれたようで身を乗り出した。

「小学校3・4年のころだったかなあ。ライブのさわ姉がえらくかつこよく見えたんだよ。たしかこんな曲だったような・・・」

俺は唯からレスポールを借りると、思いっきり歪ませた音色で速弾き、タツピングを連続で行った。テンポは200。すさまじい音の暴力がスタジオを満たしていき、終わるとみんな耳をふさいでいた。「先生がすごいのはわかりましたけど、ほんとにかつこよかったんですか？」

手を耳から離して梓が疑問の表情を顔に浮かべた。

「はつきり言っつてこのジャンルは好きじゃない。でもガキだったからな」

俺はありがととレスポールを持ち主に返した。ただ、今演奏した時ギターの感触に違和感を覚えた。これは唯に一回注意しないと・

。。。

「へー、タクつてば、小さいころそんなこと思ってたんだ」
「いつの間に？」

気がついたら、さわ姉がいた。この現れ方、心臓に悪い。いないと思つてたから話してたのに。さわ姉は笑いながら俺を羽交い絞めにして

「で、今は尊敬のかけらもないと」

と締め上げてきた。この扱いはないだろ！

「先生！先生が危ない！」

「あずさちゃん、どつちのこと？」

ムギの言葉で、みんな一瞬だけきょとんしたが、一斉に笑い声に変わった。

「あそつか、弟だから名字も一緒なのか！」

律がポンと手を叩いて納得した。あのな、俺は不幸にもさわ姉の弟だからここにいるんだぞ？

「不幸にも、はないんじゃない？」

今度は怒った顔をしたさわ姉の手が伸びる。俺はそれをかわすと、梓とムギに、漣と同じことを言った。

「もう名前がいいよ。現にこんがらがってるし」

「それもそうですね。そうします」

一瞬、漣がショックを受けたような顔をしたが、すぐに戻った。でもこれなら、名前でパニックになることはないだろう。

突然のさわ姉登場で、曲作りは思った以上に進展しなかった。予想してたと言えはしたけど、それ以上の結果だ。ほんとぐだぐだなんだよな、この部活。

空は相変わらず太陽の独壇場だった。今日が海で遊べる機会としては最後になるから、思いつきり遊びたかった。

まあ、そうでもない俺の精神はふらふらと別のところに行く

てしまうからだ。

相変わらず、みんなの水着姿はまぶしい。さわ姉は置いておくとして、それぞれベクトルが違うからかなり目が注目してしまう、男として。ほんとに溲は、グラビア撮影でもしに来たのかと錯覚してしまう。でもさすがにガン見はできないし、変態、さらにいけば痴漢扱いされかねない。

というわけで、俺は浜辺でのボール遊び、サンドアート大会をこの中でもっとも真剣に取り組んでいた。アートの方はなかなかのきだった。いっぽうボール遊びは足がはまって散々だった。俺そこまで運動できないわけじゃないんだけど。

「はは、たくちゃんのへーん！」

しかし俺の力作は律の大笑いで吹き飛んでしまった。いや、この妖艶なカーブといい、滑らかさといい、ちょっとできないぞ？

「ふ、この良さがわからないとは子供だな、律。これはフランスは絶対王朝の貴族をモチーフにした・・・」

「それって砂関係ないですよ。というか気持ち悪いです・・・」
梓の評がとどめになって、俺は40分もかけて作ったアートをけり砕いた。

次は岩場に移動してプチ探検ごっこをする羽目になった。いや、命名者は唯だ。俺じゃないぞ。探検自体はきらいじゃないけど。

溲と梓はペアになって恐る恐る岩を飛び越えていた。岩礁を波が洗い、苔や海藻、貝類がこびりついていた。

「先輩、しつてますか、藤壺の・・・」

後ろで梓が何気なく話しかけたのだろうが、溲はそれをうけとれなかった。

「いやーっ！」

耳をふさいで、海に響き渡るほどの絶叫を挙げながら溲はもと来た道を駆け抜けてしまった。律が梓にでかした、と切れの良いサムズアップ。おい、からかいすぎにもほどがあるだろ。俺は溲を連れ戻そうと踵を返したが

「たくちゃん、澪はほつといていいよ。この先いつても怖がるだけだし」

あの絶叫は肝試しの時とほとんど一緒だったので気にはなっていたのだが、昼間だし迷うことはあるまい、と律の助言を受け入れることにした。

ただ、探検ごっこでできるほど広い洞窟もクリフ・ハンガーできそうながけもなかった。ひたすら岩場を歩いただけになったが、別荘前の砂浜に戻ると太ももが痛い。これから練習あるのに大丈夫だろうか。

「しっかし律はよくこんなに遊ぶの思いつくな。まだ元気だし」

「いやあ、それほどでも」

埼玉在住の日本一有名な五歳児によく似たテレ方を見せる律だった。が、俺は皮肉半分で言ったんだが。これ合宿なんだけどな、と視線を別荘の真横にある林に向けた時だった。

「澪の奴、あそこでなにしてるんだ？」

澪は手を耳に押し付けたまま身体を震わせていた。まさか、走り去ったあとずつとここで怖がってたのか？俺は澪のそばに近寄って声をかけた。

「澪？」

「ぎゃーっ！！」

まるで自分が襲われたような声をあげ、走り去ろうとする澪の腕を俺はつかんで手を引っぺがした。

「澪っ！落ち着けよ！」

「た、巧斗先生・・・」

まだ身体は生まれたての仔馬のように震えていたが、少なくとも恐怖に支配されてはいなかった。ただいきなり俺が目の前にいたからなのか、顔がみるみる紅潮していく。

「ずつとここで震えてたのか？」

「えっと、そうです。ごめんなさい・・・」

バツが悪そうにうつむく澪。恥ずかしがり屋に怖がり屋、さらに

人見知りのトリプルパンチか。五人はみなキャラが濃いけど、なかでも澪は見た目と中身のギャップが大きすぎる。まあ、そのギャップが可愛い時はあるが、この怖がりようはマイナスにしか働かないだろう。

「なんであんな反応したんだ？」

「あの、私痛い話もだめなんです。そういう話を聞くと、自分の身体がそうなるみたいに感じちゃって……」

感受性が豊か、ということになるのか。たしかにそれは音楽だけに限らず、創作に置いて有利になるだろう。でも極度になると、まずいよな。

ライブ、いや人前に出ることができないとも言っていたが、文化祭はこれでやれるのだろうか？ 去年の例があるにしても、澪はこれから先のこともある。このままでいいわけがない。でもそうなってくると、俺の手に余る問題が発生しそうだった。

「あ、澪ちゃん泣いてる！ たくちゃんがいるってことは……泣かされたの？」

「ちげーよ！ 澪を正常に戻してたんだ！」

「みんなー！ たくちゃんがね……」

「ちよつと待て！」

俺たちを見かけた唯に、俺の思考はプツンと切れてしまった。

ただ、この時感じた疑問を先延ばしにしていなかったら、あるいは未来はもっと良くなっていたのかもしれない。

「カンパニー！」

グラスが触れあい、宴会開始の合図が響いた。明日で合宿も終わりというところで、今日の夕飯は様々な料理が出た。テーブルが重みでしなっている。

宴会と言ったが、俺もさわ姉もアルコールを飲んでいない。酒を飲むなら迷惑にならない時間、場所、程度を考えると俺が言ったか

らだ。そこはさわ姉もさすがにわきまえていた。

「明日で終わりかー」

律がチキンを豪快に食べながらさみしそうな顔をした。

「楽しかったね。初めてのことでもいいっばいできたし」

「ムギちゃん、ありがと！」

唯はいつもの天真爛漫な笑顔で、この別荘を提供してくれた仲間にお礼を言った。

「唯も律もムギも、この後練習あるんだからな」

漣は終わった気でいるお気楽トリオにくぎを刺した。たしかにまだ新曲もやれてないし、時間はまだある。

「そうですね！練習がんばりましょう！二学期は文化祭もあるんですから！」

梓が手にしたコップから、ジュースがこぼれそうになる。文化祭か。そのころぐらいに、俺は臨時顧問を終わっているはずだった。

その事実が、俺の心を氷柱の矢のように刺した。

「どうしたの、タク。一人でしんみりしちゃって」

隣で軽音部の喧騒を見守っていたさわ姉が、俺にささやいた。格好がつかないと踏んだ俺は、さみしくなった気持ちを抑えた。

「なんでもないよ。ただ、合宿まであつという間だったなあって」

「なに、タクらしくもない。ひよっとして、さみしくなった？」

ふきだしながらも俺の心を読み取ってしまうあたりは、家族だからなのだろうか。

「ちげーよ！むしろほっとしてるくらいなんだよ、さわ姉のお守しなくてすむから」

「せんせい、それほんとですか？」

ムギが信じきった顔をして会話に入ってきた。実際は一部だけが本音だった。

「そうだったらただじゃおかないわよ、タク」

「さわ姉、いいかげん俺の扱いを考えてくれないか？」

「えー、だってタクだし」

ぶりっこするア라운드クウォーター。見るのも耐えられん。しかも改善の意思なしか。トヨタだったら即刻解雇されてるところである。

「でもさわちゃん、その気持ち、わかるぞ！」

「でしょ？」

「わかるな」

俺の扱いで意気投合する生徒と教師。なんで俺は、こんな扱いなんだ毎回毎回。

「あ、そういえば、たくちゃんって今月の17日あいてる？うちらと一緒に納涼祭行こうぜ！」

俺が参加することが、もう当たり前になっていた。おかしな話だが、合宿についてきた今になって、みんなとのつながりを実感している。アートワークスとは違うつながりだ。どう違うのかは具体的に言いにくいけれど、そう簡単に崩れないような。

「あーごめん、その日予定入ってるんだ」

「え、まさかたくちゃん、デート？」

唯が期待に目を輝かせた。たしかにそうだったら誇らしいが、残念ながらライブだ。でもこのことを言うべきかどうか、一瞬迷った。「だったらいいけどな、そんなんじゃない。外せない用事があつたさ」

「デートじゃない用事って、なんですか？」

ムギが鋭いところを突いてくる。

「大学生にはいろいろあるんだよ。高校生じゃ想像もつかないあれやこれや・・・」

ふざけてしゃべると、漣が目に涙をためて怯え出した。

「た、たくとせんせい、それってどういう・・・？」

なにを頭の中に思い描いたのかは定かではなかったが、それまでの笑顔からの一転ぶりにみんなが反応した。

「あ、たくちゃん、漣を泣かせた〜！」

今日の海と全く同じ展開に、俺の頭は混乱の極みだった。

その後の練習、お風呂の間中、漣はため息が出るばかりだった。海も夕食も、巧斗を引かせるような行動ばかりとってしまった。夕食で漣が想像したのは、自分でも処理しきれないほど大人な内容だった。

きつと、変に思ったよね、先生……。

何回したかわからないため息がでる。それまでかなり巧斗と空気が良かっただけに、自分の繊細さに嫌悪感すら覚える。しかも、この落ち込みぶりは、自分以外のことにも原因があった。

先生、納涼祭来れないんだ……。

直接本人に確認をとっていたわけではないのに、一緒に行けると浮かれすぎていた。確かに先生は大学の友達もいるはずだし、優先順位を自分はどうこう言える立場ではない。だけど、やはりシヨックは大きかった。こんなに合宿は楽しいのに、最後になって気分が下降するなんて……。

この合宿は、いろんなことがあった。みんなと遊んだこと、巧斗への認識に気付いたこと、巧斗におんぶされたこと、巧斗とさわ子とセッションしたこと。思い出すことのほとんどに、巧斗がかかわっていた。

こんなことを考えながら、風呂上がりだった漣はみんなと部屋に戻っていた。さっぱりしたはずなのに、頭の中のせいで気分はちっともさっぱりしなかった。

「あ、巧斗先生！」

ムギが巧斗を発見して呼びかけた。巧斗は風呂に入るのか、手には着替えとバスタオルが握られていた。

「お、みんな上がったな」

漣は夕食で泣き出してしまったから、巧斗の顔を直視できなかった。思えば、今日は目が覚めてから、巧斗とまともな会話はあまり出来ていない。

「たくちゃん、お風呂からあがったらどうするの?」

「んーと練習かな、とりあえず」

唯の質問に、巧斗はいつものように答える。その様子はさっき練習で漣がほとんど目をあわさなかったことを気にしている風もない。それに、漣はまた気分が落ち込む。なんで、巧斗は平気なのだろうか。

「そりゃよかった。あたしたち、部屋でギターストークするから入ってこないでよ」

にたりと注意する律に対して巧斗は

「誰が行くか。それに、ギターの練習ができて都合がいいや」

と笑って去ってしまった。漣が言葉をかける間はなかった。

「それじゃあ行きますか、みなさん」

ギターストークといっても、その内容に漣はあまり関心を持ってなかった。

部屋につくとさっそく、寝ている時は間隔をあけて敷く布団を部屋の真ん中に集め、ジュースとお菓子を広げた。

「ギターストークって、なに話すんですか?」

準備が整ったなかで梓が疑問を口にした。女子の会話はジャンルを選ばないが、先輩たちが恋愛の話をするとは思えなかったからである。

「まーいろいろ。今夜はさわちゃんもいるし、いろいろと大人な話もきけるぞ」

チヨコ菓子を食べながら、さわ子の目が光った。

「まさか先生、また変な服を・・・」

漣と梓は経験から話ではなく、コスプレを強要させるのではないかと後ずさった。しかしさわ子は、さすがに研修中のために準備ができなかったという。

「研修がなかったら持ってきたんですか・・・」

「じゃあその話は置いて、梓。この中で一番モテそうなのは誰だと思っ?」

「せ、先輩の中ですか？」

さわ子を除いた五人はほとんど恋愛に関する経験がないにもかかわらずトークを展開した。もつとも、巧斗やアートワークスのメンバーがレベルの高さを認めているだけあって、五人全員街で声をかけられた経験もなくはない。ただし、女子高という環境の影響は大きく、思春期なのに潤いは少なかった。本人たちに自覚はあるのだが。

「あらら、みんな恋愛をわかってないわねー」

普段は子供みtainな顧問、と思われているさわ子は出番だとばかりにオトナな態度で軽音部のメンバーを見渡した。

「さわ子先生、私たちに恋愛を教えてください！」

軍隊も顔負けな敬礼をして唯が正座した。

「恋愛、それは男と女の駆け引き・・・！食うか食われるか、相手が隙をみせたら こつちのものよ！男は女の際に弱い！」

そういうものだろうか、澪は疑問半分で話を聞いていた。恋愛って、もつときれいなものじゃないのか。食うか食われるかなんて少なくとも澪が思う恋愛ではなかった。恋愛をほとんどしたことがない澪は、まだ、ライバルを蹴落としてでも手に入れたという恋愛を知らない。恋も愛の区別もつかない。恋愛をファンタジーとして捉えていた、といつてもよい。本人は、まだ自分が恋をしているという自覚はなかったが。

「みおー、なーんでさっきから黙ってんだよー。今のうちに聞いとこつぜ」

メンバーの中でだまっただまだった澪を見かねたのか、律が話題を振った。

「え、そ、そんな。そういうのは二十歳を過ぎてからじゃないと・・・」

「江戸時代の価値観そのままじゃないの。そんなんじゃないよ、澪ちゃん！」

強い口調で生徒をたしなめたさわ子に、澪は

「でも私、バンドが恋人みたいなものですし・・・」

なんで恋愛しないのか、と言われた時に決まっという台詞で誤魔化そうとするが、漣の胸が激しく痛んだ。これまでは、恋愛がただ単に恥ずかしくて言っていた言葉なのに、今回は痛みが伴った。

さわ子はなんだか対処の仕方に困った顔になった。

「なーんで年頃なのにこんな頑なになるのかしらね・・・。でも、そういう時期もあるか」

一人納得したさわ子だが、みんな付き合ったらどんな感じになるのか聞いてきたので答える羽目になった。

「でも普通よ、人それぞれだし」

「先生はどうだったんですか？」

ムギの質問に一瞬さわ子は動揺した。デスメタルにのめりこんでいたきっかけというのが、そもそも片思いの男子だったからだ。

「そうね・・・。自分でいうのも変だけど結構甘える方・・・かな、って何言わせるのよ！」

「でも先生けっこうノリノリですよ」

梓がやや引き気味に言うなかで、唯と律はこそこそ話しあっていた。

「やっぱりこのことも聞いとくべきだよな？」

「りっちゃん隊員、私もそう思います！」

「どうしたの？」

「さわちゃん、やっぱり初めての時って・・・痛いなの？」

唐突かつ衝撃的な内容に、教師としてさわ子はどうするべきか判断に迫られた。漣はその内容に身体が縮こまってしまった。初めて、女子がその単語を口にする時、意味は一つしか存在しない。

「いきなりなんなの、二人とも・・・」

「だって、こんな時しか聞けないと思って・・・」

「唯ちゃん、一応私、教師なんだけど」

「クラスの友達と話していると、そんな内容がちらほら出てくるからさ。どうなの？」

さわ子は、澪以外4人が恋愛以上に興味を瞳に乗せて聞いている現状に狼狽した。自分も経験がなかったころは女友達とこういう話もしたが、先生に聞いたことはなかったような。しかし見方を変えれば、ここで正しい知識を与えておくことで健全な交際につながるのではないだろうか。それが、教師としてすべきことではないのか。そう思うと、さわ子は質問に答える気になった。

「たしかに痛いわよ。私の時は血がいつぱい出て・・・」
「いやあああああ！」

澪はこの生々しさに耐えきれなくなり、絶叫して部屋を出てしまった。

「あ、澪にはこの内容きつすぎたか・・・」

律は興味のあまり幼馴染を顧みなかったことによようやく気がついた。

「うまくアレンジいかねえな」

個人練習を終えて部屋に戻りながら、俺は青島に対して一人ごちていた。青島がメールで、納涼祭では一曲はみんなが知るメジャーな曲をするべきだと主張したからだ。このライブは曲に関する制限はないが、見に来る人のほとんどは自分たちのことを知らないだろう。青島の提案は本来だったら却下すべき内容だったが、観客のことも考慮するという意見はもつともだった。ということ、さつそく夏祭りらしい曲を自分たちが演奏しやすいようにアレンジをスタジオで試みたのだが、急な話だからかうまくいかなかった。どうするかな、と考えながらリビングに視線が向く。誰もいないなかで、わずかに開いた窓から風が入り込み、カーテンを揺らす。その隙間からは、バルコニーの向こうに海が見える。

夜の海、か。

みんなの部屋には行けない。あの六人の部屋に行きたい気持ちはもちろんある。当然だ。でも律の口ぶりからは内容がけっこうえぐ

い匂いがしていた。ということは……。

部屋に戻ると、海に面した窓のカーテンを開ける。雲もない、三日月に近いシルエットが水面に照らされている。

ちよっと、外に出てみるか。俺はケースに入れっぱなしにしていたアコースティックギターを取り出した。

砂浜は風も穏やか、寄せては返す波の音、虫のさざめき。鼻孔をくすぐる潮の香りが、月明かりに照らされた海岸をまとめ上げ、ひとつの芸術作品のような美しさを放っていた。

砂浜に腰をおろし、アコギを手取る。センチなことをしていると自分でも思う。だけど、ここにあるのは自然だけだ。俺以外人はいない。砂も海も、風も、なんにも言わないけれど俺の演奏は聞いてくれる。たまにはこういうことをしてもいいじゃないか。

指が自然に動き始め、その旋律に従って、俺は歌い始めた。

自分のための、音楽だった。

はあ、飛び出してきちゃったよ、私。

漣は後悔こそしていなかったが、きょう二回目の絶叫に落ち込んでいた。初体験の話は漣にはショックが大きすぎた。わかってはいたことだが、やっぱり痛い話はだめだ。

部屋には今更もどれない。あの話の続きは聞くになれなかった。

どうしよう。そう言えば、巧斗はスタジオにいるって言っていた。巧斗に対して不信感ばりばりだったから、せめてその認識だけは変えたかった。

意を決してスタジオまで行くが、明りは点いていなかった。廊下の明りが、真っ暗なスタジオを照らしているだけ。

この際、先生を探してみよう。

一人はいやだったが、かといってみんなとは今いられない。だから漣はこう考えた瞬間頭が爆発しそうになったが、必然的に、巧斗を探すことになった。

リビング、キッチン、お風呂。覚悟を決めて巧斗の部屋まで足を運んだが、どこにもいなかった。

巧斗先生、どこ？

これ以外に思い当たる場所がない。そう思って玄関に行ってみると、巧斗のサンダルがなかった。

「外に行ったのか・・・」

肝試しの光景がフラッシュバックし、漣の足がすくむ。あんなことが、もしかた起きたら・・・。

『でも、このまま巧斗と話さないまま合宿が終わって、いいの？』
心の中で、もう一人の自分がささやきかける。それは嫌だ。でも、怖いのもいやだ。

漣は頭の中が混乱してリビングに戻ってしまった。彼女にとってこの状況で外に出るといふ行為は清水の舞台から飛び降りるにも等しい行為だった。

ソファに座ったものの、漣は自分が情けなくて仕方がなかった。怖がりな自分、痛いのがいやな自分、恥ずかしいのが嫌な自分、さみしがり屋な自分。嫌いなところを挙げていけばきりがなかった。巧斗に対する認識を自覚しただけに、自分のいやなところが合宿でさらけ出されてしまって、巧斗は幻滅しているんじゃないだろうか。風に当たれば、すつきりするのかもしれない。そう思って、漣がバルコニーに続く窓を開いた時だった。

耳に届く、一回だけ聞いたことのある歌声と、アコースティックの温かな調べ。漣の目は、浜辺に座る一人の姿をとらえていた。月は、明るい光を投げかけている。

漣の足が自然に動いていた。玄関を抜け、砂浜に続く坂道を下る。走らないように、それでいてスピードは下げないように、巧斗に近づく。

自分でも不思議だった。あんなに外を拒んでいたのに、巧斗の姿を見たたん、身体が反射的に動いたのだ。自分の思いよりも、速く。

浜辺に着くと、歩くスピードを緩める。演奏と歌が、次第に大きくなっていく。それと比例して砂を踏みしめる音も大きくなって溲の耳を突くが、巧斗は演奏に集中しているのか、気付く気配がない。巧斗の背中が、はっきりと見えるところまで、溲は来た。巧斗の背中も練習でもライブでも見ている、見慣れたはずなのに、いつもより大きく見えたのはなぜだろう。

「巧斗先生……」

溲は、慈しむようにその名を呼んだ。

アコギを弾きながら、歌いながら、考えていた。こういう時じゃないと、考えられないと思ったから。

俺は、溲のことをどう思っているのだろう。

明らかに、ムギや唯たちに対するものとは違う。これははっきりしている。それは、溲とのかかわりがほかのメンバーよりも多いからなのか。それとも……。

「巧斗先生……」

俺の指がとまり、思考が現実引き戻された。背後からしたのは、今しがた思い描いていた声の主だった。

「溲、ど、どうしたんだ？」

考えていた本人が現れたものだから、俺は急なことで対処ができなかった。

「えっと、外を散歩していたら、巧斗先生の歌が聞こえて……」

なぜか溲も、形のよい頬が染まっていた。月の明りが強く、溲の顔がよく見えた。冷静な考えれば、怖がりの溲が夜の散歩をしていたというには大きな矛盾があったが、この時の俺はそこまで論理的に判断する余力がなかった。

「そっか。じゃあ座る？」

「え、いいんですか？お邪魔したんじゃ……」

たしかに、この状況を見られていたことに恥ずかしさはある。で

もそれで澪を追い返すことなどできなかった。澪は少しためらった後、間隔をあけて俺の斜め後ろに座った。そこに俺は、一抹の寂しさを覚える。

「巧斗先生、なにを歌ってたんですか？」

「なんとなく、手癖に任せて。この景色見てたら、なんか弾きたくなってるさ」

うわ、なんてキザなこと言ってるんだ。俺は平静を装いながら激しく後悔した。

「手癖で・・・」

澪に変な男だと思われたくなくて、俺はあわてて話題を変えた。

「澪、合宿に連れてきてくれてありがとう」

俺の急な感謝に、澪はあたふたしだした。

「そ、そんなこといいですよ。みんなと決めたことですから・・・」

「そのことでさ、聞きたいことあったんだけど。澪って、なんで俺が合宿行くことに賛成したんだ？」

そつだ。さわ姉に電話で報告した時に沸いた疑問だ。聞くなら今だろう。

「どうして、そう思うんですか？」

あ、そうきたか。俺は澪や梓まで賛成するとは思ってなかったからと答えた。

「そ、それは・・・。巧斗先生がいないと、練習ができないからですよ！そうなんです！」

澪の発言以上の理由が、その胸にしまっているような気がしたが、そこまで踏み込むことができない口調だったので、俺は強引に納得することにした。

「そ、そうなのか。まあおかげで、楽しかったよ。合宿。みんなと遊べたし、練習もできたし」

それ以外のこと。俺が、言葉にできないことがあった。だけど、それを認めたら自分がどうなるのかわからなかった。ふと視線を空に向けると、いつの間にか雲が月を隠していて、さっきよりも暗く

なっていることに気がついた。

「そのことなんですけど……。今日は、本当にごめんなさい。先生に迷惑かけて……」

迷惑、迷惑……。泣き出したことか。そんなこと気にするなよ、と言おうかとも思ったが、漣の表情を考えたら気休めにもならないし、かえって傷つけるだけのようには思えた。

「俺は気にしてないぞ。むしろ、漣の隠れた一面が見れてよかったかも」

俺の言葉に漣ははつきり分かるほど動揺していたが、急にしゅんとなって

「だけど私、こんな自分が時々いやになるんです。どうしてもっとみんなのように振る舞えないかな、って」

自覚も自己分析もできてるじゃないか。もともと、漣の場合はまじめな分自己否定につながりかねない。ここはフォローしなければ。「わかってるなら、いいじゃない。それに、俺だって自分の嫌いなところ、あるし」

「そうなんですか？」

「だれだってそうだよ。具体的な理由はなくても、みんな漠然とこうなりたいって思いはある。課題があると先延ばしにするし、学校行きたくなくなるときだってあるし。みんな同じだよ。漣だけが、特別ってわけじゃない」

「そういうもの、なんですか」

漣と視線があった。言葉以外にも俺は安心させるようにつなずく。心臓が妙な跳ね方をした。

「だ、だから漣、あわてずに行けばいいんだと思う。まだ高校生なんだし、求めすぎたら、いつか破裂しちゃうぞ。一つ一つ、直していけばいいじゃない」

まさか、漣にこんな悩みがあるなんてな。俺が初めて軽音部にきてからもう三カ月近くになるけれど、演奏以外でも話をするようになるなんて思わなかった。しかしそれは、裏を返せば顧問の期限が

刻々と迫っているということでもあった。

「そうですね。わたし、ちょっと考え方、変えてみます」

「ははは。じゃないと、文化祭大変なことになりそうだからなあ」

俺が言った瞬間、漣との空気が固まった。顧問の期間など考えていたからだろう。お互いに口も動かなかった。

「で、でもまだ、時間はあるし。それまで、ばっちり練習しないと
な」

あわてて言いながら、俺はむしように悲しくなった。なんでだ。

俺は、確かにみんなといることに安らぎにも似た感情を持っている。いじられても、いじっても、軽音のみんなといることが当たり前だと、いつの間にかそう思っていた自分。あの五人と一緒にいられなくなる時が来るなど、どうして今、漣を励ましているなかで思うのか。

わからなかった。そして、自分がどれだけこの部活が好きになっていたのか、心の底から思っていたのかに気付いた。

俺はしないとな、といった後の言葉が出なかった。感情が体内を駆け巡りすぎて、感情が言葉を殺していた。

そんな俺を見て、漣が立ちあがって、俺の前に立った。

「そうですね、巧斗先生。まだまだ、文化祭まで時間はあります」
その時、不思議なことが起こった。

それまで月を隠していた雲が消え、その青白い光が放たれる。漣は、その光を一身に受けていた。

俺は、言葉を失った。月明かりを浴び、俺にそういつてほほ笑む漣は、俺が見てきた女子の誰よりも美しかった。月光を受けた艶やかな黒髪が淡く照らしだされ、髪の毛の一本一本から全身へと、漣のシルエットが強調される。

まるで、神話の中から、漣が抜け出してきたかのように、漣は輝いていた。その神々しいまでの美しさと清らかさ、そして、俺を包み込んでゆく、優しさに満ちていた。

「・・・先生？」

「あ、あ、み、漣に言つとおりだな。時間はまだあるよな、そうだよな」

これまで、漣に対して思っていた事、漣と手をつないだこと、二人でしか知りえないことが、一気に頭の中を駆け巡った。そして、俺はただ一つの事実に気がついた。

俺は、漣のことが、好きなんだ。

そう気付いたとたんに、俺はこの状況がいかに甘いものであるかに激しく狼狽した。これまで二人きりになることは何回もあったのに、どうしてだ。

また無言の空気が流れる中で、俺はギターを手に取った。俺が逃げられるものは、これしかない。

「漣、歌えるか？」

俺の手は、漣がよく知っている曲を弾いていた。漣の顔が驚きの表情で満たされていく。

「これって、ふわふわ時間……」

巧斗のギターから流れるメロディは、テンポこそ遅いが明らかに『ふわふわ時間』だった。桜ヶ丘高校軽音部の、オリジナル曲。好きな人への気持ちをしつなく、それでいてポップに歌った曲だ。

「先生、どうしてこの曲を……」

巧斗は少し頬を紅くしながら

「初めて軽音に來た時から聞いてるんだ。タブ譜も見だし、いつの間にか覚えてたよ」

それよりも、漣が気にしたのは、巧斗の歌えるか、という発言だった。

「それよりも、これ、歌うんですか？」

「だって、これ漣が書いたんだろ？それに」

巧斗はギターを止め、目を閉じた。漣の耳に、砂浜の音たちが入ってくる。どこまでも落ち着く、天然のBGMだ。

「ここには、俺達しかいない。だから、どんな恥ずかしがり屋でも、歌えるぞ」

漣からすれば、巧斗がいるというだけで緊張感と恥ずかしさのゲージが振りきれそうなのに、それは言えなかった。漣は、今自分を取り巻く空気を壊してはいけないと直感で気づいていた。そして、巧斗がこういうなら、漣は納得できた。ひよっとしたら、昨日セッションしたことも影響しているのかもしれない。

漣はうなずくと、巧斗に対して微妙な距離を保ちながら、今度は隣に座った。

「じゃ、行くぞ」

巧斗がアコギのボディで四つ、カウントを入れた。

キミを見てると、いつもハートDOKI DOKI

揺れる思いはマシユマロ見たいにふわ ふわ

なんでなんだろう。歌いながら、漣は去年の文化祭よりも歌いやすくなっていることに驚いていた。

歌詞が、スツと出る。歌に、力を込められる。

もっと遠くに届いてほしいと、願う。

巧斗が奏でていく、アコースティックギターの柔らかかで暖かみのある音色に合わせて歌っていると、緊張感が薄れて、周りの光景が目に入らなくなった。漣の中に今あるのは、ギターと歌だけだった。それは、軽音部では経験したことのない体験だった。

気がつけば、巧斗と漣はそれからしばらく二人だけの演奏を続けていた。

こうして、俺の合宿は終わった。

だけど俺は、帰ってから漣のことが好きだと自覚しただけに、あの部活への悩みが増えることになった。

アコースティック・ムーンライト（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

えーと、この話は過去最大のボリュームです。

毎回長いのは自覚しているつもりだったんですが、今回は通常の倍くらいの量があります

どうしても、このラストで合宿を終わらせなかったもので・・・

三回にこだわらなければよかった。

さて、今回はついに溼を好きだと自覚した巧斗と軽音部がどうなるのか、そして、夏祭りはどうなるのか、というお話です

春まっさかりなのに夏の話。気にしないでくださいね

次回もお読みくだされば幸いです

キミは、誰とキスをする？

陽炎がおこるほどの暑さの中、梓は走っていた。憂との約束に間に合うか合わないかギリギリだった。納涼祭の鮮やかなポスターや看板が街にあふれ、すぐ近くまで迫っていることを知らせていた。

「ごめん、遅くなった！」

すでに待っていた憂に、梓は謝った。真夏のなかを動いたため息は荒く、服もべたつく。しかし、憂の反応は遅刻したことではなかった。

「・・・誰？」

こんがりと日に焼けた梓を見て、頭上にクエスチョンマークを浮かべる憂。その疑問の仕方は、姉の唯にそっくりだった。

「ほんとにわからなかったよ」

「んな大げさな・・・」

ファーストフードでトレイを持って座る梓は、憂の冗談とも本気ともとれる言葉にため息をついた。もつとも憂だからあまり怒りは感じない、

「でもなんでそんなに黒くなったの？」

「軽音の合宿行ってきたの。言っただけ？」

「お姉ちゃん、そんなに焼けてなかったよ？」

もつともな憂の疑問に、オレンジジュースを飲みながら梓は事実を述べる。

「私、結構はしゃいでたから・・・」

「へへ。なじんでるじゃない、梓ちゃん」

にこにこ笑顔で憂は感想を述べたが、なにかと憂に愚痴を言ってきただけに素直に認められなかった。

「お姉ちゃん、すつごく合宿楽しかったって言ってたよ。顧問の巧斗先生の以外な過去も知れたって」

今回の合宿は、梓にとって初めての本格的な練習だったといって

もよかった。確かに昼間のほとんどは海で遊んでいた気がするが、それでも午前中と夜は練習できていた。長時間スタジオに入るのはしんどくもあつたが、それ以上にバンドで何時間も練習ができるというのが新鮮で楽しかった。

「そうなんだ。確かに唯先輩は遊んでばかりだったけど、頑張ってたし……」

初日の深夜、唯の個人練習に付き合った梓は、唯のでたらめなところをちよつとだけ見直していた。

「梓ちゃん、合宿って何やったの？」

「練習なんだけど、ムギ先輩の別荘でやったんだよ！スタジオも広くて機材もすごいのばかりで……」

梓ははしゃぎながら合宿での思い出を振り返った。バーベキューやスイカ割り、肝試し。ガールズトークがかなりきわどい内容だったことまで、とにかく濃い四日間だったと憂に言った。ひとしきり話した後、しかし梓の顔が陰った。

「梓ちゃん、どうしたの？」

「いや、澪先輩のことなんだけど……。ちよつと気になることがあつて……。憂、唯先輩にも、誰にも話しちゃだめだよ？」

「わかった」

梓の真剣な声のトーンに、憂はうなずいた。

「さつき、さわ子先生がは……初体験の時のことについて、話してくれたって言ったよね。その時澪先輩が叫んで飛び出しちゃったって」

「うん」

「先輩、なかなか帰ってこなくてみんなで心配して。探しに行こうかってなった時にもつとつて来たんだけど、妙に嬉しそうな顔して。だけど律先輩が何度も理由を聞いても、話してくれなかった」

「そのとき、部屋にいたのは女の子全員？巧斗先生は？」

憂はムーンチャイルドで巧斗に会っているし、唯からよく部活の話聞くので、梓の話はいちいち前置きが必要ないほどには理解し

ていた。

「スタジオで練習するって言ってたよ」

「そっか。ね梓ちゃん、合宿中漣先輩が、いつもの先輩らしくない時なかった？」

「らしくない時？えーっと」

梓は、肝試しであるクールな漣が気絶するほど怖がりだったこと、巧斗を信頼しきっていた事、巧斗の話に反応するのが、自分たちよりも速かったことなどを思いだした。そして憂に、漣自身のことではないが、今になって想えば関連することも伝えた。憂はちよつと驚いた顔を見せる。憂にとって、漣はクールでしっかりした美人の先輩として映っていたいたからだった。

「そんなにあっただんだ……。しかもその大体に」

そう、巧斗が関係していたのだった。梓の心の中で、雲のように不安がゆつくりと横切っていく。これが意味するものを、梓は1つしか知らなかった。もしかして、漣が帰ってきた時妙に嬉しそうな顔をしたたのも……。

「ねえ、憂、どう思う？」

「そうだね、普通に考えたら」

憂の発したセリフは、梓の仮説とほぼ同じだった。もしこれが事実だとするなら、自分はどうすればいいのだろう。漣はしっかり者だし尊敬できる先輩である。巧斗も、ギタリストとして、バンドマンとして尊敬している。だけど自分の仮説は、軽音部そのものに対して漠然と、それでいて大きな不安を投げかけるものだった。自分は何かがあつた時、漣と部活、どっちを取るべきなのだろうか？

「梓ちゃん、大丈夫？思いつめた顔してるけど」

「うん。合宿楽しかったけど、なんでこんな悩むんだろ、私」

一度、自分なりに確認をとる必要性がある。梓はそれからどうするか考えようと決めた。

「では、この文章を見ていきましょう。この話は、時代として平安時代の中期。もっとも貴族が華やかだったときですね。紫式部は、この時代を生き、この源氏物語を書きました」

肌寒く感じるほどクーラーの効いた教室で、漑は夏期講習を受けていた。成績優秀な漑であったが、それはこうした日々の努力に裏打ちされているものだった。長期休暇のときは、こうして大手予備校に通っている。

しかし、今日は集中しようと思ってもなかなかできなかった。古典の題材は漑も好きな源氏物語であったにも関わらず、あまり講師の解説が耳の中に入っていない。ノートに取ろうとシャーペンを動かすが、それも時々止まってしまふ。

そう、合宿での出来事が、頭から離れないのだ。

去年も楽しかったけれど、今年の合宿の方が、思い出の数が多かった。その多くに巧斗がからんでいたのは言うまでもない。

なかでも巧斗とセッションしたこと（もっともさわ子もいたが）、浜辺で歌ったこと、肝試しのこと。思い出す度、頭が爆発しそうになるのを抑えねばならなかった。そしてそうなるときまって、漑は別のことに集中しようとする。まさに今がそうであった。

大切な時期なのに、大学に向けて頑張り始めるのは今が一番大切だと講師も言うのに、思い出に浸るのはおかしいだろう。

題材となる源氏物語は、物語の二部にあたる『柏木』の巻。光源氏の妻となった女三宮に一目会いたいと、柏木という登場人物がついに思いを告げる。しかし、これは明らかに不倫であり、女三宮は妊娠し、柏木はこのことに気付いた光源氏の皮肉と恐怖のあまり死亡してしまう。

正直、漑は源氏物語の昼ドラにも通じるドロドロめいた修羅場は好きじゃない。しかし、きらびやかな世界を舞台に広がる恋愛とその心理描写やすれ違いは少女漫画のようで、ここが漑の心をつかむこの柏木のように、強引だが思いを告げられてみたい、とさえ思ってしまう。そこまで想われるのは、女として幸せとさえいえる。

その願望は漠然としていて、それまでの漣であれば芸能人に憧れる心情のようなものだった。だが、今はどこかちがう。その告白されるというシチュエーションにイメージはわからないものの、だれかを想うということは、理解できそうだった。

軽音のみんなとは、隠し事はしない。というよりも自分の性質からできなかった。

なのに、今年の合宿はみんなに話しておきたくないことばかりだ。浜辺から部屋に戻るなり追求されはしたが、話さなかった。それは、話してしまうとからかわれてしまうという理由もあったが、それよりも自分の胸にしまっておきたい欲求の方が強かったからである。巧斗のアコギの調べに乗せて歌ったこと。それが、今の漣にとって最も大切な思い出になっていた。

この日の夏期講習はこんな葛藤で講義を受け続けたものだから、漣が予備校から出る際の表情は晴れなかった。

すっかりしなきゃだめなのに。合宿が終わってから、ずっとこうだ。

幾分落ち着いた日差しを浴びながら、漣は自分に喝を入れた。

律たちに隠し事をしているという認識はない。ただ、いつか話をすべきだという思いはある。もっとも、みんながどうという反応をするかは想像できないけど。

「漣じゃない。久しぶりね」

視線の先に、和がいた。赤いアンダーリムのメガネにショートヘアのボーイッシュな雰囲気は変わっていなかったが、赤のベストにデニムのスカートという服装。和の私服姿はほとんど見たことがないだけに、一瞬誰かわからなかった。それに、これまでの和となにかが違う気がした。具体的にどうとは言えないけど、あえて言うなら女っぽくなったというべきか。

「終業式以来・・・だっけ。和も夏期講習？」

和の手提げ鞆は漣以上に膨れている。テキストでいっばいなのだろうか。和は漣よりテストの成績がいいのに、夏期講習を受けてい

る。おそろくさつきまでの自分をみたら呆れるだろう。

「うん。澪、ちょっとお茶しない？いろいろ話したいし」

人見知りかつ思い出しにふけるので急がしかった澪は、予備校で知り合いはほとんどできなかった。だから和の提案に乗っかることにした。駅前の喫茶店に腰を落ち着ける。予備校より冷えていないクラーがありがたかった。

「唯から聞いたんだけど、合宿行ってきたんだって？」

アイステイーを口に運びながら和が言った。澪は会話の中身をあの程度予想していたから、落ち着いて返事をする。なぜ合宿のことどころも予防線を張るのかに疑問を抱きながら。

「そう。ムギの別荘でやったんだけど、去年より広がったし、いろんな意味ですごかった」

「そっか。でも唯、やっぱり遅刻したみたいね。しつかり言っておけばよかった」

和はため息をついた。

「いや、そこまでしなくても！憂ちゃんにませっきりにした私たちが・・・」

ほんとのところは、ほとんど眠れなくて唯の遅刻まで考慮できていなかった。というか、最近睡眠時間が短くなっている。

二人はそれから軽音のこと、勉強のこと、課題のことをしゃべりあった。澪にとって、和は落ち着いて会話できる数少ない友達だった。律や唯といると、どうしても自分は振り回されて心が休まない。みんな腹を割って話せる間柄ではあるけれど、澪はフォーローに回ってしまつので疲れることが多い。それでも、巧斗や梓が来てくれてだいぶラクにはなったのだが。ある意味、二人に負担が移ったと言えるのかもしれない。

「そう言えば和、唯から納涼祭の誘い断ったんでしょ？唯残念がってたよ」

合宿の帰り、納涼祭のことで盛り上がった。というのは、律が納涼祭で地元バンドのライブが開催されるという情報をみんなに伝え

たからである。その時、唯は和を誘ったが断られたといった。和にもそんなことするのかぐらいしか、その時は感想がなかった。それ以上に、巧斗と一緒に納涼祭に行けない事実のほうが大事だった。

「う、うん。ちょっと、外せない用事が出来て・・・」

驚いたことに、和はうつむきながら頬を染めていた。これは何かあるなと思うが、とにかく色恋沙汰にさっぱりな澪は触れない方がいいと判断するしかなかった。これが唯や律だったら問い詰めていただろう。

「そ、そうなんだ・・・。ごめん、変なこと聞いて」

「そんなことないよ。澪、なにあわててるのよ」

それは見たこともない和がいたからだ、という言葉を澪は何とか飲み込んで消化した。落ち着こうとアイスマルクティーのストローを口に運ぶ。

「それより澪、臨時顧問の先生ってどんな人？」

澪と同じく和もこのどきまぎした空気を変えようと話題を振った。しかし振られた澪は、巧斗のことだったからアイスマルクティーを噴き出しそうになった。予防線もここまで見越して張っていたわけではない。

「どんな人って・・・。いきなり何なの？」

「だって、話題になってるって一回言わなかった？山中先生の弟だからみんな噂するに決まってるじゃない」

「ど、どんな噂？」

澪の心が好奇と不安で染まった。

「変なのはないわよ。かつこいって話も出るし、彼女はいるのかとか・・・。だって、うちの学校って女子高でしょ？そこに先生の弟が来れば話題にもなるし、軽音に入りたがる子だっているかも・・・」

迂闊だった。澪は、どれほど自分が周りを気にかけていなかったかを痛感した。和の言うことはもっともだ。確かに、美人のさわ子にそっくりということは、男性として魅力ある容姿をしていること

になる。以前、律と唯が巧斗に猫耳カチューシャをつけようと追いかけてまわしたことがあった。その時巧斗は自分の顔が好きじゃないと言っていたっけ。だから澪は、穏やかな巧斗と演奏中のギャップに驚いたのだ。

しかし、巧斗は文化祭が終わるといなくなってしまう。

和の話聞きながら、澪はこれから三か月弱しかない時間をどう過ごせばいいのか考えていた。

スタジオに入った俺は、アートワークスのメンバーにカバー曲のアレンジを伝えた。ムスタングを弾き、具体的なイメージを口にする。

「へえ、そのアレンジなんだ。新しいじゃん」

青島が腕を組みながら感想を述べた。

「なんでこれになったんだ？タクラしくないと」

「お祭りだからっていう簡単な発想だよ。それにこんなノリの曲あんまやってないし」

室井の質問は、予想されたものだった。たしかに俺が作る曲は、オルタナというかポストロックというか、とにかく激しい。これでもバリエーションは高校よりも増えているつもりなのだが。アレンジを変えるだけだし、思いつきり『俺たち』らしくないことをするのもアリかなと思った。だから逆に、この案がみんなに承諾されるかという不安もあった。

「でもみんなが知ってるような曲だし、いいんじゃない？ただコピーするってのも芸がないし」

うなづく柏木。どうやらみんなの同意は得られたようだ。

テンポを確認して、一回ぶっつけで通すことにした。もっとも、これは練習というよりもセッションに近い。時間もないから、その場その場で組み立てていくのが最善だった。

「柏木、歌えたら歌っていいぞ」

俺の言葉に、ボーカルがマイクに向かって歌いだした。透き通る、張りのある歌声がスピーカーからあふれ出した。

柏木は原曲のキー通りに歌える。男女のキー関係なく、だ。これが、俺が柏木にボーカルで勝てないと思う一番の理由だった。柏木の音域の広さは天性と努力によってなしえるものだ。今やっている原曲はガールズボーカルなので、男子がそのキー通り歌えるかといわれれば、少なくとも俺は苦しい。しかし柏木は苦も無く歌い上げる。一回俺がアレンジを聴かせただけなのに合わせてくる。それは、青島も室井も同じだった。こちらの意図をくみ取り、あるいは意図を発信しながら曲をまとめ上げていく。だから俺は、このバンドを続けたいのだと思う。

何回か通しただけで、それぞれのパートは固まってきた。事前に原曲を聴いたこともあるのだろうが、ここまですんなり曲作りがいくのは珍しい。

「これ、やると楽しいな。イケるかも」

室井が軽くさっきまでのリズムを叩きながら言った。たしかにこのリズムは思わず身体が乗ってしまう。思いつきでやった割には、よくできた方だ。

「そーいやタク、お前旅行行ってきたらしいじゃん。土産とかないの？」

「あー・・・ごめん、忘れた」

合宿のことだ。俺の脳内で月光を浴びる溼の姿が浮かび、俺の心臓が跳ねあがる。

全員がつくりした表情を見せた。泊まっていたのはムギの別荘だし、近くに土産になりそうなものは売っていなかった。買う時間もなかったし。

「土産買う暇もないほど遊んだのか？おかしい・・・」

柏木が俺の作り話の矛盾点に気付き始めていた。しかし、俺にはこの話を貫き通すしか選択肢は残されていない。だって、合宿に行ったことがばれたら、あらぬ誤解を生みだしてどうなるかわかった

ものではない。

「帰りバタバタしてたんだよ。ごめんな」

「いや、ないならいいんだけどさ」

毒気を抜かれたように青島が言った。どうにか回避・・・できたようだ。

合宿のことを話したくないのは、何も社会的にマズいからだけじゃない。合宿は、あまりに多くの出来事が起こりすぎた。その一つ一つを思い返す度に、俺の頭は処理しきれなくなって、爆発しそうになる。

それは、漣のことが好きになつたからだ。

単純に、漣が可愛いからとかではない。彼女はいい面も悪い面もあるけど、そのどちらも受け入れようと思える。浜辺で見せた、俺を氣遣つてくれた優しさ。あれがあつたから、俺は漣に惚れたんだと思う。

ただ、俺は普通の男子だったら起こすべきアクションができなかった。メールなり、電話なり連絡を取ってデートに誘って、それから・・・。

無理だ。できるわけがない。

それは、俺が桜ヶ丘高校軽音部の顧問だからだ。好きになつてはいけないと自分に言い聞かせていたはずだったにもかかわらず。

なのに俺は、恋に落ちた。秋山漣というベ이스ストに。

ギターを練習をしながら、俺の頭はライブの出来ではなく、漣は夏祭りに来てくれるかという一点にだけ集中していた。

合宿は、たしかに楽しかった。感謝こそすれ、後悔なんて出ることもおかしかった。しかし俺は、どうして納涼祭のライブのことを話さなかったのかと、言っておかなかったのかと自分を責めた。そうすれば、漣に会う理由ができたのに。

顧問としての倫理と一人の男子の感情との間で、俺は経験したことのない二律背反に苦しんでいた。それは、このメンバーで演奏していても、晴れることはなかった。

キミは、誰とキスをする？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

えーと、まずタイトルですね

僕の大好きなマク スfのoppの歌詞から拝借しました

なんというか、あってるなと思ったもので（そうでもない？

前回と比べてだいぶ文字数が少ないですがきりがよかったんでこのあたりで切りました

というかおんなじような話を前に書いた気もしますが・・・。

次は本当に夏祭りの話になります。巧斗と澪は相手の気持ちに気付かないままですが、そんな中で祭りを迎えます。意外な事実とイベントが発生しますが・・・

次回もお読みくだされば幸いです

白昼夢は、現実になりえるか？

一陣の風が、壁一面の風車を揺らす。

なんて、満ち足りた気持ちなんだろう。

澪は、自分でも驚くほどの笑顔で振り返った。あの穏やかで、自分のすべてを包み込んでくれる人がそこにいる。

ちよつとはにかんで、澪は一步踏み出す。「その人」の手をとり、ぴよんと小さく飛んで横に並ぶ。おどろく「その人」に腕をからませながら、澪は言った。もちろん、指はしっかりと一本一本絡み合っている状態だ。

「・・・行こ？」

澪が見上げると、「あの人」はしょうがないな、とほほ笑む。夏の火照った空気の中を、二人は歩幅を合わせて歩いた。

「・・・夢？」

澪は、目を覚ました。夏期講習の予習復習で毎日夜遅くまで勉強していたからか、どうやら、歌詞を考えている最中に眠ってしまったらしい。それにしても、

「今の夢、なに？」

顔が熱くなっているのがわかる。自分の夢なのに、なんでこんなに恥ずかしいのだろうか。想像したこともない自分が、夢の中にいた。己の願望に正直で、嬉しそうだった。しかもあの夢の流れは・・・。

「どこの少女マンガよ、アレ。そ、それに一緒に歩いてたのって・・・」

澪の顔が、爆発したように赤くなった。パソコンの画面には、まだAメロの一行しか書けていない新曲の歌詞。ムギのメロディをMP3プレイヤーで何回も再生していたが、うまく書けなかった。しかし今、澪は夢の解釈というか推理並みの考察で必死になっていて、歌詞どころではなかった。

こつという夢を見るのは、初めてだった。一人になったり、眠りに落ちる前にいろいろな感情や思考があふれるように脳内を駆け巡ったことは何回もあったのだけれど、夢の形をとったことはなかった。『あの人』を見上げた時の表情と声の甘さ。自分ではしたことも言ったこともないのに、ごく自然にできていた。まるで、普段からしているかのようなだった。

なんでこんな夢をみたんだろう……。澪はため息をついた。その時だった。

唐突にケータイが震えだし、澪の思考は現実に戻された。サブディスプレイには、幼馴染、いや腐れ縁とでもいべき律の名前があった。

「もしもし」

「澪、遅いぞ！待ち合わせの時間過ぎてるじゃんか！」

「ええっ?!」

あわてて部屋の時計を確認する。律の言うとおりだった。納涼祭に軽音の五人で行こうと4時半に待ち合わせのはずだったのに、15分もオーバーしていた。

「ごめん律、すぐ出る！」

澪はノートパソコンを閉じると階段を駆け下りた。迂闊だった。

ケータイのアラームを設定するのを完全に忘れていた。いつもの自分だったら、こんな凡ミスは犯さない。

一階のリビングに降りると、キッチンで作業していた母親に問いかける。

「ママ、浴衣ってどこ？」

「そこにかかっているでしょー」

確かに母親の言うとおり、窓に吊るされた赤い浴衣が目にとまった。去年、澪の祖母が買ってくれたものである。

あわてて浴衣を身体に合わせながら、澪は夢のことを考え続けた。夢は潜在意識の現れであると聞いたことがある。その話が本当なら、あの夢は自分が欲している状況ということになる。

私が、望んでいる・・・？

夕焼けに染まる空を窓越しに見つめながら、澪は巧斗にこの浴衣を見てもらいたかったと思った。その時、はっと気づく。夢の中の自分は、浴衣を着ていたということ、そしてあの状況は、納涼祭そのものだった。

納涼祭のライブは、全部で三バンド出演することになっていた。

思いのほか少ないと思ったが、ライブは市長がごり押しに近い形で実施しただけに時間が確保できなかったという。それは仕方ないとしても、ステージはメインで使用されるものらしいから時間はあまりとれないという。

「お役所仕事ってことか」

訳知り顔で青島が言った。いやどのあたりが役所なんだ？社会を知ってますよ。うな口のきき方はまだできないぞ。俺たち。

「高校生の避雷針と社会人のロダン・ファブ・フォー、それに俺らか。持ち時間は準備も入れて三十分・・・こんなもんか」

室井が市の職員から郵送されてきた書類を見ながら言った。かつちりとした規格通りのフォントに書式。なんと市長のハンコまであるからには正式な書類であるのだろう。こういうのがお役所仕事な気がするが。

俺たちはライブのりハーサルのため、納涼祭の会場となる市役所前の大広場に来ていた。もうメインステージは鉄骨の骨組みではなく、アンプもスピーカーも搬入済みで、あとはラインを整理するまでは完成していたし出店もちらほらと見え始めていた。祭りの開始時間まであと3時間半である。日中の荒れ狂うように強い日差しが身体を容赦なく突き刺していく。こんなコンディションはギターにもアンプにも悪い。しかし有志の団体と一緒にメインステージを使用するわけだから仕方がない。そもそも夏祭りとされるイベントでライブというのは聞いたことがないから、市長に感謝すべきなのか

もしれない。

とはいうものの、完全な野外ライブは、俺以下アートワークスは初めてだ。音の作り方からライブの進め方まで、どの程度までライブハウスと同じなのか予想がつかない。ライブ担当の職員から細かい説明を聞きながら、俺はイメージを組み立てる。

漣が俺をまつすぐ見ている前で、どう演奏しようか・・・って、あれ？

ライブのイメージではなく、妄想に近い映像が頭で再生されて俺は狼狽した。あの五人が納涼祭に来るようなことは言っていた気がするが、それとライブを見に来るかは別問題だ。今更俺ライブに出るよ！なんて伝えることは恥ずかしくてできないし、漣だけに伝えなくても、ほかの4人に不公平だろう。だから、俺の感情通りに行動できなかつた。

対バンするほかの2バンドは知っていた。どちらもムーンチャイルドをメインに活動しているバンドではないが演奏を聞いたことがある。避雷針はコピーが中心だが3ピースバンドとは思えない音圧を持っている。ロダン・ファブ・フォーは中年の、いわゆる親父バンドだ。落ち着いた雰囲気を持ち、横ノリの曲を主体とする。この三バンドでは一番耳にいいだろう。俺たちのバンドはテンポもリズムも音色も、年齢によっては拒否感を持つ人もいる。なのになんで選ばれたのか、わからない。

こんな疑問を直接職員にするほど、俺は自分に素直ではない。

ライブの開始そのものは五時半から。順番は避雷針、アートワークス、ロダン・ファブ・フォーがトリを務める。時間厳守であり、開始時間の五分前にはすでにいなくてはならない。納涼祭は五時過ぎにスタートするから、ライブ前にはしゃげないだろう。

時間があるので、順番通りにリハーサルがはじまった。準備の段階だが、野外なため音の作り方を大幅に変える必要があるなど柏木青島に助言した。

青島は避雷針の音を作るPAを見てうなずいた。どういう経緯で

選出されたのかは俺の知るところではなかったが、音が荒くノイズもひどい。全体的に歪んでもいる。夏フェスはここまで行かないから、全体的に原音を落ち着かせた方が聞こえやすくなるだろう。

だが、柏木は俺の意見をまともに聞いていなかった。ケータイを見つつ、何かを期待したようにサブディスプレイを確認している。

「柏木、聞いてんのか？音作り、時間ないから言ってるのに」

「あ、ああ。そこはタクに任せる」

「いや、そうじゃなくて……。本番出来なくても知らんぞ」

茶化すように、なぜか室井が口をはさんだ。

「ユキ、長野には必ず来いよ」

「そりゃ行くさ！なんだよいきなり……」

あれ、いつもの柏木じゃない。なんとというか、表現がオーバーじゃない。

「いや、今のお前だと来ない気がしただけ」

ニヤつく室井の顔が、なぜか俺の癪にさわった。

待ち合わせ場所の駅前に着くと、だいぶ待たせてしまっていたからか4人手持ちぶたさの様子を隠す風もなく、漣は謝るしかなかった。

「漣、なんで遅刻したんだ？珍しい」

いつも時間きっかりに行動する幼馴染が大幅な遅刻をしたことに納得がいかないのか、律は腕を組んで質問した。

まさか夢の分析で遅刻したと言えるわけがなく、漣は寝過したとだけ答えた。

「そうなんですか……」

律だけでなく、なぜか梓までも疑問に満ちた視線を投げかけてくるのに、漣は驚いた。律はわかるとしても、自分をフォローしてくれてもいた梓が、なぜ？

「まあここで尋問してたら時間が無くなっちゃう。行くか！」

律は気持ちを切り替えたのか号令を出す。五人は浴衣をひるがえして、納涼祭が開かれる会場を目指した。

開始時刻をすでに回ったからか、市役所近くの大広場は人でごった返していた。子供が駆け回り、出店の匂いが胃袋を刺激する。ざわめく音が漣たちの周囲を揺らして、唯は待ちきれない様子で、一瞬の間にかけて出してしまっていた。

「お祭りだ！」

「危ないから気をつけろ！」

動物のように本能に忠実な唯に向けて、漣は叫んだ。当の本人は鯛焼きの出店でさっそく食べ始めていて聞いていなかった。

「はー。やっぱり唯が……っておい！」

気がつくと、律もムギも唯に同調してしまつて、隣にいるのは梓だけだった。

「先輩たち相変わらずですね……」

呆れた口調だったが、表情はむしろ笑っていた。漣は、梓が軽音部に本当の意味でなじんだことを悟った。

「でも、これが私たちらしいといえば、らしいな」

そう、これが、巧斗のいない時期だったならば、素直な気持ちで言えただろう。だが今は、何か欠けている感覚と罪悪感が伴っていた。

「そうですね」

その時、漣の耳は夏祭りに相応しくない音楽をとらえた。激しいギター之音、リズムを刻むドラムの深い音色。今度はリング飴を食べるのに夢中になっていた唯、律、ムギも演奏に反応した。この音は、バンドでしか出せない。

「お、始まったな。行こうぜみんな」

律の言葉で、漣以下五人はメインステージに近づいた。自分たちとほぼ同じ高校生らしいバンドだった。J・ROCKのコピーだったが、高校生代表とされるだけあって演奏に力があつた。

「なんで私たち選ばれなかったんだらうね？」

「唯先輩、いくらなんでも無謀ですよ・・・」

梓は本気でそう思っているらしい唯に呆れた。ライブと言えば新歓に文化祭だけという、ライブハウスに一回も出たことがないバンドにそんな話が来るわけがなかった。演奏そのものが劣っていると梓は考えていないが、外に出て活動しているといえないのでは大きな差があった。

「そうだな。でも私たちも負けて」

その時漣は、視界の端でよく知った姿が映った気がした。確認しようとして顔を動かすが、人ごみがひどくて確かめることはできなかった。

「漣、どうしたんだ？」

「う、ううん、なんでもない」

これ以上広げる話じゃないし、見間違いかもしれない。そしてその感情は、ムギの一声で別の感情に書きかえられてしまった。

「あ、巧斗先生だ」

漣はムギが指さす方に視線を移した。ボーダー柄のTシャツに水色のシャツ、グレーのクロップドパンツといういでたちの巧斗とオートワークスのバンドメンバーがいた。なぜかボーカルだけいなかったのだが、漣はさつき見た夢と会えないと思っていた巧斗に会えたという感動で気づかなかった。でもなんでここにいるのだろうか？バンドメンバーと一緒にだったことに漣は胸をなでおろしたものの、なぜか一瞬だけ、女の人と一緒にではないかと不安になったことが恥ずかしくなった。

「たくちゃん！」

律がぴよんぴよん跳ねながら恥ずかしがっている巧斗のそばに駆け寄った。それに唯が続く。漣は二人を注意する振りしながら、観客の間を縫ってごく自然に近づくように心がけた。急ぐことなくそれでいて、できるだけ早く。夢のことがあって、これまでの漣だったらまともに顔を見ることすらできなかつただろう。しかし今は、巧斗の近くにいたいという思いが身体を駆け巡っていた。

「あれ、みんな来たの？」

驚く巧斗に対して、律は唇をとんがらせた。

「それはこっちの台詞さ！なんでライブでるって言うてくれなかったんだよ！」

「えっ、巧斗先生、ライブ出るんですか？」

漣は、突然の情報に脳の処理が追いつかなかった。合宿のとき、そんなことは一言も言っていなかった。メインステージをよく見ると、プログラムには避雷針、ロダン・ファブ・フォーに挟まれてアトワークスの名前があった。

ひよっとして、なにか言えない事情でもあったのだろうか。そう前向きに考えようとするが、伝えてくれなかった事實は、漣を落ち込ませるのに十分だった。落ち込むのは筋違いだ、という自覚はあったとしても、だ。

「ご、ごめんな。言おうかどうか迷ってたら逃しちゃって」

巧斗は後悔しているのか、素直に謝罪した。

納涼祭で会うには、タイミングが悪かった。ライブの後だったらこのバツの悪さもなく、会話を楽しむことができただろう。しかし、この想像はもはや後の祭りだった。室井も青島も、俺の状況を面白がっているのかフォローの一つ投げかけてこなかった。

五人は俺が納涼祭ライブの告知をしなかったことに腹を立てている。しかしなんで律は事前に知っていたのだろう？

「律、なんで俺が出るって知ってたんだ？言っただけなのは悪かったけど……」

少し自慢げに鼻先を擦って律は答えた。

「納涼祭のホームページがあつてさ、そこで発表されてたんだよ」なるほど、それは俺も知らなかった。今ではどんな情報もネットで入手できる時代だが、まさか夏フェスのようにホームページで発表されるなんて。ちょっと恥ずかしい。

「巧斗先生、どんな曲やるんですか？」

漣と視線が重なって、俺は心臓がドキツとするのを感じた。みんな今日は夏祭りということ、それぞれ艶やかな浴衣に身を包んでいる。制服姿に慣れているせいもあるが、みんな普段しない髪形と浴衣が放つ魔力としか表現できない魅力があつて、俺は内心たじろいでいた。特に漣は、初めて髪をまとめてあげている。色が白く、墨のように真黒な髪を持つ漣は、五人の中で赤い浴衣が一番似合っていた。これは俺が惚れていることもあるだろうが、バンドメンバーも誰もいない状況だったら、見とれてしばらく動けなかつただろう。

「ああ、ボーカル曲が四つに、インストがひと・・・」

「うち一曲は、みんなが知ってる曲のアレンジだから。巧斗がうまく具合にネタ作ってきてくれて」

さっきまで事の次第を見守っていた青島が急に会話に割り込んできました。

「アレンジ？コピーじゃなくてですか？」

梓が音楽の話に食いついてきた。普段はツインテールだが、今日は右だけに髪の毛を集めている。

「そ、俺もびつくりするくらいに・・・」

思いつきりハードルをあげてくれる青島を、室井が制した。しかし、それは俺をフォロウするためではなかつた。

「もう行かないと。時間だぞ」

腕時計を確認すると、出番まであと10分を切っていた。

「そうだな。じゃあ、またな」

本当はもっと漣と話していたかった。しかし、こんな状況ではそれもかなわなかつた。それでも、ステージ裏に向かう俺の足取りは、ここ最近で一番軽かつた。

納涼祭でライブは初めてという宣伝が功を奏したのか、それとまた

だ単に珍しいからのか、見物する数は増すばかりだった。五人は固まっているからはぐれる心配はなさそうだったが、見物人と押し合いへしあいする形になったので身動きが取れなかった。

「たくちゃん、どんな曲作っただろ」

「アレンジが面白いって、言ってたよね」

律とムギは期待を隠そうともしなかった。唯はぴよこぴよこ動きながらステージに注目している。

漣は、ムーンチャイルドでのライブを思い出していた。初めて、本気の巧斗の演奏を見たあの時は、ステージまで1メートルほどしか離れていなかった。それこそ、はじけ飛ぶ汗がかかるくらいに。ただ今回は、ステージまでの距離は長く、視線も上がる。そしてこの人ばかり。自分では絶対にこんな中でライブなんかできっこないだろう。今日は、去年の文化祭よりも段違いにすごい。

アートワークスがステージに登場すると、どこからともなく拍手が起こった。その瞬間、漣のやつり目がちの眼は、もう巧斗しかとらえていなかった。だから、隣で漣を複雑な表情で観察する梓に気付けなかった。

セッティングが終わるとすぐ、ボーカルの柏木優季がMCに入った。

「それではアートワークスですどうぞよろしくお願いします！一曲目、fly universe！」

巧斗以下4人はめっちゃくちゃにそれぞれの楽器を奏で始めた。そして強烈な音圧とメロディがレーザーのように観客に向けて放射される。

相変わらず、巧斗の演奏はすごかった。

合宿のセッション、浜辺でのアコースティック・ギターを弾いていた時とは、180度違う表情だった。荒れ狂う海のような激しい演奏なのに、リズムとフレーズがぶれることはない。広いステージだからか、動き回る範囲も、アクションもムーンチャイルドの時とは数倍のハチャメチャぶりだった。

観客の何人かが、そんな巧斗を見て笑う声が聞こえた。それは、これだけの動きをしていながら演奏ができるすごさが分からないからだ。漣は笑った人に怒りを覚えるとともに、その笑いをものともせず弾き続けるアートワークスを、巧斗をまぶしく見つめた。自分の演奏が笑われたら、漣はその場で泣き出してしまいかもしれなかった。

2曲目の4打ち、3曲目の落ち着いたインストも聞いたことのある曲で、アートワークスのバンドメンバーが言ったカバーではなかった。どちらもムーンチャイルドで演奏したものだだったが、どちらもその時よりも少しだけテンポが速かった。

漣はそのカバーをわくわくしながら待っていた。巧斗の仲間が『いつもと違う』と言っていた曲は、どういうものなのだろう。

そんな漣だから、時折自分に向ける、梓の視線に気付けなかった。梓は、憂に言った通り、今日、自分の中に渦巻く疑問を解決しようと思いに決めていた。だから、巧斗がライブをするというこの状況を逃すわけにはいかなかった。結果、尊敬するベーシストの先輩を観察する度に、疑問が確信に変わっていった。

とはいっても、確信になったところで自分で何か動こうと梓は考えているわけではない。来たるべき時に備えて、覚悟だけはおこうと、考えているのみである。まだ、バンドを優先するか、漣を優先するか結論は出ていないが。

「梓、タクちゃんのライブが終わったらさ・・・」

律が梓にこっそり耳打ちする。その内容から梓は律に質問した。

「律先輩、合宿の時もそうでしたけど、なんで」

「幼馴染だから かな」

そういう律の表情は、笑いながらもその奥に母性を感じさせた。メインボーカルである柏木がMCを始めた。

「さて、僕たちアートワークスも、残り2曲です。ありがとっ、でもまだほかにバンドあるからね。4曲目は、みなさんが知ってほしい曲をアレンジしました。乗ってくれたら嬉しいですよ」

巧斗はみんなに目線で合図したように見えた。ゆっくりりで4カウント。

水色のムスタングから流れてきたのは、切ないメロディだった。アルペジオを弾いているうちに柏木が、歌う。

キミと夏の終わり、将来の夢、大きな希望忘れない
小学生のころ、夏休みのお昼にやっていたドラマの主題歌だ。溲たちといくらも変わらないガールズバンドの曲だった。

ワンフレーズ歌った後の、無音。

そこから、ドラムのバスドラが軽やかなテンポを刻み始めた。アートワークスが、同じリズムを、取る。拍の緊張感と期待感、躍動感が一気に高まった。

ダンスリズムが、解放された。

もともになった曲は、夏の別れを歌った、切ないバラード。しかしアートワークスのアレンジはダンスロックとでもいうべき、リズム隊の四つ打ちを基本とした、軽快な曲に仕上がっていた。

観客の盛り上がりは急激に上がった。知っている曲ということとおそらく大多数の人がした予想を裏切るアレンジ、それを可能にするアートワークスの高い演奏力とボーカルのうまさ。ガールズボーカルなのに、原曲のキー通りに苦も無く歌い続ける柏木に溲は気付いた。それまでは男らしい声だったのに。

そして巧斗は、とびきりの笑顔を見せていた。口を歌に合わせて動かしながらステップを刻みつつギターを弾いている。

そして、サビに入る絶妙のタイミングで巧斗はギターを右肩越しにストラップでくるっと回転させた。

「ギターが回った!!!」

そのパフォーマンスは、溲、唯はもちろん、ライブを見ている数百人の観客の度肝を抜き、歓声は一つの頂点を迎えた。そんなことはテレビでもあるかないか、生で見たことがある人はわずかだった。その流れのまま五曲目に突入、ハイテンションかつスピード感あふれる歌ものを盛大にぶちあげて、アートワークスのライブは終わ

った。

「すごかったねー、今のバンド」

「ギターがこう、くるっといったの、どうやってんだ？」

観客の興奮が言葉になって現れ始めた。漣はその言葉を聞くたびに、なぜか誇らしくなるのと同時にさびしくなった。巧斗の演奏が多くの人に触れるのはもちろん嬉しいが、そのたびに巧斗が遠くに行っているような気がしていたからだった。

「漣、タクちゃんをねぎらいに行こうぜい！」

「調子いいな、律」

それでも、漣自体が興奮していたというのもあって、五人は連れだってステージまで熱気が冷めそうにない観客をなんとかかき分けて進んだ。

「はー、あちいー！」

俺はのどのSOSを解除すべく、控えのブースに入るなりのもとへスポーツ飲料水を流し込んだ。ライブの盛り上がりからか、俺は体力のほとんどを使うほど暴れ、弾いた。ポケットモンスターであれば、すぐにもポケモンセンターに運び込まれるくらいだっただろう。

「タクのギター回し久々に見たな。シンの高校でライブやった時以來か？」

柏木はタオルで汗を拭き、息も荒く質問した。

「そんな気もするけど・・・覚えてないな」

ギター回しをしたのは賭けだった。あのテンションでもっとも盛り上がるパフォーマンスを選択したが、できるかどうかは五分五分だった。タイミングが狂えば演奏がおじゃんになってしまうからだった。

「でも、サティスファクションの前にこれだけ盛り上がってもらえてよかった」

青島は満足そうに答えた。8月の終盤は長野でライブ合宿を行うが、それは9月のライブに向けての意味合いもあった。その前にこうして演奏ができたということは、いい流れでかの敷居の高いライブハウスに乗り込めるだろう。

「今回はタクのアレンジ案がよすぎた。アレは観客におおつけだったし」

「ちがう。それだけ俺らが成長したんだよ。大学入りたてだったらできなかった」

室井の賛辞を、俺はバンドへの賛辞に変換した。軽やかなダンス・ロックというのは、実は難しいジャンルだと俺は感じていた。グルーブが絶対にぶれてはならないし、クリーンで通すなら通さねばならない。その中で曲のサビなりメロなりを表現するのだから。この曲が盛り上がったということは、つまり俺たちアートワークスのグルーブがぶれていなかったという事実につながる。

「そうだな。合宿はみっちりできそうだ」

柏木は満足そうにうなづいた時だった。

「タクちゃん、お疲れ！ライブすごかった〜！」

唯以下いつもの五人が登場。あれ、ここは関係者以外立ち入り禁止だったはず。しかし澁の姿を認めたとたん、その常識が薄らいだ。にやにやするバンドメンバーを無視して、俺は精神を振りしぼって五人を外に追い出そうとした。

「タク、それするんだったらお前も外で話して来い」

「室井、なんでそうなるんだよ」

「まずこの狭い空間じゃキャパオーバーだ。そして、追い出したところでお前は結局悶々とする。それが気持ち悪い」

室井の強い口調と、それに同調する柏木と青島の空気に説得されて、俺は外に出た。澁に会える。そう思うと、メンバーの心遣いに感謝した。

「あ、巧斗先生出てきたよ」

ちよつと困ったような顔で現れた巧斗は、まだ疲れているように溲は見えた。あれだけ動いたのだからそれも仕方ないだろう。それでも律儀に自分たちに対応してくれる顧問、いや溲にとっては同時に尊敬するバンドマンであり、会えばドキドキする男子だった。

「まさか、シークレットベースをダンスロックアレンジにするなんて。コピーはいくつかありますけど、あの発想はありませんでした」
梓が梓らしい観点から感想を述べていた。もちろん原曲は知っているし、ダンスロックについても好きなバンドはある。しかしそれを結びつけた巧斗を、素直に尊敬していた。

「ちようどフランチ・フェルディナンドを合宿で聞いてたつてもあるし。展開としてはもつと練り直した方が・・・」
揚々としやべり始めた巧斗の解説を。律はなぜか遮った。

「まあその話は置いといて。タクちゃん、これから予定ある？うちらと納涼祭回らない？」

「え、だけどここのあとバンド控えてるし」

溲は巧斗の言葉に軽い落胆を覚えた。律の提案に期待して五秒も経っていなかった。

「そうですね、先生は出演者ですから・・・」

溲に目には、うつすらと涙がたまっていた。

「わ、わかった！回るよ！」

教え子の思いもかけない涙に動揺したのか。とっさに巧斗は前言葉を撤回した。

「ほんとですか？」

基本的に押すことを知らない溲は、無意識のうちに巧斗の意思決定に大きくかかわってしまったとは思えない。彼女にとっては律たちと一緒にはいえとも回れるという事実だけが大事だった。

「ああ。大丈夫だろ、室井が何とかしてくれる」

「よし、それじゃあタクちゃん、私レモンのかき氷！」

「あ、りっちゃんずるい！私はいちご！」

巧斗は唯と律に引つ張られる形で、かき氷の的屋で財布をしぶしぶ取り出す羽目になった。

「二人とも、これがねらいだったんじゃない……」

呆れた様子でかき氷をパクつく唯と律を見ていた澁だったが、目の前に差し出された蒼いシロップがかかった容器に気をそがれた。

「澁がブルーハワイで、ムギがメロン。梓は抹茶だったよな？」

自分は青リンゴのシロップを選択した巧斗が、かき氷を差し出していた。

「え、いいんですか？」

「二人だけつてのは不公平だろ」

ちよつと恥ずかしかつて言う巧斗が可愛く思えた澁は、少し顔がほころんだ。

「ありがとうございます」

「おーし、次は射的だぜ！みんないくよ！」

かき氷を食べ終えた律はいきなりかけ出した。それに面白かったのか、唯、ムギ、梓も一緒に走ってしまった。

「ちよ、ちよつとみんな！」

いきなりのことに対応できなかった澁は、離れまいとあわてて走り出したが人ごみがひどく、すぐに仲間を見失ってしまった。

「うそ……」

「あー。こりゃひでえな」

泣きそうになった澁の隣で、心底呆れたトーンを隠そうともしないで巧斗が言った。巧斗にはまだ元気に走り回るだけの体力が残っていないのだろう。

「どうしよう……」

かき氷の容器を持つ手が震えた。みんなと一緒に入れないのはさびしいのはもちろん、巧斗と二人きりというこの状況をうまく切り抜けられる自信がなかったのである。心臓は寂しさやとは全く関係なくパンク。ロックのようなビートを刻んでいた。

「おれも今更戻れないしな。澁、みんなが見つかるまで、納涼祭、

一緒に回るか？」

漣は視線をあげた。巧斗の優しい瞳が、そこにあった。

思考が家で見た夢をリアルに再演するわ、脳の別のところが、棚からぼた餅だとか、降ってわいたような話だとかの慣用句を出してくるわで漣はパニックになりそうだった。でも、このチャンスを利用してはいけない、と無意識に感じていた。

「はい……。私で、よければ」

もっとも、かわいくにつこりと微笑んで、というわけにはいかず、うつむいて言った。しかし周囲の音に負けない音量はあった。

「よ、よし。じゃあ……」

そう思っ、一歩踏み出そうと、漣は眼をあげた。

その視線が固まった。隣にいる巧斗も、同じだった。

「和……?」

「あれ、漣？」

視界の中心にいたのは。藍色の浴衣を身にまとった漣の大切な友達と、さっきまでステージで歌っていた人。

「柏木が……。なんでここに」

真鍋和と柏木優季は、固くお互いの手を握り締めあったまま、漣と巧斗の二人を見つめ返していた。

白昼夢は、現実になりえるか？（後書き）

ということので16話です

お読みいただきありがとうございます

和と柏木は付き合っているのか？

それは次回のお話ですが、伏線は結構張ってありました

ところで、作中にあったダンスロックアレンジですが

私ウツキーのオリジナル・・・というかやりたいアレンジです

いいですよ、ノリのいい曲って。

実際夏祭りでライブなんかあり得ない！なんて思う方がいらっしやるかもしれませんが、これも私の願望です。

もちろんストーリーに絡めるつもりですが、どうかな、できるかな・

次回もおよみいただければ幸いです

打ちあがる思いを、受け止めるには

とりあえず、状況を確認しようと、俺の頭内は一致していた。耳に容赦なく飛び込んでくる周囲の騒ぎが、急速に消えていった。

俺は漣と一緒にいる。それは、仕方がないことだ。だって、置いてきぼりにされた漣を放っておくわけにはいかないし。

いや今の段階ではそれはいいとして、問題は目の前にいる二人だ。藍色の浴衣に黄色の帯を巻いた赤いアンダーリムのメガネが特徴の和ちゃん。ムーンチャイルドのライブに来てくれたから当然知っている。問題は和ちゃんの隣にいる男だ。

心底驚いた表情で立ち尽くす、俺のバンドのボーカル。しかし手は、いわゆる、恋人つなぎのままほごうとしない。これはどういうことだ？現実の一つの事実を導き出したが、俺はその事実の衝撃に耐えることができなかった。

あの柏木に、カノジヨ？

なぜかと言えば、柏木はモテないことで（仲間の内で）定評があったからだ。好きになった女子はことごとく彼氏持ちか、アタックするとすぐ彼氏ができたりで、俺らの間では一種のお約束にさえなりかけていた。だから、目の前で女の子と肩を寄せ合って、手をつないで、甘い笑顔を浮かべている柏木が存在していることに違和感を覚えたのだ。

お互い出くわしたことが想定外だったのか、俺と漣も、柏木も和ちゃんもなんらアクションを起こさなかった。いや、すくなくとも俺はできなかった。柏木が俺の知らない子だったらよかったのかもしれないが、ここに鉢合わせしてしまった四人は、それぞれを知っている。

過去に、友達が彼女とのデート中に出くわしたことはある。でもその時は決まって一人か男友達と一緒にで、今のように隣に女子がいたことはなかった。だからどう対応すべきか、わからなかったのだ。

「よ、よう、タク。お前も回ってたのか」

ついに柏木が口を開いたが、動揺しているのが丸わかりだった。

「ああ。それより、今日のライブにあんま乗り気じゃなかったのって……」

俺の言葉を聞いた柏木はついに和ちゃんをつないでいた手を離し、すばやく俺に近づくと肩をがしつとつかんだ。

「そうだけど。なんでそんなこととの前で言うんだよ。昔っからタクは鈍感だけど、これくらい気付いて……」

「あいな」

柏木の言い方に軽い怒りを覚えた俺はボーカルの突き放した。

「いきなり彼女つれてきたバンドメンバーを祝福しろって言うのは難易度が高いぞ。前々から違和感があったけど。なんで言わなかったんだよ」

「え、青島と室井に聞かれたからってつきりお前にも話が伝わってるもんだと……」

巧斗と柏木が話始めたので、漣は柔らかい笑みを柏木に向ける和に話しかけた。漣も、目の前で和が恋人と一緒にいるという光景が理解できなかった。

「和、今の人って……?」

「あ、ユキさんのこと?」

余裕ある笑みを浮かべた和は、漣がドキツとするほど大人の香りがした。

「うん……。もしかして、二人、その……付き合ってるの?」
はにかみながら、和はゆっくりとうなずいた。

「といっても、今日で六日目……。だけどね。前夏期講習の帰りに、漣とお茶した後、ユキさんから……」

俯いてもじもじしながら、しかし幸せさを隠すことなく言う和を漣は、可愛いと思うのと同時にうらやましさなぜか、こみあげてき

た。

「そうだったんだ……。おめでとう、和。あでも、唯ってこのことは……」

「ありがとう。ううん、唯にはまだしゃべってないわ。だから、この話は唯にはまだ黙っててね。私が直接言わないとすねると思うから」

「はは、そうかも」

雲をつかむのが難しいように、唯のふわふわした性格をもっともよく知る幼馴染の和でなければ言えない台詞だった。

すると今度は、当然のように和が質問する側にまわった。

「それで漣は、なんでさわ子先生の弟さんと一緒にいるの？ひよっとして漣も……」

「ち、違う、和！」

誤解されるのを阻止しようと、漣の口調が強くなる。

「律たちを見失って、それで……。成り行き、なの」

「そう……。なんだ」

漣に圧倒されて和はうなずくのみだった。和にしてみれば、この漣の反応が答えになっているも同然だった。が、本人にはまだ自覚がないのだろうと推測すると納得がいった。

こうして話していると、巧斗との会話を切り上げた柏木が二人に話しかけた。

「漣ちゃん、ごめんね。邪魔しちゃって」

「い、いえ、私たちはそんな関係じゃ……」

柏木はこの反応におもしろくなさそうな反応を示した。

「タクと一緒に……。まあいいや。漣ちゃん、タクのこと、よろしくね。あいつのことだから、苦労するかもしれないけど。けっこういいやつだから」

まるで親戚から子供を頼みこむような柏木の言葉に、漣は動揺した。これでは、巧斗と自分がセットになるのが確定しているようなものではないか。

「えっと、はい、頑張ります・・・」

「ほら、澪あわててる。澪は繊細なんだから、そこまで言わなくてもいいわよ」

「そっか」

付き合ってから六日目と和は言っていたが、そうだとは思えないほど息の合った会話だった。

「じゃ澪、行くね」

「う、うん。じゃあ・・・」

そうして和と柏木は再び手を取り合い、肩を寄せて人ごみの中に消えた。

あの和が。失礼な話だが、和はあまり恋愛に関心がなさそうだった。むしろ、唯の世話でいっばいだったというか。

それ以上に澪にとって衝撃だったのは、『身近な人に恋人ができた』という事実だった。それまで、そういうものは造り物でしか見たことがなかった。よく知る友達が、男子と仲睦まじく歩いている。それは、向かいの川岸にしかなかった恋愛が、川を飛び越えて澪のもとにやってきた瞬間だった。

もっとも、澪が具体的に恋愛というものを考えるのはまだ先のことである。

「柏木のやろう・・・」

澪の隣に移動しながら、俺はバンドのボーカルに対して内心むくれていた。意外だったこともあるが、それ以上に

「澪ちゃんとお前、どうなってんの？」

という一言が、俺の心を強く刺したまま離れない。なんでもないと行ってしまつと、自分に大きなウソをついている気がする。そうではなくても、合宿で芽生えてしまった澪への気持ちを、抑えようとしている自分があるだけに、見透かされた気持ちになった。

しかし今は、柏木のことと混乱しているときでも、自分の恋心に

ついで考察している時でもなかった。

「漣、柏木が変なこと言わなかった？」

二人が消えた先を見つめている漣に、俺は落ち着いている風を装って話しかけた。

「い、いえ、そんなことは、何も・・・」

漣の戸惑い振りから、あの野郎がなにか吹き込んだことは明らかだった。それがなんなか、非常に気になるところではあったが、俺も漣も、今しがた起こったことのインパクトが強すぎたのか、しばらく言葉もなく、視線も合わせなかった。

「と、とりあえず行こうか。みんなに会うかもしれないし」

「そ、そうですね」

俺も漣もぎこちなく頷きながら、言った。

相変わらず人の数はひどく、出店も多かった。このあたりの夏祭りでは、一番規模がでかいらしいから当然なのかもしれない。ということは、さっきの柏木と和ちゃんみたいな、いわゆるカップルも多いわけで・・・。

どこもかしこも、というわけではなかったが、それでも仲よさそうに歩いている男女を見ると、妙にこの状況を意識してしまう。この状況が初めてではないにも関わらず、だ。さわ姉もいるし、女子から男扱いされたことが皆無だったこともあって、女子と二人きりで行動すること自体、ある程度の経験はあったにもかかわらず、だ。俺はどうすればいいのか分からなくなっていた。隣で歩く漣の浴衣姿はすれ違う浴衣女子の誰よりもきれいだし、成り行きとはいえこのタイミングで二人きりだと、このままいくとのぼせてしまいそうである。

「巧斗先生、大丈夫ですか？」

俯いた俺の顔を、漣が覗きこんだ。本当なら、俺が場を盛り上げるべきなのに、逆に一緒に回っている女の子を心配させてしまうとは、男子失格だ。それに、一瞬だけ浮かんだ感情も。

「うん・・・。なあ漣、今だけでいいんだけどさ」

「は、はい！」

澪は俺の提案を予想できなかったらしく、やや身体をこわばらせたのが分かった。

「その、先生っていうの、やめて・・・欲しいんだ。もし澪の高校の誰かに聞かれたりしたら、それだけで軽音の迷惑になるかもしれないからさ」

そう、俺が心配したのは、ここだった。どんなに俺が軽音のみなどと、澪と仲良くなったとしても、世間体は顧問と生徒の関係として認識する。それは、俺の恋愛感情とは関係ないところで動いているかもしれない。いまのところなんの問題も起きていないからいいようなものの、こうして澪が先生と呼ぶ相手と二人きりで、それも夏祭りで歩いているところを目撃されたら、どんな根も葉もない噂が立つかわからない。そうすると、軽音にも、さわ姉にも迷惑がかかることになる。だからせめて、呼び名だけでも手を打っておこうと思ったのだ。

「そ、そうですね・・・」

怒ったような、それでいて悲しそうな表情を澪は一瞬浮かべたが、すぐに

「えっと、それじゃ・・・なんて、呼ばれたいですか？」

「んーと、取り立ててないんだけど。律や唯みたいにタクちゃんとかは・・・無理そうだな」

もともと真面目な澪は、真っ赤に染まった顔で首を振った。

「そ、それなら、巧斗さん・・・」

「合宿の時と一緒にだな。名前で言うくらいでそんなきんちよ・・・すると澪は語気を強めて

「しょ、しょうがないじゃないですか！だって」

「だって、なんだよ」

澪の表情は怖いというよりも可愛く俺の眼に映った。俺は澪の顔を覗き込む。吸い込まれそうな、澪の眼が揺らぐ。

「だ、だって、私、男の人とあまり話したことないんです。名前で

呼ぶなんてこともなかったし、こうして歩くことも・・・」

澪はしゃべりすぎたと思ったのか、はっとして口をつぐんだ。これ以上弄るのはまずいか。

「わかった。澪の好きなような呼び名が一番だ。ごめん！」

俺は手を合わせて謝った。調子に乗りすぎていた。いくらなんでも、澪のことを考えれば言うていいことと悪いことがある。ついでにふと思ったのだが、俺が澪を弄るのってこれが初めてじゃないか？

「私、怒ってませんよ。だから巧斗さん、行きましょ」

俺は顔をあげた。言葉通り、澪は口元を緩め、俺を見上げていた。日は沈みかけ、夕陽と出店の鮮やかなオレンジ色の光が、澪の白くて美しい顔を照らしていく。普段長い髪に隠れて見えないうなじは、官能的としか言いようのない色香を撒き散らしていた。浴衣マジックでもというのか、とんでもない美人である澪が、ことさらにきれいに俺は感じた。こんな女の子と、二人で夏祭りを回っているのである。

にしても、澪も変わった。俺一人いたくらいで演奏できなかったのに、今こうして成り行きとはいえ男の俺と歩くまでになった。それだけ打ち解けたのか、これまでと同様に男子として見られていないからなのか。でも、そんなことを考えるのは終わってからでいいか。相変わらず人は多いし、合宿の肝試しでは澪を気絶までさせてしまったから、惚れた男として、澪を守らねば。

「そだね。あの、もうひとつ提案があるんだけど」

俺は澪の返事を待つまでもなく、その手を握った。澪の手が、俺の手の中で反応する。急なことで、今度は澪があたふたする番だった。何度も見てきたように、澪の顔がおっレンジではなく紅く染まる。そのうち、この色のまま固定しそうだ。

「これで俺らまで離れ離れになるわけにはいかないだろ？合宿では澪を守れなかったんだ、ここでくらい」

「え、えっと、その言い訳、どうかと思います」

澪はすねた表情を見せたが、手をほどこうとはしなかった。

「これも、今日だけですよね?」

「律たちがいるところでは、むりだろ?」

「はい、そうですね」

こうして柏木たちから遅れること十数分後、俺と漣も群衆の中に消えた。

もつとも、あの二人のような自然さは皆無で、ぎこちなさしかなかったけれど。

一方そのころ、律、唯、ムギ、梓の四人はうまい具合に見つかったベンチに座ってラムネを飲みながら、行き交う夏まつりの参加者を見つめていた。

「これがラムネなのね。おいしい!」

ムギが人生初めてのラムネに感嘆した。さんざん出店で遊び、食べた後だから、四人とも一気に飲み干してしまった。

「はあ。夏もおわりかあ」

ラムネのビー玉をカラカラ鳴らして、律が嘆いた。桜ヶ丘高校の夏休みは今月の25日からという極めて中途半端な日にちから始まっていた、それなりの進学校ということもあり、八月いっぱい夏休みということにはなかった。

「でも去年よりも楽しかったな、今年。合宿も去年よりスケールアップしてだし、こうして納涼祭も来れたし」

唯はまっすぐ前を見つめながら答えた。ムギもほほ笑んで、そんな二人を見つめている。

しかし梓は、その言葉にどうも納得がいかなかった。この中で漣がいない。なのに、楽しかったという感想が述べるのはどうしてなのだろうか。そもそも漣が離れたのにはちゃんとした原因があつて。

先輩たちは、気付いているのだろうか。漣のことを、その変化を。それがもたらすかもしれない未来の予想もしていないのだろうか。

先輩たちを、信頼していないわけじゃなかった。むしろ逆だ。信頼しているからこそ、齒がゆいのだ。演奏のことは巧斗にまかせてあるから除外するとしても、これではまるで……。

「あの、先輩」

梓はこらえきれなくなった。だから、今日のライブが疑問が確信に変わってからそれほど時間がたっていなかったが、気持ちが悪くあけて飛び出したのだった。

「ん？どしたのあずにゃん」

唯が梓の顔を覗き込む。そのまったく邪気のない顔を見ると、言いたいことがはたしていいことなのか予想がつかなくなった。

「溇先輩のこと、みなさんどう思ってるんですか？」

「いや梓、お前ひよっとして溇に先輩以上の感情が……」

律はやや引き、ムギの眼が輝きを増した。梓は言葉が足らなかったことに気付き、あわてて付け足した。確かに溇のことは尊敬しているが、それ以上の感情はない。

「そういうことじゃありません！そうじゃなくて、最近の溇先輩、ちょっとらしくないというか」

「そうか？あんまり気にしてなかったけど……」

「律先輩、はぐらかさないでください。じゃあなんでさつきも、合宿の時の肝試しも、溇先輩と巧斗先生を……」

律は手を開いて、興奮しがちな梓を制した。律らしい動きだったが、いつものお調子めいた動きはいくらか抑えられていた。

「梓の言いたいこと、なんとなくわかるよ。でもさ」

律はニカツと笑って見せた。しかしその笑顔をするのに、律はすこし無理をしているんじゃないだろうか、と梓は思わずにはいられなかった。

「溇とタクちゃんだからさ。梓だって、この意味はわかるだろ？」

すでに唯とムギは律の言うことが分かっているのか、口をはさまない。二人とも、普段のおっとり具合がうそに見えるほど落ち着いた顔を見せていた。

「はい。でもはつきりとは説明できませんけど」
「それに、このままじゃあだめだってことも、わかってる」
喧騒をじっと見つめる律を目の当たりにして、梓はいくらか気分が晴れた。しかし、台風が去った後のような晴天とまではいかなかった。

「巧斗さんって、お昼食べてなかったんですか？」

さつきから手当たり次第とばかりに屋台の食べ物や口運ぶ巧斗に、澪は疑問を投げかけた。たこ焼き、キュロス、綿菓子、お好み焼き、飲み物。今度はフランクフルトにフライドポテトだった。

さつきまで手を握ってくれたのに、とは言えなかった。そんなことをいっただら、まるで自分が求めているみたいではないか。

「うん。練習とかなんだかんだでまともに取りれてなくてさ。それにライブで動きすぎたってのもあるし」

巧斗はフライドポテトを澪に差し出しながら答えた。塩と揚げたて独特のおいがお腹を刺激してしまう。

「あのアレンジって、合宿で思いついたんですか？」

「いや、戻ってきてからだよ。あの曲を使いたくなっていうのは出てただけだ。メタルとか、オルタナ系のアレンジは結構してるバンド多くてさ、ネットで聞く限り」

あのシークレットベースのダンスロックアレンジは、すくなくとも今の軽音部では出来ないだろうと澪は思っていた。律のドラムとそれに合わせる自分のベースに、唯のギターが一番のネックだ。

「でもほんと、巧斗さんのギターはなんというか、テクニクの安定ぶりや演奏の高さがすごいなって、改めて思いました。そんな人に指導してもらえるんだから、幸せです」

「ほんとに？」

巧斗は立ち止まって、澪を見下ろした。もちろん両手は塞がっているから顔だけ突き出す形になった。

「そうですね。少なくとも私は、そう思ってます」

これは社交辞令ではない、本音だった。現役のバンドマンだからこそわかること。真剣に音楽と向き合っているからこそ、学ぶこと。これまで溻は、巧斗が指導をすることで気づいたことは数多くあった。

「そっか」

巧斗は破顔した。

「いつか、巧斗さんとおなじステージに・・・」

「え？今、溻なんて言った？」

「な、なんでもありません！」

自分が分からない。どんどん、これまでの自分だと言えなかったことも言えてしまう。そもそもこんなに男子と会話を弾ませたことが、自分の過去にあっただろうか。

そしてついさつき口走ってしまった、願望、いや夢だった。極度の恥ずかしがり屋の自分が、こんなこと言ったなんて知ったら、軽音部のみんなはきっと腰を抜かすほど驚かすに違いない。実際にできるかどうかは、本当にわからないけれど。

「あそうだ、今回はきちんと連絡しとかないと。俺、クラブ・サテイスファクションっていうライブハウスにでるんだ、今度」

「サテイスファクション？あの、ライブハウスですか？」

この町から電車で40分ほど揺られると、都会になる。サテイスファクションは、その中でもっとも有名なライブハウスの一つである。過去に出演したバンドはどれもプロ並みの実力をもち、このライブハウスがきっかけでレベルに所属することも多いという。

「でも平日でトップバッター。初めてだから、そんなにそのスタツフも期待してないような気がするけど、これはしょうがないね。」

ほかの対バンはみんなどこかのレベルに所属してんだから」

つまり、プロに交じってライブをするのである。溻は巧斗がどんな先に行ってしまうような気がしていた。巧斗は、バンドという大きなツバサを持っている、だからどこまででも飛んでいけるのだ

ろう。

でも、自分はどんなのだろうか。相変わらず、ライブと言えば文化祭と新歓くらいしかない今の軽音部。いつだったか、律は自分がいるから外でライブはまだ難しいようなことを言っていたっけ。演奏にしたって、まだまだ、たりないところはたくさんある。つまり自分が、自分たちが巧斗と同じ段階に進むには、何段飛ばしで階段を駆け上がればいいのだろうか。

普段なら絶対話題にもならない玩具の出店で遊びながら、遷はずっと考え続けていた。文化祭まで時間がない。もっと、もっと巧斗のことが知りたい。

こうして屋台を回っていると、お面屋の前でようやくみんなと合流できた。梓がちよつと元気がなさそうな表情を一度だけみせたが、すぐになくなった。

もちろん、巧斗と手をつなぐこともない。

しかし、今日の間だけ、という言葉があつたから、遷はそれからずっと巧斗の名だけを使い続けた。

打ちあがる思いを、受け止めるには（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

次回では柏木と和についてあいまいなまま終わってしまいました
が、まず、和フアンのひと、勝手に柏木と結び付けてすいません！

そんなこと言ったらこの小説の存在意義がなくなるかもしれませ
んが。

でも、これには自分なりの考えがあつて・・・それは今後明らか
になる

ですので、よろしくお願いします

今回の話ですが、本当はタクと漣の雑談をもつと入れ込む予定で
した。

しかし、全体的にただの祭り回ではなくなっているのでやむを得ず
はぶ

きました。どこかで使いたいな。でもできるかな。がんばろ

さて、次回から二学期に入ります。

物語も、いよいよ佳境に入ります（いやこれまでがグダグダなだけ
なんで

すが)。文化祭までの時間が刻々と迫る中、二学期最初の部活が始まりま

すしかしそこで大きな問題が……。そして、大きな舞台に向けてタク

も動き出します。しかしそのせいで顧問として満足に指導できなくなり

ます。そこで、タクはあることを思いつきますが……。

次回もお読みくだされば幸いです

レベルアップに、ふしぎなアメは使わない方がいい

バスから降りて混じりけのない空気を胸いっぱい吸い込むと、森の味がした。さわやかで、身体の毒素がすべて浄化されるのではないだろうかと錯覚するほどだ。地元なら蒸し焼きになるうかという暑さにも、ここでは無縁だった。

「うおっし、来たぜ長野イン志賀高原！まってるよホテル！」

「な、ユキのやつ、カノジョができてからさらにめんどくさくなつたな」

苦笑しながら室井が俺に耳打ちした。たしかに、旅行バッグを道路に放り出さんばかりに振りまわし万歳するボーカリストは前と比べて迫力が増したというか、もともとばかでかい地声がさらに大きくなった。さらにいえば、インの正しい用法は志賀高原イン長野だ。それだと志賀高原はとつもない広さになってしまう。

「ユキ、ホテルはそっちじゃない。初めてじゃないんだから」

青島の指摘に、柏木はくるつと方向転換した。

溇たち高校生は夏休みが終わり、授業という縄に縛られる生活に戻ったが、大学生である俺たちにはまだまだ自由な時間があった。

これが大学生の特権である。その特権を利用して、俺たちアートのクスはバンド合宿を行うことになっていた。今から向かうホテルは高校生の時からお世話になっている。室井のおじいちゃんが支配人に口を聞いてくれたのがそもそもその発端だ。あれ、近い話をついこの前聞いた気がするな。

バンド合宿は、その名の通り練習をしながら寝泊まりする。俺が溇たちにくつついていった合宿のホテル版だと思ってもらえればわかりやすい。むしろ、溇たちの方があり得ないのだ。

本来ならだいたい前に予約を取らなければならなかった。しかし、昔なじみであるということと、室井のおじいちゃんの関係からなんとか一部屋確保してもらえたのだ。

「なあ、ユキの彼女って、タクはみたのか？俺プリクラしか見たことないからさ」

青島が先にずんずん進んでしまう柏木を遠い目で見ながらいった。「うん、一回だけ。かわいいけど真面目そうな子だったな。ここだけの話、なんで柏木を選んだのかわかんないくらい」

「タクが見た時は二人だったのか？」

室井の言葉を受けて、俺は漣と二人で納涼祭を回った時のことを思い出した。

「うん。肩も手もぴったり寄せてた」

「あいつがねえ。幸せそうだからいいけど、やっぱり違和感あるな」腑に落ちない表情を見せた青島はつぶやいた。

「初めてだからいいだろ。それに」

珍しく、室井がいたずらっぽいわらわらした。

「あいつに話を聞く時間は、これからたっぷりあるさ」

俺は空を仰いだ。雲ひとつない、一面の青空が広がっている。柏木のことともそうだが、俺は漣が、いや、軽音部のみんなのことが気になっていた。一週間近く部活に顔を出せないからといって課題は出したが、これがどう生きてくるだろうか。

あと、やっぱりあのご褒美はまずかったかな。

時間軸は、巧斗が合宿に出発する四日前にさかのぼる。

梓は、二学期初の部活に向かうのが楽しみなはずなのに、廊下を歩く足どりが重いことに気がつくのに時間はかからなかった。

その理由は、自分でもわかってた。

漣のことだ。納涼祭である程度、納得はした。ただ、自分の中でどうも不安がこびりついたまま離れない。いくら自分の中で処理しようとしても、キャパシティを超えていた。だから、不安をはぎ取るためには、方法は一つしかない。でもそれをするのが、はたして正解と言えるのか。それをするのはただいたずらに、漣を追い

つめることでしかないのではないか。

「先輩たちが信じてるって言ったから、私もそれに従うべきなんだろうけど」

文化祭のライブもあって、本来ならばモチベーションが上がってしかるべき時期だった。

「梓、いよいよ部活だな」

「み、漣先輩！」

「そんなに驚かなくても・・・」

梓は、不意に話しかけられたために、あからさまにビククリしてしまった。この道筋では二年生とかち合うのは確実だった。

漣と直接顔を合わせるの、納涼祭以来だった。梓は、今日漣に質問するのはやめようと決めた。

「夏休みはどうでしたか？」

「夏期講習ばかりだったよ」

そう言って漣は苦笑いした。しかし、その表情からつらさや不安めいた、負の感情は一切感じられなかった。むしろ逆に、夏休みに入る前にくらべて生き生きしているようにさえ見えた。

やっぱり、律先輩たちの言うとおりなんだろうか。

部室に近づくと、ギターの音がした。一瞬巧斗の Mustang かと思っただけ、駐車場に巧斗の車はなかった。

まさか唯が？

梓は部室に着くと、そつとドアを開けた。

果たしてそこには、一人部室でギターを練習する唯がいた。その光景は、梓の眼にはジミヘンと美空ひばりが並んでいるほどのそぐわなさを持っているように映った。

「ゆ、唯先輩が練習してる！」

梓の頭から、さっきまで考え込んでいた事がわずかになくなった。「ここ軽音部であってますよね？」

あまりの状況にとんでもないことを言う梓。漣はあきれた表情を隠そうともせず

「梓も毒されてきたな」といった。

このまま唯の練習風景を見ていたかったが、どうしても今日になって練習しているのか気になった。梓と漣は部室に入るなり、唯に話しかける。

「一体どうしたんですか唯先輩」

あまりの暑さで頭でもやられたのか、と遠慮なく付け加えると、漣が苦笑いした。

いいところに、と唯は二人に反応すると、急に困惑の感情を顔に浮かべた。

「ちよつと、ギターの調子が悪いんだけど・・・」

ギター見せてください、という梓の言葉で、唯はサニーバーストのレスポールを渡した。

梓は、ギターを見て絶句した。

「弦がさびてる！いつ交換したんですか？」

指に感じるざらざら、いやともすれば怪我をしかねないまで錆びついた弦を見たまま梓は質問した。このさび具合はひどい。

「え、弦って交換するもんなの？」

なにいーっ！と梓は反射的に叫んでしまった。唯の知識、いやギターに対する認識をなめすぎていたと梓は反省した。

よくギターを見てみると、これまたひどい。ほこりのたまり具合、フレットの抑えにくさ。まだまだでてる。

「あずにゃん、さつきからずっと調子がおかしいの！」

「唯、今日巧斗さんがくるから聞いてみたらどうだ？」

「あ、そっか。タクちゃんだったら直せる！」

曇天どころか今にも雨が降りそうな暗い表情をしていた唯の表情が晴れた。このやり取りに、梓は漣に強烈な違和感を覚えた。今、漣は巧斗のこと、名前で呼ばなかったか？

「タクちゃん、速く来て！」

部室に向かっていると、律とムギのペアと一緒にあった。唯は確認したいことがあるからと、先に部室に向かったらしい。

「確認つて、何する気なんだ、唯は」

俺の疑問に、律は

「さあ。冷蔵庫の中を見ようとか、思ってるんじゃない？ 今日二期で初めての部活だし」

と気のない返事を返した。すると、ギターの音色がした。が、部屋に着く前に止んでしまう。

「唯のやつ、練習してたのか？」

律の眼が見開いた。しかし、俺の耳は練習していたこと自体をとらえてはいなかった。

「ムギ、さっきのギターの音、ちょっと変じゃなかった？」

俺は律をはさんで歩くムギに問いかけた。ムギはこうした音の變化をとらえてくれる。

「そうですね。いつもと比べて、雑音が多いというか・・・」

その言葉で、俺は合宿で感じた違和感を思い出した。そのまま放置しておいた違和感だ。

そして、ドアがあいたままの部室に入ると、その違和感が現実になっっていたことを知った。

「タクちゃん、お願い、ギター直して！」

俺が部室に入るなりずい、とレスポール・スタンダードを差し出してきた唯。俺は状況を理解しようと、澀たちに視線を投げた。

「先生、唯先輩のギターを見てください！」

「なんだよって・・・ひどっ！おい唯、なんでこんなになるまで放置してたんだよ！」

俺はレスポールに目を凝らし、舐めるように隅々まで見た。

「オクターブチューニングもめちゃくちゃになってるし、ネックのそり具合も許容範囲越えてるぞ！なんで大事にしないんだよ！」

珍しく、俺の口調が荒くなった。いつものツツコミではなく、本

気の怒りだった。メンテナンスをするのは、音楽家の基本である。いや、道具を使う趣味をしている人間ならば必ずするものだろう。唯はギターを大事にしていけないのではないか？

「巧斗さん、落ち着いてください！唯の頭じゃ理解できない！」

頭から焦げ付いた匂いの煙があがりそうなほど放心状態にあった唯を、なだめながら漣は言った。いや、この機会にきっちりメンテナンスの大事さを叩きこんでやろう。これは異常だ。

「なんでこんないいギターなのに放っておいたんだ？大事にしないってことはありえないだろ」

それでも、漣が言ったからだろうが、俺は感情を抑えて唯に重ねて質問した。梓が大きくうなずいた。

「大事にしてるよ！服着せたり一緒に寝たり・・・」

「ギターはぬいぐるみじゃない！あとそんなことしてりゃこんなに埃たまるのは当たり前だ！」

ベクトルが違いすぎる。愛情をもってギターに接するのはいいことだが、ずれすぎだ。東京から沖縄に行けと言っているのに新潟を目指しているくらい方向が異なっている。

「タクちゃん、メンテしてよ」

唯が泣きついてきた。確かに、ここまでだったら俺でもできないことはない。ギターケースに工具類は一式揃っている。でもここで俺がうなずいたら、唯はメンテナンスの大切さを理解しないでまた同じことを繰り返す。それでは唯のためにならない。俺は、来年もここにいる人間じゃないからだ。

「楽器屋に頼むしかないな。この分だと」

だから俺は、唯の願いをにべもなく却下した。

「え、そこまでしなくても・・・」

「しないとだめ。というかするのが当たり前だ」

俺の言うことが正論過ぎたのか、唯はあわてて仲間を探した。それは律だった。

「りっちゃんはメンテなんかしないよね？」

「しとるわい。私はしてなくてとーぜんみたいな聞き方するな」
そこはさすがに、律もしていた。

「じゃあ今日は練習しないで、楽器屋だな。唯、どこで買った？」
「えー、ほんとにいくの？」

「じゃなきゃ直らないぞ？それでもいいのか？」

半ば脅迫めいた俺の言葉に、唯はうなづくしかないようだった。
さて、そこで楽器を買ったという10G IYAまで赴くことになったのだが、そこでひと悶着あった。なにかトラブルが起きたみたいな言い回しだが、ようは、俺が運転する車の位置取りでみんなが揉めたのだ。

こういうと、いかにも俺がハーレムマンガの主人公状態であるかのように聞こえるが、実際は誰が荷台に乗るかということ騒いでいたのである。さわ姉から借りている軽自動車だから、当然6人も席に収まるはずがなく、誰かが荷台で縮こまっている必要があるのだ。

「ここは唯が荷台だろ。唯のために行くんだから」

「りっちゃん、決めつけないでよ！」

「誰が助手席に乗るんだろうね」

「ムギ先輩、そのことでみんなもめてるのに・・・」

「ははは・・・」

女が三人寄ると姦しい、とはよく言ったものだが、ワゴンRをそばにしてぎゃあぎゃあ言う5人はとつてもやかましかった。

「速くしてくれよ。誰が乗るかなんて・・・」

「タクちゃん、それでうちらもめてるんだぜ！」

「じゃあタクちゃんが決めてよ！」

「無茶言うな！」

俺の失言に、律と唯が噛みついた。今の俺が席を決めるのはある意味危険だった。間違はなく私情が挟まってしまっただろう。

「じゃんけんでいいだろ。そもそも、歩いて15分のとこなのに車で行くこうとする根性がきにくわん」

「ぶー」

小学生のように唯は頬を膨らませて抗議するが、俺はさっさとじやんけんに移行させた。誰のために今日練習をなくしたと思ってるんだ。

ボタン、と車のドアが閉まる音がした。

「巧斗先生、よろしくお願いします」

助手席に座ったムギがほほ笑んだ。なんだろう、このふわっとしたい匂いは。ムギのことだから、どんな高価なシャンプーを使っているのだろうか。こう思った瞬間、俺は首筋にチクリとした感覚を覚えた。首を手でこすり確認するが、針が軽く刺さったような感触は消えなかった。

「先生、どうしました？」

「え、ううん、なんでも」

なんでこのタイミングで首筋に違和感を覚えるのかわからなかった。すると

「ちえっ、やつぱりムギか」

「律、じゃんけんで負けたからっていじけるんじゃない」

公正明大なじゃんけんの結果、勝ったのはムギ。最後まで残ったのは律だった。楽器に埋もれる形でなんとか荷台に小じんまりと収まっているが、窮屈そうだ。

「ほら行くぞ。律、警察に見つからないように隠れてるよ」

俺はいつもよりだいが重いアクセルを踏み込んだ。

10G I Y Aは俺もギターを始めたころからお世話になっている。場所も店もよく知っていた。

「うっ。治るかな。治らなかつたらどうしよう、タクちゃん！」

駐車場に停めてその10G I Y Aに向かう道すがら、唯は心配を隠さず言った。

「大丈夫だよ。あそこはメンテもきちんとしてくれるし」

実際、俺も教本でわからないことがあった時は臆することなくこの店員に相談したものだ。テクニクはさわ姉から学んだが、

さわ姉の性格から細かいメンテナンスや機材の知識はここで学んだと言ってもいいくらいだった。

「ほんと？」

唯の眼が輝いた。大切にするのはいいんだけど、今度から方向性を正しくしてくれよ、ほんとに。

その方向の相違は店員も同じ思いを抱いたようだった。ぼろぼろになった唯のギターを見たたん、戸惑うのが手に取るように分かった。

「えっと、これ、ビンテージですか？」

「いえ、ただメンテしてないだけです……」

申し訳なさそうに受け付けた店員に、梓は告げた。

「はあ。あれ、漣はどうした？」

漣の姿がなかった。そう言えば、車に乗っている時もあまり話に加わってこなかったし、降りた時もなぜか機嫌が悪そうだった。なんでなんだろう。

「あ、入口でまだもじもじしてら」

俺は漣のそばに歩を進めた。しかし心の中はばくばくだ。

「漣、どうしても中まで行かないんだよ」

あくまでも軽く。そう、心の中を悟られてはならなかった。

漣少し悲しそうに答えた。さっきまでの機嫌の悪さは感じられなかった。俺は漣を気にしすぎてるのだろうか？

「巧斗さん……。私レフティだから、見るの悲しくて」

「あー、そうか。こればかりは仕方ないなあ」

左利き用のモデル、通称レフティモデルは需要の少なさから種類が少ない。ジミヘンのように、右利きがあえてレフティを使用する例もあるがそれもごくわずかな例に過ぎない。たいていの左利きは右利きに矯正するという話もある。現に楽器は違えど、うちのドラマは箸を持つ手は左だ。本人は祖父の影響だと語っているが。

ふと眼を店中にやると、律があるところで立ち止まり、すこし大きな声で言った。

「お、ここレフティフェアやってるのか」

次の瞬間、漣はサイヤ人かと思うほどの速さで律のそばまで移動した。その速さに律が飛びのいたほどだ。

「こ、ここは天国ですか・・・」

漣の声が震えているのがわかる。苦笑しながらそばに行くと、漣は焦点が定まっていないような眼で

「す、すいません、ここにあるの全部ください・・・」

「おちつけ漣！」

俺と律の声が重なった。嬉しいのはわかるが、暴走するのはまずい。ムギ別荘の合宿で、漣はコンプレックスの塊みだとは思ってたが、爆発するとこっちの想像だにしない方向に進むんだな。これは、俺がしっかりしないと。あれ、変だな、今の俺。

漣はレフティに岩礁の貝のようにへばりついているので俺は店内を見て回ることにした。

ギターコーナー、エフェクター。欲しいのはいくつも見つかっているし目星も付いているが、これ以上持つのははたしてどうなんだろう。ムスタングとジャズマスターという良いギターを二本も持っているし、エフェクターも粒がそろってる。思い描くサウンドの半分も出せていないのは、俺の腕がまだまだな証拠だった。

しばらく、今あるもので頑張るか。

そう思い直すと、俺はギター・プレイヤーズでも読もうと雑誌コーナーに向かった。その間、ムギに店員がぺこぺこしているのに違和感を覚えた。あでも、ムギのことだから、この店もムギの家に関係してるのかもな。面白いのでちょっとみていると、店長らしき人までがムギに恭しくあいさつし始めたので、俺はあいた口がふさがらなくなった。

すごいな、ムギの家って。まあ、あの別荘を持つてる分からして当然かもしれないけど。

その時、俺の眼はスコアをとらえた。そういえば、みんなに長野で合宿をすること、そのせいで一週間ほど部活に來れないというこ

とを言っていないかったのを思い出した。一週間この軽音部から離れるのは正直不安だった、いろんな意味で。俺は厳しくしていないつもりでもあの五人はそうとらえてるのかもしれないし、一気にだれることも、十分考えられる。

「新曲も進んでないのか？話に出ないってことは、そうだよな」

溇の歌詞まちと言っていたから、まだ歌詞は草案まで完成していないのだろう。となると、何か課題を出すといいのかもしれない。

俺は素早く頭を回転させ、部屋にあるものを脳内でリストアップし始めた。

メンテナンスの結果は完璧で、ビンテージと歡違えすらされた唯のレスポールは新品同然、ぴかぴかになって持ち主のもとへ戻ってきた。

「ギ 太！」

ひしつと抱きしめる唯。しかし、俺と梓はその名前という衝撃を受けて立ち尽くしていた。ギターに名前？そんな話聞いたことがない。偉大なるアーティストのファンが、ギターを愛称で呼ぶことはあっても自分からつけるなんて普通じゃない。いや、違う、唯は個性の塊のような女子だった、この法則は当てはまらない。

「それでは、5000円になります」

店員がレジの前でこう告げると、唯の笑顔も固まった。どうやらメンテナンスにお金がかかることを知らなかったらしい。この金額でもまだ安い方だ。部品までイカしてたら、もっとお金がかかっただろう。唯にはこうして痛みを覚えてもらおう。そうすれば自分でメンテするように・・・。

俺のそばで、ゆらり、となにかが沸き立った気がした。それはオーラというか気というか、とにかく超自然的ななにかだった。そのものは怒りのエネルギーに満ちていて、店員をまっすぐに狙っていた。この間、五秒もなかった。

「え、えっと、今日はサービスで・・・」

あれ、まさかのタダ？

振り返ってムギを見返すが、本人はいつものにこにこした微笑を浮かべているだけだった。でも、5000円がタダになるなんてやつぱり……。やめよう。こういうのは、気にしたら負けってやつだ。

「よし、帰るか……。ってあれ、漣は？」

「あ、そこに……」

漣は屈みこんだまま、レフティフェアのコーナーにいた。その姿は、俺がそこから離れた時とまったく同じだった。

「漣、帰るぞ」

「ヤダー！」

なんと漣は、律の促しを拒否した。嬉しいだろうけどここまで来るなんてな……。

しかし律は、漣の首根っこをつかんで強引にその場から引き離してしまった。俺はこうはいかない。そんなこと、男子としてはならない行為だからだ。ちょっと律がうらやましくもあつた俺は、みんなと一緒に10G I Y Aを出た。

「う〜」

「漣、まだ未練あるんかい」

ずつと俯いたままにいる漣に、律はツッコミを入れた。俺が唯に視線を移すと、唯は満面の笑みで、ギターのことと梓と話している。合宿のこと、話すとしたら今かな。

「みんな、ちよつといい？」

俺は振り返ってみんなに呼び掛けた。

「ほえ？タクちゃん、どうしたの？」

俺は簡単に、サテイスファクションでライブがあるということ、合宿に行くこと、そのせいで来週一週間は合宿に来れないことを告げた。

「サテイスファクション？巧斗先生、そこでやるんですか？」

想像通り梓が食いついた。このあたりで音楽に詳しい人、あるいはライブが好きな人ならたいいは耳にするであろうライブハウス

だった。

「そ。見たかったら言って。チケット持ってくるからさ。で、合宿の件だけだ」

「どこ行くの？」

律が眼を輝かせた。しかし、表情からはお土産の文字が読み取れなかった。

「長野の志賀高原。ちゃんとお土産は買ってくるから心配すんな。で、それに関係して何だけど、俺明日部活行くから。よろしく」

「え、そうなのか？」

普段、学校に行く予定日は律に半月単位で連絡してある。明日行くとは連絡していない。

「うん。ちょっと、思いついたことがあってさ」

俺がそういうと、何人かは不安そうな表情を浮かべた。一方俺は、これはいいアイデアだと自画自賛していた。

予告通り翌日の放課後、俺は軽音部に来訪した。部屋にはもうみんな揃っていた。

「おつす！」

「タクちゃん、すごい荷物」

唯が、俺に右手に持った紙袋を見て言う。俺はそのままいつもの椅子に座った。ムギが冷えたお茶を出してくれる。いつもの光景だった。

「じゃ、さっそく見せるわ」

俺は紙袋からごそごそとその物を出した。

「先生、これって・・・」

「説明するね。これ、俺が来れない間にやってほしい課題です！」

「えええっ！」

唯と律は絶句し、漣と梓は顔を引き締めた。ムギだけが、ここにこしている。

「これ全部ですか？」

「いや、それぞれに選んだから」

俺が持ってきたのは、スコアとそのCDだった。

「それじゃ渡すよ。漣はこれ」

「レ、レッチリですか？」

漣に俺が選んだのは、レッド・ホット・チリペッパーズの『ブラッド・シュガー・セックス・マジック』。このアルバムはグラミー賞を獲得したGive It Away、全米1位を獲得したUnder the Bridgeなど、レッチリの中でも評価が高いアルバムの一つだ。しかし、俺ごときが言うのも恐れ多いが、このアルバムが一番レッチリらしいというか、ミクスチャー・ロックの代名詞といえると思う。このアルバムはハードロックとファンクの折衷を目的に作られているからである。

「なんで……。フリー、ですか？」

「その通り。漣のスキルは高いしうまくバンドをまとめる。けど、もっと上に行くにはファンクに特徴的なビートのツボを覚えたほうがいいと思って」

「ビートのツボ……。ですか」

漣のベースラインを聞いてて、思ったことだった。軽音部の曲のアレンジは、かなりテンポが速い。つまり、テンポ100ぐらいのいわゆるバラードが存在しないのだ。テンポが緩やかな曲を的確に表現豊かに演奏するにはフリーのファンクよりだったベースラインが参考になると思ったのだ。このアルバムがファンク要素を大いに含んでいるのはさっき話した通りである。

「律はこれね」

俺がCDとスコアを渡すと、律はバンド名を見てぎょつとした顔になった。

「凜として時雨……。タクちゃん、ひよつとしてあたしに、ピエール中野をコピーしろと？」

「ひよつとしてもしなくてもそうだよ。だいたい、ドラムのフレー

ズ手数が結構多いのに律はリズムがあんま一定しないんだよ、まだ。キース・ムーン好きならこれくらいのコピー、できるだろ」

律に手渡したアルバムは、凜として時雨のメジャーデビューアルバム、『just a moment』。凜として時雨、通称時雨は3ピースながらすさまじい音圧と冷たく乾いた曲調が特徴のバンド。メンバーの演奏レベルはもちろんだが、中でもドラムはギターとベースの間隙を埋めるような手数のフレーズを多用してくる。これは室井からの受け売り何だけれど。この軽音部でドラムのレベルアップが図れば、外で拍手喝さいも夢ではないと思う。運が良ければ、それこそホワイトボードに書いてある場所まで行けるかもしれない。

「たしかに手数っていう意味では似てるけどさあ」

俺は律への説明を打ちきって、今度はムギに渡した。ただし、スコアというしつかりした本ではなく、ファイルに入った十枚ほどの紙とCDだ。

「これ、何て読むんですか？矢印」

「ピアノジャックって読むんだ。知ってる？」

ムギは頭を振った。

「このバンドはピアノとカホンで構成されてる。一回聞いてみる？」俺はこの部屋にあるカセットプレイヤーの外部ジャックを使って、俺のMP3プレイヤーからPiano-jackを流した。何世代も前のスピーカーからジャズともポップとも違う、軽やかでセンスのいい曲だった。

ムギへの課題はこのバンドの『Fast・Contact』と『風神雷神』の2アルバム。Piano-jackはインディーズながら数万枚の売り上げを成し遂げるが、1枚当たりの曲数が少ないからだった。

「すごいですね、この演奏」

「ムギにもっと、こういう軽いフレーズも弾いてほしいなと思ってさ。キーボードだからピアノの感触まで再現しろとは言わないけど」

個人的な話になるが、俺も中学まではピアノをガンガンにやらされた口だ。だからムギがいかにもまいかもわかる。ただ、ロック、あるいは現代ポピュラー音楽となるとベースは一緒でもところどころ違う。だから、そこを知ってほしかった。

「ねえねえタクちゃん、私はなに？」

うきうきした唯がテーブルに身を乗り出した。ひよつとすると、この課題では唯が一番苦勞するかもな。

「これだよ」

俺が差し出したのは、the band apart のサイドアルバム『alfred and cavity』。俺がこのバンドを選んだ理由はただ一つだった。梓はスコアを見て、心配そうな視線を唯に投げかけた。もっともな動きだった。

「唯、このバンドはすごいぞ。唯の課題には最適だ」

「確かにそうだとは思うんですけど、唯先輩にはハードル高すぎませんか？」

それまで口をはさまなかった梓だった。梓はバンアパを知ってて当然だろう。唯に対してはちょっと厳しい時もある梓だが、実は一番唯のスキルを理解してもいる。

「あずにゃん、それどうということ？」

「それはこういうことさ」

俺はちよつともったいぶって説明した。

「つまり唯には、ギターボーカルとしての腕をあげてもらおうと思っ
て」

「ほえ？」

さすが唯、自覚がないか。バンアパのボーカルは、カッティングなどサイドギターにとどまらないフレーズを弾きこなしながらボーカルをしている。基本、ボーカルがギターをする場合はコード弾きをするパターンが多い。

「なるほど・・・」

梓が納得してうなずいた。

「唯も、これくらい出来てくれれば अच्छいだ」

えー、と唯の顔が引きつった。このレベルをいきなり弾きこなせるとは思っていない。昨日のメンテナンスと同じく、唯に自覚を覚えてもらうのが狙いだ。

「それじゃ、梓は rega」

「rega・・・ですか？」

rega の名前を聞いて、梓は戸惑った。

「梓はうまい。でも、これからはこのジャムもいいなと思って。このバンドのリズム感とフレーズを勉強してほしい」

「わかりました」

Rega はジャム・ロックバンドだ。このバンドもインディーズなのでスコアはない。俺はアルバム『Million』とコードを書いた紙を渡した。このバンドはインストながら縦ノリのかっこいい曲ばかりだ。ギターのリフが絡み合い、思わず足が動いてしまう。梓にこのフレーズを弾いてもらえるようになれば、オリジナルもさらにバリエーションが豊かになるだろう。

「さて、どうかな？」

「めんどくさい！」

真っ先に律が抗議した。しかし俺はこうなることはすでに想定済みだ。どれくらいこの5人とコミュニケーションをとったかを考えれば当然だった。

「ただで、とは言わない。それにこれは、みんなで競い合ってもらおう」

「競う？」

律が疑問符を顔に浮かべた。

「そ。みんなに配った曲数は大体12曲位。俺が戻ってくるまで、何曲コピーできたか競争するんだ」

「数を競う？」

漣の顔が紅潮した。この漣もかわいいな・・・って、本題はもっと違うところにあるぞ、気をつけんか俺。

「そして、1位の人だけにご褒美をあげようと思う」「ご褒美、の単語を出すと全員が反応した。」

「な、何?」

唯の眼が輝いた。

「1位の人の言うことを、俺は聞く」

レベルアップに、ふしぎなアメは使わない方がいい（後書き）

遅くなりました！

18話です！

今回はいくつもバンド名が出ていますが、どれも普段聞いているバンドです

見事にばらばらですが・・・

気になる人は、ようつべでたいてい聞けるので是非聞いてみてください
さい

さて、次回ですが、長野と桜ヶ丘高校でそれぞれの思いが交錯します

漣、巧斗の心境に変化が・・・？

次回もお読みいただければ幸いです

吐き出す感情、向ける先

巧斗が長野に旅立つ前日の昼。桜ヶ丘高校はお昼休みを迎えていた。

「ムギ、唯、コピーやってる？」

少しぐったりした様子で、律が机越しに話しかけた。

「想像してたよりも難しいね。コードを頼りにしても細かいところが・・・」

ムギはフォークを口に運びながら小さく笑った。言葉ほど悩んでいるようには見えない。むしろ楽しんでるように律は見えた。

「唯の方こそ大丈夫か？スコアあんま読めないんだろ？」

「そうなんだよ。あずにゃんもタクちゃんにも聞いているけどよくわからなくて・・・。これかなってという音はわかるんだけど・・・」

唯はため息をついた。スコアの読めない唯に対して、音源とスコアを渡されてコピーしろというのはいささか荷が重すぎると顧問である巧斗は思ったのか、唯にだけは譲歩していた。つまり、わからないところがあれば遠慮なく聞いてよいのだった。感覚だけでギターを弾いているといってもよい唯のこと、すぐ聞く羽目になった。

ギターボーカルとしての練習は去年の文化祭前にも唯は行っているが、あの時はさわ子が直接教えてくれた。しかし今回は自分でやっていかないという点でも、唯には越えるべき壁が増えたのである。

「りっちゃんはどうか？進んでる？」

ムギがにこやかな笑みを崩さず言った。

「あんまり。ただでさえ時雨はコピーするのが難しいのに。おまけにツインペダルときてるしさ。タクちゃんのやつ・・・」

律は唇をとんがらせた。律に課せられたバンドも、そう簡単に見えるものではない。なんといってもフレーズの多さとそのキープ力を再現できる高校生は、そういない。しかも、ただ手数が多いだけじゃなく独特の間というのものもある。実際、スコアを見ても原曲を聞

いても、律はどう叩けばいいのかわからないところもある。
「こうなったら、一位になってタクちゃんを思いつきり弄るしかないな」

律の眼がりりしさを増したが、その理由はなんとも子供っぽい。

「あと一週間あるし。頑張る?」

ムギがそう言って律と唯を励ます。

「そだね。今日あずにゃんにまた聞こうつと!」

「唯、お前はもっと自分でやれよ」

軽く律が唯の頭を叩く。すると唯は、思い出したように全く関連のない、しかし三人にとっては衝撃的な話題を提供した。

「あそうだ、この前、和ちゃんから聞いたんだけど・・・」

唯はこそそとムギと律に、耳打ちするような小声で話した。すると、律が大きな声を出そうとしたので、唯はあわててその口をふさいだ。

「もご?うおんふおに?ぶはっ。和に彼氏ができた?」

唯の手をはぎ取ると、律は声のトーンを落として言いなおした。

「そうなんだよ。あの和ちゃんにさ」

まるで自分のことのように喜ぶ唯に、律もムギも質問を重ねた。

「それで、相手は誰だった?」

「かつこいいの?」

律とムギから見ても、和は恋愛に積極的なタイプには見えなかった。生徒会のメンバーとして何かと軽音部を気にかけてくれること（もつともこれは律のずぼらさも大いに原因があるのだが）、唯のあしらい方を完璧に身に着けていること、成績優秀で真面目なところと、その理由はたくさん見あたる。しかも自分たちと同じく、それほど男子との接点があるようには思えなかった。

「ほかの人には言わないでね。それが、タクちゃんのバンドでボーカルやってる人、だって」

「あの人なんだ・・・」

ムギはちよつと意外そうな顔をした。巧斗の所属するアートワー

クスのライブを二回、しかもどちらもメンバーを間近で見ているだけあって記憶は鮮明だった。もつとも、柏木優季を忘れる人はあまりいない。

「始まる前はお茶らけてたあの人だろ？歌ってる時は、たしかに180度変わってたけど。タクちゃんが戻ってきたときにどんな人が聞いてみるか」

「それで、いつから付き合ってるんだって？」

「夏休みの終わりぐらいからって。これを話してくれてる時の和ちゃん、すっごく嬉しそうだったなあ」

遠くを見るように、唯は視線を動かした。唯は唯で、和に思うところがあるらしい。

「そうね。ちょっとうらやましいかも」

ムギは本気でこう思ったのか、はたまた普通の恋愛にあこがれているだけなのかは律には判断できなかったが、女子として羨望の思いを向けてしまうのは当然だった。

そして、この羨望という意味では、律たちは律たちで考えることがあった。

「なあ、そろそろ話すべきかな？」

いつの間にか弁当も食べ終わってしまい、掃除までの雑談にクラスは入り始めていた。だが、この三人の周囲に漂う空気は雑談をシヤットアウトしていた。

「そうだね。今、ちょうどいいし」

ムギは大きく頷いた。律は、昔、泣きべそをかきながら発表の練習をしている彼女ことを、なぜか今思い出していた。

「あいつもいい加減、自分と向き合う時だよな」

「レッチリか」。難しいよお」

漣は、自室で天井を仰ぎながらつぶやいた。

一位をとつたら、なんでも言うこと聞いてやる。

なんで、巧斗はあんなご褒美を出したんだろう。はつきりとした理由はわからない。ただ、単純な宿題としてスコアを渡したただけは、自分たち全員がコピーをすることはなかっただろう。よく見ているとしか、漣は言いようがない。

それにしても、選曲が見事にばらばらだった。

正直、regaya Pia-no-jac は知らなかった。インストも聞く、ただ単に巧斗はミィハーで音楽をやっているわけではないことが分かった。

それに、巧斗の提示したそれぞれの課題は的確だったように思う。確かに自分は早い曲をコピーする傾向があつたし、オリジナルでもそうだった。だけど、これからのことを見据えると、そればかり作るわけにもいかなかった。

「巧斗さん、すごいなあ・・・」

自分とたつた二歳しか離れていないのに、この思考の深さの違いはどういうことなのだろう。自分たちはただ、軽音で楽しく過ごす今しか考えないことがほとんどだというのに、巧斗は来年、さ来年のことも考えて顧問をしてくれてるように見える。

漣は、はつとした。頭の中が、また、顧問のことでいっぱいだった。なんだか、納涼祭を境にして、巧斗のことを考えてる時間がぐっと増えた気がした。

それだけではない。漣の中で、どんどん欲求が膨らむのだった。

もっと、巧斗のことが知りたい。もっと、話したい。もっと、そばに寄りたいたい・・・。

こんな思いが、ずっと身体中を駆け巡るのだった。

「最近のあたし、変」

この前だって、助手席に座ったムギ鼻の穴を伸ばしてる巧斗が見えたものだから、思わずムツとして怒りの視線を巧斗に投げつけた。なんであの時怒ってしまったのか、今もわからない。たしかにムギはきれいだし、一般人の自分たちに持っていないものを持っている。ただはつきりしているのは、その時の巧斗を見ているのが嫌になっ

たということだった。

「れ、練習しなきゃ」

そう思って再びスコアに目を通すと、その難しさに目が回りそうだった。

フリーのことはもちろん知っている。ロックを志すベーシストで知らない人はおそらくいないだろう。もしいるとしたら、その人はよっぱどやる気がない。フリーは従来ロックになかったフレーズを持ち込んだベーシストであり、そのテクニク以外にも、人格的な面からみても尊敬を集めるベーシストである。とくにこの『ブラッド・シユガー・セックス・マジック』あたりのアルバムまで、バンドの屋台骨と言えるほどレッチリサウンドに欠かせない存在だった。そんなフリーをコピーするということは、溇にとって大きなチャレンジだった。

それに溇だけじゃなく、巧斗の出した課題は納得するものが多かった。確かに律のドラム、ムギのキーボード、唯のギターボーカル、梓のギター。どれが欠けても軽音の音にはならないが、それぞれが抱える問題は解決しなくてはならない。言われてみて初めて気がつくこともある。

「それに、ご褒美って……。律や唯のこと、よくわかってるんだなあ」

自分や梓、それにムギは、課題を出されたら真面目にやるだろう。ただし、唯や律となると怪しい。だからなんでも言うことを聞くと、いう無茶ともいえるご褒美を出したのだ。

「なんでも、か……。」「
納涼祭の時、手をつなぐって言って、すぐ食べ物に走っちゃったしなあ……。」

溇は、自分の想像、いや妄想がなんて恥ずかしいことなのかに気が付き、あたふたして身体をばたばたさせた。

しかし、ご褒美の内容は溇にとってこの上ない、甘い響きを放っていた。

なんでも。漣の脳内で納涼祭の日に見た夢が再生されていく。今でもあの夢はないなと思う。どれだけ自分は、甘えていたのだろう。どれだけ、楽しそうにしていたのだろう。誰にも見せたことのない自分が、そこにいた。

「なんでなんだろ・・・巧斗さんは、顧問なのに・・・」

男子としては見えていても、脳が勝手に妄想を暴走させても、まだ漣は、自分の感情をもてあまし、そして眼をそむけていた。そんなこと、してはだめなような気がずっと漣の中から離れなかった。

なんといつても、この感情に素直になると、みんなに迷惑がかかるのではないだろうかという思いがあった。夏休みにあれだけみんなに言えない思い出があって、考えるのもおかしいとは思った。が、なにより、巧斗は顧問で、自分はその生徒だった。どれほど自分と巧斗が仲良くなっても、巧斗はその姿勢を崩してはいない。踏み込まれても一定の距離を保ちつつ、自分たちと接している。

物足りない。でも、これが正しいあり方なのだとも思う。おまけに、漣だけはなにもできなかった。これまでのことは、すべてが成り行き上でのことだったからである。

どうしていいかわからずに、漣は小さく、巧斗の名前を呼んだ。

男だけ合宿、いや泊まりがけの行動をとると、いろいろと悲惨なことになる。

まず、時間の感覚がおかしくなる。食事をとるとらないも自由だから、遅くまで寝ても構わない。24時間スタジオを使えるということもあって、昼夜逆転が当たり前になってしまった。

次に、酒、煙草、下ネタの割合が普段と比べて格段に上がる。部屋にはたいていアルコール類が転がってるし、雑談の時は煙がひどい。下ネタ、いやエロネタも実際の話になって、これまたエグい。

要するに、ぐうたらでステキな時間が出来上がっているというわけだった。柏木の彼女ネタも、こういう流れだと当然話題に上る。

「ユキ、なんでよりによってお前に、カノジヨ出来たんだよ」

酒が入ってる青島は柄悪く柏木に絡んだ。

「なんでって・・・。言っても信じてくれねーだろうから、いいや」
意外なことに、とうとうと自慢話をするかと思っただうちのボーカ
リストは口を固く閉じた。それくらい大事にしているということなの
か、はたまた至るまでの経緯に言いたくないことがあるのか。

しかし、合宿で口を閉ざすなど、聞いてくれと言っているような
ものである。

「大事にしてるんだよな」。なんてたつて、桜ヶ丘高校の二年生だ
し」

俺の発言に、柏木から怒りの視線が向けられたが、室井と青島は
驚愕の表情を見せた。幸いにも、俺は和ちゃんのクラスメイトや幼
馴染を指導してるからな。逃げられるわけがない。

「え、ユキJKと付き合ってたのか？くそおお」

大学生になって初めて分かったことがある。それは、いかに制服
が素晴らしい衣装だったのかということだ。これは、バンドメンバ
ー全員が一致した結論である。たしかに大学にはいろんな服を着て
くる女子がいて、見ている分には構わないが、やはり、あの制服と
いう魅力にはかなわない。AVで女子校生ものが氾濫しているのも
同じ理由だろう。だから、青島が嫉妬するのは当然と言えた。

ただ、俺も滲に惚れている手前、このままいけば飛び火するかも
しれないが。

「へえ。ユキ、きつかけぐらいいいだろ？タクが連れてきた子の
一人だっけ？」

「シン、なんで知ってたんだよ！」

プリクラを一度見せただけなのに、と柏木は付け加えた。室井の
記憶力は侮れない。おそらく、よく覚えていたのだろう。自分は彼
女といちゃいちゃしてるかと思えば、よく観察しているな。

「だってあれだけいければ覚えてるもんさ。まあお前に不釣り合いだ
とは思っけど」

練習を通じて悪い面も良い面も知っているからなのか、俺たちは言いたいことを言う。しかし、空気が悪くならずにいられるのはそれだけ付き合いが深いことの証明だった。

俺もきっかけまでは知らないの、カシスオレンジを一口飲んで、柏木の言葉を待った。

逃げられないと思ったのか、いやいやながらも柏木は口を開いた。「実は」

その時、タイミング悪く俺のケータイが鳴った。「なんだよこんな時に」

俺はサブディスプレイを確認することなくケータイをとる。ひよっとして、とかすかな期待に胸が躍った。すると、

「タクちゃん、スコアでわかんないとこあるんだけど、教えて！」
ほわほわした声が、ケータイから俺の期待を打ち砕いた。まあ実際に、その期待がかなう日が来るとは思えなかったが。

「タク、女から？」

唯の声がケータイから漏れていたらしく、全員がギラギラした興味を俺に向けた。ケータイを手で多い、俺は短く説明した。

「そうだけど、これは指導だから」

俺は再びケータイを耳にあてた。唯に聞いても良いとは言ったが、さっそくか。でもこの時間にかかってくるということは、俺の目標の四割は達成したと言っても良いだろう。

「で、どこ？」

「四曲目が、最初から・・・」

俺はスコアを頭の中に描きながら、唯の疑問に答えた。

「ほえ、そうすればいいのか・・・。ありがと、タクちゃん！」

「そうか。っーかお前、もう四曲目なのか？」

「それは言えないよ。だって、ご褒美がなくなるもんね」

進行具合を確認しようとした俺の質問には答えずに、唯はお休みとだけ言って電話を切った。

唯、ちゃんと歌ってんのか？ギターの話ばかりだったし。

そう思いながらメンバーと向き合つと、俺は質問の雨を浴びせられた。

「ユキに続いてタクもかあああ！」

「青島、そうじゃない！これは、知ってるだろ、顧問としてだな・」

「顧問だったら、呼び捨てで呼ばないと思うぞ。それにお前結構嬉しそうだったし」

室井の一言は、俺の頭を活性化させるのに十分だった。それにアルコールが入っていたというのもあるだろう。

「それはない。これでもがっかりしてたんだぞ？」

「ということは、期待してた女の子がいるってことか」

柏木が意地悪く笑った。こいつは、俺が漣と一緒にいたことを知っている。俺は口を滑らしてしまったことに気がついたが、もう遅かった。

「へえ、高二の時以来だな、タクのそういう話。詳しく聴かせてもらおうか」

室井の眼が光った。

「ユキの話はどうなった？」

俺は何とか話をもとにもどそうと必死の抵抗を試みた。いかに腹を割って話せるメンツだと言えども、話題を選ぶ自由はあるはずだ。俺は、自分の思いは心の中でとどめておくべきだと決めたからだ。

これ以上、俺が気持ちに素直になれば、顧問として指導がなくなる。最近、その思いが今まで以上に俺をとらえていた。俺が漣のことを想うのと、それは比例して大きくなっていった。

それに、俺の実体験と同じように、漣が俺のことを男として見ていると俺は確信しているわけじゃなかった。

普段はお茶会と練習の割合が、巧斗のおかげで徐々に改善されてきた桜ヶ丘高校軽音部。とはいっても、まったりした空気までもが

改善されることはない。

「ふい〜。相変わらず、ムギのお菓子はおいしいな！」

「律、そろそろ練習するぞ。唯がほら」

驚くべきことに、唯は巧斗が課題を出してから必ず、部室でスコアとにらめっこするようになった。もつとも、超感覚でギターを弾く唯のことだから、いつもものの数分で

「あずにゃーん、助けてー」

と、よくできた後輩に助けを求めるのだった。

「練習してるか、律？」

「そういう溼は？レッチリのコピーはどのパートもムズイけど、ベースなんかとくにそうじゃない？」

逆に律が溼に聞き返す。律の感覚からすれば、チャド・スミス独特のあのリズム感をコピーすると言われただけでも戸惑う。なんといつても、バスドラのゴースト・ノートなんて今の律にできるわけがない。

「それなりに．．．。律の言うとおり、すつごく難しいんだ」

実際は、家に帰ってから勉強そっちのけでコピーばかりしているのだが、それは伏せた。プライドなのか、律に必死にやってるのを知られたくなかったからなのか、どちらとも溼にはわからなかった。ただ、こんなにコピーをしたのは久しぶりだった。初めてベースを触った時、ひたすらに教本とにらめっこした時と同じくらい必死になっていた。

「あずにゃん、ここどうすればいいの？音はわかるんだけど、弾き方が分からなくて．．．」

「先輩、ここはカッティングで、ここからアルペジオに．．．」
そう、ちょうど、今の唯と同じように。

「ほえ〜。タクちゃんもあずにゃんも、やっぱり凄いな〜」

うんうんと頷くと唯は続けた。

「昨日電話した時も、すらすら説明してくれたし。タクちゃんみたいに弾きたいな〜」

しかし、唯のこの一言に澁の心は反応した。初めてロックを聞いた、幼い子供のように。

「唯、巧斗さんに迷惑かけてるんじゃないだろうな？」

「ほい？澁ちゃん、それは大丈夫。タクちゃんそんなこと言わなかったし！」

どうだと言わんばかりにVサインをするが、澁は不安に駆られていた。あの巧斗が、面と向かって迷惑だと言うはずがない。

「今、巧斗さんは必死で練習してるんだから、そこは考えろよ」
ふう、と一息つく、律がニヤニヤしていた。

「澁、タクちゃんのこと心配なんだな」

「そ、そうじゃないぞ。人として当たり前なこと」
しどろもどろになって答えると、ムギが追い打ちをかけた。

「ふふ、澁ちゃんって、まるでお嫁さんみたいだね」

澁の口が空気をかむように動いた。

お嫁さん、ということとは、私と巧斗さんは……。

これまで巧斗との間で頭が追いつかないことはいくらでもあったが、これは、澁にとってその中でもっとも刺激が強かった。瞬間的に、澁は自分がエプロンを着て巧斗に料理を出しているシーン、出勤する巧斗を見送るシーン、子供をはさんで笑いあうシーンが目の前でメリーゴーランドのようにぐるぐる回った。

「ムギ先輩、澁先輩から煙が！」

唯の練習を放置して澁に駆け寄り寄る梓。澁は今にも気絶しそうな顔で天井を見上げていた。

ホテルのスタジオだから、機材はそこまで良いものはそろっていない。ただ、それくらいで意欲が下がるほど、純粹培養されて音楽はやっていない。好きな時に好きなだけ練習ができる環境というのは、のどから手が出るほど欲しい。アメリカでは、ガレージで練習ができるバンドはいくらでもいる。スタジオで一時間千円以上のお

金をかけなければ練習できない日本とは大違いだ。ここに、日本と世界との壁がある。

「あー疲れた！な、風呂入ろうぜ！汗びったびた」

部屋に戻ると、柏木がTシャツをばたばたさせながら提案した。いかにここが長野と言っても狭いスタジオに数時間も入っていれば、汗も大量に出る。

そんなわけで、俺たちは24時間入れる大浴場に浸かっていた。俺たち以外に入っている人はいなかった。

「はあー、良い気分だな」

肩まで熱いお湯につかると、疲れが一気に吹き飛んだ気になる。すでに夜遅く、窓のそとは真っ暗だ。かすかに山々のシルエットが、夜よりも黒く見えるだけだ。

「なあタク、なんでお前、そんなに恋愛しゃべんないの？昔からお前そうだけど、今回なんて特にそうじゃん」

頭に暑さが強襲をかけたように熱くなった。

「だって、しょうがないだろ……。俺が、好きになっても迷惑をかけるだけだ」

「ということは、あの五人の中にいるってことか」

反対側にいた室井が追求する。

「つつてもタクは期間限定の顧問なんだろ？しかもほんとの教師じゃないんだし」

「そういう単純な問題じゃない。だって、俺が生徒に手を出したってことになるだろ」

そうなると、さわ姉の立場が悪くなる。弟に部活を任せるということで、学校も相当な混乱があったに違いない。それでも俺があの部室に行けるということは、つまりさわ姉にそれだけ信頼があった上での判断だったということになる。

この合宿の間、俺が漣のことを考えなかった瞬間はない。練習にどれだけ集中しているつもりでも、どうしたら漣はサティスフアクションで感動してくれるのだろうかと、漣はどんな動きが好きな

のだろうと、そこに行きついてしまう。俺が自制しているからなのか。

「そついや、タクの姉貴の代役だっけ。それは悩むなあ」

青島が頷いた。そう、ここがなければよかった。ただ、さわ姉がいなければあの五人に出会うことも、漣のことを好きになることもなかった。

「あでも、期間限定っていうことはだぞ」

バシャ、と柏木が身体の向きを変えた。

「さわ子さんが戻ってこれば、お前が想定してる障害って全部なくなるんじゃない？」

その発想は、なかった。

夕陽が空を染め上げる。まだ蒸し暑く制服も半そでだが、空の透明感から、確実に季節は秋に近づいていた。

「ばいばーい！また明日！」

校門で、軽音部のメンバーはそれぞれの帰路に分かれた。とくに今週は課題があるせいなのか、みんなとどこかによるわけでもなく、こうしてばらばらに帰宅する。

もつとも、漣と律は家が近いために二人並んで歩いていた。

「まだまだあつついな。なあ漣、コンビニでアイス買ってこうぜ？」

「部室で結構食べてただろ、律。それに私、太り・・・アレ？」

気がつくくと、律はコンビニの中に入ってしまった。

「ん、やっぱりアイスは格別だな！」

「はあ」

アイスを口に運びながら、漣は流れに乗ってしまった自分にため息をついた。

「ねえ漣、ちよつとき、あの公園行ってみない？」

唐突に、律は漣の顔を覗き込んだ。漣は帰ってから練習する予定

だったが、律の真面目なトーンに頷いていた。

食べ終えたアイスのごみを屑かごに投げ入れると、律はタイヤの上をぴよんぴよん跳ねた。鞆を置くこともなく飛び乗ったので、途中でバランスを崩しそうになる。

「おつとと……。 溇、音楽やり始めた時、よくここで話したよな」
「そうだな」

溇が音楽を始めたきっかけは、律だった。まだお金もなく、ステイックしか買えなかった律と一緒に、ここでどんな曲がやりたいか、どんなことをやりたいかさんざん話しあったものだった。それが、遠い昔のことのように感じるが、まだ五年と経っていないのである。

律の真面目なああのトーンが気になって、溇は少し黙った。

「それが今はさ、ムギもいて、唯もいて、梓もいる。バンドができてる。最近思うんだけど、わたしやりたかったことができてるんだなあって」

律の思いもかけない吐露に、溇の心が強く動かされた。なんでこのタイミングでという疑問はあったが、律も律なりに今の状況を思うことがあるのだろう。

「溇、私たち、うまくなってると思う？」

タイヤから降りた律は、溇に感想を求めた。

「うん。個人的にも、バンド的にも。律のキープ力もよくなってるし、唯のギターも聞きやすいし。合宿のときだって、さわ子先生にも褒められたの覚えてるだろ」

「でもさ、それってやっぱり、タクちゃんがいたからなんだなって」
「え？」

溇の胸が、巧斗の名前を聞いてざわついた。ひよっとして、律がここに連れてきた理由は……。

「いやだってそうじゃん。あんなに音楽に対してひた向きって言うの？そんな人見たことなかったし、ギター弾かせればめっちゃくちゃうまいし。でも普段はそれと逆ってというか、私が弄っちゃうくらいフレンドリーだし、面白いし」

律は、振り向いて漣を見つめた。

「タクちゃんのこと、漣、無理してるだろ」

「な、なんでそこで私が出てくるんだ！無理なんか……。そもそも、律が思ってるようなことなんて……」

「じゃあ聞くけど」

あくまでも優しい口調で律は漣に質問した。

「いつの間に、漣は巧斗さんって呼ぶようになったんだ？」

気付かれていた。漣は、納涼祭の時から、ほとんど無意識にこの呼び名を使っていた。なんだか、そうした方が、漣の中で自然だったからだ。

「そ、それは、そう呼んでくれて……」

「ムギヤ梓からそんな話は聞いてないけどな」

漣は追い込まれたことに気がついた。律は、怒っているのだろうか。おそらく自分の行動に、巧斗への感情が現れた時があったのだろう。それが一番顕著だったのが、名前を呼ぶことだったのかも知れない。

「普通、顧問の先生を名前だけで呼びはしないだろ？それに合宿の時だって、最後の夜、タクちゃんと一緒にいたんだろ」

「な、なんで知ってるんだ？」

しまった、と漣は口を手のひらでふさいだが、後の祭りだった。

「消去法でいけばわかるさ。それに帰ってきたときのあの笑顔。何年、私は漣の隣にいて思ってるんだよ」

「じ、ごめん、律……」

「せめてなんかかないよ。ただ、最近の漣みてられなくて」
にかつと笑うと、律はベンチに腰を下ろす。

「漣、もっと自分に素直になっても良いんじゃないかな。もっと、自分の感情に正直になってもいいと思う」

「素直……？」

漣は、律の言葉の意味を把握しあぐねた。どうということなのだろう。

「昔から漣は、なんでもかんでも自分の中に溜めすぎ。なんで言うてくれなかったんだよって思うこと結構あったし」

「そ、それと巧斗さんのことは関係ないだろ」

もし、巧斗のことをみんなに言ったら、バンドが成り立たなくなるのではないか。その不安があつて、言いだせなかった、いや言えなかった。

「なに言ってるの。関係なかったら、今日だってムギのお嫁さんって言葉だけで気絶はしない。普段の漣だったら、真っ赤になって否定する」

律の言うとおりかもしれない。あの時は、どうしようもなく頭が回りすぎた。

「なんで漣が私たちに言えなかったのかは、聞かない。でも漣、これだけは伝えとくね。私たち、タクちゃんだから、こうやってること」

「巧斗さん、だから・・・？」

「私たちのことを気にして、タクちゃんのことを考えなくてもいいってこと。応援してるんだよ、みんな二人を」

「お、応援って・・・」

まるで、漣が巧斗に片思いをしているかのように律は言った。漣は、自分が恋愛をしているとは思えなかった。ほとんど恋愛を知らない漣にとって、恋愛はもっと大人になってからするものだと思っていたし、自分にできるはずがないとも思っていた。

だから、巧斗をめぐる感情がなんなのか、未だに答えは出ていない。それが苦しかった。なにをどうすれば、この苦しみが無くなるのだろうかと思つた時もあった。巧斗のことを考えて、よく眠れない日もあつた。それが、苦しいけど、楽しくて、ドキドキして仕方がない。なぜなら、今の漣にとって、その時間はバンドをしているのと同じくらい幸せな時間だったから。

「だれがご褒美を実行するかわかんないけどさ、もし漣がなったら、自分に従えばいいと思うよ。だって、タクちゃんなんでもするって

「いったし」

「正しくは言うことを聞く、だぞ」

漣の頭が、納涼祭の時に見た、この時期では季節外れになった夢を再生する。でも、漣が混乱することはなかった。

「それに、巧斗さんだからってどういう意味、律？」

気分が軽くなった漣は、いつもの姉御肌を出しながら言った。

「またまた、そこは漣が一番わかってるくせに」

「だから、私はそんなことないってば！」

顔を真っ赤にして否定しながら、漣は律に、そしてみんなに感謝していた。律が漣のことをわかるように、漣も律のことが分かる。

みんなに、気を遣わせていたのだろう。それは触らないという意味ではない。みんなが漣の背中を押すために、律は今日話してくれたのだろう。

たしかに、巧斗へ素直になるという言葉は漣の心を軽くした。

それは、みんなの想いやりがあってこそ出来るもので、自分勝手にしてはいけないものだった。

いつものどつき合いを、夕陽が濃くなっていく公園でしながら漣は、バンドメンバーに心から感謝した。

吐き出す感情、向ける先（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます！

今回は時間軸が前後してて読みにくいかもしれません

巧斗のパートは合宿二日目です。

後半の女子パートはその翌日。だから唯は電話したといったんですね。

こうして、二人に変化が訪れました。お互いに自分のことで精一杯ですが……。

さて次回ですが、課題の結果が明らかになります。え、だいたい想像がつく？

だれがご褒美を手にするのでしょうか。

そして、軽音部の新曲もまだ出来上がっていません。タクはライブが間近になり、緊張していきます……

次回もお読みくだされば幸いです

近づく度に

どんなに想っていても、伝わらないこともある。
逆に、どれほど思われていても、わからないことだってある。

俺が長野の志賀高原から帰ってきたのは、夜遅くだった。

「長距離バス、疲れた・・・」

よく遊びに行くほうではないから、長距離移動と言えばフェスに出かけるくらいだ。だから、山道をぐおんぐおんカーブするバスには慣れていなかった。

「楽しかったけど・・・でもなあ」

バンドの調子は良くなりつつある。サテイスファクションでやる曲もほぼ確定したし、セッションでは新曲のネタもいくつか見つかった。なにより、音楽漬けの一日があるというだけで、満足していた。少なくとも、今まではそうだった。

「それにしても、あいつら・・・」

呪詛の言葉のように俺はつぶやいた。酒の席で質問攻めにあつたことを思い出す。結局俺は、漣のことを話す羽目になった。彼らに押し切られ、漣のことを好きだと認めることになってしまったのだ。「おお、タク、好きな人ができたのか。JKってところが納得いかんけど」

青島はかなり赤い顔で俺の肩をたたいた。ホテルのテーブルに転がっているいくつかの缶が、バンド全体にアルコールが回っているということを示していた。

「JKつつても、教え子っていうか、もう友達みたいな感覚に見えるけどな、ライブ見た限り」

「たしかに、仲はいいと思う」

俺はなるべく冷静さを保つようにながら返した。これ以上説明

する必要はないだろう。なにせ、向こうから泊まりがけの合宿に誘うくらいなのだから。

「まあでも、タクだしな。たいていの女子とは自然と仲良くなれるもんな、お前。そこはすごいわ」

「柏木、俺をチャライ男みたいに言うんじゃない」

「でもタク、漑ちゃんが好きなのはわかった。それに、顧問って言っても文化祭までなんだろ？何悩む必要があるんだよ？」

「それが分かれば苦労しないっての」

頭のなかでいくつも理由が思い浮かんでは消えていく。だが、どれも根本的な理由ではないような気がした。だが、はっきりした理由がわからなくても一歩引いてしまつのが事実だった。

「さわ姉に影響が出るから？バンドを優先すべきだから？いや、違う。」

俺はベッドの上で寝転びながら、根本的な理由を見つけた。

俺は、怖いんだ。

今も、あの五人にも男として認められていない事実を認めるのが、それが原因になって、漑との時間を、関係性を失うのが怖いんだ。

「和、はい、お土産」

和は忙しい間を縫って、合宿から戻った柏木と会っていた。

「ありがとう」

小さく笑って、和はやや小さい紙袋を受け取った。柏木がみんなに茶化されながらも必死に選んだお土産だった。

「どうだったの、合宿？」

ファミレスの椅子で姿勢を直しながら、和は質問した。

「高校生から行ってるんだけど、いつも以上にみんな気合い入ってたな。それよりも一番の話題があって……」

柏木が巧斗のことを話すと、和の表情が驚きに染まった。

「そう……。でも私、この話聞いてよかったのかしら？」

「え？」

「私は黙ってるからいいけど、対面的には、あんまりよくない話だと思っわ」

「タクとおんなじこというんだな。あいつ、学校ではどんな感じなのか知ってる？」

対面的なことを気にすることが、ただ単に巧斗が真面目だからなのか、はたまた本心を偽っているからなのかは、付き合いの長い柏木でもわからなかった。

「直接見たわけではないから……。ただ、弄られたりしてるけど本格的に部活を見てくれてるみたい。唯も尊敬してるみたいだし」

「あいつが尊敬されてるねー」

柏木からすれば、タクの音楽への情熱は見習うことが多いし、作ってくる曲も、最近バリエーションが増えた。これまでは展開が似通ったものだったのに、意外な構成の曲も書けるようになっていた。ただ、巧斗が女子の中にいるのは、ある意味見慣れた光景だった。女子のようなルックスの巧斗は、濃い顔立ちの柏木からすれば敬意を表するほど憧れていた。でも本人は、それが嫌だと言っていた。男として見られない。だからなのか、昔から男としてどうあるべきかをさんざん考えているというのがわかるのだ。

「その言い方、気になるんだけど、どうしたの？」

「それだけ付き合いが長いってこと。なあ和、澁ちゃんのことなんだけど……」

それでも昔から巧斗は、女子に対して行けないところがある。だから柏木は、友達として最大限のおせっかいをしようと心に決めた。

家に帰ってそのままベッドでうだうだしていると、俺のケータイが着信を告げた。さわ姉からだった。

「どした？」

「今日長野から帰ってきたんでしょ？」

いつもと変わらない明るい声でさわ姉は言った。合宿に行ったことは伝えていないはずなのだが。

「お母さんから聞いたの」

まるで俺の心を読んだかのようにさわ姉は続けた。

「どうだった、合宿？」

「楽しかった。新曲のネタもいくつかできたし、ライブに向けて練習もガッツリできた」

俺の言葉に引っかかるものを感じたのか、さわ姉の声が少しいぶかしむ。

「ムーンチャイルドなのに気合い入ってるわね」

「それが、サティスファクションなんだ」

「あんたがサティスファクションに？」

私も出たことがないのに、とさわ姉は付け加えた。確かにさわ姉が大学時代に組んでいたバンドは、上手かったが活動範囲はさほど広くなかった。都会のライブハウスに立てる実力はあったと思うのだが、そのあたりはよくわからない。しかし、やはりバンドマンだったさわ姉もこの名は知っていた。

「運がよかつたんだよ。送ったデモ、かつちりしたのじゃなかったけど、気に入ってもらえたみたいで」

「わたしのギター真似してたタクがねえ。どんどん伸びてくじやない。師匠として、鼻が高いわ」

「大げさだよ。実際にライブしてみないとこれからブックキングしてもらえるかどうかもわかんないし。噂だけど、ここのオーナーすっごく厳しいらしいし。あとPAも」

「タク、今から緊張してるでしょ」

「んなことない」

俺は見栄を張った。しかし、日を重ねることに俺の緊張は増していた。それなりにライブはこなしているつもりだったが、やはり緊張しいの性格の根本は治っていないようだ。

「この前の納涼祭もライブしたし、今年の夏は結構忙しいかなあ。」

「つってももう九月だけだ」

未だ夏休みの俺は、すっかり休みボケになった頭で言った。この感覚をみせると、あの五人にひどく怒られそうな気がするな。

「納涼祭でライブか」。友達が見たって言ってる感想くれたんだけど大盛り上がりだったらしいじゃないの。やるじゃん。ダンスロツクなんかもやっちゃって」

「俺たちなりにポップさをだしただけ。急に話きたライブだから準備期間はそうなかったよ」

「ま、高校までのタクならできない音出せるようになったかな。合宿のセッションでもそうだったし」

「へ？」

さわ姉が俺を素直に褒めることは少ないので、俺の口から気の抜けた声が飛び出た。

「なんていうのかな・・・深みが出た。大らかさがでたというか、まとめ上げるフレーズもできてたし。まだまだ十分な深さじゃないけどね」

セッションを数時間やっただけでここまで分析、評価できるさわ姉は、正直すごいと思う。俺が軽音部の演奏を評価した時はほとんど技術面のアドバイスばかりで精神面に突っ込んだことはできなかったからだ。

「やっぱり、軽音部に行ったからかな？」

「いやいたずらっぽいやい声が俺の耳に届く。」

「そお？いつも振りまわされてるしなあ。この前も・・・」

俺が唯のレスポールメンテナンス事件（命名者、俺）を語ると、さわ姉は笑いだした。

「唯ちゃんらしいわね」。タクのことだから怒ったんじゃないの？」

「俺の感覚とズレてるしな。あそこまでしないのは・・・。去年大変だっただろうな」

四人だったころは、唯のギター指導が相当に難儀だったはずだ。

弦楽器ができるのは溘しかない。基本的なことは教えられたかも

しれない。だが、そこから先は専門外の科目を教える高校教師のよ
うなもので、漣の大変さが推し量れた。何といってもあの、唯だし。
「まあ、唯ちゃんだしね。漣ちゃんたちも、そこまでは気が回らな
かったみたい」

「普通は他人の楽器状態まで細かく気にしないしな」

もつとも俺は耳がいいのか細かいのか、チューニングのズレはも
ちろん弦の調子やドラムの張り具合まで気にして怒られることもあ
る。

ここで俺は、さつきから心の中で、違和感が存在していることに
気がついた。確かに、軽音部は四人だった。各パート一人しかいな
かった。だが、俺がここにいるのは誰のせいなのだろうか？

「さわ姉、去年は軽音部にいたんだろ？メンテくらい教えられたは
ずだよな？」

そもそも、この姉がいたから、俺はギターを始めた。この姉が高
校でデスメタルをしていたから、軽音部の顧問になった。つまり唯
を指導できた人間はいたのである。

「ギターはもちろん教えたけど、メンテまではめんど、いや気が回
らなかつたわ」

「おい音楽教師！」

ケータイを顔前にして俺は怒鳴った。

「本人も大事にしてるって言ってたし、それくらいはするだろうっ
て」

師も師なら弟子も弟子ということか。俺の身体から一気に力が抜
けた。

「それよりもタク、夏休みになったんだし、恋愛の一つでもないの
？」

「唐突だな。そんなのないよ、残念ながら」

「だって気になるし」

漣の顔が、俺の脳内一杯に再生されていった。恋愛の話、それは、
ある。しかしこの話は、さわ姉に大きくかわることだ。迷惑をか

けてしまう本人に話してしまうことになる。それは、自ら進んでト
ラの前に寝転ぶほど危険だった。

「それに私がそうだったんだから。自由にできるのは、大学生の今
の内しかないわよ」

この流れは、またいつもの愚痴コースか。そう判断した次の瞬間、
さわ姉は驚くべきことを言った。

「またまた見栄張って。漣ちゃんのこと、好きなんですよ」

めつきり会っていないはずのさわ姉が言ったことが信じられず、
俺は言葉に詰まった。それでもなんとか、俺は言葉を絞り出す。

「ストレートすぎるだろ、言い方が」

「姉弟なのに隠すことないでしょ」

「なんでそう思うんだよ。だったら、ほかにもいるだろ・・・」

「私の眼をごまかせると思う？ セッションのときだって漣ちゃんと
私の時とじゃ眼が違ってるし、スタジオに呼びに言った時だって、
漣ちゃんの名前出したとたん態度変わるし」

まったくもってその通りだった。だが俺は、自分の気持ちを誤魔
化さなくてはならないと思った。弟として、さわ姉に迷惑をかける
わけにはいかない。

「顧問がそんなこと言っているのか？」

「いいんじゃない？ 健全な恋愛をしてくれれば」

健全な恋愛がどういうものか俺には理解できなかったが、あっけ
らかんと言っているのけるさわ姉が信じられなかった。そのことで、俺
はさんざん悩んでいるというのに。

「と言っても、付き合っただったら私が戻ってからにしてよね」

「どっちなんだよ」

「姉としては応援するけど、教師としての私もいるってこと」

タクと漣ちゃんか。意外な組み合わせね。

タクはもつと、にぎやかな子がタイプだと思っていた。そうでな

くても、タクから恋愛のことを聞いたことはほとんどない。というよりも、本人は話したがらない傾向にある。

姉「私」がいるからなのか、私によく似た顔立ちだからなのかはわからないが、タクは女子の輪にスツと入ることができる。温和な性格がそうさせるのだろうと思うけれど、少なくとも、軽音の五人と打ち解ける確信はあった。

それが、こんなことになるなんてね。本人は否定も肯定もしなかったが、私にはわかる。

個人的には、弟の恋愛を応援したい。今はこうして山奥で研修の毎日だけ。

私はああ言ったけど、本当は気にしていない。むしろ、タクの方が気を使っている。それで考えすぎて、頭が混乱している印象を受けた。

恋愛で悩むことは当然のことだとしても、タクの場合は少々意味が違う。その原因は他ならない私だったが、そのせいでタクが幸せになれないのは、いやだった。

そこがうまく伝わればよかったんだけど。

漣はその日、授業に集中できなかった。ノートを取ろうと黒板に、教師の解説に耳を傾けるが、あまり進まない。

認めたくなかったが、巧斗のことで、頭がいつぱいになっているからだった。打ち消そうとしても、できなかった。

午前中ずっとこんな調子で、漣は机のため息をついた。自分らしくなかった。

「どうしたの、漣。ため息なんかついて」

和だった。最近の和は、漣の視点からでも、同級生の視点からでも輝いているともっぱらの評判だった。恋人がいるところも変わるものなのだろうか。和はおおっぴらに彼氏がいると自慢するタイプではないが、それでも日常が充実していることがはつきりとわかる。

恋人ができる、女子はこうも変わるものなのだろうかと思つてしまふ。

「今日、ぜんぜん授業に集中できなくて。ノートのとりにこないばかりなんだよ」

「そう？ 私には、むしろ嬉しそうに見えるんだけどな、今日の溇」和の言葉には、裏があつた。そこに気付いた溇は必死になつて否定した。和は、夏祭りで自分がどうしていたか、律たちが知らないことを知っている。

「そんなことない！ テストも近いのに、嬉しそうなのはおかしいだろ」

今日は、長野から帰ってきた巧斗が部活に来る日だった。それはつまり、課題の結果が分かるということの意味していた。曲数を競い合う、と巧斗が決めたからなのか、一位の景品がなんでもありだからなのかは溇に判断がつかなかったが、誰も曲数に関しては言っていない。あの唯でさえ、自慢もしてこない。

つまり、あのまったりした軽音部には珍しく、いや、初めてといつても良いくらい、やる気が満ちていた。

『一位の言うことを聞く』

この言葉を実践するのは、だれになるのだろうか。

「そう。でも溇、なにかあつたら、私力になるからね」

しかし、この和の言葉が現実のものになるなんて、溇は予想していなかった。

放課後の喧騒が、やけに耳へ飛び込んでくる。アンティークささえ漂う木製の階段を、登る足が重すぎる。

「くっそ、あんなこと言わなきゃよかった・・・」

よくよく考えてみれば、あの課題を今の時期にやってよかったのか分からなくなっていた。無責任な話だったが、いまの時期は個人のレベルアップよりもまとまりを重視する方がよかったのではない

か。文化祭も後二カ月に迫ったことから、もつと演奏を詰めるべきじゃなかったのか。個人の課題も、同時にやっておけば……。

それに、この課題が変な癖を生む可能性だってある。もしその可能性があたってしまった場合、文化祭までに修正できるかどうか。

なんでだろう、これまで、指導の面でここまで悩むことはなかったのに。

こんな情けない姿をみんなに見られるわけにはいかず、俺は部屋に入る前に深呼吸をひとつ、入れた。

だが、部屋にはだれもいなかった。今日は部活があつたはず……。ケータイで時間を確認するが、取り立てて早く来たわけでもない。つまり、みんな何か用があるのだろう。

それにしてもこの光景、結構まずいな。部屋に男一人。全く知らない人に見られたら俺は完全に女子高に侵入した痴漢になってしまうだろう。俺は普段靴に入れっぱなしになっている入校許可証をぶら下げた。こうしておけば、最悪の事態は回避されるはずだ。

俺は部屋に一つしかないソファに腰を下ろした。昨夜結構ハードなことをしたせいだ。だから身体がこんなに重い。

みんなはいつ来るだろうか。
そのまま座って待ってしようと思った。なに、すぐみんな集まるだろう。

だが、その読みは甘かった。完全に睡眠への一本道だった。

「みんなは遅くなるのか……」

律たちはクラスで決めることがあるとかで、梓は委員会だった。今日は課題結果が分かる日だというのに、こつも予定が重なってしまつのは運が悪いとしか言いようがない。おまけに溲自身、今日の自分に戸惑っていて部屋に行くのがすこしこわかった。ムーンチャイルドの時もそうだったが、今日はその時よりもっと集中できていなかった。

巧斗はいつ来るのだろう。そう思って、澪は部屋のドアを開いた。澪の顔が驚きで染まった。

「た、巧斗さん……」
すでに来ていた二歳上の顧問は、ソファで小さく寝息を立てていた。

無防備な巧斗が、そこにいた。

その姿を見止め、澪の心臓が高速ビートを刻み始めた。合宿でも見ることはなかった、巧斗の寝顔。いつもの面倒見のいい巧斗でも、たまに見せる男っぽい巧斗でもない、素の巧斗がいる。

「ど、どうしよう」

澪の身体は入口で止まった。そこからでは、巧斗の顔はよく見えない。

「みんな、今日は遅くなる、よな」

巧斗を起こさないように小さく澪はつぶやいた。それが、魔法の言葉のように澪を動かした。今なら、誰も見ていない。

そっとベースを置き、巧斗に近づいていく。もちろん音を立てないように神経を足に集中させている。

澪はため息をついた。

想像以上だった。あどけない顔をして眠る巧斗のインパクトは、新しい音楽を耳にした時と同じくらいだった。

澪は屈みこみ、巧斗の顔を覗き込む。本当に、巧斗はさわ子によく似ていた。顔のライン、眼、鼻の形、口元。メガネこそかけていなかったが、こうして見ると本当に中性的な顔立ちをしていた。あどけないその寝顔からは、邪気の類は一切感じない。まるで子供のように眠っている。

いつみんなが来るかわからない緊張感はあったものの、澪はその場から離れられなかった。顔は熱く、身体の震えが止まらない。自分がどんなに大胆なことをしているのかも分かっている。なのに動けない、いや動かない。

本当に、自分で自分が信じられない。

「ごそり、と巧斗が寝返りを打つ。漣はびくつとして身体がのぞけた。自分がしていたことを、巧斗に知られた時にはもう、生きていけない。それだけのことを今しているのだが。」

「どれだけ、巧斗の寝顔を見ていたのかはわからない。ただ、律たちがやってきたことに気付かないほど真剣になっていたことは事実だった。」

「あれ、タクちゃん寝ちゃって・・・なにしてるの漣?!」

「み、みんな!これはその、ええと・・・」

「どう説明すれば、うまくこの場を切り抜けられるのかわからなくなつた。」

「どう見ても、タクちゃんの寝込みを襲うとしたとしか・・・」

「そんなわけないだろ!・・・あ」

「律の言葉は刺激が強すぎて、漣は大声で否定してしまった。一瞬、巧斗のことを気にならなかった。その場にいた四人が、巧斗に注目する。」

「うーん・・・ぐー・・・」

「しかしよほど深い眠りに落ちているのか、巧斗は寝返りを打って寝続けた。」

「タクちゃん、かわいい寝顔だねー」

「ハムスターを見るようにソファへ顔をちょこんと乗せた唯はころころと笑った。」

「よし、こうなつたらやることは一つ・・・」

「おもむろにサインペンを取り出した律だったが、漣に制止されてしまった。」

「梓ちゃんがくるまで、そっとしとこ?」

「ムギの提案に、全員静かに頷いた。」

「いつの間にか、寝ていたらしい。俺が目をあけると、目の前に五人の顔が円になって並んでいた。」

「ごめん寝ちやっただ・っ・っで何してるんだ？」

「いいえ、ただ寝顔を見てただけです」

起き上がってムギに問いかけると、小さく笑って答えた。

まさか。迂闊だった。こんなところで寝た日に待っているものは、一つしかない。

「溲、鏡持つてる？」

差し出された手鏡で顔がどんな状態になっているのか確かめる。

幸い、俺の軟弱な顔はいつものままだった。

「なにやっつてんの？」

笑いを噛み殺した律に、俺は危機を感じた。ここでは二度と寝れない。

「ねこ耳付けさせようとしたのはだれだよ」

あの事件がきっかけで俺はみんなを名前で呼ぶようになったわけだが、そんなことを思いつくメンツがそろっているのである。悪戯される可能性を考えてしまうのは当然だろう。

「そんなのあつたけ？」

「唯先輩、律と一緒に追いかけてまわしてたじゃないですか……」

梓が呆れた声を出した。そういえばそうだった。

「さてと、みんないることだし、さっそく課題の結果を……。律、なんだよその眼は」

「タクちゃん長野行ってきたんだろー。お土産はー？」

お土産って、催促するもんじゃないと思うのだが。しぶしぶ俺は鞆からひよいとアップルパイが入った箱を取り出した。

「お、結構でかいぞ！」

「人数が少ないからな。といってもムギがいつだって、持ってきてくれたものどだいぶ違うと思うけ……」

俺が最後まで言い終わるのを待たず、律はアップルパイを俺の手から取り上げると机に置いた。

「ムギ、お茶だ！みんなでお土産を堪能しようぜ！」

「ちよつとまで、課題が先だろ！そもそも俺がさっきまで寝てたの

つて・・・」

「まあまあ、タクちゃんも食べよ！」

唯が背中を押す。それに続いて漣が

「そうですね。じゃないと、律や唯はベストの状態になりませんか」

漣はちよつとほほ笑んでいた。そこに俺は、ちよつとした戸惑いを覚えた。漣って、もうちよつと俺よりじゃなかったけ？でも今した漣の表情は、二度と忘れられそうにないほどにきらきらしていた。だから俺はこれ以上言う気になれず、おとなしく席に着いた。

「タクちゃん、合宿ってどんなことしたの？」

均等に六つに分けられたアップルパイは特別大きいわけじゃなかったから、みんなあつという間に食べてしまった。ムギはクッキーを新たに用意してくれた。

「律、クッキーがこぼれてるぞ。ずっと練習だったかな。好きな時間にスタジオ入って、好きな時間に風呂入って、寝て・・・。少なくともここよりは練習したな」

「普通は練習しますよね・・・」

この中ではもっとも感覚は一般的であろう梓がつぶやいた。とはいっても、梓も合宿で真黒になっていたのを俺は忘れたわけではない。

「そうですねですか。巧斗先生たちって、週何回くらい練習してるんですか？」

アイステイーにレモンを沈めながらムギが質問してきた。答えは週によってばらばらだ。ライブ前は二日に一回は必ず入るし、逆にテストが迫っていれば土日どちらかしかできないときもある。

「大学って、もっと簡単なイメージあつたけどやっぱり違うもんだな」

「それこそ大学によるぞ。バンドでいうと、俺と室井は比較的单位修得が難しい。あ、室井ってのはハットかぶってたドラマね。あいつはW大行ってるからしゃあないけど」

「W大！？ということは、巧斗さんも・・・」

「俺はそこまで頭よかないよ。地元のS大だけどギリギリだったし」
「S大？国立じゃん」

唯だけ眼が点になって会話についていけないようだったが、それ以外の四人は明らかに驚いていた。

「タクちゃん、どこがそこまでだよ。頭良いじゃん、普通に」

国立に入ったのは、ある意味俺の意地だった。俺の家は、母が音楽、それもクラシックが好きとあってどうしても子供を音楽家にしたかったという。その期待を一身に受けたのがさわ姉だった。しかし、当の本人はデスメタルにはまり込み、その影響で息子までもクラシックとは全く関係のない、むしろ真逆といっても良いロックに目覚めた。さわ姉の場合は、昔からそれこそ死ぬほどピアノをやったらしいが、俺の場合は小学校からギターをやったこともあって、そこまでガッツリピアノを練習した記憶はない。

だが、明らかに母は落ち込んでいた。幸いさわ姉は音楽教師になったものの、俺は高校に入ってバンドを組んだ。夜遅くまで練習して叱られたことも数知れない。

だから、バンドを続けるためにはそれなりの結果を残さないとダメだと思ったのだ。

「そうだったんですね・・・。巧斗先生の音のこだわりがすごい理由がわかりました」

梓が頷いた。アレ、なんか空気が最初と違うぞ。

「じゃー課題の結果を見せてもらおうかな」

「でもどうやって判断するんだ？みんなバラバラなのに」
律が質問したが、それは課題を出してから俺が悩んだところでもある。競争という形もとっている以上、確実性とサプライズ性が要求されるだろう。

「みんな、このルーズリーフにコピーできた曲名書いて。ただし、全部できるやつだけだぞ。嘘書けばすぐばれるから」

俺が言ったことは理解できたようだが、納得していないみたいだ

った。それでも、珍しいことにみんながシャーペンを走らせる音だけが、部室にこだました。

「よし。じゃあみんな、これから一人づつ、書いてもらった曲を弾いてもらいます」

「え〜!」

唯と律のめんどくさそうな声が同調し、漣と梓は戸惑う。ムギだけが、いつもと変わりなかった。

「そんなことやったら朝になるじゃん!」

「まさか。全部やってもらおうなんて思ってないよ。これからランダムで指名して、そこから俺が指定する箇所を弾いてもらいます。みんなが書いてくれたこの紙をもとにね」

「巧斗さん、曲全部わかるんですか?」

「いや、それが実は結構抜けてた曲もあってさ。昨晚ずっと聞いて覚えてたんだよ。それで寝不足になったんだ」

「そうだったんですか・・・」

漣が顔をなぜか赤くして感想を述べた。おれだって、好きな曲のすべてのパートを覚えてるわけじゃない。

「それより、練習やってみてどうだった?」

「いや〜きつかった。あんだだけのコピーを一週間でやんないもん、普通」

全員が律の言葉に頷いた。この反応は、俺にとって意外だった。

「そっか。俺が中学のころは、ギターがうまくなりたくて一週間でアルバム一枚とか、課題決めてやってぞ」

「すごいですね・・・」

梓が尊敬しているのか、呆れているのかわからない表情で言った。俺はギターバカという認識はないが、そうなのか?それよりもみんなコピーをしないんだな。

「さ、課題発表やるか」

一瞬、五人の間に緊張が走ったように見えた。

「じゃーまず最初は、ムギ」

「はい！」

ムギはキーボードにたち、指を構える。準備を確認すると、俺は書いてもらった曲名、展開を指定する。ピアノの跳ねる音は、キーボードだとどうしても軽くなってしまうが、そこはやはりムギ。うまくカバーしながら、指定された箇所を完璧に弾いて見せた。

「お疲れ、ムギはこれで最後か。ということは、七曲か」

「ムギちゃんすごい！私なんて」

「それじゃあその唯言ってみるか。もちろん歌うんだぞ。そういう課題だったから」

「はい」

マイクの調整とギターセッティングが終わる。唯はきっちりとボイカルとギター両方をこなした。バンアパの声はハスキーでありながら表現豊かに歌い上げる。唯の声はそれとは正反対といってもいいが、それでも唯なりにアレンジを加えていた。

「六曲か……。良く頑張ったな、唯」

「でも、ムギちゃんにまけた」

そう、あの唯が条件付きとはいえ、一週間で六曲もコピーした事実は、素直に賛辞を贈ろう。とはいうものの、唯本人は一位を取る気満々だったようだ。

「それじゃ、三人目は梓」

regaの縦ノリ全開なフレーズが、赤いムスタングからあふれ出す。やはり梓は、テクニクがある。Regaのフレーズの独特なリズム感を、完璧とはいかないまでもかなり再現している。そもそも、梓の腕からすれば梓がリードギターを務めるのが素直にいいと思うこともある。ただ、ふだんサイドギターに徹しているからか、梓は楽しそうだった。

「梓ちゃんは、私と同じ七曲ね」

「ああ、あずにゃんにも負けた」

唯がうなだれた。これで一位は絞られた。律が少し残念だった表情を見せたので、四人目は律を指名する。

「律、一曲目はテレキャスのイントロから」

「はい。ほんじゃ、いくよ！」

豪快なハイハットの4カウント。このセットでは音源のような深く、それでいて鋭利な音は再現できるはずもないが、律のドラムは持ち前の思い切りの良さが全面に出ていた。よく見ると、ハイハットペダルでリズムを刻んでいる。だからなのか、一週間前よりはテンポキープできている。

「律、よくやった。うまくなってるじゃん、ちょっとだけど」

「ちょっとって……。あー疲れた……」

「律は六曲か……」

「そうだな。ということで、一番最後は溇だ」

「ええっ！」

溇は身体を激しく震わせた。最後なんだし、もう覚悟はできていたと踏んでいたのだが、そううまくいかなかった。

「なに言ってるんだよ、私たちがやったの見ただろ？」

「溇先輩、文化祭あるのに……」

口ぐちに呆れた言葉をつぶやく部員たち。たしかに、こんなことで演奏ができないなら、文化祭は一体どうなる？

「なんだよ、溇。それじゃ、ここに書いてきた曲は嘘ってことではないのか？」

「そ、そんなことはありません！」

キツと力強く溇は俺を見つめてきた。不覚にも俺の心は早鐘を打ち始めた。

「だったらできるじゃん、それだけやったって思えるならさ」

俺の言葉に溇は困った顔をしたが、何とか演奏させるために、俺はたたみかける。

「それに、やってきたことを否定してるってことになるぞ。俺だったら嫌だけどな」

少々きつい言葉だったのかもしれないが、思ったことをそのまま伝えた。

澪は少し悩んでいるようだったが、口を開いた。

「わかりました、やります」

セツティングする澪を横目で追っていると、律が俺に耳打ちした。

「澪、タクちゃんの言うことだと結構素直だとおもわない？」

「なんだよいきなり」

「だって、あの澪がタクちゃんに一言くらい言われたら演奏する気になったんだぞ？」

「含みのある言い方はやめてくれ」

律の言い方から、言葉の奥深くにある意味を読み取ることができた。それに気がつかないほど、俺は鈍感ではない。

「タクちゃん、そろそろ・・・」

「澪ちゃん、準備できたよー」

唯が声をかけたので、俺は澪の書いた曲目をランダムに読み上げ、演奏させた。澪は顔を紅くしていたが、フリーのスラップやファンクよりのベースを指弾で奏でていく。基本大人しい澪が、アグレッシブなベースラインを弾くさまはギャップにあふれていた。跳ねまわったり動き回ったりはしていないものの、一週間頑張ったことはよく伝わってきた。

「こ、これで全部です・・・」

緊張で疲れ果てたのか、澪はベースを抱いたまま床にへたり込んだ。ムギがあわてて駆け寄って、冷えたペットボトルを差し出した。

「よし、これで全部か」

「えーっと、ムギと梓が7、唯と私が6、そして澪が8・・・」

「そうなるな」

みんなのメモにウソはなかった。一週間でこれだけコピーできたのは、正直驚いた。俺の場合は好きなバンドだったから一週間でフルアルバムを一枚コピーできたが、課題でやれと言われてここまでできるかどうか。

もっとも、軽音部のメンバーは課題よりもご褒美の獲得者がだれになるかに関心が行っているようだったが。

「あれ、ということとは1位って・・・」

「溇先輩、ですね」

「わ、私？」

まだ床に座り込んで飲んでいた溇の顔がまた急激に赤くなった。

「くっそー、1位とってタクちゃんに思いつきり恥ずかしいことさせようとしたのに・・・」

律が大げさに悔しがったが、俺の背中が栗だった。課題のことを根に持っていらっしやるのか？

「タクちゃん、1位の賞品でなんだっけ？」

「1位の言うことを聞く、だよ」

唯の質問に答えた俺は、急激に恥ずかしくなった。いくらなんでも、これはイタいだろう。冷静になって考えれば、この発言はハーレムマンガでしか通用しない。それか、自分に酔っているナルシストだ。

「なんでもいいよ。溇だから、律みたいに変なこと言わなさそうだし」

「ひどっ！」

「さっき言ってただろうが」

ムギ、唯、梓は溇が何を言い出すのか興味をかくさずに注目した。俺も、どんなことが飛び出すのか緊張で落ち着かなくなった。

溇はあたふたして、それでいて必死に頭を回転させているように見えた。

そしてついに、口を開いた。

「わ、私の歌詞作りに、協力してください！」

「・・・どういうことだ？」

溇の言葉の真意が理解できず、俺はどうすればいいのか質問を重ねた。

「え、えっと、歌詞を作るために、一緒に出かけてください・・・」

もじもじという溇はこの世とは思えない可愛さを炸裂させていたが、それ以上に、内容を理解するのに時間がかかった。

イツシヨニデカケル？それは一体何語だ？

一緒に、出掛ける・・・ん？ん？これってひよつとして・・・。

この時の俺は、おそらく濁以上に混乱していた。

近づく度に（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

それよりも、更新が遅くなってすみません！

言い訳しません。オチまで構想はあるのにかかない僕がわるいのです

今回はもっと早く更新します。

今回、タクの出身大学をちらっと書きました。

けいおんのモデルは京都ですが、劇中から間違いなく関東のどこかだろうと思いました。しかし、都会ではありません。

このことを踏まえて、大学名はイニシャルで載せましたがわかる人はわかりますねwww

タクは真面目なので、音楽で迷惑をかけている分、勉強で心配させたくなかったんです。あと室井がかなり頭がいいので助けてもらったり。

国立言って顔はさわ子に似ていてギターそれなり。あれ、タクが普通の大学生じゃなくなってきたなwww

今回は都会の由緒あるライブハウスで、アートワークスがライブします。

そして、澗のご褒美は一体どうなるのか？二人はどうなってしまっ
のか？

次回もお読みくだされば幸いです。

安堵する場所

言っちゃった。あの時のことを思い出すと、澪は未だに恥ずかしさで身体をバタバタさせてしまう。

今がそうだった。

「ああー、もう私ってば、なんてこと・・・！」

言っちゃった。言っちゃった。感情をどうすればうまく処理できるかわからずベッドの上で身体が大きく暴れる。

『歌詞を作るために、一緒に出かけてください・・・』

1位になったことが信じられず、自分の頭は混乱の極みに達していた。でもなにか言わなければならず、ふっと頭に浮かんだことをそのまま言ったのである。

ご褒美のことを考えなかったわけではない。ただ、自由度が高いものだっただけにいい案が浮かばなかっただけである。

そもそも、課題に関して言えばご褒美が目的で澪はやっていない。レッチリは聞いていたし、ブラッド・シュガー・セックス・マジックも当然聴いていた。だからといってコピーするとなると、話は大きく違ってくる。ただひたすら、コピーしていたにすぎない。巧斗が自分たちのために考えてくれた課題だったから。

それにしても、去年の自分だったらこんなことにならなかっただろう。

「先生、きつと変に思ったよね・・・」

巧斗は、拒絶しなかった。自分にご褒美を設定した手前もあるのだろうが、それ以上に気になったのが、巧斗の反応だった。

『一緒に出かける、か・・・。わかった。日取りとかはまた連絡しろよ』

とだけ言った。そこには、恥ずかしがっている様子も、戸惑いも澪は読み取れなかった。

「巧斗さん、こういうの、慣れてるのかな・・・」

もしそうだとしたら。漣は言いようのない不安が身体を覆っている感覚に囚われた。それは、嫌だった。巧斗は恋愛話をほとんどしないこともあって、事実がどうなのか漣にはわからなかったし、聞くタイミングも勇気もなかった。

とはいえ、漣はこんなに激しく恥ずかしがっても、巧斗の態度に不安があっても、ご褒美を撤回する気は起きなかった。

「でもどうしよう……。歌詞作りのためって言ったけど……。歌詞の制作状況は、これまでにないほど遅かった。合宿からもうひと月たつというのに、サビまでかけていない。書こうとイメージをふくらませようとしても、なぜか巧斗の顔や、これまで一緒にしたことが浮かんで、歌詞どころではなくなってしまう。こんなこともあって、漣の中では一応の大義名分があった。巧斗のことで書けないとすれば、もっと一緒にいければ、歌詞が浮かぶのかもしれない。しかし、どうすればいいのだろう。」

その時、漣のケータイが着信を告げた。アメリカの音楽史に1ページを残したスメルス・ライク・ティーンスピリットのイントロ。この着うたは、一人にしか設定していない。

「巧斗さん？」
ケータイに手を伸ばす。しかし、興奮と緊張でうまく取れなかった。

手の中を、ケータイが躍る。焼き芋を触るように跳ねた。

「え、ちよっと、こらっ！」

やっとの思いでケータイを手に取り、電話に出る。

「もしもし」

「漣、今大丈夫か？」

本当のところ、思考が煮詰まっただけで大丈夫なはずがなかったが、その原因である巧斗にいうほど、漣は愚かではなかった。とはいっても、巧斗の意図はもちろん別にあつたが。

「は、はい……。どうしたんですか？」

巧斗がこうして連絡をしてくるのは初めてだった。漣が自分から

連絡なんてできないし、向こうも忙しいだろうという思いから気にしないようにしていた。だが、部長ということで律に連絡がいくことの寂しさは感じていた。

「いやその、漣が課題で一位になった件だけど。ご褒美は本当にアレでいいのか？」

「え、えつと・・・」

アレ以外の回答は思いつかなかった。前に律が背中を押してくれなければ、もつとつまらないお願いをしていただろう。

「歌詞作りの付き添いだろ？そんなに進んでないのか？」

巧斗のせいなのに、という思いを漣は必死で飲み込んで消化した。しかし、進んでいないのは事実だった。

「はい、そうです・・・。ごめんなさい、その、巻き込んでしまつて」

「謝るのは俺じゃなくてみんなにだろ。それより、どこにいきたいんだ？」

そこまでは考えていなかった。しかし一緒に出かけるということ は当然目的地がなくてはならない。ここでも漣は、用意していない というミスにあせった。

「そ、それじゃ、一日、街を周るっていうの、だめですか？」

どこでもよかった。巧斗と一緒にいられるのであれば、場所は関係なかった。

「そうか・・・。俺、ライブまで時間取れそうにないから、細かい話はそれからでもいい？」

「は、はい！大丈夫です！」

巧斗がライブを優先させたことに、漣は寂しさを覚えた。だが巧斗に頼んでいる立場上これ以上強くは出れないし、なにより、巧斗に迷惑をかけることはしたくなかった。

電話を切ると、漣はベッドに倒れこんだ。身体に、嬉しさが弾け飛ぶような錯覚が襲う。

まさか、こんな展開になるなんて、巧斗が来た時は想像もできな

かった。

「でも巧斗さん、やっぱり普通だったな・・・」

感じた疑問が膨らんでいく。彼はこういうことに慣れているのではないだろうか。本人は気にしていなくても、実際観察するとデートしていることは、よく話に聞く。自分が電話で激しく緊張していただけに、余計気になった。

だから歌詞ができないのは、本当に巧斗のせいなのか。それを確かめてみよう。

顔を真っ赤にしながら、漣はそう決めた。

「漣、すごいこと言ったな」

掃除の時間、教室で箒にもたれた律は唯、ムギに話しかけた。すごいことの意味は、具体的に伝えなくても、この二人はわかってくる。

「確かにそうね。でもこれでよかったんじゃないかな？」

「ムギちゃん、どゆこと？」

「だって漣ちゃんは、こういうことでも起きない限り、自分の気持ちを出さないから」

律は頷いた。ただ、幼馴染の律でさえ、漣がはつきりと自分の欲求を口にしたことに驚いた。自分が漣に言った言葉がどれだけ効果があったのか、正直判断がつかなかったからだ。

「漣、変わったな」

「そうだね」

恥ずかしがり屋で引つ込み思案なベ이스ト。それがわずかでも変わったのは、明らかに巧斗と出会ってからだった。以前と比べて、漣は素直になった気が、律はしていた。

「というか、本当に行くのかな、あの二人」

「たしか、もうすぐライブだって巧斗先生言っただけでなかった？行くとしたらそのあとじゃないかな」

ムギの指摘はもつともだった。巧斗の優先順位は、音楽がトップに来ることくらいわかる。とくに今回のライブに関しては気合いが入ってくることを感じるだけに、漑の方を優先させはしないだろう。「ライブって、平日だったよな？」

律の質問にムギは同意した。アートワークスは一番手ということもあって、見に行くならば、時間はぎりぎりだ。高校生は授業という縛りがある。巧斗のような大学とちがって途中で抜けることはできなかった。

「りっちゃん、どうしたの？ライブいくんじゃないの？」

唯の中では、もう行くことは確定していて、それに関する心配はなかった。

「ここでもう一つなにかあれば、二人はぐっと近づくとと思うんだけどなー」

梓も含め、四人は漑が抱いている感情がなんなのかの検討はとっくについていた。漑だけが認めていない、あるは気付いていないためにあれこれおせっかいを焼いていたのだった。今回のライブでも漑と巧斗をもつと接近させたい。しかしそれには巧斗のライブを見ることが条件になりそうだった。

ライブを控え、練習は一つのピークを迎えていた。

いつもよりも必死に、いつもよりも細かく練習する。

下手なことはできないという思いと、出るからには最大の努力が必要だ、と全員の意識が一致していたからだ。

曲ももっとよくなるためにいくつか変更したし、四人のグループを合わせるために何回も録音をした。繰り返し聞き返すことで、どこがよくてどこがダメなのか客観的に判断していく。

「よくなつてはいるな。でも何かが足りない気がしないか？」

スタジオで録音した演奏を聞き終わると、青島が真っ先に口を開いた。

「どこのこと？俺はイントロとメロのつながりがまだ甘いと思った」
室井が指摘する。曲の起伏が激しいだけに、そのバランスがいまいちだと言いたいのだろう。

「なんだろう、弾け具合が足りない、のかな。ガツンと来て欲しいところが来てない気がする」

「柏木、ボーカル抑えられないか？サビ、アウトロは思いっきり言っ
ていいから」

俺はボーカルに提案した。

「わかった。でもどれくらい？」

「通ってるんだけど、抑えてる」

「矛盾してないかそれ」

俺の要求はその通りだったのだが、柏木にはいまいちピンとこ
なかつたらしい。

「客にはしつかり聞こえてるんだけど、ポリュームが抑えてるのか
な・・・もう一回通すか」

普段の1.5倍はスタジオにこもり、ほぼ毎日練習していた。し
かしどれだけ練習しても、俺は不安だった。

なんといつても、プロと一緒にライブをするのである。音楽で飯
を食っていいこうとは思っていない俺らが出ていいのかと考えたこと
もある。バンドに、自分の演奏に自信がない、という意味ではない。
ただ俺の気が弱いだけ、という判断もするが、こう思うことはまだ
まだ練習が足りないからだろう。

「よしいくぞ、室井、カウント頼む」

この時、俺は意識して、溲のことを考えないようにしていた。今
は、音楽に集中するときだと思ったからだ。

クラブ・サティスファクションは、繁華街から一本抜けた通りに
ある。見た目はただの暗い雑居ビルにしか見えない。ただ、この地
下にあるこのライブハウスは、1960年代からの歴史を持つ、由

緒正しいライブハウスなのである。そもそも、サテイスファクションの名前の由来が、かのローリング・ストーンズからきているのである。まだロックがラブ&ピースを本気で信じていたころから、というわけである。

実際、このライブハウスに俺は何回も来たことがある。それはすべてプロのライブを見に行くためだった。それがまさか自分がステージに回ることになるなんて。

まだ日も落ちていない夕方に、俺たちアートワークス四人はそのサテイスファクションについた。

「よし、行くぞ」

心なしが、いつも冷静な室井でさえ、動きが硬かった。地下にある階段にはられた幾枚ものポスターやシールをよくみると、そうそうたるバンドが名を連ねている。1970年代から、俺の好きなインストバンドや時雨まで。このライブハウスを拠点に活動していたプロも多い。

そんな中に、自分はいる。それも、バンドとしてだ。店中に入るとすでに到着したバンドがいた。

「よ、よろしくお願いします！」

いつも調子のいい柏木ががちになってあいさつした。すでにこの空気にのまれてしまっているのが分かる。

「今日対バンするアートワークスか。こちらこそよろしく」

今日のトリを務めるバンド、humanoidのギタリストであるタツヤさんが気さくに握手を求めてくれた。このバンドはさわ姉と年齢が大差なく、ツアーも何回かしているという。

「今大学一年だって？」

荷物を置いてリハーサルがはじまるまでの間、緊張した俺たちを気遣ってくれたのが、いろんなバンドが話しかけてくれた。どのバンドも、俺たちが大学一年生ということに驚いていた。しかも、myspaceにこっそりとアップしていた曲も聴いてくれていた。humanoidのタツヤさんはウェーブのかかった髪とセンスの

いいアメカジスタイルという典型的なバンドマンだった。

「そうです。高校からずっと・・・」

「へえ、すごいな。それで、この年でここに立てるのか」

humanoidはタツヤさんが大学時代に組んだバンドが元になっっているというが、メンバーの変更も経験しているらしい。

そうして過ごしていると、このオーナーがリハーサルを告げた。ムーンチャイルドのいかついオーナーとは違い、小柄で人のよさそうな中年のおっさんだった。噂に聞いていた厳しい感じは感じられなかった。

「逆リハで行きますんで、お願いします」

もっとも、PAはむっつりした表情を一切崩すことがなかったので、噂は本当かもしれない。

桜ヶ丘高校の校門から、かなり急いで走る集団があった。その数は六人。

「あの電車遅れると間に合わないぞ!」

「律、なんでもっと早い電車調べなかったんだよ!」

「しょうがないだろ!まさかうちのホームルームがあんなに伸びるなんてさ・・・」

とにかく、六人は走った。

俺は舞台そでから客席を除いた。お客は10人ほどしかいない。

平日だし仕方がなかったが、俺が望む顔はいなかった。

「和たち、まだ来てないか?」

「ああ」

彼女が来ていないことをしきりに気にしている柏木に俺は同意した。この分だと、間に合わないかもしれない。漣の姿がないというだけで、俺のテンションはすこし、いやかなり低くなっている。特

定の誰かに演奏を見てもらいたいと願うのは久しぶりだった。

「タク、大丈夫か？ 今日あった時から目が充血してるけど」

青島の心配はもつともだった。

「昨日寝れなくてさ。一睡もしてない」

今はライブ前に大量に分泌されているであろうアドレナリンのおかげで眠くはないが、終わったあとどうなるかわからない。

「タクも緊張してんだな」

室井はうなづくが、それは全員同じだった。特に俺がひどくて、寝落ちしようとギターを弾いていたら、そのまま夜明けになってしまったというだけだ。

SEが流れ始めた。そろそろ、ついに出番だ。

「うし、円陣でも組むか」

「おう」

柏木の提案に俺たちは乗った。普段はこんなことしないのだが、今日は特別だった。

「タク、なんかかない？」

「俺？ ベストを尽くす、それだけだと思う。失うものなんてないし」

「そうだな」

室井は少し落ち着いた顔になって言った。

「アートワークス、行くぞ！」

おおっ！

掛け声が見事にそろい、俺たちはステージに向かった。

ポジションに着いてフロアを見渡したが、やはり溲たちの姿はない。

「タク、心なしかお前、落ち込んでないか？」

柏木が俺の顔を見て問いかける。気持ちが顔に現れているのだからか。

でも、演奏するだけだ。届けたい人がいてもいなくても、関係ない。ライブは、そういうものだ。いかに人数が少なくても多くても、聞いてくれる人がいる事実が変わらない。

と言いつ聞かせるが、やっぱり乗れないところがあるのも事実だった。

高校二年の時のことを、俺はこの大事な時に思い出ししていた。当時好きだった子にライブを見てほしくて、誘った。でもその子は足を運んでくれたものの、出番に間に合わなかった。激しく緊張して、心臓が人生で最大のビートを刻みながらチケツトを渡したにも関わらず。おまけにライブ後に聴いた話では、もともと来るつもりがなかったというのだ。

それから俺は、自分から女子をライブに誘わなくなった。友達が行きたいと言う時にだけ、チケツトを渡した。また誘って、無理に來てもらうのが嫌になったからだ。

結局その子には想いを告げることはなく、それ以上ライブに誘うこともなく終わった。

このことがあるから、俺はいつものようにライブに臨めなかったのだろう。あれだけ溲のことを頭から締め出して練習しても、いざ本番になるとこんなにも気になってしまう。

弱い。人として、バンドマンとして、俺はまだまだだった。プロならば、どんな事態が起きても、一定以上のクオリティある演奏をしなければならぬ。でも今の俺にそれができるかと言われるば、怪しい。

「いくか」

そう俺が言った時だった。フロアの扉が開く。

「よかった、まだ始まってない！」

「タクちゃん、来たよ！」

息も絶え絶えになった、よく知った制服姿の六人が現れた。

「和、間に合ったのか・・・」

彼女の姿をみて嬉しがる柏木。一方の俺は、安堵の表情を隠せなかった。今回は、見に来てくれた。それもあんなに汗を流しながら。溲の顔が上気しているのはステージの上からでも確認できた。

「溲・・・」

「タク、よかったな、漣ちゃんたち間に合って」
「うん」

青島の感想に俺が素直に頷いたので、その感想を言った本人はひどく驚いていた。しかし俺は漣を見つめた。漣と視線が重なる。吸い込まれそうな瞳を見て激しく心臓が動き出すが、それとは別のところで、どんどん気持ちが悪く落ちていくのが分かった。漣の視線から感情を読み取ることはできなかったが、今は漣がいてくれることが大事だった。

「よし、ゲストもそろったし、行くか」
室井はそう言って、ワン・ツー・スリー、とカウントした。

アートのワークスの演奏は固かった。それは、誰の目にも明らかだった。

だが、それでも四人は今のベストを尽くそうとした。今の状況でできる最高のサウンドを出そうと。あるものは抑えている感情を、あるものは身体から湧き上がる衝動を。

若いうちにしか出せない爆発力がさく裂し、フロアを満たしていく。

必死になって演奏する力に、観客も引き込まれていった。魂の鼓動が、聞いている人の感情の琴線に触れたのだ。

届けたいと思う気持ち。バンドを楽しむ気持ち。

最初の三十分は、確かに届いていた。

「もう終わった・・・」

それが、アートのワークスの、いや巧斗の演奏を見た漣の感想だった。

緊張しているのは漣でもわかった。それを考慮しても相変わらずレベルの高い演奏だった。

ただ、漣は入った瞬間に向けた目の先が巧斗から離れなかったこと、巧斗と重なった視線になにか二人が共有するものがあつたことに気がついた。演奏が終わった後も数秒間見つめあつた。不思議と他人の眼が気にならなかつた。

「漣、タクちゃんばっかり見てたな」

にやにやして律に指摘されるまで、漣はぼうつとしていた。

「な、何言ってるの！そんなことない！」

「あ、タクちゃん戻ってきた」

セッティングしている次のバンドを避けるようにして、巧斗たちアートワークスはフロアに戻ってきた。ボーカルである柏木は和のところへ、室井は彼女のところへ、青島は友達らしき人のところに行つたが、巧斗だけ出演者が集まるソファのところに行つた。その足取りは重いというよりも、軸がぶれているという表現が正しい。まともに歩いていないのだ。

漣は急に心配がこみあげた。これまでの巧斗は疲労困憊してこそすれ、あそこまでふらふらになつたのは見たことがない。

巧斗の、そばに行きたい。次のバンドのSEが流れ始めた中で、漣はどうすればいいのかわからなくなつた。

「漣、行ってこいよ」

律がさつきとは打って違って、背中をぼん、と押した。

「で、でも・・・」

足がすくむ。遠慮しているのか、それとも近くに行くのを心がどこかで怖がっているのかわからなかつた。

「漣ちゃん、行ってもいいよ。あいつ喜ぶし」

「そうだって」

気がつくくと、仲間やアートワークスも含めたみんなが頷いていた。「こんなときくらい、想いに素直になつても罰はあたらないうぞ」

普段弄るくせに、こんなときだけ優しい。今発言した律なんか特にそうだ。

「ありがとう」

なぜか涙が出そうになるのをこらえて、漣は巧斗に近づいた。

巧斗はソファにぐったりとしていて、呼吸も深かった。

「巧斗……さん？」

演奏が始まり、騒がしい音が周囲を次第に一杯にしていく。しかし、巧斗は漣の方を向いた。

「ありがとう、漣、来てくれて。なかなか来ないから、ちょっと心配してた」

あまりに疲れていたのか、巧斗が見せた笑顔には力がない。

「大丈夫ですか？」

「うん。情けない話だけど、緊張のあまり昨日から一睡もしてないんだ。ちがうな、ここ数日練習ばっかしててろくに寝てないな」

「だ、大丈夫ですか？」

漣は巧斗に身を寄せた。身体を近づけると、ふわりと巧斗の汗の匂いがした。

「心配しなくても大丈夫。俺、結構タフだから」

漣はなぜか悲しくなった。なんで巧斗は、こんなになるまで音楽をするのだろう。好きなのはわかる。でも身体が壊れてしまっただけ、元も子もないではないか。

「本当に気を付けてください。巧斗さんに会えないの、私……」

しかしこの言葉は、轟音と尻すぼみになっていった声のポリウムで巧斗の耳に届かなかった。

「隣すわる？ここのソファふかふかしてて座り心地いいぞ」

「は、はい……」

促されるまま、漣は腰を下ろした。

「俺弱いよなあ」

ポツリと、巧斗はつぶやいた。

「弱い、ですか？」

「こんなに緊張して、漣たちがいないとテンションあがらないし。」

男だったらもつと構えてなくちゃ」

「そんなこと……。私なんて、人前出るの全然ダメですよ？それに比べたら、巧斗さんは……」

またしても、漣の言葉は途切れた。しかしそれは、漣が詰まったからではなかった。

巧斗は、眠ってしまっていた。それも、漣の肩に寄り掛かって。

「た、巧斗さん……？」

数日間まともに寝ていないというのは本当だったのだろう。ゆすつても起きない。ピクリともしない。

その寝顔はあまりに安心しきっていて、無防備だった。漣の心臓がきゅつと縮んで、また激しく鼓動を刻み始めた。

私に、安心してくれてる……？

漣も、さつきからなにか心地いい感触に身体が包まれていた。軽音のみんななるときのとは違う、巧斗の隣にいる時にだけ感じる、なにがあっても大丈夫だと思える感触だった。

「巧斗さん、お疲れさま」

漣は巧斗に対して初めて、穏やかな表情になった。

相変わらず心臓はバクバク動いている。でもそれ以上に、漣はここを離れたくなかった。

安堵する場所（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

この話、ライブの描写がこれまでと比べてあっさりしてますが、今回のテーマはライブそのものではなかったので割愛しました。

二回も描写してるし、まあいいかなーと 待て

心の動き、とくにライブ前のテンションって経験上、来てほしい人がいるかないかですごく変わるんですね。

タクの知られざる恋愛が少し出てきましたが、タクはもてるというよりも仲が良かったために恋愛対象として見られないことがほとんどだったりします

かといってリア充に嫉妬したりはあんましないかな

感想どんどんお待ちしています。賛辞、指摘、要望、なんでもかまいません。書いてくれるとウッキーの更新頻度が上がるかもしれないかもしれませんwww

今回は、デートに向けて、タクと漣がどう出るか、です。お互いまともなデート一つ経験がない。でも行きたい。

そんな中、仲間がアドバイスしますが、ただ純粋なアドバイスともいかず……

次回もお読みくだされば幸いです

おせっかいと親切は紙一重

グラスの触れ合う音が、居酒屋にこだました。

こじんまりとした居酒屋だ。そこに、ライブに参加したバンドの半数、つまり10人以上が騒いでいた。

俺たちアートワークスも誘われたので出席しないわけにはいかなかった。もっとも俺はとてそんな気分になれなかつたけれど。

「オーナーに結構いわれてたなあ」

共演したバンドの一人が同情してくれた。

「どんなこと言われた？」

タツヤさんがジョッキを片手に言った。

俺たちは目を合わせた。

いつの間にか溼の肩に身体を預けて眠ってしまった。ここまでは良かった。しかし、ライブ後聴いたオーナーの感想がそのやり遂げた感覚を粉碎した。

「まず、君たちの音楽は、まだまだモノマネの段階だ。個性はあるが、弱い。ニルヴァーナが好きということがすぐにわかる」

「インストも、インパクトがある曲とない曲の差が激しい。どっちかに絞るべきだ」

「ベースとギターのバランスが悪い」

などなど。穏やかそうな顔ではつきり言うので、ずしりと言葉が重い。

「そっか。でもこのクラスのハコになると結構言われるからなあ、みんな」

見た目は草食系のドラマ が、昔を思い出したようにつぶやいた。「そういうもんなんですか？」

柏木が身を乗り出した。

「そりゃそうさ。個性の出し方なんて一番苦労するとこだしなあ」
ここまで言われたのは、実は初めての経験だった。聴くといつて

も友達かノリのいい観客だし、それなりに自信もあった。少なくとも、ムーンチャイルドでやっている限りでは。

でもここでは違う。上手い演奏はできて当たり前、その上でどんな曲が作れているかが求められた。ライブハウスは慈善事業じゃない。食っていかなくてはならないのだから、厳しくなるのは当然だった。それに歴史が加われば、なおさらだ。

それから、たわいのない話に内容は移ったが、俺の心はやはり落ち込んだままだった。

ニルヴァーナのコピーかな、と思った。

オーナーに言われたこの一言が、俺の心臓を串刺しにしたまま、動かない。

昔も今も、強い個性を持つバンドの曲は色あせない。何十年経とうが いいものはいいのだ。

それができるのは、確固たるオリジナリティ。そのバンドでしか出せないものが存在しているということ。今のアートワークスには、これが足りないのか。

飲み会のノリは騒がしく、居酒屋全体を包み込むほどだった。俺は煙草に火をつけた。

その日、何も手につかず、漣はベッドにもぐりこんだ。

眠れない。ライブの時、巧斗と重なりあった、視線。

音楽の世界に埋没している、演奏。

ライブ後実感した、巧斗との一体感。

そのどれもが、漣を夢中にし、興奮させていた。もっとも、漣のことだからどうしてなのかわかっていなかったが。

ひとつ言えることは、漣はこれまでにないくらい、巧斗を身近に感じたということだ。それは何も、今日がもっとも身体が接近したということではなく、心が近づけた感触がある。それが、漣を幸せな気持ちにさせるのだ。

しかも、このライブが終わったということとは……。布団にもぐりこんだ漣は、疑問を感じることなく、ただひたすら幸せをかみしめた。

漣の幸福な時間は、長く続かなかつた。

すぐにでも来ると思っていた巧斗からの連絡が、なかなか来ないのだった。

今日でライブから三日目。巧斗は部活にも顔を出さなかった。いつ来るか具体的な話は律に聞いてもわからない。いつもだったらあらかじめ予定が組まれてあるのに、なにも言っていないのは初めてだった。

自宅の部屋で、漣はベースを立てかけると部屋着に着替えず、ベッドに腰掛けた。

ずっと、いつ巧斗から連絡がくるか、気になって仕方がなかった。携帯を確認する頻度も、ずっと増えた。驚くべきことに、授業中にさえ、こっそりと見てしまう。実際に連絡が来たらパニックになることが分かっているのに、待ち望んでいる自分がいた。

これだけ漣が感情を暴走させているのに、ライブで別れてから、漣のケータイはニルヴァーナを鳴らさない。

「今日も、来ないのかな……」

俯いたまま漣はつぶやいた。ベッドのシーツを握り締める。あれほど嬉しかったのが、うそのようだ。膨らんだ風船が萎む時間があると言っ間なように。

不安が加速していく。自分がこんななのに、巧斗はなんとも思っていないのだろうか。ライブ中の巧斗はすぐくかつこいいし、優しい。寝入っている姿は、思わず見とれるほどだ。大学には女の子もたくさんいるだろうし……。

漣の手がケータイに伸びては止まり、伸びては止まるを繰り返した。

聴けばいいだけのことだ。だがそれは迷惑になるのではないだろうか。

胸の中がどうしようもないほどもやもやした状態だった澁は、もう一日まとう、と決意するので精いっぱいだった。

次の日も連絡は来なかった。部活中、まったりと仲間がしゃべるのに、会話の受け答えが今一つになる。

「澁、どうしたんだ？」

まず律が気付き、聴いてきた。澁自身、気が乗らない原因は明らかだったが素直に言ってしまうのは気が引けた。

「え、テストが近いから、かな。ははは・・・」

澁の精いっぱい笑い声は、しかし乾いた空気を醸し出していた。言い終わった澁は、みんなが疑惑を込めた眼で見つめていることに気がついた。もう何回目になるのだろう、素直にならずに、こうしてみんなから不審がられるのは。

「澁ちゃん、タクちゃんとなにかあったの？」

唯が身を乗り出した。澁は、ここで同意すれば、次巧斗が来た時どんなツッコミを受けるのか考えた。

そんなこと、させたくなかった。

だから澁は、しつこく食い下がる律たちをかわしながら、練習に臨んだ。文化祭まで、残された時間は少なくなっているからだ。

帰宅すると、昨日と同じく、澁はベッドに倒れこんだ。部活中あの手この手で巧斗と今どうなっているのか、本当に出かけるのか根掘り葉掘り聞かれ、肉体的にも精神的にもぐったりしていた。

「あんなに聴かなくてもいいのに・・・」

気になる気持ちは、分からなくもない。もしみんなに浮いた話が出れば、どんな人なのか知りたくなるだろう。願いが届いてほしいとも思うだろう。

でも、自分と巧斗の場合は違うのだ。確かに巧斗を見ていると胸

が高鳴るし、歌詞の手伝いをしてくれると決まった時も喜びがさく裂したが……。男子として見てはいても、基本は尊敬だと溼は思っていた。

一向にならないケータイを握り締める。もやもやした気分がこのまま続くことの不安と、巧斗の迷惑にならないだろうかという気持ち溼の中で、ぶつかり合う。しばらく葛藤は続いていたが、ついに決めた。

アドレス帳を確認し、発信。

「もしもし」

数コールの後、もっとも溼が聴きたい声がした。

溼からの着信があった瞬間に俺が思ったのは、しまった、ということだった。

ライブの酷評から俺の意識は完全にバンドに飲み込まれてしまっていた。ニルヴァーナに似ていると言われてからずっと、バンドのオリジナリティはどこにあるのか、なにがアートのワークスにしかない音楽なのか、ギターを弾きながら探していた。

溼と出かける約束は、もう少しあとでもいいと思っていた。それがいけなかったようだ。

しかも俺は、顧問としての活動もしなかった。

「溼、部活行かなくてごめん。今週中は絶対行く」

「わかりました。それで、その……。出かける話なんですけど」

電話から聞こえてくる声は、感情を抑えているのか分かった。ここから俺は、溼が俺に怒っていることを知った。

「本当にごめん」

どうして連絡しなかったか、言い訳はできなかった。溼のことを察していなかった自分が悪い。ライブのことで落ち込むことは自分の問題だからだ。それを溼に電話しなかった理由にしたくはなかったし、ぐだぐだと言いつつ並べるのは、男のすることではない。

巧斗は一切言い訳をしなかった。漣が理由を聞こうとしても言うことなく、謝罪するだけだった。なにがあつたのか知りたい漣だったが、なにも部活に來なかつたこと、電話しなかつたことを責めているわけではない。巧斗は大学生だから用事も多いだろう。ただ、一回熱を出したことからもしかして、という心配があつた。声を聞く限りでは元気そうだからその心配はなくなつたが、それがなぜ、と新たな疑問を生じさせる。

「どうしてなんですか？みんな、心配してたんですよ」

「あ、ああ。ライブのことで、ちよつとね」

聴いてもこれしか言わない。どんな些細なことでもいい、部活では楽しそうにしていた巧斗である。その彼が、どうして一切の連絡をしなくなつたのか、知りたい。

それでも、ただ謝るだけ。漣の中で、電話をかけた時の焦燥感がどんどん萎んでいった。

巧斗は、ずるい。これでは何も言えないではないか。

「ずるいですよ。どうして、巧斗さんはいつも謝るんですか？」

電話の向こうで、巧斗が息をのむ音がした。

「それは……。言い訳するの、男らしくないからだよ」

男だから。巧斗はずいぶん、そこにこだわる。女々しい言い訳はしたくないのだろう。しかし漣は、さびしくなつた。巧斗に安心感を覚えても、それは自分だけの話だ。頼りがいがある女子だと自分で認識したことはないが、それでも、頼ってほしかつた。

「なにかあつたら、言ってくれていいんですよ。巧斗さんは顧問ですけど、でも私たちが力になれることがあれば、なんでもしますから」

「そうか……。有難う」

電話が切れると、漣はベッドに倒れこんだ。やや強引なやり方だつたとは思つ。それに、こういう心を開かせるのに長けているのは

律か、唯だ。自分はおどおどしまくりだし、慣れていない。むしろ開く側だ。

それなのに、巧斗相手だとどうしてこんなに、感情が湧きあがるのだろう。

混乱する溼だったが、スケジュール帳にしつかりと、巧斗と出かける日に大きく花丸をつけることは忘れなかった。

「溼ちゃんから怒りの電話が来たあ？」

「うん」

柏木がビツクリした声をあげたのは気に食わなかったが、事実なので頷くしかなかった。

「巧斗がそんな風になるとはねー。ライブのあと、俺もへこんだけどさ」

カシスオレンジが入ったグラスを運びながら青島が理解を示した。今日は練習がないが、ライブ後まともに飲めなかったのでやり直そうということになり、三人で地元の居酒屋に来ていた。しかし室井は彼女と約束があるらしく来れなかった。

「でもなーんかつらやましいな、内容もかわいいじゃん」

もう溼とのことを隠す必要はなくなったので、質問されるまま俺は答えていた。青島の感想は客観的なものだったが、俺からすればシヨツクの大きい出来事だ。かわいいなどと考えられなかった。

「かわいい？いきなり電話でなんで来ないんですかって言われてみるよ。言葉に詰まるから」

「それはどうでもいい。結局、どんな話になったんだ？」

「それは、その・・・」

俺はジヨツキを置いた。この件はどうすべきなのだろう。ただ俺にはその類の経験がない。残念だが、今は問い詰めた柏木の方が、経験値が高い。

「こんど、一緒に出かけることになって・・・」

二人の口が、開いたままになった。

登校中は、律と漣は一緒になることが多い。家が近いのと小学校からの付き合いなので今や習慣になっていった。

今朝は珍しく律が漣を迎えに来たが、律はちよつと驚いた。

漣が嬉しそうなのだ、どことなく。とっておきの情報を言おうと思っていた律は面食らった。ある意味、漣は唯よりも感情が顔に出やすい。

「漣、なにかあったのか？嬉しそうな顔してるけど・・・」

漣はあいまいに返事を返したが、律の疑惑は深まるばかりだった。学校へ向かう道すがら、律は漣を注意深く観察した。やはり機嫌がいい。歩くテンポ、表情、すべて漣のテンションが上がる何かがあったことを示している。

「漣、タクちゃんとかける話、アレどうなったんだ？」

なんでもない風を装いつつ、律は言ってみた。すると

「あ、あの話？無くなったよ。か、かわりにベースの弦買ってくれてるって」

どぎまぎして言う漣。面白いくらいに、自分のひっかけにかかってくれた。

「なーんて言つて、本当は行くんじゃないのか？」

律は漣の顔を覗き込んだ。漣の頬が朱に染まった。

「な、なんでそんな疑うんだよ」

「だって顔に書いてあるし」

にやにやしながら律が指摘すると、漣は反射的に顔を触った。律はそんな漣を見て、巧斗がうらやましくなったし、なんとしても、と決意を新たにするのだった。

「弦だなんて分つかりやすいこと言っちゃってさ。ようし、タクちゃん次来るの明後日に決まったから、それまでにいろいろアドバイスしなきゃな」

「アドバイスって、何する気だ？」

澪がジトつとした視線を投げかける。澪からすれば、恋愛経験のほとんどない軽音部からのアドバイスは信用できない、ということなのだろう。それはその通りだったが、律は一点だけは確実に言えることがあると考えていた。

ため息をつきながら澪は席に着いた。律が、いやみんながするアドバイスがどういうものなのか、検討がつかない。鞆から教科書やノートを取り出しながら、澪は考えた。そもそもこれは、巧斗と歌詞を考えるためのものだ。そんな、みんなが考えてるような甘い感じは……。確かに目的地もはっきりと決まったわけじゃないし、大まかな流れはほんやりとしかイメージも湧かないが……。どうすればいいのだろうか。昨日考えようとしても、イメージを浮かびあがらせる事だけで頭が爆発しそうになったためにほとんど考えられなかった。

これって、デート になるのかな。

でもそれは、どちらかが遊ぶ目的で誘うから成り立つのだと、澪は自分に言い聞かせた。なぜこんなにも保険をかけるのか、言い訳じみた思考をするのかわからなかった。もう自分が、巧斗を普通の男子として以上の見方をしていることに気付いていたのに。

「おはよ、澪。もうすぐホームルーム始まるわよ」

煮えたぎりそうな思考は、和の声で収まった。振り向くと、口角を絶妙な角度まで上げてほほ笑む和がいた。その姿はやはり女らしいオーラに包まれていた。

そう言えば、今や和は知り合いの中で一番恋愛の話が聴ける人だった。相変わらず中はよさそうだし、サテイスフアクションの時も、柏木から離れなかった。帰りに律が弄ってもあまりに堂々としているので、みなが羨望のまなざしを向けたほどである。

「おはよう、和。今日、聞きたいことあるんだけどいいかな？」

「いいけど、なんの話？また唯のこと？」

漣が和に相談するのは珍しくなかったので、気さくに応じてくれた。しかし、今は時間がなかった。

「ちよつと長くなりそうだから・・・お昼の時に良い？それに今日はほら、小テストもあるし」

和は漣の言葉に何かを感じ取ったのか、柔らかい微笑を浮かべて良いわよ、と言ってくれた。

「それで、何を改まってききたいの？」

ようやくやってきた昼食の時間。二人は窓際の席を陣取って弁当を広げると、和がまず口を開いた。

漣は決意したもののなかなか言い出せなくてもじもじしていたが、数分たつて質問した。

「和と柏木さんで、どんなデートしてるの？」

和が一瞬ずっこけかけた。なにやら重大なことかと身構えていた和にしてみれば拍子抜けする内容だった。

「どうなって・・・普通よ。ご飯食へに行ったり、遊びに行ったり。漣も一回見てるでしょ？」

和は納涼祭のことを言っていた。確かにあの時は付き合い経てだったとはいえ、和から楽しさがあふれ出していた。漣は思い出すだけで恥ずかしくなった。あの時は、まさか巧斗と二人きりで周ることになるなんて思っていなかったし、手もつないだし・・・。

「そうだったな。でもバンドマンだからライブとかに行ったりはした？」

「うん、今度行ってくる。私はよく知らないんだけど、優季さんが大好きなんだって」

本当に、楽しそうだ。普通だったらただのノロケにしか聞こえない内容だが、和の仁徳かそこまでいやらしさは感じない。

「あ漣、なんでいきなりこんなこと聴くの？唯なら分かるけど」

漣はあせった。和は、矛盾というか不可解さに気付いている。できれば誰にも知られることなく出かけたかった。でもどうすればい

いのか、経験が圧倒的に不足していた。それは、自分が巧斗に、『歌詞のために、普通のデートをしてください』
と言ってしまったからだだった。

普通って、なに？

「え、えつと、今度、巧斗さんと二人で出かけることになってさ・
」

微笑すらしていた和の顔が硬直し、フォークを危うく落としそうになった。あまりの驚きぶりに、言った澁の方が驚愕したほどだ。
和は顔を澁に近づけて言った。

「場所変えるわよ」

和が澁を連れてきたのは、生徒会室だった。今日はなんの活動もないから安全が確保されているらしい。

「安全って・・・そんな大げさな」

「澁、自分と先生の立場を考えてみなさい。澁はファンクラブがあるほど人気があるわ。それに巧斗先生はちゃんとした顧問。私は優季さんがいるから話聴いているけど、ばれたらどうなるかわからないわ」

和の口調は穏やかだったが、投げかけてくる視線は厳しいものがあった。ファンクラブのことは半ば忘れかけていたにしろ、巧斗と澁の関係は顧問と生徒だった。二人の年齢差が、たった二歳離れているにしろ。

「まずかった・・・かな・・・」

だが、しゅんとなった澁は和が言った次の言葉に耳を疑った。

「なんてね。澁のことだしね。聴きたいことがあったら何でも言うて」

思わず、澁の口から気の抜けた言葉が飛び出した。

「なんで？」

「ほら、この前言ったじゃない。何かあったら力になるって」

和からすれば、この手の話をアドバイスすることになるうとは思ってもみなかった。

「そもそも、なんでそんな話に？」

澪は、至った経緯をかいつまんで説明した。

「巧斗さんも思い切ったこと言ったわね」

「ご褒美ということであれば、真っ先に思いつくのがお菓子か、何かを買ってあげることだ。なかなか、なんでもアリという思考には達しない。もっとも、それでどこかに行きたいと言ってしまった澪も相当なものだったが。

「だから、普通のデートってどういうものなのか知りたくて・・・」
ただ、澪はこうしたことがなければ言い出せなかったであろうとは和にも想像がたった。

「普通のデートね・・・。私の場合は、どこか目的地があったけど・・・」

それから和は、澪の質問に答え続けた。自分の体験談を話すことはどうも恥ずかしかったが、澪が真剣なまなざしで聴いてくれるので助かった。でなければ、ノロケる女子校生という一番性質の悪い話になっていた。

昼休み終了のチャイムが鳴ると、澪は納得したような、それでいて悩むような顔をした。

「じゃあ澪、頑張ってたね」

「う、うん・・・」

真摯に頷く澪をみて、和はほんの少しだけ、巧斗に嫉妬した。

その日の軽音部は、どこがおかしかった。

律や唯といった、普段練習しながらないメンバーがまず、お茶タイムよりも練習を優先させたからであった。

「おーし、次カレーいこうぜ！」

相変わらず頭の中は出かけることでいっぱいだった澪も、この変化には気づいた。

「二人とも、どうしたんだ？いつになく気合い入ってるけど」

澪の質問に、律は含みのある笑い方をした。

「今日はやることがあるからな」

梓も、今日のノリが理解できないのか、不安そうな視線を澪に向けたが、澪にはさっぱりだった。

やることが何なのか激しく気になったが、文化祭が近いこともあって、ようやくやる気が芽生えたのかもしれない。澪はそう前向きにとらえることにした。

一通り練習が終わると、ついに唯が言い出した。

「みんな、お茶にしよう」

ムギがお菓子を準備している間は、みんな席でしゃべるのが常だったが、今日は違った。律と唯はホワイトボードを引っ張ってきて、マーカーである言葉を書いた。

『澪大变身大作戦！』

「・・・律、何だよこれは」

ホワイトボードの怪しげな作戦名に、澪は嫌な予感がした。

もしかして、巧斗さんと出かけることが分かった？

いやでも、みんなの前で宣言しているからちよつと違う。どうなったか報告していないのに、この扱いは不思議だった。しかもこれは、マンガによく出てくる恋愛系のエピソードじゃないか。

「書いたまんまだよ、澪」

「ひよつとして、さっき言ってたやることって・・・」

「そだよ」。澪ちゃんを、もつと可愛くさせるんだ！」

天真爛漫な唯の台詞は、しかし澪をさらに追い込んだ。

「みんな、用意できたよー」

気がつくくと、目の前にはアイスティーとケーキが整然と並べられていた。展開に追いつけずに、澪は目を白黒させた。

おもむろに律はたちあがると、サミット開会を告げる国家元首のように静粛な面持ちで言った。

「ではこれから、澪を魅力的な女性にするための会議を始めたいと思います」

「だからなんでだ！」

梓や巧斗が加入してから回数は減ったとはいえ、去年もつとも弄られた経験を持つ澪はまたその類の何かではないかという疑惑を抑えられなかった。

「いやだって、澪はタクちゃんとかけるんだろ？そのためさ」

アドバイスをしたということなのだろうが、してくれる本人たちはその類の知識に明るいとは思えない。そもそも自分はそういうこと出かけるわけじゃないし。

「律、朝も言っただけその話なしになったからな」

「嘘おっしやい。あの時の澪、明らかにおかしかったじゃないか。

あたしの眼はごまかせないぞ」

「それじゃ、澪ちゃんを可愛くするためにはなにが大切だと思う？」

澪の抵抗空しく、唯の一言で会議は始まった。

「唯、意見があります」

「どうぞ、りっちゃん議員」

「まず、ファッションを磨くことが必要だとあたしは考えます」

「ファッション、ですか？そうでなくても澪先輩は十分可愛いと思いますけど」

練習中不安だった梓も会議に疑問を感じなかったのか、律の提案に反論した。

「だって梓、澪の私服はなんというか……澪を生かききれてないと思うんだ」

そういう律の私服はボーイッシュなもので固められている。お嬢様であるムギ以外、おしゃれに気を使うメンバーではなかったが、思うところはあったらしい。

「生かききれてないってどういうこと？」

ムギが楽しそうに質問した。自分を置いてどんどん進行していく会議に、澪はあせった。このままいくとどうなるか、想像がつかない。

「去年の文化祭で、澪にはファンクラブができたし、一緒に街で遊

ぶと男子がよく視線を漑に向けろし。小学校から知ってるけど、やっぱり漑の外見は普通の人と比べると違うなあって。でも肝心の漑はおしゃれに気を使ったことがない！」

こう力説した律の言葉には説得力があった。確かに漑がばっちりな格好で現れたことはない。あまりに律の言う通り過ぎて、漑も反論できなかった。

「それで、こういうことを考えたんですか・・・」

納得です、と梓は言ったが、漑はなんとかこの空気を変えるべく「で、でもしなくていいぞ。服のことは私が決めるんだから」

「強がつて。じゃあ漑の好きな格好つてなに？」

律の質問に漑は言葉に詰まった。

「えっと、動きやすいとか、そんなに派手なじゃない服・・・かな」
律は深刻そうな顔で言った。

「漑、それで出かけるつもりなのか？」

「出かけるって、みんなが想像してるようなことじゃないからな！
歌詞を作るために、普通のデ、デートがどういうものか知りたくて・・・」

せめて認識の違いを直そうと漑は主張した。みんなは漑が自分のためだけに行こうとしているが、それは違う。

「漑ちゃん、でももし普通の格好で行って、タクちゃんが幻滅したらどうするの？それに普通のデートっておしゃれすると思うんだけど」

ここで唯がまさか入ってくると漑は思わなかったが、的を得ていた。巧斗がショックを受ける・・・それは今の漑にとって一番衝撃的なことになっていた。

「わかったよ、おしゃれする」

「そうこなくっちゃ！」

しぶしぶ認めた漑の言葉に、律と唯はハイタッチした。

「それじゃー話を戻すとして、漑はどんな格好がいいと思う？」

「りっちゃん、それなら巧斗先生が好きなファッションを考えた方

「がいんじやない？」

ムギが会議を楽しんでいることがよくわかるテンションの高さで言うと、律の顔が輝いた。

「それだ！みんな、タクちゃんが好きそうな格好をどんどん上げてこっ」

結局、練習時間よりも会議のほうが長かった。どんな服を買い決めたものの、湊には不安が募った。

それが服に関してなのか、出かけるそのものに対してなのか分からなかったけれど。

おせっかいと親切は紙一重（後書き）

一か月以上更新できなくてすいません！

最長ですね……。なんとかしないと、これから……。

今回の話ですが、初期の構成とはだいぶ変わりました。

どんなだったのかは次回以降にかかわるので詳しくは書けませんが、もっとラブコメちつくになる予定でした。

しかし、書いてていうのもなんですけど巧斗がうらやましい。

僕はライブ経験結構あるんですが、プロと対バンなんてしたことないですからね。もっとも、オーナーにぼこぼこにされましたが。

それに溲からあんなに慕われて……。

さて次回ですが、ついに初めて、二人が出かけます。これまで二人きりになることはあっても偶然だったのに対して、待ち合わせから入るわけです。

でも素直になりきれない二人のことだから……？

次回もお読みくだされば幸いです

理想の先を、見たい

夜が明けた。

「・・・結局寝れなかったな・・・」

何度確認したかわからない日にちを、ケータイでもう一度確かめる。やっぱり、漣と約束した日だった。ケータイのニュースは雲ひとつない快晴だと伝えている。

「で、漣ちゃんどこ行くんだ？」

あの居酒屋で出かけることを告白するとすぐさま、うちのドラマに連絡が行き、なぜか彼女を連れてきてまで室井は合流した。そんなに大事なのか？

「決まってるよ。街を周ることしか・・・」

「歌詞のために普通のデートするなら、お前が計画建てないといけないな」

室井が提案すると、柏木は頷いて

「そうだな。デートってどういうものか、教えないと漣ちゃんがつかりするからな」

そうして小一時間、俺はデートの講義をアルコールが回った頭で受けたのだった。その結果は室井が親切にもまとめてくれたメールにある。何回も読み返したからもう覚えてしまった。昨日学校で会った時、漣は嬉しそうで、緊張してもいた。それがプレッシャーになつて、肩がズシリと重い。

「はあ。これで漣は喜ぶのかなあ？」

正直な話、今漣と出かけた気持ちはサティスファクション以前よりも下がっている。漣には口が裂けても言えないが、なのに俺は徹夜だ。

「好きになるって、こういうことなんだな」

ちょっと早かったが、俺はクローゼットの中を荒らしまわるようにチェックし始めた。

「漣、ちゃんとその服着ていくんだぞ？」

一昨日の夕方、玄関に入ろうとした漣の背中に律の言葉が飛んだ。両手いっぱい紙袋で身体を律の方へ向けるのは難しく、顔だけ振り向いた。

「分かった！律、その・・・有難う」

軽音部で一致した巧斗が好きそうな服は、女の子らしいファッション、だった。その点では、ムギという十分すぎるモデルがいた。ムギは五人の中で唯一、私服でスカートを多用するし、女の子っぽい服が似合っている。それに雑誌を組み合わせて、部活を返上して買い物をしたのだった。

部屋につくと、買ってきたばかりの服を床一面に広げる。どれも自分が着たことのないものばかりだった。アドバイスはムギからしつかり聴いたし、組み合わせも大丈夫。少なくとも、巧斗が引くことにはないだろう。

そう言えば、と漣は服を見ながら考え始めた。街を周るって言うたはいいものの、希望はあらかじめ言っておくのが良いのだろうか？それに、和から勧められたこともあるし・・・。

この時ばかりは、漣の中でデートの建前は消し飛んでいた。

待ち合わせ場所は、漣たちの学校に近い商店街のアーケード前だった。俺は漣の家まで迎えに行こうとしたのだが、本人は恥ずかしいのとそこまで迷惑はかけられないと主張した。だから俺と漣の家から真ん中に位置するこの商店街に来たのだ。唯がギターをメンテしてもらった楽器屋がある商店街だ。駐車場に車を止め、その待ち合わせ場所に向かいながら俺はつぶやいた。

「待ち合わせまで20分か……。何してまとうかな……。」
その時、すれ違った軽そうな二人組の男子の会話が耳に飛び込んだ。

「入口にいた黒髪の女の子、マジで可愛かったよな」

「ああ。声かければよかった」

ヒントは一つしかなかったが、俺はとっさにかけて出していた。まだいないと思っていたが、まさか？

はたして、予想通りだった。いや、厳密に言えば予想以上だった。「ねえ誰か待つてるの？いなかったら、すこしで良いから俺に時間くれない？」

さつき会話を聞いた男たちよりもさらにチャライ感じの男が、いかにもナンパ中という台詞を吐きながら漣に接近していた。漣はかなり怯えた表情をしているが、追い返せないのだろう、口をぱくぱくさせているだけだ。

この光景を見た瞬間、俺の脳内は爆発した。

「漣、遅くなつてごめん！」

「た、巧斗さん……」

俺の顔をみたたん、漣の表情が明るくなった。その輝きに俺は骨抜きにされそうになったが、自分でできうる最高の笑顔を作りだし、うろたえている男に返した。

「ごめん、この子には予約が入ってるから」

「くっせー。ごめんな〜」

チャライ男ではあったが、しぶしぶ引きさがつた。

「た、巧斗さん、ありが……。って、どうしたんですか？」

俺は膝に手をあてうずくまっていた。男に今しがた放った言葉で、俺の心中は嫌悪感と恥ずかしさの不協和音とノイズが盛大に流れていた。

「ごめん、いくらなんでも予約はまずかったな……。って」

そう言っつて顔をあげると、漣の顔が見たこともないくらい赤く染まっていた。

「そ、そうですね！わ、私たち、そういうことで今日来たわけじゃない……のに……」

澪のその一言は、俺を落ち込ませるのに十分だった。分かってはいても、直接そう言われるときつい。ただ俺は、表情に出せなかった。

俺と澪は笑ったが、どこか乾いた笑いだった。まるで、澪が言ったことですまそうとするかのよう。

「じゃ、行こうか……って澪、その服……」

「え、えっと、こういう格好普段しないんですけど、どうですか？」
さっきまでの展開から解放されて改めて澪に視線を向けると、見たことがない澪がいて、俺はまた骨抜きになりそうだった。白を基調としたワンピースにデニムのボレロ、革製のサンダルといった出で立ち。普段会う時は制服だし、私服らしい格好を見たのは合宿と納涼祭の浴衣だけ。それほど服に気を使うタイプだとは思っていなかっただけに、今日の前の澪は新鮮で、そして可愛かった。上目づかいも相まって、俺はどこか別の世界に飛んでしまいそうだった。

「す、すごく可愛い……」

あまり回転しない脳が導き出した言葉はなんのひねりもウィットもないただの感想に過ぎなかった。にもかかわらず、澪はまたしても顔を染めた。

「よ、よかった……。私、結構不安で……」

俺たちはちよつともじもじしていたが、ここでもじもじしていても何も始まらない。

行こう、と声をかけて俺と澪は商店街に入っただけだった。一瞬視線を感じたが、それは澪を見ている男子のだろうと勝手に納得した。

休日ということもあって、商店街はかなりの人でにぎわっていた。テレビでシャッター商店街を見る機会もあるが、ここはそこまでさびれていないようだ。

「楽器屋行く？」

室井が提案したデートプランでまず上がったのが楽器屋だった。唯がギターをメンテしたあの楽器屋だ。普通のデートで楽器はないだろと反対したが、室井は両方バンドやって行かない方がおかしいと反論した。考えてみればもつともな意見だったので受け入れることにした。

「はい」

とはいえ、楽器屋に漣と入ったもののなにをしていいのかわからない。個人的に見たいエフェクターやギターや機材もあるが、どこまで自分を出せばいいのだろう。

「巧斗さん、今欲しいギターとかあるんですか？」

悩んでいるところへ漣が質問してきた。

「うん、ちよつとテレキャスに興味があつてさ。行っても良い？」

「いいですね」

漣の眼が輝いた。

店員に案内されるまでもなく、俺たちはギターコーナーに向かった。さまざまなギターが並ぶ中で、木目調のテレキャスを発見した。テレキャス、正式名称はフェンダー・テレキャスターという。テレキャスターは初めてソリッドボディを採用したエレキギターの最初期から存在する。もう60年以上市場に出回っているギターだが、澄んだ高音域と硬質な音色が特徴的だ。レスポールに代表されるエレキとはまた違ったその音色からギターボーカルが持つことも多い。「やつぱ良いのは高いなあ。少なく見積もっても諭吉が10人はいるか・・・」

「テレキャスです、仕方ないですよ。巧斗さんはやつぱりフェンダー派なんですか？」

「そうなるかなあ。持つてるギターもほとんどフェンダーだし。でもレスポールとかギブソン、リッケンバックの音にあこがれる時もあるよ」

ギターリストでもこだわりから選ぶギターにも傾向がある。代表的

なのがフェンダーとレスポール。どちらもエレキギターの歴史は古いが音色は大きく違う。とはいえ、俺は今言ったようにメーカーに固執している感覚はなかった。

店員に頼んで、俺はテレキャスを試奏した。シンプルな構造のテレキャスはやはり弾きやすい。今メインで使っているムスタングはじゃじゃ馬という訳がつくが、テレキャスはクセがなく、素直に音が出てくれる。でもやっぱり、高い。

店員はやたらとテレキャスを勧めてきたが何とか振り切り、俺はMTRやその他の音楽機材のところに移動した。

「巧斗さん、これは何ですか？録音する機会に見えますけど・・・」
「そうだよ。ここにあるのはCDを焼いたりとかもできる。今はフリーソフトでも曲は編集できるけど、やっぱり俺はこっちがいいかな」

初めて見るのか、漣はしげしげと学校の机ほどもあるMTRを指さし

「巧斗さん、こういうの持ってるんですか？」

「うん、ここまででかくはないけど、バンドで買ってさ・・・」

そのあと、漣の要望でベースコーナーへ。メンテナンスの時に開催していたレフティフェアは終了していたが、その名残なのかいっもよりモデルはあった。

「いいなあ、レフティ・・・」

じい、とベースを見つめる漣の横顔はどことなく憂いを帯び、さらに俺はドキツとした。

「試奏すれば？漣、このベース見てたけど」

「で、でも私が弾いていいんですか？」

「さっき俺も弾いてたし問題ないと思うよ。それに、漣の演奏聴きたいしさ」

「え、巧斗さん！」

そして漣は白のミュージックマン・ステイングレイを手にして椅子に座った。もっとも、足はかなり震えていたが。

「そういえばなんでミュージックマン？フリーとかルイス・ジョンソンみたいな、スラップなイメージがあるけど」

スラップ奏法、日本だけチョッパ奏法というが、溇が手にしているベースは、俺の勝手なイメージからするとファンキーなベースだった。それを溇が持っている光景はシユールとギャップが合わさっていて、俺はくらくらしそうになった。

「巧斗さんの課題でやったフリーのセッティングに関心が出てきました。どうすればあんな音になるのか・・・」

「それでか。ってことは溇、ついにチョッパーを本格的に？」

ノリノリでアグレッシブにチョッパーする溇を想像しようとしたが、どうしてもできなかった。みんなのライブは去年の文化祭の映像を見たきりだったが、普段の様子も合わせて考えると、ジェームズ・ブラウンがデスメタルのライブに出演するくらいの違和感があったからだろう。

「そ、そういうことじゃなくて！せっかく巧斗さんが考えてくれたから、もっと勉強しようと思ったんです」

俺の課題はこの前に終わっている。というか、そもそもそれがあったからこうして二人でいるわけだ。なのに真面目に課題をもっと深く追求しようとしている。溇の真面目さと、向上心は俺の想像よりも高かった。

「そうか・・・で、弾かなくていいの？店員のちらちらした視線が気になってきたよ」

「それは巧斗さんが強引に声をかけたから・・・」

「だけどさつき、フリーのセッティング勉強したいって言ったじゃん。弾かないときっかけつかめないと思うけど」

俺は正論を言っただつもりだったが、もうひとつの思惑として、今のおしゃれな溇がベースを弾く姿をこの目に焼き付けたかった。なんといいっても、ワンピースとボレロにベースが加われば、可愛さはほとんど完成されたと言っている。俺は特撮が大好きだが、アニメの『萌え』が今一つ理解できない。が、ひよっとしたらこういう感

じなのかもしれないと思った。

こんな暴走が俺の脳内で繰り返り広げられているとは知らずに、漣はゆっくりと指でミュージックマン・ステイングレイを弾き始めた。おそらく、初めて触る種類なのだろう。感触を確かめるように、丁寧にフレットを押さえながら。アンプから出てくる音色はゆつたりとしていて、温かい。最初こそ戸惑い気味だったが、時間が経つにつれて自然な笑みがこぼれていく。楽器屋にいる事実から抜け出した、まるでPVのような光景を目の当たりにして、俺は自分が邪な考えをしていた事が恥ずかしくなった。

確かに漣は俺が預かる軽音部の生徒だ。でも、感覚は友達で、抱いている感情はそれ以上だ。あつてはならないはずのことを、今俺はしている。それが、漣が望んだ結果だとしても。

演奏自体は五分もない。というより、試奏はながながとできるものじゃない。

「どうだった？」

「うーん、やっぱり今のジャズベースの方がいいですね。でも勉強にはなりました」

どこか納得した顔で漣は頷く。音楽は手を出すジャンルが広いとオリジナルを作りやすくなる、というのが持論だ。それが良い曲かどうかはともかくとして。

それからエフェクターも見だし、カホンのコーナーでは……。

「これ、おもしろいんだよ」

カホンは、一目ならただの箱にクッションがついたものにはしか見えない。しかし、たたく箇所によっていろいろな音が出てくる……。って室井が言っていた。あいつの家に遊びに行った際、叩いたこともある。ある程度は教えてもらったが、微妙な音の変化、リズムの取り方。ギターとはぜんぜん違う。自由すぎるからこそ難しい。

「この音って、確かムギがコピーした……」

屈んで俺を見上げる漣の顔にどきまぎしながらも、俺は答える。

正直に言っつて、漣の上目づかいは反則だった。どんな堅物男子でも

恋に落ちるだろう。

「そ。といつても、カホン以外にシンバルも使ってるけど、ユニツトであの音と庄はすごいな」

そうなんですか、と言った溇の瞳は好奇心でいっぱいだった。俺はすっかり叩いても悪いし、交代しよう。と言つて俺が屈んだ瞬間、俺の頭を強い衝撃が襲った。

立ち上がりかけた溇に気付かずにはいたため、溇と激突したのだった。

「た、巧斗さん、大丈夫ですか？」

「う、うん、溇の方こそ・・・」

お互いに頭のとっぺんを押さえながら気遣いあう。溇とこんなことができる日が来るなんて、想像できなかった。溇も同じように感じたのかは分からなかったが、俺と溇は、声を合わせて笑った。

溇と巧斗が入った楽器屋からほど近いところに、これといった特徴もない喫茶店がある。あえて挙げるとするならば、さほど客がないために落ちつけるくらいだった。このマスターはほとんど退職後の道楽で喫茶店をやっているという噂まであるほどだ。

そのマスターでさえ、窓際に陣取っている若い女性の四人組が放つ異様な雰囲気警戒していた。普通、女性というのは年齢関係なく集まれば姦しいという。が、窓の外を四人そろって見つめる時間の方が、話す時間よりも長い。

いつもは客に特別な興味を抱かないマスターだったが、この時ばかりは作業をする振りをしながら視界の端で四人をとらえ続けていた。コーヒーマルを弾きながらマスターは四人の行動を推察した。窓の外を見ているということは、外に何かがあるのだ。今日は、うちの商店街なにもなかったはずだが・・・。

こんどは掃除する振りをして彼女たちのそばに近づいた。すると、意味深な会話が聞こえてきた。

「もう一時間たつぞ？あの二人なにやってるんだ？」

「そんなこと言うなら、入ればよかったじゃないですか」

「まあまあ。澪ちゃん楽しんでるみたいだし、気長に待とうよ」

「うう。でもこのままいくとお昼になっちゃうよ」

マスターは、一瞬自分の耳を疑った。どうやらこの四人は、刑事のごとく二人を見はつているらしい。その割に窓に張り付いているあたり、その方面には明るくないただの女子 見た目から判断すれば高校生 は、こっそりと後を着けているようだ。

「あ、二人でできた！」

「タクちゃんデレデレだな顔が」

「澪ちゃんも幸せそう」

それにしても、とテーブルを拭きながらマスターは友達に後をつけられるカップルがどういう二人なのか、非常に気になった。

すっかり室井と並んで巧斗をリードする柏木優季が、和と付き合い合うことで変わった点がいくつかある。

そのうちの一つが、小説を読むようになったことである。和の読書好きが知り合うきっかけになったということもあって、今や優季は、マンガを読む時間と小説の時間が半々になっていた。

今日もそうして和から勧められた医療ミステリーを読みふけていたさなか、ケータイが鳴りだした。ワンコールでであると、優季のテンションが瞬間的に上がった。

「もしもし和！……ってあれ、今日はそっちの日だけ？」

「そうよ。優季さんがそう言ったんじゃない」

「あ……そうだった。今、和に借りた小説半分まで読み終わったとこ。ぐいぐい引き込まれるなあ」

基本的に、優季と和の会話は取り留めがない。用事もないのに女子と電話するなど、以前の優季であればまず起こり得なかった現象である。

「そうでしょ、この人が書くのって・・・」

しばらく小説や今度行くライブの話で盛り上がったあと、和が真剣な口調に変わったので優季は巧斗のことだろうかと直感した。なんといつても、お互いの友人同士をどうにかして、というおせっかいを焼いている最中である。冗談など、軽い気持ちではなかった。

「この前、澪から相談受けて・・・」

和の内容は口調と反してほほえましく、優季の顔がニヤついた。

「へえ。でも和のアドバイス、巧斗すっごく喜ぶと思うぞ」

確信をもって恋人に感想をいう優季だったが、

「どうして？」

と和が質問したので、素直にその理由を言った。

「好きな子が頑張ってくれたものって、男は無条件にうれしいからさ」

「ありがとうございました」

楽器屋を出た俺と澪の手には、いくつかビニール袋が握られていた。

「澪、スコア代ほんとに俺が出さなくてもよかったのか？せっかくデートに来てるんだし・・・」

「い、いえ、音楽のことに關しては、全部自分でやりたいので・・・」

澪は淀みながらも意志のこもった返事をした。スコアを見るなかで、澪が興奮したのは、邦楽、洋楽の有名ベ이스トのムックだった。使用機材からセッティング、演奏方法まで網羅しており、俺と澪はつい読みふけた。これから作曲する際のヒントが見つかるのではないか、という理由もあった。

「そっか。でもフリーのとき、前もって見たかっただろ」

「それは結果論です。確かに課題の前であればよかったなとは思いますが・・・」

あの課題は、みんなにとって酷なものだったように感じていた。なにせ、選んだバンドはどれも個性豊かで技術も高い。それをコピーしろなど、反発が起きてもおかしくはなかった。

「課題ね……。なあ澪、アレ、ほんとのところどうだったんだ？」
立ち止まって澪に問いかける。俺の顧問としての活動は、みんなの眼にどう映っているのだろう。見切り発車でやってしまった感も否めないし。

澪はすこし考えた後、口を開いた。

「はじめは、戸惑いました。難易度も感じて。でも、巧斗さんがみんなに指摘してくれたことは、ほんとだと思えます。巧斗さんが言うことで間違いだったこと、ありませんから……」

ここまで俺のことを信頼してくれていたとは思わなかった。なんだが、猛烈に恥ずかしくなった。まともに澪の顔が、見れない。好意とは違う、純粹な感情をむけられるということがこんなにこそばゆいとは思わなかった。

「そ、そうか。そう言えば、飯どうする？連れに美味しい店教えてもらったんだけど、そこ行くか？」

あわてて話題を変えると、澪はひどく顔を染めて

「た、巧斗さん、わたし、お弁当作ってきたんですけど……」
へ？澪の、弁当？

俺の心に幸せのファンファーレが鳴り響いた。好きな子が自分のために作ってくれた弁当である。今ここで躍り出したい衝動に駆られたがぐっとこらえた。それでも、顔がにやけてしまう。

「ほんと？じゃあ近くに公園あるし、そこで食べよっか」
「はい！」

頷いた澪が本当に嬉しそうな笑顔なのを見て、俺の中で、一瞬ある可能性が浮かんた。しかし俺はすぐその可能性を打ち消した。今日のこと、俺の経験を考えてみれば、可能性は可能性だった。

そして近くの喫茶店に目をやると、よく知った四人が慌ててメニューで顔を隠す瞬間をとらえた。メニューで隠せていない黄色の力

チューシャとブロンド気味の髪。黒髪のツインテールとちょこつと見える黄色いヘアピン。なんでこんなところにいるという思いと、納得する思いが同時に沸いた。彼女たちの日常を考えれば、予想しなかったほうが不思議というものだ。

本当の『二人つきり』というわけにはいかなかったか。

「巧斗さん、どうぞ・・・」

「サンドイッチにから揚げにサラダ・・・。これ全部溇が作ったのか？」

商店街から歩いて五分のところにある公園のベンチに、溇が作ってくれた弁当を広げて座っていた。溇がふたを開けると、光があふれるような感覚とともに煌びやかで極彩色豊かな料理が、視界を一杯にした。どれも、おいしそうだ。

「は、はい。でも私、あんまり料理得意じゃ・・・」

待ち切れずに、溇が言い終わるよりも早くサンドイッチを口に運ぶ。タマゴときゅうりのサンドは、程よい味付けがタマゴの甘みときゅうりの新鮮さが抜群にマッチしていた。合宿で食べたサンドイッチよりもおいしい。

「うまい！ありがとうございます、溇！」

好きな子が、自分のために作ってくれたという状況を差し引いてもおいしい。俺は料理と言っても簡単なものしかできないので、これだけのものはまず作れない。

「ありがとうございます・・・。よかった、お口に合わなかったらどうしようかと・・・」

「そんなことないよ。溇の味付け、俺好きだな。合宿の時のカレーも溇の味付けだろ？あの味もよかったなあ」

こう言っ作ってくれた本人の方を向くと、顔を真っ赤に染めた溇がいた。もともと白い肌なものだから、顔色の変化がよくわかる。口をばくばくさせた後、ようやく溇の口から声が出た。

「た、巧斗さん、恥ずかしいからもっと声押さえてください・・・」
「だって、今日は普通のデートを体験するんだろ？」

普通のデートに反応したのか、漣は反論した。

「デートっていつても、これじゃまるで、付き合った時のデートじゃないですか。私が想像してたのは、もっと、こっつ」
「もっと、なんだよ？」

「付き合う前の、お互いの距離が近づきあうみたいにな・・・ほ、ほら、デートって範囲が広いと思うから・・・」

漣が作る歌詞は独特だ。恋する女の子がどういう心理状態になるのかは分からない俺でも甘いと感じるほどに。だが今漣の口から洩れた言葉から察するに、感覚そのものはいたって普通なのだろう。感情をアウトプットする表現が普通と違うということか。

「そっか。正直うらやましいよ、漣たちが」

俺はコンビニで買ったオレンジジュースのペットボトルを一口飲んで空を見上げた。ウェザーニューズは晴れと言っていたのに、なんだか雲行きが怪しい。

「うらやましい・・・なんでですか？巧斗さんのバンドの方がずっとうまいのに」

俺は、なんで漣に連絡できなかったのか、本当のことを話そうと決めた。

「この前やったライブ、覚えてるだろ？都会でやった」

「ええ。相変わらず、かつこいいライブでした」

かつこいいの言葉に、俺の心は揺らいだ。

「そうか、そうとらえてくれたのか。でも、言われたんだよ。ニルヴァーナに似てるって。つまりオリジナリティがすくないんだよ、うちのバンド。それで、オリジナリティって何なのかずっと考えて。正直な話、漣と出かける話を先延ばしにしてたんだ。」

「似てるって・・・そんなことないですよ、巧斗さんの曲は」

あわててフォローをしてくれる漣。でも、その時の俺は、気休めにしか感じられなかった。だから、俺は漣に出会って初めて、いら

つきを覚えた。

「いや、そのとおりだよ。演奏はできて当たり前。必要になってくるのは、このバンドにしかない音を出すことなんだ。アートワークスでしか演れない曲を作ることが」

澁は、対処に困った顔をした。俺は本音を隠せなかった。

「だからうらやましいって言ったんだよ。澁の歌詞は、本当ならポップスなのにアレンジはしっかりしたロック。ガールズバンドはポップに走りがちになるのに、澁たちはちゃんとしてんだよ。本人たちに自覚はないのかもしれないけど」

「ただ、私たちは自分たちが好きなことをやってるだけで・・・。そんな考えは・・・」

澁は、謙遜している。ただ俺は、話をつづけるたびに澁たち五人のバンドがどれだけすごいのかを感じ、シヨックを受けていた。

「澁には、わかんないだろうな。どれだけ今、軽音部に嫉妬してるか」

「嫉妬・・・なんでまた・・・」

そうだ。俺は、あっけらかんと演奏しているように見えて、楽々と個性が出る五人に嫉妬していた。これまで、感じたことはなかった。でも、サティスファクションを境に、五人の演奏がどれだけのものがあるのか、さわ姉が言ったことが顧問の機嫌が迫る今になって身にしみた。

「わかんないんだよ。どうすれば、お前たちみたいに個性が出せるのか。俺たちができるなかで、どうすれば自分たちだけって言えるのか」

「それは・・・」

澁は押し黙って、俺を見つめた。そこに一陣の風が吹き、俺たちの髪を揺らしていく。弁当を境に、澁と俺に存在する、立場以外での隔たり。音楽をしていく上で、絶対避けて通ることができない問題に、俺は澁たちを通じてぶつかっていた。

澁にぶつけたところで、なんの解決にもならないことは十分、理

解っていた。どれだけ自分が情けないのかも。

理想の先を、見たい（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

デート回のはずが、なんだかシリアスな終わり方をしてしまいました。

前半けっこう良い感じだったのにな。

巧斗は音楽に関してとてつもなく真面目です。でもオーナーに自信のあ

る曲が否定されてもう一度自分を見つめなおす必要になるんです

今回はデートの続きから入りますが、今回とは違う形式の予定です。

本当にデートは成功するのか。そしてこっさりあとをつけている四人は

話に絡むのか？

次回もお読みくだされば幸いです

存在の行方

漣は、どうすればいいかわからなかった。

自分の隣で本心を明かす巧斗。初めて知る、巧斗の胸のうちだった。普段、演奏の時は的確で怒ったりすることはない。その巧斗が自分たちをどう見ていたのか、考えたことはなかった。思えば、最初に演奏を評価してもらって以来、バンドそのものの感想は聞いたことがない。

ただ、漣からしてみれば巧斗が悩んでいるのは手に取るように分かったし、なのに書けるべき言葉を見つけられないのは歯がゆかった。悩んでいる原因が、自分たちだからだった。

バンドをやっていく上で、個性は欠かせない。それにはさまざまな要因が存在するが、漣たちの場合は巧斗の指摘通り歌詞とアレンジのギャップである。ただそれがごく自然にできてしまったところが、漣たちのポテンシャルの高さを証明していた。もっとも、本人たちにそこまでの自覚はない。

巧斗が悩む姿を見るのは漣にとって初めてのことであった。部活であった時、今日のことと余裕がなかったとはいえライブのことで落ち込んでいるようには見えなかったからだ。それなのに、自分は・・・みんなと買ったワンピースの裾を握り締める。

「巧斗さん、ごめんなさい・・・。私、自分の気持ちしか考えてなくて・・・」

漣は視線を下げた。巧斗がなんで連絡しないのか、考えれば理由があることぐらい分かりそうなものだった。

「いや、漣は悪くない。そこまで気使えなかった、俺の方だ」

まっすぐ前を向いたまま、巧斗は答えた。漣に向かって言っているというよりも、まるで自分に向かって言い聞かせるかのようにその声は沈んでいた。

「わかってたのに・・・。音楽をやる以上、評価をもらおう覚悟はで

きてたはずなのに。1回言われたくらいで、落ち込んで、手付かなくなつて……。はは、やっぱり俺は、コバーンになれそうにないな」

こんなに自虐的になる巧斗を、漑は見たくなかった。漑の中で、巧斗はいつも落ちついていて、悩むとは思っていなかった。いや、悩んでいても、それを気付かぬうちに越えている、そんなイメージだった。

巧斗が軽音部の顧問になつてからこの四ヶ月の間で、巧斗の心を垣間見たことはほとんどない。漑が自分の悩みを吐露することがあつても、その逆はサティスファクションまでなかった。つまり漑は、巧斗の一部分しか見ていなかったのである。

まだ、巧斗にかけるべき言葉は見つからない。いつの間にか弁当を食べるのも忘れ、お互いに今の感情をどう解決すればいいのか、その糸口を探していた。だから、雲の色が濃くなっていることに気付けなかった。

「あの、巧斗さん。思つてること、全部言つてください。そうすれば、少しは……」

それでも漑は、巧斗の力になりたかつた。それが、今漑にできる精いっぱいのことだった。巧斗の話を、いや思いを受け止めよう。これしか、思いつけなかつた。

巧斗は漑の言葉で、漑の顔を驚いた表情で見つめた。漑はなぜか、こんな時なのに顔が熱くなつているのを感じ、内心アタフタした。今、巧斗が悩んでいるというのにドキドキするのはおかしいだろう。

だが巧斗は一瞬クスッと噴き出した後、深呼吸して、語り始めた。それは、巧斗が歩んだ音楽の道のりそのものだった。

俺がバンド……。いや、ギターを始めたのは、さわ姉がきっかけっていうの、合宿で話したっけ。

当時は音楽と言つたら、習つてるピアノと、特撮ものくらいしか

なかった。ピアノは母さんの影響でさわ姉ほどじゃないけど結構練習したし、特撮だって毎日聴いてたし。むしろ、ロックは嫌いだったかな。

なんでかっていったら、やっぱり、さわ姉なんだよ。1回母さんとさわ姉が大げんかするの聴いちやってさ。そう、さわ姉がバンドを組んだ時だった。さわ姉を本気でピアニストにさせたがってた母さんと、好きな人のためにバンドを始めたさわ姉が、それは大声で言いあって。さわ姉は一步も引かなかったし、なにより、音楽で生きていきたいけど、それは自分で決める！って聴かなかった。だからしばらく、家の空気悪くて。あのころは、こんな状況にさせたバンドを嫌ってた。

だけど、さわ姉のことは嫌いになれなかった。だって、なんだかんだ言ってる俺のこと可愛がってくれたし。文化祭に誘われた時は喜んでついてったなあ。同級生に紹介して、文化祭のいろんなところ連れて行ってもらって。だから、桜ヶ丘高校にはいい印象があったのかも知れない。

で、さわ姉のライブ。あの時のさわ姉は、本当に楽しそうに、自分のために音楽をやっていた。初めて見る、さわ姉の笑顔だった。だって、それまでピアノの練習で母さんにしごかれて笑った顔、あんまり見たことなかったから。

純粹に、かっこいいって思った。ステージで、みんなの歓声を一斉に浴びて演奏するさわ姉に。俺も、こうなりたいって、思った。

それからは早かったなあ。文化祭が終わったその日に、俺はさわ姉にギターを頼んだ。本当に、さわ姉がかっこよくて、ああなりたかって思ったんだ。

それからかな。俺は、ロック漬けになった。さわ姉にいろいろギターを教えてもらいながら、ギターばかりやってた。とにかくあのさわ姉に近づきたくて。毎日毎日練習した。ピアノの練習はこんなにやらなかったのに、さ。俺の原点は、やっぱりここなんだと思う。

それから中学に入って、柏木と仲良くなった。洋楽の話が合うの、あいつくらいしかいなかったんだけど。だって、メタルとハードロック好きな小学生ってあんまり聞かないだろ？まあ柏木はハードロック中心だったけど。

そして俺は、ニルヴァーナに出会った。もうカート・コバーンは自殺していたし、ドラマーのデイヴ・クロールがフ・ファイターズを結成し始めたところだった。柏木からNevermindのCDを渡されたのは、中1の夏休みだった。初めて俺は、CDを聞いて衝撃を受けたんだ。なんて言ったらいいんだろうな……。一目ぼれに近い感覚、だったと思う。新しい学校で会おう、理想の女子に会ったみたいなの。それぐらい俺は、ハマった。音楽をやってきて初めて、身体の底が震えた。ちゃちなスピーカーからあふれ出てくる、シンプルなのに深い曲が、心に届いてきたんだよ。カート・コバーンの魂みたいなのが。

それから俺は、もう一人、目標ができた。とにかく上手くなりたくなったし、バンドにあこがれた。さわ姉とニルヴァーナはジャンルもスタイルも全然違うけど、かっこいいと思ったのは本当だったからね。

それから柏木と盛り上がったなあ、バンドやりたいつて。1回2人でスタジオに入ったけど、どうしても物足りない。で必死になって探して、何とかドラムとベースを見つけたけど、中学生って基本的に自分勝手じゃん？数回スタジオ行っただけで自然消滅しちゃった。俺らとリズム隊の好みが違うっていうのももちろんあったけど、とにかくライブに出たい二人とモテたいだけで楽器始めた二人に別れたら、やる気がなくなるのは当然の結果だった。

高校に入るまで結局、バンドは組めなかった。柏木と俺は同じ高校に進学したけど、軽音楽部はなかった。たまたま俺と同じクラスになった青島が、銀杏BOYZのベースをめちゃめちゃ褒めてたの偶然耳にしたんだ。普通、CD聞く時って歌詞とかメロディ、ポーカーに行くじゃない。でもベースに興奮した青島を見て、こいつは

いける、って直感した。しかも話しかけてみたらベースやりたいて言って、それでフリーの教則DVDも買ってたのよ。フリーにもやたら感動して、俺がバンド組みたいと思ってるって言ったら、一緒にやりたいて言出した。その時はまだ、青島はベース候補の1人だった。まだまだ時間はあつたし。

俺と柏木は小さいころから音楽が身近にあつて、それがバンドにながつてたわけだけど、青島の家はむしろスポーツ好きで、音楽とは程遠かった。この違いをあいつはどう思ってたかは知らないけど、7日で銀杏BOYZの『夢で会えたら』をコピーしてきてさ。俺も柏木もびっくりして、保留にしたバンド加入を決めたわけね。このバンドほとんどベースがソロみたいになうね動くから初心者には向いてないんだ。それを1週間で完全にやってきたんだから、そら、組みたいって思うわな、誰だって。青島は日本のバンドを紹介してくれたし、俺も柏木も良いバンドを知ったら教えて、いろいろコピーした。スコアがなくても俺が耳コピーして作って、分からないところは考えあつて。

でもやっぱり、ドラムはいなかった。何人か入りたいっていう友達はいただけど、スタジオに来なかつたり、練習しなかつたりでやっぱりだめで。近場に軽音楽部があるのは、溇たちの高校くらいだったから、さわ姉のツテで、そこに上手い人がいれば、紹介してもらおうかと考えてたくらい。

そんな時、1年の九月だったかな たまたま3人が好きだったバンドのライブに行ったら、やたらおしゃれなのに一人で前に陣取ってずっとドラムの方を見るやつがいたのね。それが室井だった。柏木が休憩のときに聴きにいったら俺らと同じ年で、ドラムやってるって言う。通ってる高校は俺らよりもずっとレベルの高い高校だったけど、お坊ちゃんばかりで、まともに音楽やりたいやつらがない、ツエツペリン好きだけど話が合わない、バンドは組んでるけど正直辞めようか悩んでる、ようなことを聞いた。俺たちはこいつだ、と思つた。

俺ら三人が今バンドのドラマーを探して、好きな音楽も大体一緒
って話したら、向こうから1回セッションやりたい、って言ってき
たのさ。約束して別れて、スタジオに入ってセッションしたら上手
くてさ、室井。だって高校生って基本金欠なのに自前のスネア、キ
ック、シンバル持つてくるし、俺がわざと変拍子にしたらついてく
るし。1回のセッションだったけど、それから1カ月後にはもうラ
イブしてた。室井は高校のバンドをやめて、俺たちを選んでくれた
んだ。

最初はコピーばかりで、個人個人はそれなりだったけどまとま
りはなかった。初めて録音したCDを聞いてみんな絶句したね、あ
まりの下手さに。なんでこんなに合わないんだろって、スタジオ
に入るたびに録音して聴いて、修正して。それと並行して、オリジナ
ルも作るようになった。

初めてオリジナルをライブで披露した時、友達の反応は結構よか
ったんだ。正直、今から思えば展開もフレーズもコードもありきた
りなメロコアな曲ばかりだったのにさ。けどさわ姉はしつかり欠
点を指摘した。さわ姉に褒められるような曲をつくらうって俺は決
めて、いろんな曲を参考にしながら、計算したり、インスピレーシ
ョンを大事にしたりして曲を作り続けた。没になった曲の方が、レ
パートリーよりも多い。さわ姉にはライブの度に言われて、落ち込
んだ時もあった。なんで良い曲ができないんだって、自分に怒った
時もあった。バンドですごい人は書いているのに、こんなにやって
る自分がないんでできないんだって。だけど、そんな時、いつも頭に
思い浮かべるのが、小学生の時見た、さわ姉のライブなんだよ。
自分はまだ、あそこにまで行けていない。ここであきらめるなっ
て思って、また作り始めるの繰り返しだった。

でも、高校3年の秋。初めてさわ姉からも友達からも、俺たちも
納得のいく曲ができたんだ。さわ姉が褒めてくれた時は嬉しかった
なあ。さわ姉って、普段俺をいじって、振りまわす癖に音楽のこと
になると厳しかったから。

ようやく俺たちも大学生になって、幸運にもばらばらになることなくバンドを続けられてる。サティスファクションまでいけるようになったけど、オーナーの言ったことはもっともだった。

カート・コバーンに、俺は影響を受けすぎているし、理論を学んでいるだけに頭が固くなりがちだし。

まだまだだっというのは分かっている。分かっているけど、俺はバンドの個性をアートのワークスやってきて初めて見直すことになってるんだ。高校のときあれだけ必死になって作ってきた、積み上げてきたものが、崩れた気がしたんだ。俺たちにしかできないこと、それが何なのか。

未だに、考えても考えても分からない、答えが見つからない。

巧斗の話を聞きながら、漣はある気持ちがかみ上げてきていた。それよりも、巧斗がバンドを組むまで、そして組んでからも悩みながら音楽を続けていた事が、巧斗を身近に感じさせていた。

音楽をやるうえで、漣は本気で悩んだことがなかった。それは、濃いキャラクターに満ち溢れたあの軽音部の中でバンドをやっているからでもある。歌詞が不調な時はもちろんあるが、悩むのは、唯の極端なギターだったり、まったりとした部の雰囲気だったり、さわ子がいればやたらと強要してくるコスプレだったり、音楽のことではなかった。

漣は自分が、音楽に対してどれだけ真剣に向き合っていたのだろう、と疑問に思った。

「漣、ありがとう、聞いてくれて。ほんとはもっと、漣のことを聞くのがデートのあり方だと思うんだけど」

幾分落ち着いたのか、巧斗はひよいとサンドイッチを口に運んだ。「そ、そんなことないです。巧斗さんが、本当に音楽を、バンドをやっているのが、すごく伝わってきましたから・・・」

漣の言葉に、ペットボトルを飲むとした巧斗の口が止まった。

「本当に、か……。どうなんだろうな」

「どうということですか？」

少しためらった後、巧斗は言った。

「俺、これからバンドでどうしようか、あまり考えてないんだ。プ口になりたいのか、このまま趣味で続けるのか。音楽一本で生きたい覚悟があれば、言えるのかもしれないけど」

将来のことだった。漣はもちろん、ただバンドが続けていければいい、という漠然とした思いしかない。それくらい、漣にとって軽音部は大切なものになった。

でも巧斗は、その先を考えている。今の巧斗は、考えることが多すぎ、整理しきれていないように、漣の眼には映った。

そんな顧問に、いや巧斗に、漣は言いたいことができた。

「あの、巧斗さん……」

意を決した瞬間だった。漣の頭に、ポツン、という感触があった。反射的に空を見上げると、真黒な雲が見え、次の瞬間、一滴が漣の雪のような白い頬に、落ちた。

「漣、雨が降る！ 弁当しまつて！ あの木陰にいくぞ！」

とつさに巧斗が声をかけたおかげで、あまり濡れることなく、近くにあった木の下に避難することができた。人が立つことができる大きさの木ではあったが、ゆったりできるほど枝が広がっているわけでもなかった。二人が避難してすぐ、すさまじい勢いで雨が地面をたたき始めた。

「漣、こつちに来て。濡れるぞ」

「ありがとうございます……」

巧斗が漣の腕をつかんで、漣をそばにひき寄せた。肩と肩が触れ合う。巧斗の体温を感じると、さっきまでの暗い空気もあってか漣はまともな言葉を発することができなかった。

なんで、こんなことになったのだろう。本当に、今日2人で出かけてよかったのだろうか。

漣は、こんなことになった原因が自分にあると判断し、そして巧

斗の自虐的な言葉を聞いていたから、なんだか悲しくなっていた。「そう言えば溇、さっきなに言いかけたんだ？」

「え？」

重い空気を遮って、巧斗が溇の顔を覗き込んだ。雨独特の甘い匂いと、草木のさわやかな匂いが、溇の周りを包む。

「た、巧斗さん、私が巧斗さんの音楽を聞いてきて、思ったことを言います。いいですか？」

溇は真剣に、これだけは言おうと思った。巧斗は黙って頷いた。

「私、初めて巧斗さんの演奏を見て、身体の底が熱くなったんです。こんなに楽しんでギターを弾く人を、初めて見ましたから。ライブでも合宿でも、巧斗さんはいつも、悩みがあるなんてこと感じさせずに演奏してました。本当に、すごいって思ったんです。どこまでもまっすぐに、音楽に向き合って、楽しんで。私にないもの、足りないものを、巧斗さんはほとんど持つてるって感じてたんです。」

私、巧斗さんの曲、好きです。大好きです。だって、巧斗さんがカート・コバーンに感じたような衝撃を、私も感じたから……」

一言一言、想いが口を突いてくる度に、感情が堰を切ったようにあふれ出した。

止まらなかった。あれだけ楽しそうに演奏する巧斗の姿が、音楽の世界に没頭している巧斗が脳内を駆け巡って言った。

もう溇の声は、半分以上涙声になっていた。だがそれに構うことなく、しつかりと、土砂降りな雨の音に負けないように、溇は最後の言葉を紡ぎ出した。

「だから、過去の自分を否定しないでください……。オーナーに似てるって言われたからって、巧斗さんの曲は巧斗さんしか作れません。巧斗さんの曲を聞いて、巧斗さんと同じステージに立ちたいって思った人間が、今ここにいますから！」

巧斗の話は、彼がこれまでしてきた努力を否定しかねないものだった。いや、実際否定していた。巧斗を尊敬している理由、自分がどうなりたいかはつきりさせてくれたのは巧斗だった。ライブ嫌い

な、目立つことが嫌いなのにバンドをする矛盾を抱えた漣が、目標をはっきりと決めることができた。それは、巧斗がさわ子に憧れたように漣もまた、ライブの巧斗のように、堂々と演奏したいと思ったのである。それが漣本人にとって、果てしなく遠い目標に感じられていても。

巧斗がなにを感じ取ったのか、漣は分からなかった。漣は俯いていて、どれくらい時間が経ったのか興味があわいてこなかった。それよりも、さっきからあふれてくる感情を流すことで精いっぱいだった。

「漣……」

ふいに巧斗は漣の肩に手を回すと、ふわり、と優しく漣を抱きしめ、ぼん、と漣の頭に手を置いた。

「ふえ……巧斗さん……」

あまりのことに漣は対応できなかった。でも拒絶なんてできなかった。この、今まで嗅いだ事のない、しかしいい匂いは、巧斗のものであった。

「ごめんな、バカなことばかり言って。俺、気付かなかった。そんなに漣が、俺のこと、俺の曲で考えてくれてたなんて」

「そ、そんな……わ、私はただ、感じたままを言っただけで……」

「そんなことないよ。それに、漣が来てくれなかったら、前のライブはもつとグダグダになってたかもしれないんだ」

さっきまでの雨はほとんど止み、すぐに日の光がさし始めた。通り雨だったらしい。

感情の濁流が止むと、漣は自分の身体が猛烈に熱くなっていることに気がついた。木の下で、自分は巧斗に抱きしめられている。これまでの数倍も恥ずかしくなり、漣は呼吸困難になるのではないかと思った。

「雨、止んだな」

「そ、そ、そうですね……」

「漣、弁当食べて、デートの続き、するか？」

耳元で囁かれ、漣は身体が意志とは無関係にゾクゾクするのを感じた。もちろん、漣は巧斗の提案を拒否できるわけがなかった。

一方、漣と巧斗を追跡していた4人は、公園の茂みで、衝撃のあまり口がふさがらなかった。茂みといってももちろん二人からは見えない位置にあるし、屋根代わりにもなるから観察するにはもってこいだった。

「あの2人・・・ついに抱き合ったな」

「ほぐ。タクちゃんやるね」

もつとも、巧斗が狙って漣を抱きしめたと、4人は思えなかった。巧斗は恋愛に対して鈍そうだったし、なにより想像できなかった。

しかしこれで、4人は漣だけでなく、巧斗もまた、漣のことをどう思っているのか確信したのだった。

雨は通り過ぎ、空は雲ひとつない。漣は涙で赤く腫れぼったくなつた顔を鏡で見て驚いた。最後の方はほとんど本気で泣いてしまったからこうなるのは仕方ないが、巧斗にたいして本気で泣いてしまったことの方が、漣自身も不思議に思っていた。巧斗の言葉を聞いているだけで、なんだかたまらなく、感情があふれてしまった。みんなの前に立つこと以外で、気持ちが高まることなど考えられなかった。

そして、巧斗のことで頭どころか体中一杯になっているのを感じた。抱きしめられた腕、背中、頬。まだ、あの時の感触が残っていて、じんじんする。

「巧斗さん・・・」

優しく、すぐにでも壊れてしまいそうなガラス細工を包むように、抱きしめてくれた巧斗。つい今しがたのことだ。その事実が、漣の

意識を支配している。心臓の鼓動があり得ないくらい加速していった。これで、これから大丈夫なのだろうか。幸せで身体がはちきれそうになり、もうまともな思考ができないのではと不安になった。

だが巧斗のもとに戻った澪は、自分がおそらく、律にまで見せたことのない笑顔になっているのではないだろうかと思った。でも巧斗と歩いていると、すぐにその疑問はどうでもよくなった。

巧斗と一緒に、それも二人きりであるこの瞬間を、いつまでも大事にしたい。

澪は、ただ純粹にそう願った。

存在の行方（後書き）

一か月以上遅れて申し訳ありません！

なんか予想外な展開になってしまい、落とし所に悩みました。

今回は溼視点ですが、同時にタクの音楽歴でもあります

タクの家が音楽一家というのは前々から決まっていた。というか、音楽教師ってそれこそ小さいころからきつきつに音楽やってるイメージがあるので

とはいえ、溼にしてみればかなりきつい話だったはずですよ

尊敬しているし、美化してタクを見ていた感もありましたから。

さて次回は、デートの後半に入ります。歌詞の糸口を、溼は見つけることができるのか、そして二人を追うあの四人はただ見守るだけなのか？

次回もお読みくだされば幸いです

タッチダウン

公園を後にして、俺たちは商店街に戻った。昼間を周ったからか、人でさらに込み合っていた。

俺は、室井のデートプランを無視することに決めた。そして、建前も気にしないことにした。雨の中で、漣がどれだけ俺の事を心配してくれていたか、俺の音楽を肯定してくれたかが分かったから、これからはそれに応えようと思ったのだ。漣が泣きながら俺の思いを受け止めたほどはできないにしても、自分の出来る範囲で、漣の望みに沿うようにしたかった。

「漣、どこ行きたい？さつきは楽器屋だけだったし・・・」

「この商店街の店舗数は、かなり多い。都会のショッピングモールや繁華街とは比べるべくもないが、それでも一通りのジャンルは揃っている。漣はどんな店を選ぶのだろうか。」

「そ、それじゃCD屋に寄ってもいいですか？探したいCDがあって」

「OK」

いかに感覚がメルヘンな漣であっても、根本はバンドマンで音楽好きに変わりはなかった。普通の女子校生なら日本のレゲエやR&Bなどをチェックしに行くわけではないだろう。最近アレが売れている、だからいいという話を漣の口からは聞いたことがない。そこは俺の高校時代、大学の女友達ではまず起こり得ないことだった。

何せ、俺は女子とほとんど音楽の話がかみ合わない。タモリが司会をやっている音楽番組を見るよりも、衛星放送のバンドやライブ特集を見る方が好きな人間である。ヒットチャートよりも、自分の感覚を優先して音楽を選ぶ人間の方が少ないわけだから仕方がなかった。

「で漣、探したいCDってなんだ？」

CD屋に着くと、俺はきよろきよろと店内を見渡した。普段CD

を買うときは大学近くのショップを利用するから、このCD屋はあまり詳しくない。それに、ショップで探すよりもネットで買った方が確実だし、確実な場合もある。

「探したいというか、いろいろと教えてほしくて……。巧斗さん、インスタバンドでお勧めはありますか？」

教えてほしいという溇の言葉が、俺にいけない妄想をかきたててくれるのを何とか我慢しながら俺は答えた。

「インスタねえ。ここのお店に置いてあるかなー。最近ちよこちよこ流通し始めたけど」

溇を連れて店の中を歩く。店の規模としてはさほど広くないが、通路を犠牲にして商品棚を設置しているため予想以上にモノはあった。しかしそれでも、ポストロツクの棚はなかなか見つからない。

「でも溇、なんでまたインスタを聞こうって思ったの？」
見つかるまで間を持たせようと、溇に問いかけた。

「ベースの勉強と、もっと幅広い音楽を聞こうって思って。歌ものもいいんですけど、巧斗さんのバンドを聞いて、興味がわいて……」

「むう、なかなか恥ずかしい事を言ってくれるじゃないか、溇。とはいえ、好きな子に興味を持つてくれることは嬉しかったから、自然と俺のトーンも上がる。友達に振っても、まずインスタの説明から始めなきゃならないのが常だったからだ。」

「そっか。インスタは幅広いぞー。音楽もそうだけど変拍子はざらだし、曲によつてガラツと雰囲気変わるし。エフェクターの使い方もえ、ここでこれ？みたいなのがよくあるし。何といつてもバンド全体でメロディを作っている感じがいいんだよなー。それに、かっこいいし」

「そうなんですか？確かに、海外のポストロツクを聞いてるとあれつて思うことが多いんですけど、インスタは主旋律を誰が担当してもいいですね」

そんなことを話していると、店の隅っこで申し訳なさそうに陳列し

てあつたインストコーナーを見つけた。海外、国内関係なく乱雑にまとめられている。

「俺が最初に聴いたのはこのLITEだな。ネットでたまたま拾ったんだけど抜群にうまくてさ。しかもイギリスでコンピにも参加してるし、ツアーもやってる」

手に取ったファンタジアのCD。LITEは抜群にうまい。それが織りなす、一聴すれば合っていないようなフレーズが一本にまとまっていく。ここまでバンドでまとまっていきたいと思わせるバンドだった。

「そうなんですか・・・」

「このアルバムなら俺持つてるし、今度貸そうか？」

「え、いいんですか?!」

ジャケットに見入っていた漣が、視線を俺に向けた。好奇心と興味で瞳が輝いている。

「うん。あと、参考っていうか度肝抜かれたのがte、かな。タイトルがちよつと中二ツクだけど、スネアの存在感が半端ないし、何より音が暴れてる」

「音が・・・暴れてる？」

一回聴いただけでは覚えられそうにないタイトルと水色でストライプというシンプルなジャケット。とても俺が言ったことがイメージできないのか、漣は首をかしげた。

「そう。音作りなのか、構成なのかよくわからないけど、一回聴いたら忘れられないっていうか・・・。個性つていたら、間違いなくあるバンドだよ、これ」

そして俺は、最後にもっとも勧めたいバンドを発見して小躍りしそうになった。

「あ、漣、これこれ！toe！これは絶対聴いた方がいい！」

「toe・・・名前だけなら聴いたことありますけど、そんなにすごいんですか？」

「なんととってもおしゃれだし、バンドのグルーヴが抜群にいい。」

センスの塊みたいなバンドなんだよ。うちの室井がコピーできないって嘆いたくらいドラムがうまい。下手にコピーしたら変な癖がつく。そこまでゴリゴリしてないんだけど、耳に残るし。一回ライブ行きたいな」

ここまで話して、俺は自分ばかり話していることに気付いた。たて板に水のように、音楽のことを喋りまくって溲はどう思ったのだろうか。溲の要望を聴くと言ったのに、これでは意味がない。

「ふふ、巧斗さん、目がすっごく輝いてますよ」

この言葉に、俺ははっとして溲を見つめた。まさか、あの溲がこんなことを言うなんて、どんな心の変化だというのだろう。恥ずかしがり屋で、人を茶化すことなんてめつたにないはずなのに。言った本人も驚いたのか、顔を染めて視線を足元に向けた。

「こ、これはしょうがないだろ。だって、普段こういう会話ほとんどできないし・・・」

口をとんがらせながら、それに溲が相手だし、と俺は心の中で付け加えた。

「そ、そんなに落ち込まないください。私も、こういう会話友達としたこと、あまりありませんから・・・」

まあ、確かにジミヘンやフリーのことを理解して盛り上がる女子校生が多いとは思えなかった。いやそれよりも、なんでムキになっただんだ、俺は。これではさわ姉の時と対応がほとんど同じじゃないか。

「と、とにかく」

俺はなんとか態勢を取りつくりうと咳をひとつ入れた。

「今紹介したバンドのアルバムはたいしてあるから、今度の部活のときまとめてもってくわ。梓にも勧めてみようかな・・・。それとも、もう持つてるかな？音楽好きには有名なバンドばかりだし」「そうかもしれないね。梓の課題だったバンドも知ってるみたいだったし」

それから俺と溲は、それぞれよさそうなアルバムを手に取ると、

試聴コーナーに向かった。洋楽といってもロックはもちろんポップ、ヒップホップ、レゲエ、ジャズなどジャンルは様々で数も多くなかったが、それでもアークティック・モンキーズの新作はきちんとあった。

「アクモン・・・そう言えば新作出てましたね」

「うん、雑誌見た限りだと、これまでよりテンポ下げてるらしい」
早速ヘッドホンを装着するが、これでは漣を待たせることになってしまう。音楽がかかれば周囲など目に入らなくなりそんな俺は、CDを再生する前に頭を回転させた。できれば、一緒に聴きたい・・・。

そうだ。

俺は、ヘッドホンの片方をくるりと外に向けた。

「漣、これで聴けるぞ。耳、付けて」

「え、え?!」

「ほら、再生するぞ」

戸惑う漣の腕をつかみ、やや強引ではあったが回したヘッドホンを耳にフィットさせた。アークティック・モンキーズは若い才能の塊みたいなもので、俺とそう大差ない年で世界的な名声を手にした。それに飽きることなく、新作をコンスタントに発表し続けているのは、純粹に尊敬していた。だから、その想いを漣と一緒に分かち合いたかった。だから、自分が今しがたやった行動は、なんの矛盾もなく正しかった。漣の視線を気にすることもなく、単純に音楽が分かる子には当然だと思ったのだ。

今日何回目のドキドキだろう、と漣は数えようとした。しかし、思い出すと今日はこれまでずっとドキドキしっぱなしで、数えても意味がなかった。

巧斗と、同じヘッドホンで聴いている。巧斗の顔が、すぐそばに、それも同じ高さだ。

どこかのドラマにでも出てきそうなシチュエーションに、澪は自分の心臓がきゅっと縮むのを覚えた。ちらりと視線を横に向けると、完全に目をつむって音楽を聴く巧斗がいた。真剣に、身体でリズムをとりながら目をつむる。その横顔に、澪は見とれた。きれいな肌、すつと通った鼻筋。顎までのラインはシャープで、姉に似ていながらも男子としての力強さを感じる。

澪は音楽に集中しようとして、できなかった。耳から入ってくる情報よりも目から入ってくる情報があまりに魅力的で、その誘惑に抗えない。あつと言う間に一曲が終わった。

「アクモンらしさはあんまりないけど、ここまで徹底してできるのはすごいな」

目を開けた巧斗が感想を述べるので、澪はあわてて視線をそらした。巧斗に見られていたと思われなくなかったし、なにより、急に恥ずかしくなった。

「え、ええ。スローなんですけど、音はやっぱり変わりませんね」
なんとか、巧斗に合わせようとする。

「しっかし、俺らと年変わんないのにここまで売れるのほんとすげえよな。初めて聴いた時ビックリしたもん」

巧斗の感想は、公園での話を聞いていたからただの感想に思えなかった。

ヘッドホン外してもいい？と巧斗が言ったので、澪は名残惜しさを感しながら同意した。

歌詞を作るため、とは言ったものの、このデートはもうそれ以上の意味を持っていた。そして、巧斗がどう自分を思っているのだろうか、というあり得ない疑問が浮かんで澪は狼狽した。自分がこんなに緊張して、心臓がばくばくいっているのに、やはり巧斗はなんでもないように自然体だった。木の下で抱きしめてくれたのは、一体どういう意味があつて……。

CD屋から出ると、俺たちは喫茶店によることにした。さつき寄った楽器屋の目の前にある店である。人のよさそうなマスターと数人のお客しかいない。落ち着くにはもってこいだった。二人と告げた時、マスターの妙に勘ぐる視線が気になった。

店の一番奥に座ってコーヒーを注文すると、ずっと立ちっぱなしだった足が休息する。それに、さつき試聴したとき溇側の身体が妙に反応して固くなっていたせいもある。曲を聴いている時、急に自分がクサイことをした事実に愕然とした。いや、溇に聴いてもらいたいと思ったのは事実だけど、はたから見たらこれは仲の良い恋人同士である。恥ずかしさに穴があつたら入りたい気持ちに駆られた。なんとか集中して一曲聴きとおしたが、普段の三倍も気合いを入れなければならかった。まわりが何と言おうと、俺は溇に、自分の気持ちを悟られるわけにはいかなったし、それはこれからも続けていかなければならない。

どれほど俺が、溇をかけがえのない存在として捉えていたとしても、どンドン溇に惹かれていったとしても、越えてはならない一線はあった。柏木とは、越えるべき壁の高さも厚みも段違いだった。ここだけは、忘れるわけにはいかない。これで自分がもやもやするのは目に見えているけど。

「溇、歌詞はどうだ？いいの書けそう？」

「そう・・・ですね。なんとなく、雨でなにかできないか、というイメージはできてきました。切ない感じを出せば・・・」

もし仮に、溇と俺が、互いに同じ想いを抱いていたとしても、俺から告げるわけにはいかない。雨の中で抱きしめてしまったのは、それ以外に溇を泣きやむ方法が思いつかなかっただけだ。それだけなんだ、と俺は言い聞かせる。

「雨で切ない感じが・・・。ムギのメロディって今聴ける？」

急な要望に溇は戸惑ったが、mp3プレイヤーを取り出した。正直、俺は新曲に関しては完全にみんな任せだったから、合宿以来聴いていなかった。

聴き終わると、漣がなにかすがるように見てくるので、俺は黙るわけにいかずに口を開いた。

「俺があんまり口をだす話じゃないんだけどさ、この曲はベースを押しで行ったほうがいいアレンジができると思うな。イントロ漣で、指弾きのぐりぐり感全開で」

「巧斗さんですか？私もそう思ってた・・・」

そう、こんな感じで、顧問とその教え子の関係が守ればいい。そんなところにコーヒーが運ばれてきた。

ここのコーヒーに取り立てて特徴があるわけではなかったが、ブラックで飲む分には苦みが程よい。

「巧斗さん、ブラックなんですか？」

ミルクとシュガーを入れようとした漣が驚いたように言った。

「うん。こっちのほうが好き。といっても、漣と同じぐらいは苦くて全然ダメだったよ。甘いもの食べる時はブラックの方が一番かな」

そう言っただけで外を見やると、楽器屋のウィンドウをチエックしている四人組が目に入った。その後ろ姿から正体は明らかだった。

俺たちを見失ったのか、それともあきらめたのかは分からないが、雨のことも全部見られていたんじゃないだろうな、と俺は勘ぐった。

「なあ漣、今日俺と出かけるってみんなは知ってるんだよね？」

「え、えっと、そうです・・・」

なぜか申し訳なさそうに、漣は俯いた。いや、みんなが知ってるだけならまだいいんだけど、昼前は明らかに顔隠したからなあ。

「俺もバンド仲間は無理やり吐かされてさ。それでどうすればいいのかって居酒屋で講義を受ける羽目になってさ。タクの初デートだからって、みんな妙にはりきって」

「え、巧斗さん、デートしたことないんですか？」

妙に嬉しそうになって漣が質問したが、これは予想外だった。大学で調子のいい女子の知り合いに話した時はさんざんからかわれた経験を持つ身としてはかなり勇気のいる告白だ。

「前言ったかな、俺女子の友達が多いけど彼女いた事ないんだ。バ

ンドやってるからモテるってわけでもないし、そこまで行くこと思えないし。漣はどうなんだ？」

「わ、私もですよ。今もそうですけど、男子とはあまり接点持てなくて……」

「でも漣ならモテまくりだったんじゃないか？俺が同級生だったらほっとかないな」

あ、まずい。これでは口説きにかかっていると思われてもおかしくない。漣の口調が緊張とパニックの色を強めていった。

「中学でも地味だったしむしろ律の方が……」

「そうなのか。じゃ、男子は苦手？」

俺がこんな質問をするのはおかしい話だったが、口を突いて出てしまったものは止められようがなかった。

「攻撃的なひとは、だめですね、やっぱり。まずびっくりしちゃって……」

なんとなく理解できそうな話だった。漣は恥ずかしがり屋だし怖いものだし、体育会系のノリでこられたら引くばかりだろう。現に、アーケードのところでも反論できてなかったし。

「そうか。あ、漣の歌詞見てたらすごい純粋だなんて思ってた。あれ実体験が元？」

漣の歌詞を見てて、ずっと疑問におもっていた事だった。恋する少女のピュアな気持ちが漣にしかけない感性でつづられているが、それはどこから来るのだろうか。

「えっと、ほとんど想像です。好きな人がいたら、こう思うんじゃないかなって」

「想像であれだけ書けるの？」

「え、ええ。でも最近、歌っているとそうでもなくて……」

漣のこの一言は、俺の心を大きく揺さぶるのに十分だった。いくら覚悟していても、好きな人からこんな言葉を聞いて動揺しない男はいない。

「わ、忘れてください、なんでもないですから！」

そう漣は言うど、俺に停める間も与えてくれずにトイレに駆け込んでしまった。

想像でなくなってきた。これが意味するのは一つしか考えられない。でも、その相手は誰なんだ？

気持ち落ち着かせようともう一度外を見ると、まだ特徴的な四人が楽器屋のウィンドウに固まっていた。

俺はケータイを取り出して、思い切って律のダイヤルを押した。

「え、タクちゃん!？」

もしもしもなく素っ頓狂な声が、電話の向こうでした。律が反射的にこつちを振り返り、距離はあったが目が合う感覚がした。

「なんでそこにいる？さつきから動かないけど」

「これはたまたまだよ！休みだから街に繰り出したわけさ！」

「たまたまね。俺、今から楽器屋行こうと思うから離れてほしいな」

「え、タクちゃん買い忘れでも・・・あ」

俺の簡単な鎌かけにひっかかり、律は自分から追跡していた事実を認めることになってしまった。

「漣そろそろ戻ってくると思うから、ここ来て謝れよ」

「え、漣に?」

「あいつ、お前たちがついてきてること知らないから。自分がこんなことされたらやだろ?」

律の悲痛な唸り声が聞こえ、がっくりと肩を落とすのが見えた。

漣は、自分が言ってしまったことが、どれだけの意味を持つのかわからなかった。それでも、巧斗を混乱させてしまったと感じることはできた。

練習中にボーカルをする時、これまでただ歌っていたものが変わってきていることは事実だった。マイクを通すたびに、何かが違う。歌のイメージが鮮明に湧いてくるといっつか、書いた時よりも世界が浮かびあがってくるでもいっつか。そして、最後には必ず、巧斗

の顔が浮かんでしまうのだった。

「巧斗さん、絶対変だって思ったよね」

これからどうすればいいのだろう、と考えながら洗面所を出た。今日はいつにもまして感情の上下が絶叫マシーン並みに激しい。

視線を店内にもどすと、予想だにしない光景が待っていた。

「律、みんな・・・どうしているの？」

殊勝な顔して、自分のバンドメンバーが隣の席に座っていた。

「巧斗さん、これは・・・」

状況が把握できず、漣は助けを求めた。

「四人とも、俺たちの後をつけてたらしいんだよ。このまま放っておくのもおかしいから、呼んだんだ」

漣は律に詰め寄った。身体中から衝動があふれて、制御不能一歩手前まで来ていた。

「どうしてこんなことしたの？」

「二人が心配でき。だって、漣とタクちゃんだし」

「答えになってないぞ」

巧斗が呆れながら指摘した。

「えっと、タクちゃんが漣に変なことしたら真っ先に駆けつけよう」と

「俺、そこまで信用がないのか？」

「そこまで言っています！ただ・・・」

梓が何とか説明しようとした。

「漣先輩だから、デートが本当にうまくいくのか心配で。だから、決して面白がってやったわけじゃ・・・」

「そうなのか？」

巧斗が視線を向けると、律、唯、ムギが頷いた。でも、それだけで漣は納得できなかった。

「だからって・・・。これは、あくまでも私が歌詞をかけないからやってもらったのに。服選んでくれたのはありがたいけど、これは私と巧斗さんの問題だ」

「わかつてはいたんだけど、どうしても不安になっちゃってさ・・・
ごめん、漣」

律が頭を下げると、ほかのメンバーも謝った。

「どこまで、あと着けてたの？」

「楽器屋までだよ。唯のせいで見失って・・・」

「ほんとに？」

「うん」

「たく、これからはやめてくれよ。心配してても、本人は気分のいいものじゃないから」

「分かりました」

ムギが頷き、唯は

「漣ちゃん、ほんとにごめん！」

と謝って、四人は店を後にした。

漣は、気分がもやもやしていたが律の言葉を信じた。巧斗に抱きしめられたのを見られていたら、あまりの恥ずかしさに気を失いそうだった。予想していなかったわけじゃないが、いざされてみると気分は沼に沈むように落ち込んでいく。

「でも漣、みんなに愛されてるな。普通の友達はここまでしないぞ」
「気まずい雰囲気を変えようと思ってくれたのか、巧斗はつばやくように言った。」

「だからって、ここまでする必要はないですよ。もし私が同じ立場になったら心配になるのは分かりますけど」

「それだけ、漣は大事に思われてるんだよ。やり方がまずかったのは認めるけど。それより、その服みんなに選んでもらったんだ」

急に巧斗が悪戯っぽい目になった。漣は、今しがた墓穴を掘っていたことに気がついた。

「こ、これはみんなが急にやる気になって、練習もそこそこに買いに行くって言って、それで」

「だけど行つたんだ」

「当たり前じゃないですか！わたしにとっても、今日は初めてで・
」

漣は口をつぐんだ。せつかく、巧斗と二人きりになれていたのに、それは本当の意味ではなかったのだ。

「今度会つたらきちんと言つから、そこまで問い詰めるなよ。本人たちもそこまで悪気があつたわけじゃなさそうだし」

これが大人の反応なのだろう、と漣は納得するようにはしたが、巧斗の対応が嫌だった。やっぱり、巧斗は今日のことをなんとも思っていないのだろうか。

今までたまつた疑問が、さく裂した。

「なんで、巧斗さんはそう冷静でいられるんですか？私、今日ずっと心臓がどくんどくんしてたのに、なんともないんですか？」

巧斗はなにか考えているようだったが、意を決したように口を開けた。

「なんともってことはない。さっきも言ったけど、俺にとっても初めてなんだよ、今日は。だからってトラブルにいちいち怒ってたら楽しくないだろ？」

巧斗の言葉の裏に何かあるのは感づいたが、それが余計に、漣のアドレナリンをあげていく。

「どんな服着ていこうかわからなくて、散々悩んだんです。夜もあんまり眠れなくて、それなのに・・・」

「俺だつてそうだよ」

漣は顔をあげた。珍しく、巧斗の顔が紅潮している。

「いざ行かつてなつたら、緊張の嵐だった。今日を迎えるのが、楽しみだった。いくらバンドのことで落ち込んでたつて、漣と出かけるってなつたら嬉しさでどうかなりそうだったんだ。でもおれ顧問だし、年上だし、そんなの見せるのかっこ悪いっておもつて、出さないようにしてたんだ。漣だから・・・」

言い過ぎた、と思つたのか、巧斗は急に口を押さえた。漣は、巧

斗も同じように緊張して、大切に思っていてくれたのを知って、唐突に嬉しさがこみ上げるのにアタフタした。巧斗は、慣れているわけでも感じていないわけでもなかった。ただ、立場上うるたえることができないから、澪が誤解しそうなくらいに振る舞っていただけだったのだ。

澪は、自分が巧斗の気遣いに気付けなかったのを恥じた。

「ああもう、泣きそうになるな。まだ時間はあるから、これからは本当に二人で回れるから、な？」

歌詞を作るという建前、でも本音はもつと個人的な感情から始まった今日のデート。澪は、巧斗が自分を大切に思ってくれることに感謝すると同時に、以前よりも頼もしいと思った。

そして、巧斗に対してなんでこんなに気持ち揺れ動くのか、答えが見つかった気がした。

巧斗だから、こうなるんだ。ほかの誰でもない、ただ男子として見ている以上に、巧斗だからこそ、嬉しくなったり悲しくなったりするのだと。

そう思ったとたん、澪の頭の中で、メロディとともに言葉が弾けていき、踊りだす。それは、歌詞が生まれた時だけに発生する、澪だけの感覚だった。

タッチダウン（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます

ようやくここまでできました。一区切りとまではいきませんが。

漣の気付きは、外部から見たらそこまでではありませんが、本人にとっては大きな変化です。

とはいえ、この話想定していたゴールとはかなり形が違います。

勝手にキャラが動き出すというか、とくにタクがこっちの制御からはずれて好き勝手うごくのでその後片付けに精いっぱいでした

律たちの扱いがぞんざいになったのは反省しております

次回から、文化祭に向けて本格的に動き出そうと思います。

それとものと六人の絡みを増やします。

ではまた、次のお話もお読みくだされば幸いです

外伝〜私が私で、いられる場所〜（前書き）

今回は、和のお話です。

本編とはあまり関連のないお話ですが、よろしくお願ひします

外伝　私が私で、いられる場所

「ただいま」

玄関を開ける。が、真つ暗で、返事のない家が和を出迎えた。

いつものことだ。母は、また遅くなるらしい。リビングのテーブルに行く、今日は11時過ぎまで帰ってこないという書き置きと、夕飯代が置いてあった。

「メールしてくればいいのに・・・」

和はため息をついた。遅くなるのは構わないが、直接連絡ないことに、和は一抹の寂しさを感じた。

近所のスーパーから材料を買ってきて、テレビをつけながら夕飯の支度を始める。夕方のニュースは、ニューヨークの株式市場が大幅に下落したことをつたえており、経済アナリストがその原因と今後の展望を語っていた。

フライパンで野菜が弾ける音と、ごま油の香ばしい匂いがキッチン一杯にあふれていく。手早く夕飯を作り終わると、ひとり和は食べ始めた。

ぼんやりとテレビを見ながら箸を動かしていると、和のケータイがなり始めた。

「和ちゃん、今度のテストで分からないところがあるんだけど・・・」

電話の向こうから聞こえてくる、幼馴染ののほほんとした声。しかし、内容は切羽詰まった感がありとでていた。

「自分でやらないとだめですよ。あと、ムギ同じクラスなんだから教えてもらったりとか」

幼稚園のころから、唯のフォローをしてきた和はかるくあしらう。本当は手伝ってもいいのだが、いつまでも唯の世話を焼けるわけではなかった。

「え〜。和ちゃん、お願い。今度のテストでまた補習になったら、

お母さんがお小遣い減らすって・・・」

「ふだんちゃんとしてない唯が悪いんでしょ」

「でもでも、お小遣い減ったら、みんなと遊べなくなるし、また迷惑かけることになるし・・・。最近、タクちゃん気合いが入ってるから部活できなかつたらなんて思うか・・・」

唯は、唯なりに責任を感じていた。これまでの行動に突っ込むところは多いのだが、何の趣味も持たなかった幼馴染が、初めて得た打ち込めるものにかかる想いを聞いて、和は考えを改めた。

「分かった。三十分したら行くわ。ちゃんと準備しておきなさいよ。甘いわね、と思いつながら、和は急いで夕飯を片付けた。

唯の家に到着すると、珍しいことに平沢家全員が集合していた。

「ああ、和ちゃん、いつも悪いわね、唯が迷惑かけて」

唯の性格を清楚でおしとやかにしたらこうなるのだろう、と想像するほど娘によく似た母親が玄関で和を出迎えた。リビングに目をやると、フレームレスのメガネをかけた、優しそうな父親と、洗い物をしている憂の姿が目に入った。

「唯〜！和ちゃん来たわよ！」

階段の下で母親が叫ぶと、カーニバルの言葉がプリントされたTシャツを着た唯が降りてきた。

「和ちゃん、ありがとう！さあこっちこっち！」

「ちよつと、唯！」

自分の背中を押して部屋へ案内する唯に驚きながら、和は唯に質問した。

「今日はみんな揃ってるのね」

唯の父と母は、新婚なのかと錯覚するほど仲がいい。休みに唯の家に行っても会えないことが多かった。

「うん。でも今度の休み、またデートするんだって」

唯がにこにこしているのは、声を聞いただけで分かった。

「そっか……。相変わらず、仲いいわね」

「そうなんだよ。たまにこっちが恥ずかしくなるくらい踊り場にかかったところで、階下から憂の声がした。」

「和さん、後でお茶お持ちしますね」

家族、か。和は、帰ってきたときの、真っ暗な自宅を思い起こした。

「で、どの科目？」

唯の部屋に入ると、和はさっそく本題を切り出した。

「え〜っと、古典でしょ、数学の？とBに科学、英語、日本史……」

「ほとんど全部じゃない」

予想通りだった。唯には得意科目と言える教科がない。和は鞆から参考書一式を取り出した。

「テストの初日は数学だったわね。とりあえずそこからいくわよ」
頭を抱えながら何とか問題を解いていく唯に教えながら、和は唐突に、唯と自分の違いを考えていた。天真爛漫で、周りをほっこりした気持ちにさせる子。和は、唯のようなキャラクターはすごい、と思っていた。何か失敗しても、許せてしまう存在。それは、あの両親に育てられたからなのだろうか。

「うう。疲れた……」

「まだ数学やっただけでしょ」

「和ちゃん、厳しいよお」

テーブルの上でくたつとしていた唯は恨めしい目で和を見た。

「普段やつとかないからこうなるのよ」

そう言って視線を部屋に向けると、ギターが目に入ってきた。きちんとスタンドにかかっているが、今しがたケースからだしたように、黒い布製ケースが寝転がっていた。

「唯、一日どれくらいギター練習してるの？」

「家にいるときはずっとだよ。ギー太、ちよっとまってね」

飼い犬に言うように、唯はレスポールに語りかけた。

すると、コンコン、とドアをたたく音がして、憂が入ってきた。お盆にはお茶とお菓子が乗っている。

「和さん、今日はありがとうございます。これ、おやつです」

「そんないいのよ」

とはいっても憂に悪いので、和は休憩することにした。にこにこしながら、憂はてきぱきとテーブルにお菓子を並べた。

「唯、けいおんはどう？ さわ子先生の弟さんが顧問に来てから二カ月・・・だっけ」

「うん、楽しいよ！ でもなんでタクちゃんのこと知ってるの？」

「噂よ。だって、さわ子先生の人気からしたら、でるの当たり前じゃない」

和は直接会ったことはない。しかし、その巧斗のことを見かけた生徒から広まったようで、姉とよく似ているという話は耳にしたことがあった。

「そうなんだ・・・。タクちゃん、ギターすっごく上手だし、分かりやすく教えてくれるし。でも性格は、さわちゃんと違って真面目だよ」

唯が音楽に打ち込む姿は、去年一年だけみても和にとっては新鮮だった。なにせ、ぐうたらに過ごすことだけを唯は繰り返して生きてきたからだった。バンドのことはよくわからないが、幼馴染として、和は嬉しかった。

「あそうだ、和ちゃん、今度ライブ行こうよ！ 憂も！」

唯の眼が、いつも以上に輝きを増す。

「ら、ライブ？」

「タクちゃんのバンドがライブするんだって。タクちゃんのギター聴いてみて！ 絶対感動するよ！」

唯の口からライブに行こうと誘われるのは初めてのことだった。それに、こんなに興奮して勧めてくることもなかった。

和は、二つ返事でOKした。

「ライブ、か・・・」

家に帰ったら10時を回っていた。しかし、母は書き置き通り、帰宅してはいなかった。

唯の家庭教師で自分の復習にもなったとはいっても、和は和で勉強しなければならぬ。風呂に入るとすぐに机に向かった。しかし、唯に誘われたライブの事を考えるとシエールペンシルが止まった。

どんなライブをするのだろう。和は唯には言えなかった噂を思い出していた。さわ子は美人で大学を卒業したばかりとあって、生徒から人気だった。その弟が学校に来たとなると、女子高のこと、すぐにどんな人かは広まる。

さわ子にそっくりなイケメンらしい。初めて桜ヶ丘に来た時は、でっかいケースとギターを背負っていたという。さわやかで、大学一年、とくれば、噂が噂をよび、話題に上がることも多い。中には彼女がいるのか探り出そうとする人もいたらしい。ここまでけいおんのみんなに話すとややこしいことになりそうなので黙ってはいしたが、興味をもっているのは和も同じだった。

「さわ子先生の弟、か・・・」

生徒の盛り上がりは仕方ないとしても、教師陣のかなり思い切った決断に、和ははじめ驚いていた。何と言っても桜ヶ丘は女子高である。その顧問として大学生が入るなど、対外的に見れば決して褒められるものではない。羊の群れに狼を放りこむようなものだ。どんな経緯があつたのかは分からなかったのだが、それが余計に、生徒の想像をかきたてていた。

このままでは集中できない。本でも読んで、落ち着かせよう。和は学生靴から和紙であつらえられた、赤色の美しいブックカバーのかかった文庫本を取り出した。

和がライブに行くためには、やっておかなければならないことがあつた。

唯から誘いを受けた翌日、三年生の廊下までやってきた和はすぐに目的の人物を見つけた。

「曾我部先輩！」

クールビューティ、という表現がよく似合う生徒会長は突然の訪問にも笑顔で対応してくれた。

「どうしたの、和さん」

「こんどの生徒会なんですけど、早抜けしてもいいですか？」

「なぜ？」

和は一瞬迷ったが、正直に話すことにした。

「その日、友達からライブに誘われてるんです」

「ライブ？軽音の人がでるの？」

きれいな切れ長の目を流しながら、生徒会長は疑問を口にした。

「いえ、今の顧問がライブをするらしくて。友達がいるので、誘われたんです」

「さわ子先生の弟さんが、ライブを……。いいわよ和さん、行ってきても。その代り、先生の弟さんがどんな人か、きちんと連絡するよ」

「えっ!？」

生徒会長がそんな冗談をいうとは信じられず、和は自分の耳を疑った。

「はは、冗談よ。でも、生徒会の人結構気になってるかも。だから帰ってきたら質問されるかもね」

許可はもらえたからいいものの、何のために行のか、目的がぼやけてしまった。

ライブの前々日、和は澁からチケットをもらった（唯経緯だと不安だ、と顧問が言ったらしい）。長方形でライトブルーのチケットには、ムーンチャイルドの文字があった。場所は、隣町。最後のオートワークスというバンドが、お目当てらしい。

「澁、当日はどうやっていくの？」

「隣町だけど、歩いて行ける距離だから徒歩で行こうかなって考え

てる。細かい時間はまた連絡するよ」

澪がほほ笑んだ。唯といいこの澪といい、桜ヶ丘の軽音部はかわいい子ばかりが揃っている、それも比喻じゃなく。そんななかに男子一人なんて、そこはかとなく危険な香りがした。

「澪、顧問の先生はどんな感じ？」

軽い気持ちで振ってみた。ところが、澪はなぜかおろおろして

「う、うん、ちゃんと顧問してくれてるぞ。きちんとダメなところは指摘してくれるし・・・」

軽音部ではともかくとして、普段教室では崩れない澪のクールさが、崩れた。話を聞いただけなのに、と思った次の瞬間、和は澪が顧問に対してどんな感情を抱いているのかを察した。

「あの澪がねー」

学校帰り、本屋による途中で和はつぶやいた。女子高という鎖国状態にもある環境から、教師に憧れを抱く生徒がいることくらい和も知っているし、実際にそういう噂レベルの話も聞いたことがある。社会的にはよろしくないが。

本屋に着くと、なんの小説を買おうか考えながら歩く。母は今夜も遅くなるだろう。読書は、和にとって現実から離れられる唯一の時間だった。文字を追い、頭の中で世界を構築している時だけ、いやなことを忘れることができた。

ベストセラーのコーナーでは、今ドラマ化もされている医療ミステリ が山積みになっていた。

和は、その小説を買った。

軽音部の顧問、山中巧斗は驚くほどさわ子に似ていた。

ムーンチャイルドについてすぐ、唯と律がカウンターにいる巧斗を見つけたのだ。そこには巧斗のほかに、彼のバンドメンバー

もいた。和は自己紹介と、チケットのお礼をした。そこから会話が
始まったが、途中で会話に参加してきた人物がいた。

「おいタク、お前は どうしてこんな可愛い子を・・・」

バンドのボーカルだという柏木優季は怒りというか嫉妬の表情で
巧斗に絡む。ハーフかと思うほど掘りの深い顔だからは想像でき
ない言葉の軽さだった。

「今、顧問やつてるんだよ。桜ヶ丘で」

「どうしてお前はそう運がいいんだよおおっ！」

おもいつきり巧斗の肩を掴んで揺らす柏木は、表現がオーバーで、
ユーモラスだった。和はみんなと一緒に笑った。

ライブ会場の人ごみはひどく、これまで和が経験してきたものよ
りも密度が濃かった。そんな状況に戸惑いを隠せなかったため、漣
と二人で立っていたが、そこに巧斗が気がついて、話しかけてくれ
た。

巧斗が有難う、と新曲のことで礼を言ったので、顔を赤くしながら
ら会話を続ける漣を見て和はますます確信をもった。巧斗は今日合
っただけだが、上手いこと軽音部という濃いキャラの集まりの中で
やれているようだ。なにせ、あの漣がこんな表情になるくらいなの
だから。それにさつき、律に盛大にいじられていたし。

巧斗のバンドメンバーは皆年が同じだというが、和がイメージし
ていたバンドマンとは幾分か違っていた。みんないい人そうだし、
何より落ちついていて、もっとも、さつき巧斗に絡んだボーカルは
唯と律を前にしてまだ大げさに話し込んでいたが。

和は、このメンバーがどんな演奏をするのだろう、と自分が待ち
遠しくなっていることに気がついた。

高校生のバンドがほとんどということから、正直な話、和は唯た
ちの方がうまいと思った。演奏の固さやズレなど、細かいことは分
からないが、バンドのそろい具合は軽音部のほうがある。それでも

観客が盛り上がるのは、見ていて楽しかった。

「唯、ボーカルの人となに話してたの？」

タイムテーブルが進み、次のバンドが準備をしている間、和は聴いてみた。

「うんとね、タクちゃんの面白い話。昔はいろいろやってたんだね」
唯は巧斗を、顧問というより友達の一人として見ているようだ。

確かに、巧斗の面倒見の良さ、温厚さは話をしていて十分感じるこ
とができた。でなければ、唯と友達になることは難しいだろう。そ
れも、打ち込むことだったらなおさらだ。

しかし、ただ友達ではなく、唯の根本にはギターを通じての
尊敬があるように和は感じていた。巧斗が来てからというもの、唯
のギター練習はさらに熱が入っているように、和の眼には映ってい
た。でなければ、顧問がライブするからといって自分を誘いはしな
いだろう。

「おし、次はいよいよ。タクちゃんたちか！」

律が周囲に迷惑をかけないように腕を回す。すると、唯が

「そうだ、みんな、もっと前に行こうよ！タクちゃんを応援しよう！」

「いいわね、唯ちゃん。そうしましょう」

ムギもそれに同調する。和は正直恥ずかしかったが、唯の上気し
た笑顔を見ると、行ってもいいかな、と思えてしまった。むずがる
溼の腕を引き。先端にまで近寄る。

アートワークスのメンバーが登場すると、それまでのバンドと拍
手のポリリウムが違っていた。和は、このバンドがいかに期待され
ていたのか、知ることができた。

MCのあと、和は息をのんだ。巧斗ではない。ボーカルを見て、驚
いた。

すつつ、と深呼吸をした次の瞬間、変わった。あのお茶らけてい
た表情は消えた。瞳はまっすぐ前を向き、真剣そのものだった。自
分のステージを披露する、男の顔だった。そこから流れていくメロ
ディ。ボーカルの気持ち、想いが伝わってくる。たった四人なの

に、ステージから放たれる音楽はとても重厚で、なのに歌詞は表現豊かだった。

人間は、なにかに打ち込むところも変わるのだろうか。

ライブが終わり、和ははしゃぐ唯と律を眺めながら考えていた。唯もそうだが、巧斗のバンドは音楽に対する真面目さがひしひしと伝わってきていた。あんなに、ライブ前はリラックスしていて、砕けた感じだったのに。

そんなものが、今の自分にあるだろうか。

帰宅しても、また真っ暗な家が出迎える自分に、そう思えることが見つかるのだろうか。

案の定、帰っても母親はいなかった。ライブに行くとは伝えてあるが、反応は軽いものだった。

部屋に戻り、半分になったチケットを見つめる。唯が巧斗のことを尊敬する理由が分かった気がした。あれだけ暴れながらしっかりと演奏するほど上手いギタリストならば、唯じゃなくても一目おくだろう。

それに・・・。

和はカーテンを開けた。雲ひとつない夜空からは、星がいくつも輝いている。

あのボーカルの豹変ぶりが、和の脳裏に焼き付いて離れなかった。

「和さん、ライブどうだったの？」

生徒会室で、和は質問攻めにあった。その中心はやはり顧問である巧斗だった。学年関係なく質問をぶつけられた。

「さわ子先生の弟って、どんな感じだった？」

「さわ子先生にそっくりでした。でも、ライブだとこれでもかっていうくらいに暴れてて・・・」

「さわ子先生にそっくり？ってことは、イケメンじゃない！」

会計を担当している三年生が食いついた。和は男子のルックスに興味はあまりない。見た目だけでいいか悪いかなど、決められるものではなかったからだ。見た目が良くても、中身がスカスカなら楽しくないじゃない。

「そんな質問攻めにしないの」

ぼん、と書類を机に置きながら曾我部生徒会長が注意すると、座って手を組みながら

「それで、顧問のバンドメンバーはどんな感じだったの？」

「会長もじゃないですか！」

生徒会全員からの総ツツコミに動じることなく、生徒会長は和の回答を待った。

「どんな・・・。四人でしたけど、ほとんどの人は普通でしたよ。とげとげのアイテムとか、髑髏のきらきらしたTシャツとか着てませんでした。むしろ、おしゃれでした」

「そうなんだ。ちょっと意外。あれ、ほとんど？じゃあ違ってた人がいたわけね」

曾我部先輩の指摘に、和は唯や律と同じテンションではしゃいでいた人物を思い浮かべていた。

「格好は普通だったんですけど、妙にテンションが高い人がいて。表情もオーバーで、面白い人でしたよ」

不思議なことに、演奏についての感想よりも、バンドメンバーについての感想を求められることが多かった。和は、自分が女子高に進学した事実に変更して気付いた。生徒の模範足るべき生徒会と言えど、メンバーはごく普通の女子高生。出会いというか、男子と知りあう機会が制限されている環境は話題の主を優先的に恋愛にさせていた。

とくに、大学生でバンドマンという響きがみんなの心をつかんだ

のだろう。生徒会そっちのけで会話が弾んでいく。

「和ちゃん、写メとかないの？」

「ないですよ。ライブハウスも初めてだったし、そんな余裕ありませんよ」

先輩の質問からは好奇心がはつきりと感じられた。

「それじゃ質問変更。和ちゃんはだれが一番タイプ？」

「だれって……」

困った。一目見ただけでタイプもひったくれもないだろう。とはいっても、和にも付き合うならこういう男子がいいというイメージはある。

「タイプと言うか、一番ないなっていうのはボーカルですね。面白けれど、普段からあのテンションだと……」

まるで唯が二人いるみたいだし、と和は心の奥で付け足した。もっと落ちついている人がいい。

生徒会で珍しく恋愛の会話をしたからだろう。いつも立ち寄る本

屋に言っても、恋愛系のタイトルばかりが目についた。

「私が好きだった人」

「秒速30メートルで、会いに行く」

普段ならこういう恋愛系の小説はスルーの対象なのに、今日はやけに気になる。

そんなに、先輩から言われたことを気にしているのだろうか。

恋愛をする気も起きなかったし、できるとも思っていなかった。

今の自分は、いろいろな事で手いっぱいだった。そんな余裕はない。そうなんだけど……。

考え込もうとしていた矢先、和の視線が固まる。

「あの人……」

遠目からでもわかる、堀が深く、はつきりした顔だち。ムーンチヤイルドで会った、柏木優季その人だった。

さつき生徒会でありえない、と言った自責の念からなのか、単に恥ずかしかつたのかはわからなかったが、思わず和は本棚に身を隠した。

なぜ隠れるのか、自分でもわからない。

今会うつなにか面倒なことになりそうだし、ライブの感想も聴かれるだろう。何より、あのテンションで来られたら始末が悪い。

そんなことを考えていたものだから、和は周囲への察知がほとんどできなかった。

「和ちゃん・・・だっけ。何やってんの、こんなところで」

「あ・・・」

振り返ると、よきりと本棚から顔を出している柏木がいた。

「な、なんでもありません。本を、見てただけです」

「その割に、本から背を向けてるけど」

すぐさま、和は本棚から離れるが、おかげで客がこちらを見つめているのに気がついた。数秒間二人は固まっていたが、柏木の方から

「なんかまずいし、外出よっか」

こんなことになった恥ずかしさから、和は頷くしかなかった。

「ライブ、来てくれてありがとね」

本屋を出ると、柏木が軽く会釈しながらお礼を言った。和も会釈を返したが、ぎこちないものになってしまった。

「いえ、友達の誘いでしたから・・・」

「唯ちゃん。だっけ、幼馴染だっけ？」

柏木がさりげなく道路側に回ると、二人は歩きだした。

「なんで知ってるんですか？」

和が驚いた顔を見ると、柏木が不思議そうな顔になり

「だって、ライブの時唯ちゃんから聴いたし。すっごく頼りになる子だって言ってたよ」

頼りになる。その言葉に、和の心はナイフを突き刺されたような衝撃を受けた。

「それは、唯がきちんとやらないからで・・・」

自分でもわからないくらい、和はムキになって反論した。唯にあれこれと世話をしてしまうのは、自分がもともと世話焼きな性格なのと、唯がもつ構いたくなるオーラのようなものが関係していると、自分では思っていた。それだけのはずなのに、どうして、受け流すことができなかったのだろうか。

「ふーん。ま、唯ちゃんはほっとけなくなるような気がするからなー。すつごく天然だけど」

「分かりました？」

「そりやもちろん。もともとほんわかした性格もあるんだろうけどさ、家族に大切にされたてたなーって思う」

唯の家族。和の脳裏に、先日の仲睦じい平沢家の映像がきらきらと輝いて映った。まぶしくて、直視できないほどに。

「唯の家は、本当に仲がいいですから。特にご両親は、今でも新婚かって疑うくらい」

「やっぱそうか。でも和ちゃんがいたから、唯ちゃんは桜ヶ丘にいるって思うな、俺は。和ちゃん、生徒会に入ってるんでしょ？優等生って俺憧れるもん」

柏木の言葉に、和は黙ってしまった。

確かに、その通りだ。受験の時、自分がどれだけ唯の家庭教師を務めていたか。しかし優等生と呼ばれることに、和は違和感と反論したくなる気持ちがあった。

「私は……。優等生なんかじゃ、ないです」

言ったことがないほど、和の声は冷たくなった。私は、みんなが思うような、優等生じゃない。模範となっているのも、生徒会をやっているのも、きちんとしているのも。

「えっ……」

「すみません、失礼します。おやすみなさい」

気がつく、和は走っていた。走り出した瞬間に柏木にぶつかった気がしたが、無視した。なにがなんだかわからない顔をした柏木を残して、和は一目散に、まるで逃げるように家に帰った。

とんでもなく失礼なことをしたと、和は自分でも思っていた。でも柏木と会話すればするほど、心は苦しくなっていく一方だった。彼が自分に対して抱いているイメージと、本当の自分はかけ離れていた。

家に着くと、珍しく母親が先に帰ってきていた。

「あら和、お帰り」

そういつて出迎えた母親は、和からすぐに目を離すと、パソコンのデスクトップに視線を戻し、猛烈な勢いでキーボードを打ち始めた。

「和ごめん、まだ夕飯準備してないわ」

和はリビングに顔を出すと、

「私を作るわ。お母さんは、そのまま仕事、続けてて」

「ありがとう。和は手がかからなくてホント助かるわよ。最近、特に忙しくて」

手のかからない、母はそう言った。和は柏木の時と同じように、心にズシンと重しがくる感覚を覚えた。

自分は、いつもこうだった。昔から、何か問題を起こして親に迷惑をかけたことがない。テストもいい点を取っていれば、喜んでくれた。

昔からのこと。当たり前のこと。けれど、決して唯たちには言えないこと。

自分の中ではもう普通になっていることなのに、どうして今日はこんなに気になってしまうのだろう。部屋着に着替えながら和は考えを押しつけようとした。昔からこうだったのだから、今更変わるはずがないし、変える気もない。それでなにも起きないなら、それで構わない。和はしっかりとしなきゃ、と言い聞かせた。

その時だった。

階下から、母親のどなり声が聞こえてくる。普段は静かなこの家

に不釣り合いな不協和音。

何が起きたのか確かめようと、音を立てずに一階へ降りる。すると、怒鳴った理由がすぐ分かった。

「なんとも言ってるでしょ。私はもう、戻るつもりはない。昔から我慢してきた。あなたが少しでも心配したそぶりを見せたことがあったの！？誠意のない態度が、一番腹がたつのに！」

和は内容が分かると、今度も気づかれないように二階に上がった。頻繁に起こる、別居した父と母の喧嘩だった。

電話越しだからまだよかった。一緒にいたころは、よく物が飛んでいたから。今は、なにも傷つかずにすんでいる。

和は声の止むのを待って、下に降りようとした。その時、自分の鞆に、読みかけの文庫本がなくなっていることに気がついた。

「うそ……。あのブックカバーが……」

何回も鞆をひっかきまわした。しかし見つからない。鞆をさかさまにしてまで探したが、それでもない。

学校を出る時、鞆にしまった記憶はある。とすると、走って帰宅した時にこぼれおちたのか。

途方に暮れる和。あのブックカバーは、自分にとって、唯と同じくらい大切なものだった。

翌朝、登校した和は真つ先に机の中を確認した。しかし、中には普段使わない教科書が入っているだけだった。

やっぱり、昨日帰る時に落としたんだ。

まずい。昨日どんな道を通って帰ったのか、ほとんど覚えていない。今日の帰りに探そうと思っても、検討がつかない。

「どうしよう……」

鞆を机に置いたままため息をつく、澪が話しかけてきた。

「どうしたんだ、和。ため息なんて珍しいじゃないか」

澪は心なしか嬉しそうに見えた。なにがあったのか知らないが、

今の和には詮索する余裕はなかった。でも心配はかけたくない。

「あ、最近、勉強の調子がよくなってね。漣、今度教えてよ」

「なに言ってるんだよ。私より和の方が成績いいじゃないか」

不思議そうに返事を漣はしたが、和はそれ以上言えなかった。

そんな状態でその日は授業を受け続けていたが、三時間が終わった休み時間、和のケータイがなった。知らない番号からだった。

自分は怪しげなサイトを利用したことはないし、変なことは何もしていない。それに、自分の連絡先を知っている人間は限られている。

こんなときに一体何だろう、と不審に思いながら、和は電話に出た。

「もしもし、真鍋和さんのケータイですか？」

この張りのある声に、和は聴きおぼえがあった。しかし、今もつとも気まずい声でもあった。

「そうですけど。柏木さん・・・ですか？」

「そう！ごめんね、勝手に電話なんかして。唯ちゃんから聞いたんだ」

いつの間に柏木さんは唯の連絡先をゲットしたのだろうと疑問に思ったが、和は柏木の次の言葉に耳を疑った。

「それでなんだけど、昨日帰る時本落として行かなかった？和紙でできた、赤いブックカバーなんだけど」

「そ、それ私のです！どこにあったんですか？」

思わず声をあげてしまい、周りの目が、特に漣が驚いていた。和は顔を真っ赤にすると、慌てて教室をでた。

「なんかあった？」

「いえ、場所変えました・・・。それで、どこにあったんですか？」

「どこもなにも、昨日帰る時俺にぶつかったじゃん、そんなときじゃないかな。目の前にあったから。声かけようと思ったんだけど、その時和ちゃんはもう遠くに行っちゃってて。それで、唯ちゃんに連絡先を聞いて、こうして確認の連絡をしたってわけ」

「そうだったんですか……。有難うございます」

ほっとする気持ちと、申し訳ない気持ちが一気に噴き出た。あれだけ失礼なことをしたのに、柏木はこうして連絡をしてくれた。

「今日って大丈夫？ 渡しに桜ヶ丘行こうか？」

「い、いえこちらから伺います。私のものですし……」

「分かった。じゃあ、あの本屋の前に……。六時半とか、大丈夫？ 生徒会はあるが、今日はそれほど仕事がたまっているわけでもない。大丈夫だろう。」

和は柏木の提示した時間に待ち合わせる約束をした。

「和ちゃん、これだっけ？」

まだ夕暮れの中で、柏木が差し出したのは、あのブックカバーだった。

「そう、これです！ ありがとうございます……」

これは、何が何でも離すわけにいかないものだった。和は注意深く、鞆の奥にしまった。

「その文庫本……。じゃない、ブックカバーあんまり見ないけど、結構大切なものだったの？」

驚いて和は柏木の顔を見上げた。澄んだ眼と、視線があつた。

「そ、それは……」

このブックカバーのことは、唯にも話したことがない。でも、せっかくここまで持ってきてもらったことと、昨日のことがあつた。

そのお礼をしなければならぬ。和は決意した。

「そうです……。これ、両親からの誕生日プレゼントなんです。私が小学校三年のときにくれた……」

思い出す。三人で遊園地に出かけたこと。一緒に鍋を囲んだこと。大きいバースデーケーキと一緒に、笑顔でプレゼントをくれたこと。幼い時の、そして、三人家族だった時のことが、一気に頭の中を駆け巡る。

気がついた時には、もう遅かった。和は、自分の目に涙がたまり、一滴頬を伝ったことを知った。

「の、和ちゃん？」

聞いてはいけないことを言ったのか、と柏木が慌てて会話をやめようとする。それを、和は遮った。きちんと、この人に話すと決めたのだ。

「柏木さん、場所、移してもいいですか？」

和が柏木を案内したのは、近所の公園だった。和は周囲に植わっている林の中を進み、一本の大木の下で止まった。

「ここは・・・」

当然ともいえる柏木の反応を待って、和は話始めた。

「さつきは、ごめんなさい、急に泣いたりなんかして・・・」

「そんなこと。でも、そんなことを、俺なんかに話してもいいの？」
「持ってきてくれた、お礼です」

にっこりとほほ笑む和は、不思議と落ち着いている自分がいることに気がついた。こんな気分は、それも男子に対して思うのは、初めてだった。

「ここ、小さいころからくる、私の秘密の場所なんです。唯も知らない、私だけの」

「和ちゃんだけの？」

「はい・・・。私、泣きたいときはここに来るんです。といっても、頻度はあんまりないですけど。」

ここを初めて知ったのは、そう、小学校四年の時です。その時から、私の両親は、喧嘩するようになりました。あのブックカバーは、まだ家族の仲が良かった時の、最後のプレゼントなんです」

「だからあんなに、必死になってたのか・・・」

「ええ。なんで両親が喧嘩をするようになったのかは分かりません。今となっては、どうでもいいです。でも当時はすっごく嫌でした。」

私が終わっても、二人の喧嘩は続きました。

ついに私は、耐えきれなくなつて、家を飛び出しました。走つて走つて、たどりついたのがここでした。ここは唯と、憂ちゃんとよく遊んだ公園なんですけど、こんなところがあるなんて知りませんでした。

幸せだった両親が、なんで喧嘩なんかするのか。迷惑をかけないようにつて、私はそれまで泣かなかつたんですけど、ここに来て初めて泣きました。とにかく悲しくて、どうしたらいいかわからなくて、ただずつと、泣いていたように思います」

柏木は、和の告白にずつと耳を傾けてくれていた。こんな重い話を聞かされるとは思つていなかったらう。

「そして、父が家を出て行きました。その後、母が仕事を始めて、帰日も遅くなるようになりました。家族なのに、一緒じゃない。そう思つた時も、やっぱりここにきて・・・」

「じゃあ、あのブックカバーが大事なのは、家族の思い出、だから？」

柏木は衝撃を受けたような顔をした。この話は唯にもしたことがない。言えばきつと心配する。だから和は、唯の一家に憧れたのだろう。未だに愛のある夫婦と、その愛を一身に受けて育つた唯にも「そうなんです。もう戻らないものだから」

「でも、今言うのもあれだけど、ここまで話してくれて本当によかつたのか？」

「昨日、私を優等生つばい、つて言つてくれましたよ。でも違うんです。勉強をするのも、いい子でいるのも、全部、両親に迷惑をかけさせたくなかつたから。あの人たちにこれ以上・・・」

話終えた時には、もう一番星が輝いていた。

公園の出入り口で、和はもう一度、ブックカバーのお礼を言った。なんだか晴れ晴れとした、夏の晴天のような気持ちだった。

「和ちゃん、今日は有難う。あ、あのさ・・・」

軽いイメージの柏木は、しかしやや恥ずかしそうにしていたが

「なんかあつたら、いつでも連絡してくれていいから。和ちゃんがなんでしつかりしているのか分かったから。誰にも言えなかったんでしょ、さっきの話。和ちゃんの悩みっていうか、困ったことを受け止める人になるよ」

「なに、くさいこと言ってるんですか」

和は、柏木の言葉ですうつと心がさらに軽くなるのを感じた。誰にも言えなかったこと、周りを気にして言えなかったこと、それを受け止めてくれると言ってくれた柏木が、なんだか頼もしく、見えた。

「でも本気だよ。話してくれた責任は、とる」

軽いのは見た目だけだった。まっすぐ自分の目を見て言いきる柏木に、和は、心がどくん、と高鳴るのを感じた。

それから、数週間が経った。

和は頻繁にはないが、柏木と連絡を取り続けていたし、何回か会った。柏木の声を聞くたび、姿を見るたびに、心臓の鼓動が止まらない。

和は、自分が柏木に恋をしている、と理解した。

あの人の前だと、自分は自分に素直になれるからだった。

それからというもの、和は生活に彩りが増えていく一方だった。

彼に電話をする時、彼と喫茶店で話している時はもちろん、普段から、彼のことばかり考えてしまうのだった。

だから、柏木が本を借りたい、と言い出した時は、小躍りしそうになった。

「本、ですか？」

電話で良かったと、和は思った。でなければ、どれほど自分が嬉しそうな顔をしたかばれただろう。

「うん。最近読んでなくてさ。かといって俺の周りに本に詳しい人間あんまないし。それで、和ちゃんに借りようと思ったわけ」

「分かりました。じゃあ、私が一番好きな本、お貸しします」

「ほんと？えーと・・・」

こんな自分を見たら、唯も遷もびっくりするだろう。こんなときめいている自分を。

「そ、それじゃあ、今晚って、大丈夫ですか？」

「うん。でもおどいたな、和ちゃんがこんなアグレッシブになるなんて」

「そ、それは違います。わたしなら早い方がいいって思っただけです」

「わかった。じゃあ8時に和ちゃんの家に行くよ。ついたら連絡する」

必ず柏木は、会つと自分を家まで送ってくれたので場所はよくわかってる。

「待ってます」

以前の自分では想像できないほどの嬉しさを込めた返事をする、和は電話を切った。

うきうきしてしまう。柏木と会って話すのは、なにも悩みだけではない。お互いのこと、音楽のこと、テレビのこと、なんでも話し合った。

話す度に、和は柏木のことを信頼し、そして、好きの感情が高まっていった。

この本にしよう、と和はブックカバーをこれ以上ないほどの幸せを感じながら外し、柏木に渡す本に取り付けた。

はやる心は、和を勉強に集中させなかった。なにせ、和が恋をするなど中学校二年ぶりだったからだ。

あの時好きになったのは、中学校で最も人気のあるサッカー部のキャプテンだった。明るくて、さわやかで、それでいて、騒がしくない。柏木とは間逆といってもよかった。

でも、そのキャプテンは同い年の、これまた可愛い先輩と付き合い
た。二人の仲の良さを見るたびに、和は自分に勝ち目がないと分
かった。なにせ、そのキャプテンとはほとんど話をしたことがな
ったのだから。

それが、今は違う。あの時よりもずっと、好きだ、と思うのは、
相手のことを考えてしまうのは、中学校の比ではない。憧れよりも
もっと強い、恋だった。

頬杖をつきながら、柏木に渡す本の表紙を、ゆっくりとなでる。

とその時、和の家の前で車が止まる音がした。柏木が来るには、
まだ一時間以上も早い。

そう思っていると、和の部屋のドアがノックされた。

「和、大切な話があるの。リビングに来て頂戴」

はつきりと、母はそう言った。

「お父さん……」

リビングのテーブルには、間隔を開けて座る父と母がいた。二人
の表情は固い。そして、一回も視線をかわすことがない。

「和、伝えなきゃいけないことがある」

和がテーブルの向い側に座ってしばらくすると、父が口を開いた。

「今日で、お父さんとお母さんは、離婚することにした」

リコン……。離婚……。リコン……。なに、それ……。そ
んなの……。

和の視界が、ぼやけていく。その理由を話す父と母の言葉が、和
の耳に届かない。

うそ。うそ。うそよ。そんなの、あるはずがない。離婚なんて、
そんなの。

「だから和、もう、こうして三人でいることはないんだ。和はこれ
まで通り、お母さんとここに住んでくれて構わない。和の生活に、
なにも支障は出ないよ」

和の手に、滑らかなブックカバーの感触があった。と同時に、和の中で、小さいころの記憶が、思い出が、大きな音を立てて、崩れていく。

「和、あなたに心配はさせないわ。でも、こんな形になって、ごめんさい」

和の感情が、爆発した。

「ごめんって・・・謝るなら、分かんないですよ！こんなことしないでよ！どうして家族じゃなくなるの？なんでこうなるの？なんでこんな結果になっちゃったの？」

「それは、今も説明した通り・・・」

「もういいから。話さなくてくれて、いいから！ずっと、ずっと、私は、お父さんとお母さんに、迷惑かけたくなかった。だから、いい子でいようって決めた。勉強した。みんなの見本になるようにした。それが全部、二人の喧嘩を見なくなかったからって、わからなかったの?!」

「和。落ち着きなさい」

父が腕をつかもうとしたが、その手を和は振り払った。

「もういい、もう私をほつといて！私はもう、あんた達なんか知らない！どうなってもいい！」

和は立ち上がると、止めようとする両親から逃げ、力任せに玄関を開けて、家を飛び出した。

あの時と、同じだ。喧嘩を止められなかった時と同じように、和は今、絶望に打ちひしがれていた。そして、ひたすらに泣いた。

何が何だかわからなくなった。服は汚れ、草まみれになっていた。それも、どうでもよかった。

父と別居してからというものの、母は仕事に熱中しだすようになった。それだけじゃない。明らかに父とは違う男の人と、甘い会話をしているのを目撃したこともあった。

だから、覚悟はしていたつもりだった。でも、本当に合ったわけではなかったのだ。心のどこかで、期待していたのだ。また、あのブックマークをくれた時のような、幸せが来ると。

涙が止まらなかった。あの時は、もうこないのだ。

柏木さんに……。和は泣きじゃくりながら、柏木の顔が見たくてたまらなくなった。ポケットをまさぐる。しかし、勢いで家を飛び出してしまったために、ケータイは部屋に置きっぱなしだったことを思い出した。

なんで、一番話を聞いてほしときに、聞けないのか。肝心な時に、なんで自分は一人になるのだろう。

「柏木さん……。会いたい……。会いたいよ……」

これから会うはずだった。でも自分は家にいない。腕時計をしていないから、約束の時間を過ぎたのかもわからない。

その時だった。

「和！和！」

「え……。柏木、さ……」

さっそうと、ではなかった。柏木は大木の下でうずくまる和を見つけて走ったが、根っこに足を取られて頭から前につんのめった。それでもすぐに起き上がると、持てるすべての力で駆け寄った。

「私、家に、いなかったのに……」

「約束の時間よりも前に家着いたんだけど、車止まってるし、家から喧嘩する声が聞こえてくるし。電話してもつながらない。ひよつとしたら……。と思つてたら、気がついたら、ここにきてた」

和を立ち上げらせながら、柏木がここまでたどり着けた理由を言った。

「なにか、あつたんだね」

ここまでできて、なにもわからないはずはなかった。和は、まだ泣きながら両親が離婚することになった事実を伝えた。

「そっか……。たぶん、これまで我慢してきたものが、一気に爆発しちゃったんだね」

柏木がくしゃくしゃっ、と和の頭をなでた。

「や、止めてください、こんな時に……」

「ありがとう、話してくれて。すごいっらかったと思う。和……ちゃんが大丈夫って思える時まで、そばにいる」

これ以上ないほどやさしく、包み込まれる感覚。もっとも、言った本人の顔は暗がりでもわかるほど赤かったが。

こんなときなのに、そんな柏木をみて、和噴き出した。

「わ、わるかったな。くさいのは、自分でもわかってる」

「違いますよ。顔赤くなくて言ったら、かつこよかったのに」

「そんなこと、俺には無理だよ。だって、こんなこと言ったことって、ないんだし……って、話が違う！」

「大丈夫です、優季さん」

和は、涙でぐしょぐしょになった顔をぬぐい、メガネをかけ直した。自然と、好きな人の呼び方が変わっていた。

「もう悲しくなんか、ありません。家に帰れます」

「そうか……。よかった」

柏木は心からほっとした、とわかるくらい穏やかな表情だった。

「で、でも」

和は、柏木に手を差し出した。

「やっぱり、一人だと心細いから……。一緒に、帰ってくださいませんか？」

もちろん、と柏木は差し出された手を握ったが、笑いだした。

「ははは、和もクサイじゃん。小説の読みすぎじゃないの？」

「違います！こ、これは本心で……。それより今、和って……」

「ご、ごめん、呼び捨てはまずかった！俺、女の子を呼び……」

アタフタする柏木の口元を、和は人差し指で押さえた。

「いいですよ、もう。それよりも、家に着くまでしつかり私をつなぎ止めてくださいね」

真っ暗になった夏の空の下を、二人はしつかりと手を握って歩く。和は、この人を好きになって、信じて良かったと思った。唯の輝く

家族にも負けたくない。あのブックカバーから止まっていた時間が、もう一度動き始めた。

和は、父と母に謝罪した。離婚を止めることはできなかった。でも、それを受け入れることはできた。小さいころにできなかったことが、今和にはできた。

どろどろになった服を替えて、渡すはずだった本を持ってもう一度和は家を出て、結果を待っていた柏木のもとに向かった。

「和、ほんとに俺が行かなくてもよかつたのか？」

親との話は自分一人で、と言った和の言葉を柏木は受け入れたが、それでも不安だったらしい。さっきまでの自分を見ていれば仕方がないだろう。

「はい。そ、それに、あうのは、もつと、私たちが大人で」

「大人？」

「い、いえ、なんでもないです！」

誤魔化すように和は、あのブックカバーのついた本を差し出した。

「和、いいの？これって大切な・・・」

和はゆっくりと首を振って、想いを伝えた。

「優季さんだから、つけたんです」

そして、夏休みに入り、八月へと月日は流れた。

母親との生活は相変わらずだったが、少なくとも真つ暗な家に帰っても心は痛まない。

理由は明白だった。

あれからというものの、和は柏木への好意を、隠せなくなっていた。夏期講習の時さえ、しっかりと授業は受けているのだが、鞆にはそれとは関係のない本がかなりある。小説はもちろん、柏木の好きなバンド雑誌、旅行のパンフレット、それに、柏木から誘われた納

涼祭のため、浴衣の着こなしが特集されていたファッション雑誌、
などなど。

だから、久々に合った漣が驚いたような表情をしているのも理由
が分かったし、鞆の中は絶対見せるわけにいかなかった。

漣と駅前で別れるとすぐに、ケータイ電話がなった。

「もしもし、優季さん？どうしたの？」

「和」

柏木の声から、緊張の色が伝わってくる。しかしその緊張の意味
を、和は知ることになった。

「夏期講習なのに、ありがとう、来てくれて」

「くるもなにも、ここ、私が紹介したんですよ」

家の近くにある公園。その中にある、和と、柏木だけしか知らな
い空間。和は、そこに呼ばれた。

「そうだったな……。あの、和……」

柏木の声は、震えていた。口がかくかくと空気をかむように動き、
まるでステージに初めて立ったマジシャンのように落ちつきがない。
数秒の後、大きく柏木は息を吸い込んだ。

「和、好きだ。お。俺と、付き合ってください！」

和は、答える間もなかった。好きだの言葉がでた瞬間に、涙が出
ていた。でも、これまでここで流してきた涙と、なにかもが違う。
「えっ！？和……。なんで泣いて……」

「悲しいからじゃないんですよ。優季さん……。不束な私でよけ
れば、よろしくお願いします」

「えーっと、つまり……」

柏木の返事から、あまりのことに頭が回っていないのだろう。和
は一步進んで、背伸びした。

「和……。い、今の……」

キスの味なんて、よくわからなかった。ただ、柏木の口と自分の

口が重なりあつた瞬間、ああ、自分はこの人しか見えていないのだと、この人を何があつても信じるのだと分かった。

「これが私の気持ちです。優季さん、私もあなたのこと、好きです……。最初は、タイプじゃないって思ってたんですけど……」

「最初はって……ひどくないか。それ？」

柏木の人生で、おそらくもつとも幸せな出来事だったのだろう。

言葉とは裏腹に、その顔は笑みがこぼれてしまいそうだった。

「でも、今は違います。優季さんの傍は……」

和は、柏木の手を取った。

「一番、私が私で、いられる場所ですから」

外伝〜私が私で、いられる場所〜（後書き）

え〜と、前話からだいぶ経っているのに、外伝など勝手なお話を載せてすいません！

しかし、どこかで語るべき話だと思っておりました。

和の設定に驚かれたかたも多いかと思えます。

実際、自分も思いついた時戸惑いました。

和と柏木をくつつけたのは、最初から決まっていたましたが、それは物語の役割と、意外性をねらっただけでした。

それが、考えていく度に重い話になり、どうして、という疑問に答えがでたと思えます。

漣とタクとの話とは趣が違いますが、和のキャラを自分なりに掘り下げていったらこうなりました。

和に限らず、けいおん！のキャラはまず家庭の話が出てこないのいろいろともうそ・・・いや、想像が膨らんでしまっんです。

和のような優等生って、根っからのタイプと環境によるタイプに分かれる気がするんですね。

和の家庭内不和の根拠は、ありません。しかし、唯と仲良くしているのは、ただ単にほっとけない以上のなにかがあるのではないか、優等生なのは、言えない秘密があるのではないだろうか。

そう思いながら書いていきましたが、正直心痛むことが多かったんです。和、こんなことになってごめん！と。でも、柏木と付き合えたのは良かったと思います。

話がまとまらないのでこの辺で失礼いたします。

本編の続きはできるだけ早くあげます！

これからもよろしく願います！

バイ・マイ・サイド

「澪、デートはどうだったの？」

月曜日、澪が登校すると、真つ先に和が話しかけてきた。相談したからだろう、心配していたに違いなかった。

澪は一瞬、どう感想を言おうか、迷った。唯からある程度話が伝わっている可能性も否定できない。けれど、澪から持ちかけた話ただだけに、きちんと報告する義務があった。

「うん、すつごく楽しかった」

たった一言なのに、澪は息を吸い、勢いをつけなくてはならなかった。何度も思うが、感想を言うだけでなんで緊張しなければならぬのだろうか。それも、和相手に。

「そう。よかったじゃない、で、私のアドバイスは試したの？」

悪戯っぽくニヤつく和の言葉に、澪は木の下で抱きしめられた事を、また思い出していた。家で何度も何度も、夢の中にさえ出てきたシーンなのに澪の心は激しく踊りだす。

「う、うん」

「なに作ったの？」

「サンドイッチ、卵焼き、から揚げと、サラダに果物・・・」

澪がいうと、和がくすくすと笑った。澪のよく整った眉が上を向いた。

「和、なんで笑ってるの？」

「いや、私が初めて優季さんに作ったものほとんど同じだったから。やっぱり考えることって同じなのね、みんな」

和がデート前に澪へ授けたアドバイスは、『弁当を作ってみたらどう？』だった。はじめ澪は驚いた顔をしたが、やっぱりそういうものか、と納得した。そもそも、デートでなにをすればいいのかわからない澪にとってこういう具体的なアドバイスは非常に助かった。「え、そうだったのか？」

恥ずかしそうに、しかしにこやかに笑う和を見てみると、澪まで幸せに思えてくるから不思議だった。なんの不安もなく、ただひたすら相手を想う和。それは、付き合ってからまだ日が経っていないからなのか、それとも本当に仲がいいからなのか。

澪は、和の絶望を知らない。澪が知る和は、和という人間のほんの一部であること。和が彼氏と仲がいいのは、ただ単に好きだからではない、もっと深い信頼があることを。

未だ澪は、自分が顧問に対して抱いている感情がどういうものなのか結論を出していない。いや、遅らせていたというべきだろう。考えるたびに、澪の思考は支離滅裂になり、結局これは、巧斗だからという考えに至る。のだが、なぜ巧斗なのか、と突っ込んだ考えをするのが、どうしてもできない。

澪は和と話を続けながら、和がうらやましくなった。その、相手を想う感情をはっきり示せることに。

一方そのころ、軽音部唯一の一年生である中野梓は眠たそうに机に突っ伏した。するとそこに、もっとも仲の良い二人が近寄る。

「あ〜ず〜さっ！」

髪をサイドでまとめた天然パーマぎみの鈴木純が、梓に抱きついた。飛びついた瞬間、不覚にも梓は猫っぽいや反応をしてしまった。

「ちょっと、純！なに唯先輩みたいなことしてるのよ！」

「え、そうなの？憂、あんたのお姉ちゃんって」

「うん。おねえちゃん、あったかくて気持ちいいよね〜」

「憂、それは・・・」

すっかり目がさえてしまった梓は相変わらずな憂に呆れた表情を隠すこともなくつぶやいた。どうも憂は、唯がらみになると普段のしっかりした性格が崩壊するらしい。

「それよりも梓、どうして眠たそうだったの？」

またギター練習で寝不足？という純に梓は首を振った。

「はじめはMTR使ってアレンジの勉強してただけど、寝よつてベッド入ったらいろいろと考えちゃってさ」

「MTR？相変わらずすごいわね、梓。これでもうちよつと部屋が女の子っぽかったらモテるのに・・・」

大げさに肩をすくめる純だったが、憂は

「どうしたの？悩みがあるの？」

「えっと・・・」

迂闊だった、と梓は反省した。これなら、一日中エフェクターと戦っていたと答えた方がよかった。溇のデートのことは、話すわけにはいかなかった。なにせ、これが教師の耳に入れば、溇はもちろん、軽音部の存続に・・・。

「梓ちゃん、溇先輩のデートのこと？」

梓は思わず机に、ごん、と額を打ち付けた。純が驚いて声をあげそうだったのを、慌てて手でふさぐ。

「ちよつと梓、憂、それどういうこと？」

ただならぬ心配を梓の行動で察したのか、純は声をひそめて梓に詰め寄った。よくよく考えれば憂の姉はあの唯だ。あのデートのことを憂に話していないと考える方がおかしい。だが、純だけなにも知らない。梓は、む、と真剣に自分を見つめる純に何まで話していいのか迷った。純は同じベ이스リストとして、溇を尊敬していた。

「あのね、純、だれにも言わないって約束してくれる？」

純は梓の話を聞くうちにどんどん驚きが顔に広がった。話が終わると「梓、憂、今の話って嘘じゃないよね？」

と顔を近づけた。憂や梓は溇と近いためにわからなかったが、純によれば溇はファンクラブがあるほどの人気者で、その人気は三年から一年まで幅広いという。梓は頷いて、純の質問を肯定した。

「これは、桜ヶ丘始まって以来のニュースかも。たしかに広まるといろいろと大問題に発展しそう」

「そんな純ちゃん、大げさだよ」

純を落ち着かせようと小さく笑う憂だったが、梓は純の反応が正

しいのだと実感した。

はっと気がつくのと、俺はまた澪の事を考えていた。

首を振ってなんとか色ぼけた想いを振り払い、ギターを構えた。

自分の部屋の天井を睨みつける。今バンドが大きく変わらなければならぬ時期なのに、ぼーっとしている時間はない。なはずなのにデートの時のことが、頭から離れない。触れた澪の、滑らかでさらさらとした髪、ふわっと鼻孔をくすぐったにおい。抱きしめた時の、澪の身体の柔らかかさ……。ここまで思い出して、俺は鼻の奥が強烈に熱くなりそうになった。

さて、と俺は大きく深呼吸する。教え子をかわいいな、と思うのはぎりぎりセーフだとしても、欲情はイチローのストレート三球三振並にアウトだ。やってはいけない。

俺は、澪に対する気持ちを抑えつけてきた。なのに、次から次に起こった出来事は俺と澪がもっと近づいてしまうようなものばかりだ。いくら押さえようと俺が思っても、何かあるたびにその気持ちは揺らいでしまう。

それにしても、澪の歌が今、想像から脱却して、伝えるものになってきたのには驚いた。だけどその相手って、一体誰だ？この考えに取りつかれると、俺は今までの関わりで得た澪の情報を片っ端から整理し、じつちゃんの名にかける某高校生探偵並みに推理を働かせてしまう。

澪が男子とそれほど接点がないのは間違いない。いや、そうであってほしかった。学校は女子高だから、同級生という線もない。かといって、ナンパに引っかけられるタイプじゃない。デートの時にあれだけビビりまくっていただけに。

じゃあ、誰なんだ？中学校時代か、それとも、教師か？澪は何となく年上がタイプだと思うが……。

ここまで考えて、俺はある仮説を立てた。しかしそれは、あまり

にうぬぼれてやしないか、非常に不安になった。なんといつても、俺は漣の一部分しか知らない。たしかに初対面よりもいろいろ面白い面や、心ひかれる面を知ることができた。でも、それが漣のすべでじゃない。

それに、俺には顧問として、あの部活を文化祭まで預かる責任がある。漣のことばかり考えて、本分がおろそかになってしまっわけにはいかなかった。次の部活の時は、デートの時に思いついた、面白いことをしてみよう。

ギターを弾き続けながら、俺は漣の想い人が誰であったとしても、漣に会うのは間違いない楽しみなんだと分かっていた。

俺は、漣が好きなんだから。

九月ももう半ばを迎えると、桜ヶ丘高校は一気に騒がしくなる。

立て続けに起こるイベント関連の決めごと、今年のクラスでどんなことをするのか、体育祭はどれに出ようかなど、高校生の関心は勉強よりもそっちに向かってしまうからだった。行動が早いクラスや文化系の部活では、もう準備に取り掛かるところもある。

とはいえ、軽音部に至ってはとことんマイペースだった。今日もムギが煎れてくれたおいしい紅茶と洋菓子に舌鼓をしつつ、漣にデートの件で質問攻めをしていた。巧斗は、まだ到着していない。

「漣、それで、タクちゃんはどんな感じだった？」

律が身を乗り出して引つ込み思案の幼馴染に質問する。漣は、梓を除くメンバーの食いつき具合にほとほと困っていた。なにをどう言っても、いじられる気がする。

「どんなんて・・・いつもと変わらなかったよ、部活の、時と」
注意深く言葉を選んだつもりだったが、みんなは納得しなかったらしい。

「いつもと一緒かあ。てことはタクちゃん、意外とモテたりするのかな？」

あの唯が。そう思うと、漣は落ち着かなくなった。自分と同じ感覚を巧斗に持っているのが、自分だけじゃないとしたら？

「そ、それはないぞ」

漣が確信をもって言い切るので、メンバーは驚いた顔をした。

「巧斗さん、デ、デートしたことないって、言ってたし・・・」

漣が言ったとたん、軽音部室内が動物園のような奇声でいっぱいになり、ちょうど前を通り過ぎた生徒がビックリしてプリントを廊下にぶちまけてしまった。

「やったね、漣ちゃん。先生の初デートの相手なんて」

自分のことのように、ムギはいつもよりも笑顔を振りまいて祝いの言葉をかける。そういえば、ムギの言う通りだった。漣は自分の顔がゆるんでしまうのを何とか押さえながら反論した。

「そんなんじゃないぞ。だって、あれは歌詞ができないから・・・」

「でも、それとデートがうまく結び付かないんですけど」

梓がもつとも核心を突いた意見を述べたので、漣は何も言えなくなった。歌詞のイメージがわからないから、デートをする。巧斗にそう言ったが、今思えば説得力も論理性もない。巧斗はなにも言わなかったが、不思議に思ったことは確かだろう。

「で、でも、歌詞はできたからいいじゃないか！ほら」

漣は鞆からクリアファイルにしまっておいた、歌詞をプリントアウトした紙を取り出した。巧斗のデート中に弾け飛んだ歌詞をまとめて、整理したものだっただけ。

「ほんとにできたんですね・・・すごいです・・・」

梓は唯のギター練習の時とほとんど同じ反応、つまりでたらめだけど出来てしまうことに呆れていた。一方律が逃げたな、とはつきりと漣に分かる大ききさでつぶやいたので、漣は律の腕をつねった。

「いてててて！漣、ごめん、あたしにも歌詞を見せて！」

「人をおちよくるんじゃない」

みんなで漣が作ったばかりの歌詞を読んでいると、部室の部屋が勢いよく開いた。

「みんな、遅くなつてごめん！……つて、練習やつてないじゃん」
巧斗だった。漣は誰よりも先に声の方へ顔を向けた。恥ずかしいのに、デートの時にあれだけ心臓がどくどくしたのに、もうこの反応は本能としか呼べなかつた。

「タクちゃん、漣ちゃんの歌詞やつとできたんだよ！」

唯がピョンピョン跳ねながらそのことを伝えると

「え、漣それ本当か？俺にも読まして」

とやけに大きいパソコンケースをソファに置くと、いつもの窓際にある誕生日席で漣の歌詞を覗き込んだ。

「五月雨20ラブ……。これにムギのメロディだと、ちょっとおもしろいな。これまでよりおしゃれな曲になりそう」

「先生、もうアレンジ思いついたんですか？」

梓が巧斗の言葉に目を丸くして声をあげたが、巧斗は苦笑して

「いや、そうでもないよ。ムギのメロディ聞いた時からいくつかイメージがあつて、そのひとつを合わせただけだよ」

「いやでも、マジでタクちゃんすげえと思うぞ。あたし、漣の歌詞ができるまで手つけてなかつたもん」

「律、それは投げすぎじゃないのか？」

巧斗は相変わらずやる気があるのかないのかつかめない部長に呆れた視線を投げかけた。

「この歌詞、本当にデートの時に思いついたの？」

唯が歌詞をしげしげと見つめながら漣に質問した。

「う、うん。最後の方に、いきなりイメージが浮かんできて、それをまとめたただけなんだけど……。どうかな？」

「俺はいいと思うぞ、この歌詞。今までの歌詞とはちょっと違うというか、切ない感じが出てて。よく頑張ったな、漣」

真っ先に感想を述べた巧斗は、隣で同じく歌詞を見つめていた漣の頭をポンポン、と軽く叩いた。しかしすぐに

「あ、ご、ごめん、へんなことしたな……」

「い、いえ、大丈夫ですから……」

とお互いにもじもじし始めたので、メンバーが息をのんだことに気付かなかった。

「おいおい、いちやいちゃするならほかのところでやってくれよ」

律がこれまでにないニヤつきを見せながら言っただけで、二人の顔は現実に戻った。

「そ、それじゃ練習に入るか。歌詞もできたし、今日はアレンジにするか？」

「でも先生、持ってきたあのパソコンケースは何なんですか？」

ムギがソファを指さすと、全員がそれに注目した。巧斗はパソコンケースを持ってくると、机にその中身を出した。長方形の機械だが、いたるところつまみがある。

「これ、MTRじゃないですか」

梓がまず反応したが、ほかのメンバーはなにがなんだかわからないようだった。

「これ、俺が使ってるやつなんだけど、簡単にいうと曲を作る機械かな」

「ひょっとして、楽器屋で言ってたものですか？」

漣の言葉に巧斗は頷いたが、

「曲を作るって、この機械が考えてくれるの？」

と唯がドラえもんのみみつ道具のごとき印象を述べたので、巧斗は嘖み碎いて説明を始めた。

「バンドってパートがあるだろ、唯ならギター、漣ならベースっていう具合に。それぞれのパートを別々にとって、この機械で一つにまとめる。まとめたら、その曲にエフェクトをかけたり、ヘッドホンの左右どっちから聴かせるようにするのか調節したり。いろんなことができるんだよ」

「それはわかったけど、それでなにをするつもりなんだ？」

律がMTRを見つめ、つまみをいじくりながら巧斗に聞いた。

「一回これで、みんなの演奏を録音してみようと思って。でも今日は漣の歌詞ができたから次回でもいいかな」

どっちかに決めて、と巧斗が促したので、メンバーは会議に入った。結局、巧斗がわざわざ持ってきてくれたのだから、とMTRを使うことに落ちついた。

MTRにする、と律がいったので、俺はMTRをセッティングした。といっても、コンセントに差し込んでスイッチを入れただけだが。

「で、どうするのさ？」

「それじゃやり方を説明するね。このMTRで、みんなの演奏を録ります。唯、ギター貸して」

俺は唯のギターを手に取り、シールドをアンプではなくMTRそのものに差し込んだ。

「ドラム以外はこうして録音する。中でクリックがなるようにするから、それに合わせて演奏すれば終わり」

「結構簡単なんですね」

たしかに言うだけならムギの言う通りだ。でもこれが五人連続で、しかもひとつにしなければならぬとなると、そうはいかない。

「ただし、こういうのはたいていリズム隊から録るんだけど・・・。一曲だけでだいぶ時間がかかるから、なにを録りたいか決めて、律から行こう」

「でも、ドラムだけやり方違うってタクちゃん言ったよな？」

シールドのないドラムをどう録音するのか、両方を見比べながら律はもつともなことを言った。

「この場合は、インプットにマイクをつないでそれで録るんだ。俺の場合は打ち込みで室井が渡してくるけど、さすがに律がかわいそうだしな、それだと」

録音する曲はふわふわ時間にきまり、俺は律に説明した通りにマイクをセットした。マイクスタンド二本で録音するが、それを見た律は

「おお、なんかそれっぽいぞ！」

と興奮したので俺はたしなめた。このままだとドラムだけで時間がかかりそうだ。

「それっぽいってなんなんだよ、いいからヘッドホンつけるよ。テンポは・・・150くらいか」

律は装着したヘッドホンから出てきたであろうクリック音を聞いてびっくりした。俺は

「拍の頭に、メトロノームと同じチンっていう音がするだろ。俺が合図して三小節目になったら入ってくれ」

おそらく、梓以外初体験なのだろう。みんな興味津々で俺の手元を見つめていた。

俺はクリックを流し始め、手をあげると同時に録音の赤いボタンを押した。

律が身体でカウントをとり、ふわふわ時間の演奏を始めた。しかし、緊張しているのかクリックに集中しているのか、いつもよりドラムがぎこちない。

Aメロ、Bメロは危なっかしい演奏だったが何とか律は乗り切った。しかし、サビに入ると、急にテンポが崩れ出した。

「ストップ、ストップだ律！」

俺は声を荒げ、大きく手をクロスさせて演奏を停止させた。律はヘッドホンを外し、

「ちよつとタクちゃん、今ちよつど乗ってきたトコだったのに！」

スティックをスネアに叩きつけて抗議した。

「乗ってきたじゃねーだろ！リズム狂ったらほかのパートが合わせられねーだろうが！」

ドラムを真つ先にMTRで録音したのは、ドラムの演奏を確定させなければほかのパートが取れないからだ。バンドを天守閣に例えるなら、ドラム、ベースは石垣、ギターは壁、ボーカルはシャチホコだ。つまり、土台がしっかりしなければ演奏はできないのだ。「じゃあ、サビから録り直すから、準備してくれ」

「タクちゃん、そんなことできるの？」

ソファに座って事成り行きを見守っていた唯が、久しぶりにまともな質問をした。すると梓が

「できますよ。MTRとかこういう機材って、いいとこだけをつなぎ合わせられるんですよ。どの音楽でもこうやって録音してます。

一発録りのアルバムはなかなか聞かないですね」

「あずにゃん、詳しいね。さっすが！」

といつつ唯が梓に飛びつくのを横目でみながら

「まあそんなとこだ。さてと、律、行くぞ！」

梓がMTR、すなわちマルチトラックレコーダーに詳しいとは驚きだったな。梓はツインテールにした髪形がとても似合っていて、そこが魅力の一つでもあるのだが、部屋はどうなっているのだろうか？そう言えば、梓の持ち物で女の子っぽいのがあんまり見たことがない。

律の演奏を聞きながら俺はMTRのつまみを調節していったが、となりに座っている漣の二の腕が時々触れているのが非常に、気になった。

制服越しでもわかるその柔らかさに俺は顔が熱くなりそうだった。そういえば二の腕の柔らかさって、胸の柔らかさとほぼ同じって聞いたことがある。ということは……。

いや、何考えてるんだ俺は！これは明らかに中学生レベルのネタじゃないか。

律の演奏をやめては録音し、調整しては録音してを繰り返しながら、俺は律の顔がだんだん苦行をする古代インドの僧侶のように歪んでいくのに気がついた。やっぱり律のようなタイプのドラマーには苦しいだろう。でもこれから成長するんだったら、これくらいできないと困る。変拍子がめっちゃめっちゃにあるインストを叩いているバンドではないのだから。

それでもだいぶ時間かかって、俺は律の録音を終えた。まだまだ注文するところはたくさんあったが、今回はMTRを体験すること

が目的だった。そう時間をとるわけにはいかない。

「ぜー、ぜー、あー疲れた〜。ムギ、お茶〜」

慣れないことをしたせいかな、律はふらふらになって席に着くと、突っ伏した。

「タクちゃん、いろいろ注文付けてきやがって……。なんてことさせるんだよ」

「これぐらいこなしてくれないと困るぞ。俺のバンドのドラマーは一回でも合わせてくるけどな」

俺もムギの煎れてくれた紅茶を飲みながら律に言った。

「タクちゃんのバンドと一緒にするなよ……」

「文化祭もあるんだし、もうちょっと気を引き締めておかないとな」文化祭、のワードが出た瞬間、みんなの動きが固まった。本来なら、ここでやる気がでて当然なのに……。

「そっか、タクちゃん、文化祭までだったよね……」

唯はカップを持ってしゅんとうなだれた。唯の言うとおりだった。俺が顧問としていられる時間には制限があった。

「なにしみつたれた空気になってんだ、文化祭で良い演奏するための練習なんだから、これは。ほら、次はベースの漣、行くぞ」

固くなった空気を打破しようと、俺はいつもより声を張り上げた。「そ、そうですよね。行きましよう」

漣の眼には光るものがあつたが、俺はそれを無視することしかできなかつた。

漣がベースのシールドをMTRに差し込むのを確認すると、俺は調整したばかりのドラムパートを流した。

「よし、ちょうどカウントが四つの時にイントロに入れるぞ。漣、大丈夫か？」

漣が頷くのを見届けると、俺は録音を始めた。

漣の演奏は、やっぱりよかった。これには俺の好きという気持ちが入っているのかもしれないがやっぱり安定しているし、弦の押さえ方、指使いは的確で、録音という初めての経験でもしっかり演奏

出来ていた。

見とれてしまう。漣の演奏している姿は、音楽に集中している姿はやはり美しかった。ただの恥ずかしがり屋から実力のあるミュージシャンに、漣は変わっていた。どっちも漣の一面で、欠けていてはならない。ただ単に、漣の見た目がハイスペックでよく男子から声をかけられるほどのものだからではないだろう。なにかのことに打ち込む姿にだけ発せられる美しさだった。

漣の録音は律に比べて格段にやりやすく、時間も早かった。

「よし、ベースはこれでいいか。と次は・・・」

そう言っつて梓の録音をしようと思っつたら、部活の終了を告げるチャイムが鳴った。

「あ、もう時間か・・・。残りのパートは明日に回すか。唯、しっかり練習してこいよ、特にギター」

「わ、私だけ名指し？」

大げさに頭を抱える唯だったが、俺は正直に言った。

「当たり前だろ。この中で一番不安なの唯なんだから。ほら、片付けに入るぞ」

ぶーぶー言いながら唯はギターをしまっつ。俺はみんなが帰る支度をするのを待つと、一緒に部室を出た。

「今日はきつかったなーいつもより。腕がぱんぱん」

階段を先に降りる律に、俺は

「あの、それは俺に対する嫌味かよ？」

「だつてさー、漣の時より明らかに注文が多かつたじゃん！」

「漣の方が安定してるんだからしょうがないだろ、それは」

「なんだか見透かされたような気がして、俺は律をまともに見ることができなかつた。」

「ほんとかなー。今日タクちゃん、漣とけっこうべつたりだつたんじゃないの？」

まずいことに、今俺の隣にも漣がいた。あまりに自然に並んだので気がつかなくつたが、律の言い方には言葉以上の意志を感じ取っ

た。

だが、反応したのは俺ではなく、漣だった。

「律、そんな言い方やめろよ。違うよな、みんな？」

漣は律を除くメンバーに同意を求めたが、誰も首を縦に振らなかった。

「なーんかさ、漣ちゃんとタクちゃんってぴったりだよ。最近わたしよく思うんだけど」

のほほんと唯が爆弾発言をしたので、俺は軽音部に来て一番あせっていた。余裕がなかった。

「変なこと言うんじゃないぞ、唯。色眼鏡で見ると全部そう見えてくるんだからさ。これからやめてくれよな」

「そうだぞ、巧斗さんが困るようなことはやめてくれ」

この漣の発言もやはりみんなにネタになってしまったらしく、校門に着くまでさんざんに俺は漣のことからかわれた。

次の日、なんとか時間内にすべてのパートを録り終わることができた。不安要素だった唯のギターも、家で相当練習していたのか予想よりも時間がかからなかった。もっとも、梓やムギに比べたら倍以上の時間がかかっていたのは言うまでもない。

パソコンを持ち込んでいたので、俺は簡単にマスタリングをする。とさつそくMTR製のふわふわ時間を流した。俺のパソコンのスピーカーは音がよくないが、部屋にあるカセットレコーダーよりは音質はいいだろう。

聞き終わると、みんな一斉に声をあげてハイタッチした。しかし、それも一瞬のことだった。

「あれ、なんかイメージと違う」

律の顔が曇る。みんなも同じだった。

「えつと、こんなに合っていないものなのなんですか？」

ムギの感想が一番的確だった。溜めるところで溜めれていないし、揃っていない箇所がいくつもある。多分初めて客観的に自分の音楽をみんな聞いたのだろう。

俺の感想自体は、はつきり言ってしまうは、このレベルではともライブで配布はできない。いい材料にはなるが、決して外に出せるレベルじゃない。どんなライブハウスにも送れない、このレベルじゃ。

「あー、もう！私たちはこんなもんじゃない！」

ふがいない演奏を聞いて、律が急に立ち上がった。

「タクちゃん、生で演奏するから、それとどっちがいいのか比べてよ！」

「へ？」

「そうですね、律先輩の言う通りです。私たちはこんな演奏よりもっといいの出来ます！」

珍しく梓が、このバンドを肯定した。MTRをよく知っているだけに、この中で一番ギャップを感じているに違いなかった。

「うん、やろっ！」

唯も拳を掲げる。

「そうだな。私たちは、こんなものじゃない」

漣がゆっくりと頷いて、席を立つ。こんなに演奏でみんなの意見が一致したことはない。

俺はその気迫にやや押されながらも嬉しくなった。いい経験はできたし、モチベーションも上がったようだ。

「ワンツースリーフォー！」

ふわふわ時間が、今までで一番揃ったイントロで始まる。

確かに、MTRよりもいい演奏だ。何より、集中度が違う。本来なら、たとえ機械があってもしつかり演奏するのがうまいバンドだ。でもここは何かが違う。この五人じゃないと揃わない、五人が実際に並んで初めて成立する曲、演奏。

MTRだけを聞いたなら、音楽を知る人間は酷評するだろう。でも生演奏を聞いていると、それはこのバンドのほんの一部しか切っつていないだということが分かる。

俺は今もアートワークスのオリジナリティを探している。でも、

これまでになかった一面が必ずあるはずだ。
こうして、みんなそれぞれ違う一面を持っているようだ。

バイ・マイ・サイド（後書き）

一ヶ月半ぶりの本編です。お読みいただき、ありがとうございます。今回は外伝の要素をちょこっと取り入れました。なんというか、和の幸せそうな笑顔って殺傷能力高いですね。想像しながら書いてて萌え死しそうになりましたwww

今回はデートの後、それぞれの変化と、さらなる成長のために機材を使うのですが、だんだんタクが自重しなくなってますね。

好きな子とあんなことやこんなことができてさぞかし妄想は膨らんでいることでしょうなー

ちくしょーうらやまっ！！

実際MTRを使った録音は二日間の部活だけで取れることは難しいのですが（経験上）、そこはタクの腕でカバー。バンドで一番触っているのもタクですし。

でもプロはプロデューサーがいて、意見を戦わせながらとるので結構時間はかかります。一発どりで有名なのは、やはりビートルズでしょう、とくに後期。彼らは自分たちが世界的に有名になるにつれて、音楽性を高めるためにあえて一発どりにこだわったと言います。

武道館のライブは直アンだった時代ですから、なかなか機材にも恵まれていなかったのもあるとは思いますが。本編ではこうしたトリビアはなかなか入れづらいのでここで書きました。

今回は、いよいよ近づいてくる文化祭ですが、タクの方で大きな動きがあります。そして、軽音部でも落とし穴にはまりそうに・・・。

次回もお読みくだされば幸いです。

加速度的に

きっかけは、居酒屋での他愛無いもない雑談からだった。

軽音部の顧問になって、予想外の出来事はいやというほど経験しているのに、慣れることはない。

タツヤさんはサテイスフアクションのライブ後何回か飲みに誘ってくれた。今回も郊外にあるタツヤさん行きつけの居酒屋で、俺と室井が参加していた。ほかにはタツヤさんと仲のいいバンドマンやミュージシャン。俺と室井以外はみんなプロだ。とはいってもみんなバイトをしながらバンド活動をしているし、多くのインディーズバンドは音楽だけで食っていけないわけではない。今いる居酒屋も、こつしたバンドマンを応援してくれてるらしく、料理の多さが半端ない。最初に頼んだ枝豆はどんぶり一杯だし、から揚げもテニスボールほどもある。ありがたいけど、採算とれてるのだろうか、この店は。

「ふーん。ってことは、今たつくんには片思い中の女子高生がいると」

顔を赤くし、女子高生の部分を強調しながらタツヤさんが口を開いた。室井が溲のことであつかり口を滑らせてしまい、俺は説明する羽目になった。さすがにすべて話すことはできなかったのと、ところどころ誤魔化すしかなかったがしかたない。あとで覚えておけよ、室井。

「ええ、そう、なんですけど・・・」

「恋かあ。いいなあ、甘酸っぱくて。大学の時は妥協してたからな、俺」

すでにジョッキ三杯目のタツヤさんが遠い目をした。酒が入っているのもあるだろうが、なんだか思うものを感じて、俺は黙ってしまった。

「妥協ってタツヤ、それはアカネちゃんに失礼だろ。それじゃたっ

くん、写メとかないの？」

いつのまにか俺のあだ名はたつくんで固定されていた。それは構わないのだけれど、個人的にケータイでコンプリートする猫舌な仮面ライダーを想像してしまう。

「ないですよ。そんな仲じやないし、タイミングも・・・」

実際はさわ姉の遺品ともいうべき（ただ遠くに行ってるだけ）画像やらライブ映像やらが家にあるのだが、ケータイに移すほど愚かではない。前のデートだってプリクラなんか撮ることはできなかった。

「へえ。たつくんの片思いかー」

この話題のあいだずっと、室井が笑いをこらえているのがちらちらと目に入って、胸がかき回される思いだった。片思い。たしかにそうだ。デートの事であれこれ言ってきたのも漣の真面目さがそうさせたのだろうし。

この日はほとんど他愛無い、世間話で終始し、いつもの飲み会と同じだった。

居酒屋を出て俺とタツヤさんだけになると、煙草をくゆらせながらタツヤさんが口を開いた。

「あの席で言うことじゃなかったんだけどさ、アートワークスに話がある」

ビールを水のごとくのに流し込んでいてふらふらなはずなのに、タツヤさんの声はいたって真面目だった。

「こんど俺ら、コンピ出すんだけど、アートワークスもそこに参加してくれないか？」

話の内容は理解できた。しかし感覚が追いつかない。俺らが、コンピに参加？

「コンピですか？なんで俺らが・・・」

Humanoïdとは、サティスアクションの対バン一回きりのつながりではない。こうした飲みとは別の話だ。それが、なんで？特に俺は今、自分の音楽を見失っているのに・・・。

いつものように部活へ足を運んだものの、俺は半ば上の空だった。こんな時期なのに、頭の切り替えがどうしてもできない。

「巧斗さん、どうでした？」

漣が一步前に出て、新曲の感想を求めてきた。まっすぐな瞳を向けられると、ときどきするのと同時に申し訳ない気持ちに駆られた。「あ、ああ。梓、ギターもうちよっとはじめてもいいぞ。ドラムはサビで躍動感が出た方がいいかも」

五月雨20ラブのアレンジはなかなか固まらなかった。そもそもだれがボーカルを務めるかでまずもめたし、ベースがメロディとリズムをけん引する曲なため、抑えめにするのか、それともぐりぐり押して行くのかも意見が分かれた。

このバンドは基本それぞれにアレンジは任せていたようだったが、今回はかりはまとまりが重要だと俺がアドバイスしたら、いつもよりお茶の時間が増えたらしい。

「跳ねる曲だからなー。ドラムは裏打ちを結構入れたんだけどまだ足りんの？」

律が唸ったあと感想を述べた。梓はムスタングをいじくっていて答えが返ってこなかった。

「独特のハネを表現するのは、なにも裏打ちだけじゃない。スネア以外にもあるんだし」

「そうだなー。もう一回考え直してみるか」

今日は新曲と文化祭の練習だったため、五月雨20ラブをここでいったん打ち切ることにした。この曲はなぜか漣が歌うべきだ、とメンバーが主張したために漣がボーカルになっていたが、その歌い方、表情は俺がここに来た当初よりも明るくなっていることに気がついた。漣が歌う時に思い描く男子……。気になって仕方がない。まっすぐな歌い方で声もよく通り、張りもある。たしかに上手い。

だが、俺は漣の歌に何かが足りない気がしていた。これは、片思

い中の男子の妄想、いや気がかりとは別にある、バンドマンとしての感想だった。どこがどうと言われると具体的にうまく説明できないし、普通に聞くレベルなら何も問題はない。なのに、漣の歌には、何かが足りない。

上手く言えるわけでもなく、さわ姉のように音楽をがっつり勉強したわけでもないから漣のボーカルには口をはさむことはなかった。「ねータクちゃん、文化祭の練習する前にお茶しよー」

唯はそう言うか早いか、ギターを置くと席についていた。今日はアレンジもそれなりにまとまってきたから休憩してもいいかな。

俺がオツケーすると、ものの数分で高級感漂うケーキが運ばれてきた。季節からモンブランやフルーツたっぷりのタルトなど。どれを選んでも外れがないだろう。

五人はケーキに称賛を贈りながら食べていたが、その内容が俺の耳には入ってこなかった。アートワークス内がコンピへの参加をめぐって、真つ二つに分かれていたからだだった。

俺と青島は参加しないといい、柏木と室井は参加すべきだと譲らなかつた。

俺が反対した理由は、今バンドの個性をはっきりさせようと目下あがいている最中でコンピに出るのはおかしいと思つたからだ。演奏もまだまだ。

一方、柏木たちはこんな状況だからこそ意見を聞いてアートワークスを見直すべきだ、しかもこんな機会を大切にすべきじゃないのかと主張した。

「ありがたいのはわかつてるけどさ・・・」
フォークに刺した栗を見つめながら、俺は不覚にもつぶやいてしまった。

「巧斗さん、何がですか？」

左隣に座る漣が、顔を寄せて、それでいてちょっと頬を染めながら質問してきた。その表情は雪原に牡丹が舞い落ちたように美しく、俺は視線をそらした。最近、なんだか漣と感覚じゃなくて距離的に

近いことが多い気がするが、それが何を意味するのか未だにわからなかった。ひよっと思つて思ふことはあつても、あの漣がまさか、という思いが頭をよぎつて勘違いだと考えることにしていた。なんといつても、漣は恥ずかしがり屋だ。

「いや、なんでもないよ」

コンピの件は基本的にバンドの話だし、自分たちで解決すべき問題だった。だから、前漣に言われたとはいえ、話したくはなかった。漣のことだからきつと心配する。ただでさえ文化祭という彼女にとって大きな試練が待っているというのにこれ以上負担をかけさせたくない。

案の定漣の顔に寂しさが走つたが、俺は気にしない風を装つて話題を変えた。

「そう言えば、去年の文化祭つてどんな感じだつたんだ？」

「あそれ、私も聴きたいです！」

梓が身を乗り出した。すると漣の身体がびくんと反応した。

「去年か。去年と言つたらやつぱり・・・」

律が思わせぶりな口調と意地の悪い笑顔を浮かべ、唯とムギが

「あゝ、あれね！」

とにこにこし始めたので俺と梓はわけがわからなくなった。漣が泣きそうになっているのを見ると漣絡みであることはわかつてもし、イメージができなかった。

「先輩、なにがあつたんですか？」

「そうだね。さわちゃんからDVD預かつてるから見てみよつか！」

と唯がどこからともなく真っ白なDVDをとりだしたのを見て、漣が脱兎のごとく席から飛び出して奪還にかかった。

「唯お願い、やめて！」

しかし、漣決死の行動は律によって阻止され、唯はまだ笑いながらDVDをセットした。

映像はライブの途中から始まつた。これなら、俺は顧問になる前、

さわ姉からもらったDVDで見たことがある。しかしそれには、漣がここまで取り乱すようなものはなかったはず。みんなの口ぶりからは相当なものだと予想が起きるが、一体なにが……。

体育館の天井が割れんばかりの拍手が起き、ライブは終了した。みんな慣れない状況でのライブとあってかいつも以上に疲れた顔をしているけ……。

「た、巧斗さん、見ちゃダメ！」

「え、えええっ！」

瞬間的に俺の視界が黒く染まった。この柔らかい感覚、額に感じる皮膚の固さ。そして声からすると、漣が手で俺の眼をふさいだらしい。おまけに、左耳には漣の上気した呼吸がはっきりと聞こえてくる。

どんな映像なのかとつても気になったが、それ以上にこの状況が理解できなかつた。漣の手が俺の顔に……。近い、めっちゃめっちゃ近い！デートの時よりもずっと恥ずかしいじゃないか、この状況！一瞬の静寂の後、俺の耳は漣の叫びをとらえていた。合宿で耳にした物よりもずっと切羽詰まって、悲壮感たつぷりの叫びだった。

音が終わり、俺の視界が急に明るくなった。目の前にあったブラウン管はただの黒いモニターに戻っていた。しかし梓を見ると、今にも鼻血が出そうなのか、鼻を手で覆っていた。梓がここまでなってしまう物ってなんだったんだ？

「おい漣、なんで見せてくれなかつたんだよ！」

「そ、それは……」

漣が口ごもり、視線を床に向けてもじもじし始めた。あれ、こういう漣もかわいいなあ……。って違うだろうか。

「ふーむ。タクちゃんも普通の男子ってことか。ようしムギ、もう一度だ！」

「律？それに、巧斗さんも。見ないですよね？」

顔をあげた漣からは、なんとというか、どす黒いオーラが立ち上っていた。今の漣なら、さわ姉のデスメタルを完全再現できそうだ。

いやそれよりも、澪は何としても俺に見せるのを阻止したいのか、非常に怖い。

「わ、わかった。やめとく」

「よかった・・・」

いつでも聞けるし、さわ姉に言えば完全な映像を見せてくれるだろう。みんなは澪のオーラに怯えてか、慌てて文化祭そのものに話題を変えた。

「この文化祭って結構盛大なんだよ。クラスで出し物とか、お店やったりするし」

ムギがお茶を淹れながら梓に説明した。そう言えば、さわ姉が連れてきてくれた時も喫茶店のようなものをやっていた気がする。

「今年って、先輩たちのクラスは何やるんですか？」

「今年はクラスでお菓子だらけのカフェやるうって話が出てるな。澪たちのクラスは？」

「私たちのクラスは」

女子高の、特に桜ヶ丘の文化祭は俺の高校でも注目度が高かった。とはいってもそれなりに歴史がある女子高なため、専用の入場券がないと入れない。たしか、いっこ上の先輩が高値で入手したって話をしてたっけ。男子からしたら夢のようなイベントだし。

ほんとうに、もうすぐか。そのため息をついた時、部室のドアが開いた。

かなり大きな音をたてて俺たちの前に現れたのは、和ちゃんだった。

「あ、和ちゃん。柏木がいつもお世話になってます」

「いえ、こちらこそ。ところで、文化祭のことで盛り上がっていると悪いんだけど」

和ちゃんと会う機会はほとんどないが、こうして対応してくれるところを見ると仲良くしてくれているだろう。というか、あまり

に自然なあいさつに、俺は夫婦じゃないのかと思った。あの騒がしい柏木を選んだことは驚きだが、以外に馬があつたのかもしれない。ムーンチャイルドで会った時よりも確実に女らしくなっているし。漣に片思い中で、しかもなにも行動に移せない俺は、柏木が猛烈うらやましくなつた。

そんな和ちゃんはつかつかと部室を横切り、律の目の前で一枚の紙を広げた。目がちよつとだけきつい。何事だ。

「文化祭で講堂を使う届、まだ出てないけど？」

和ちゃんのアンダーリムがキラんと秋の太陽光を反射した。よくよくその紙を見ると、確かに提出期限は今日付けになっている。おまけに、和ちゃんは少しだけ怒っているように見えた。

「あ、すっかり忘れてた！」

本当に頭から抜け落ちていた顔で律は言った。

「そう言えば、前にも似たようなことがあつたよね」

ムギが声をかけたが、律の全然反省のない態度にまたしても漣の身体から黒いオーラが立ち上り、律はどでかいたんこぶを作ることになった。

急ぎよ決まつたらしい書記に梓が任命され（ぶつぶついいながらも）、項目を埋めていく。使用者はすぐに明らかになったが・・・。「名称・・・。そう言えば、バンド名つてなんでしたっけ？」

漣、唯、律が同時にばらばらなバンド名をいったものだからなにがなんだかよくわからなかった。とりあえず、決まつてないことだけは確かだつた・・・ん？

「まだ、決まつてなかつたのか?!」

このバンドには何回か驚かされたが、今のはこれまでの中でも上位にランクインする出来事だつた。

「そういえば、そうだったな。ようし、いい機会だからここで決めるか！」

盛大に宣言した律と同調したみんなに、俺はがっくりとうなだれた。バンド名つてというのは、バンドを結成したらコピーする曲とほ

ほ同じ時に決めるものだとはっかかり思っていた。俺の時はバンド結成とほとんど同時にライブ参加が決まっていたし、急を要していたのもあるけど。

「あれ、タクちゃんどうしたの？」

「いい、気にすんな……。それよりもほら、とっとと決めないと和ちゃんに悪いだろ」

「じゃあさ、平沢唯と愉快的仲間達ってどう？」

「私らはおまけかいっ！」

唯の番組タイトルのような案にキレのある見事なツッコミをしつつ、律も

「やっぱ恩那組だよなー。かつこいいし」

「それ、どこのメタルバンドだよ」

ホワイトボードに書きつられていくバンド名候補。漣はペンをとり「ちょこれーと めろでいは？」

……。みんなの動きと、空気が固まった。やっぱり、漣は漣だった。俺の背中が猛烈に痒くなった。間に を入れるのか……。ちよっと前にそんなアニメがあったような……。

「巧斗さん、どうですか、このバンド名？」

期待をこめて漣が俺に意見を求めてきた。いやこの空気でOKって言えるわけないだろ。

「うーんと、ほかの意見も聞いてみようか」

漣のシヨックを受けた顔をスルーして、今度はムギに聴いてみた。「充電期間ってどうかしら？」

「」「縁起わりー！」「」

俺、律、梓の声が揃った。充電はいつ終わるんだよ。バンド解散する時か？

「ぴゅあ ぴゅあ、よくない？」

「漣、もつと真面目に……」

「本気なのに、律……」

「本気でそれかよー！」

「靴の裏のガムとかどう？」

「唯、思い付きだね、それは」

「タンスの角に薬指は？」

「へんなって・・・薬指？器用だなおい！」

俺と律が唯の的外れな案にツツコミを入れていくが、いい加減終わってほしい。

それから次々とバンド名には似つかわしくない案が出ては消え、出ては消えていった。

「あーもう、なかなか決まらないな。タクちゃんのバンドって名前はどんな感じで決まったの？」

「俺らのとこ？」

律は頷いて

「参考になるじゃん。アートワークスって意味とかあるの？」

俺は未だ決まらないことで顔をしかめ始めた和ちゃんに、ジェスチャーで謝ってから口を開いた。

「とくに・・・ないかな。アートワークスって日本語にすると芸術作品になるけど、そこまで大したこと考えてなかったし」

「それじゃ、なんでその名前に？」

驚いたことに、和ちゃんも会話に加わっていた。このあたりの経緯は柏木から聞いているものだとばかり思っていたが、彼氏はそこまで詳しく話していなかったようだ。

「とりあえず、あから始まるのがいいなーって。インパクトも欲しかったし、変に英語使うのもいやって話になって。ライブも決まってたから、とにかく早く決める必要になって、じゃんけんで決めただっけな。青島が勝って、つけたんだ」

「え、じゃんけん？」

唯が気の抜けた顔をした。バンド名の由来なんて真面目なものから適当に付けたものまでばらばらだ。

「アートワークスって、Art-schoolのパクリじゃんって言ったんだけど、これ以上時間がなくてさ。そのまま今に至る、み

「たいな」

「そうだったんですか・・・」

漣が何回も頷きながら言った。俺らからしたらテキト に決めた名前だしよく似たバンドもあるのだが、四年目ともなればそれなりに愛着もわいてくるから不思議だった。

「で、律さんよ。俺の話参考になった？」

「そうだな・・・じゃんけんか・・・でもそれはリスクが・・・」

またしても始まってしまいうグダグダなバンド名決め。俺はケータイで時間を確かめた。このままいけば、練習をほとんどできないまま今日は終わりそうだ。俺の脚がイライラでメタルばりのリズムをきざみ始めた。

「やっぱここは・・・」

「にぎりこぶしは？」

「ぽつぷこーんハネムーンは？」

「なんで漣のは甘いのはつかなんだよ」

「ロケットえんぴつは」

「唯は黙つとけ。混乱する」

梓も先輩たちのわけのわからないバンド名を拒否できず、それでいて肯定もできない様子で戸惑っていた。

しかたがない。俺は残っていた紅茶を飲みほし、わざと両手で机を大げさに叩いた。

「た、巧斗さん・・・？」

俺は深呼吸をすると、律のようにもったいぶった台詞まわして言い放つ。

「このままじゃ埒があかん。ということ、顧問としての権限を発動させてもらおう」

「ちょ、ちよつとタクちゃん！」

「ひどいよ〜」

律と唯がそれぞれもうちよつとまって、と目で訴えかけてくるが、この時間がない時にそれを認めるわけにはいかなかった。

「そういえば、巧斗先生って顧問でしたね」

ムギの今更な言葉に俺はずっこけかけたが威厳を保ちつつ

「もういい、俺がバンド名を決める。こういうのはぱっと決めりゃいいんだよ。練習できないだろ、このままじゃ」

俺は梓からシャーペンと届をもぎ取ると、これしかない、というバンド名を書きなぐった。なんだか、さわ姉の場合でもこうなっていたような気がしてならなかった。

「よし出来た。今この瞬間から、このバンドは放課後ティータイムだ！」

えええっ、という絶叫が部屋中にこだまし、俺は耳をふさいだ。

「タクちゃん、私らの意見全スルーかよ！」

「ちよこれーと、もない……」

「なんというか、ほんとうに適当ですね、先生……」

それぞれぶつくさ感想を言うなかで、俺は毅然とした態度で理由を説明した。

「なに言ってるんだ。軽音なんだかお茶なんだかよくわかんないことしてるこの部にはびつたりの名前だろ」

「私たち、練習してるよ！ねえ、あずにゃん」

と唯は後輩に救いを求めていくが、俺は

「でもその梓も、最初は練習しないことで戸惑ったんだよな？」

と言ったのでばつが悪くなったのか、唯はしぶしぶと引きさがった。

「放課後、ティータイム……」

澁が確かめるようにゆっくりとその名前を復唱した。

「私は、いいと思うぞ？確かに、時間もないし、嫌なら、また決め直せばいいし」

「それもそうだな……。和、それ今日までなんだよな？」

「そうよ、律。だからこれ、もう提出つてことで良いわね？」

俺が手渡したプリントを掲げて、和は五人に確かめた。全員が頷き、

「それじゃ、私は戻るわね。先生、みんな、お邪魔しました」

一礼した和ちゃんがドアを閉めると、足早に階段を下りる音が聞こえてきた。迷惑かけっぱなしだな。今度柏木経由でなにかお詫びでもしないと。

「ってことで、バンド名も決まったことだし、記念に写真でも撮るか！」

「は？」

「いいわね。澁ちゃん、カメラ持ってる？」

「う、うん、ムギ、でもインスタントだけどいいの？」

「ぜんっぜんオツケーだよ、澁ちゃん！撮ろうよ！」

「よし、タクちゃんはここに」

「いいや。俺はバンドメンバーじゃない。俺が録るよ」

律の案はありがたかった。でも俺はメンバーじゃない。もうすぐここから去ってしまう身だ。今更だが、これ以上何かあると、ここから離れる時、すっぱりと行かなくなる。ホワイトボードに書き記されたバンド名を枠に収めながら、俺はシャッターを切った。

「よし練習だ、練習！」

興奮冷めやらない律が威勢よく再開を宣言し時だった。俺のケータイが震え始めた。

電話の主は、柏木からだった。

「ごめん、練習はじめといていいから。俺外でるわ」

部室の真正面にある屋上に急いで向かうと、俺は電話に出た。

「タク、今大丈夫か？」

「ああ大丈夫。どうした？」

なんとなく内容に検討はついていたが、俺は先を促した。

「コンピの件、今日の夜みんなで話し合わないか？」

あの電話は、一体何だったんだろう。澁はベースのストラップをかけながら、そのことと今日の練習中に巧斗が時折見せた苦悩の表情が絡んでいるように思えて仕方がなかった。

バンド名のことは、落ちついた。それよりも、今まで考えてこなかったことが不思議だった。巧斗のネーミングセンスには首をかしげざるを得なかったが、巧斗が付けたというだけで、澪は否定する気が起きなかった。だから目下のところ、澪が気になっているのは巧斗が何か悩んでいないかどうかだった。

バンドの個性に関して、澪は話を聞くことはできても、自分ではどうすることもできないと思っていた。だから口をはさめないと分かっただけでも、話してくれないとなるとそれはそれで寂しくなってしまうのだった。

「澪、タクちゃんがいなくて寂しいのか？」

律がからかい半分、心配半分でスティックを持ちながら質問してきたので、澪は平静を保って答える。

「寂しいんじゃないよ、どんな電話なのか、ちょっと気になっただけだよ。あんなにあわててたから・・・」

「ふーん。ようしそれじゃあ、ふわふわいくぞ！」

唯のイントロが入る、カッティングとオルタネイトストロークを混ぜ合わせた、ノリのいいメロディ。そこに、澪たちは一斉にかぶさっていく。

この歌詞は自分で書いたというのに、その時はそれほど親近感がわかなかった。共学の学校に進んだら、普通の女子はこう思うのではないか、という想像とマンガを見ながら書いただけだった。

それが、今は違う。

どうしても、相手の部分で巧斗の顔が浮かんで消えてくれない。何回も振り払おうとした。でも、デートの後、余計に巧斗が出てくる。

ライブで必死の形相でギターを弾く巧斗。部活で微笑を浮かびながら会話をする巧斗。デートのときに見せた、ちよつと恥ずかしがっていた巧斗。

最初は、面倒見の良さと、音楽に真面目な面しか分からなかった。顧問としての顔も、今よりずっとあった。それがどんどん崩れて言

って、そのたびに漣の心は巧斗でいっぱいになっていったのだ。

そんな巧斗も、もうすぐいなくなる。さわ子が顧問の、あの部活に戻るのだ。イレギュラーが、当たり前に戻るだけ。それだけなのに、漣は家でこのことを考えてしまいう度に、気持ちが落ち込んでいく。

文化祭はもちろん楽しみだ。みんなの前で演奏するという、漣がもつとも緊張して身体が固くなってしまふのを除けば。でもそれなのに、その日が来なければいいのに、とも願ってしまう。神様にお願いしてもかなえてくれそうにない、お願いではあるけど。

だからなのかも知れない。前は男子に障ることも近づくこともできなかつたのに、最近は巧斗の傍にるのが、もう当たり前になっていた。特に今日は、公衆の面前でスカートがめくれ上がってしまった思い出すのも嫌なことがみられるかもしれないという事情があったとはいえ、目を覆うということまでしてしまった。アレを見られたら、もう巧斗と顔を合わせられなくなる。

練習を続けながら、漣は焦燥と、心に浸食していく喪失感と戦っていた。

それでも、巧斗が戻ってきたときに漣は、ほっと安堵していた。巧斗の顔から目が離せなかつた。まるで、今日転校してしまう友達のように。

演奏が止まり、律が巧斗に質問した。

「タクちゃん、なんの電話だったの？」

「ん？ああ、和ちゃんの彼氏から。今日練習あるから、その件」

「なーんだ。女からじゃないのかー」

巧斗の顔が曇った。

「俺になにを期待してんだよ。そんなのないって」

例えば、巧斗は大学生だ。大学での出会いも、たくさんあるだろう。唐突に巧斗の女性関係を気にしてしまった漣だが、それがなんなのかもわからない。

「それじゃあ、次はホッチキスな」

練習が終わり、漑はバンド名のことでもまだ盛り上がっているみんなを遠巻きにして階段を下りていた。巧斗は練習が終わるとすぐに出て行ってしまった。

おかしい。今の自分は、自分らしくない。こんなことで、なんで悩まなければいけないのだろう。

頭を振りながら、漑が玄関で靴を履いた瞬間だった。

「お、おい、みんなあっち見てみるよ！」

慌てて玄関の入り口で律が指示した方を見ると、先に帰ったはずの巧斗と、ショートカットの女の子がいた。そこまで距離が離れていなかったために、二人の様子がよく見えた。

その女の子は激しく緊張している様子だったが、鞆から何やら手紙らしきものを取り出して、震えながら巧斗に渡した。

「ねえ、あれって・・・」

ムギがちらりと漑の方を向いた。

「うん、多分、ラブレターだな・・・え？」

巧斗に、ラブレター？

漑は、心臓が胸から飛び出してくる速度になっていることと、自分の目の前が真っ暗になっていることに気がついた。

『さわ子先生の弟さんって、いま話題になってるのよ』

いつだったか和が言っていたことを、漑は思い出した。これまでに気にもかけていなかった事実。

夕陽も深まった校庭。漑の眼に、涙が溜まっていく。しかしそれに気がつくのは、巧斗が去った後だった。

加速度的に（後書き）

みなさん、お待たせいたしました！

え、そんなにまっつてなかった？

今回もお読みいただきありがとうございます。

。ネタは決まっていたんですが、上手い具合に落としこめなくて・・・

ここから、大きく物語は動き出す予定です。

時間がないのでこの辺で

あと、感想がangan送ってください！返事はなるべく早く返します
ので！

それでは、また次回で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2771q/>

けいおん！ めぐり合う花

2012年1月3日00時54分発行